札幌市文化財調査報告書

XVI

1977

札幌市教育委員会

札幌市文化財調査報告書XVI

N309 遺　跡

— 1976年度発掘調査 —

1977. 6

札幌市教育委員会

例　言

1　本書は，昭和51年6月20日～7月31日にわたって実施した北海道住宅商工協同組合の宅地造成予定地内に存在する遺跡発掘調査報告書である。

2　本調査は，札幌市教育委員会文化課文化財調査員加藤邦雄が担当者となり，高橋和樹，内山真澄が調査主任として現地の発掘業務ならびに整理業務を遂行した。

3　本書の執筆は，加藤邦雄，上野秀一，高橋和樹，内山真澄，土田亜佐子が各項目別に担当し，文末に文責を明示した。

4　発掘調査は上記3名のほか，主として下記の人々が従事した。
金井邦彦，高田正雄，斉藤美智子，北海道大学学生，北海道工業大学学生。

5　遺物整理，挿図浄書等は，下記の人々による。
金井邦彦，大滝信芳，高杉順子，酒井洋子，西條美智枝，池田和子（以上順不同，敬称略）

6　本書に掲載した写真図版の撮影及び現像処理は羽賀憲二，内山真澄の両名が行なった。

7　石質の肉眼による鑑定は，北海道開拓記念館赤松守雄氏にお願いした。

8　放射性炭素による年代測定は，学習院大学理学部木越邦彦研究室に依頼した。

9　発掘期間中，整理，出版にあたっては，北海道住宅商工協同組合，道都建設興業株式会社から，ご協力とご理解を賜った。記して謝意を表する。

凡　　例

(1) 挿図のピット実測図縮尺20分の1，40分の1。

(2) 土器実測図縮尺4分の1，土器拓影図縮尺3分の1，石器実測図縮尺2分の1，3分の1。

(3) 石器説明中a面とは，背面ないし実測図中の左側正面図をさし，b面とは腹面ないし右側正面図をいう。

(4) 石器の実測図の中で，側縁に沿って実線を入れたものは，この部分が繰り返しの使用で摩滅ないし細かい刃つぶれを生じていることを示しており，また図中の稜線とか剥離面に細線で示した部分は，使用による擦痕とか磨耗部分を示したものである。

(5) 遺構の表と図版の凡例に関しては，各々に明記した。

目　　次

第１章　発掘調査に至る経過 …… 13
第２章　遺跡の位置と環境 …… 14
第３章　発掘調査の方法と層序
　第１節　発掘調査の方法 …… 18
　第２節　層堆積について …… 18
第４章　遺構およびその出土遺物 …… 27
第５章　発掘区出土遺物 …… 59
　第１節　土　　器 …… 59
　第２節　石　　器 …… 68
第６章　ま と め
　第１節　遺　　構 …… 86
　第２節　土器群について …… 90
　第３節　石器群について …… 96
結　　言 …… 151

挿図目次

第１図　N309遺跡の位置 …… 1
第２図　遺跡付近地形図 …… 15
第３図　発掘区断面実測図 …… 19
第４図　発掘区配置図および遺構関連図 …… 28
第５図　第１号ピット実測図 …… 29
第６図　第１号ピット出土石器実測図 …… 31
第７図　第２号ピット実測図 …… 31
第８図　第３号ピット実測図 …… 32
第９図　第４号ピット実測図 …… 32
第10図　第５号ピット実測図 …… 33
第11図　第５号ピット出土石器実測図 …… 33
第12図　第６号ピット実測図 …… 34
第13図　第７号ピット実測図 …… 34
第14図　第８号ピット実測図 …… 34
第15図　第９号ピット実測図 …… 36
第16図　第10号ピット実測図 …… 37
第17図　第11号ピット実測図 …… 38
第18図　第12号ピット実測図 …… 40
第19図　第12号ピット遺物分布図 …… 41
第20図　第12号ピットおよび発掘区出土遺物 …… 43
第21図　第12号ピット出土石器実測図(1) …… 47
第22図　第12号ピット出土石器実測図(2) …… 48
第23図　第13，14号ピット実測図 …… 51
第24図　第14号ピット出土石器実測図 …… 55
第25図　ピット出土土器拓影図(1) …… 57
第26図　ピット出土土器拓影図(2) …… 58
第27図　発掘区出土土器拓影図(1) …… 60
第28図　発掘区出土土器拓影図(2) …… 61
第29図　発掘区出土土器拓影図(3) …… 62
第30図　発掘区出土石器実測図(1) …… 69
第31図　発掘区出土石器実測図(2) …… 73

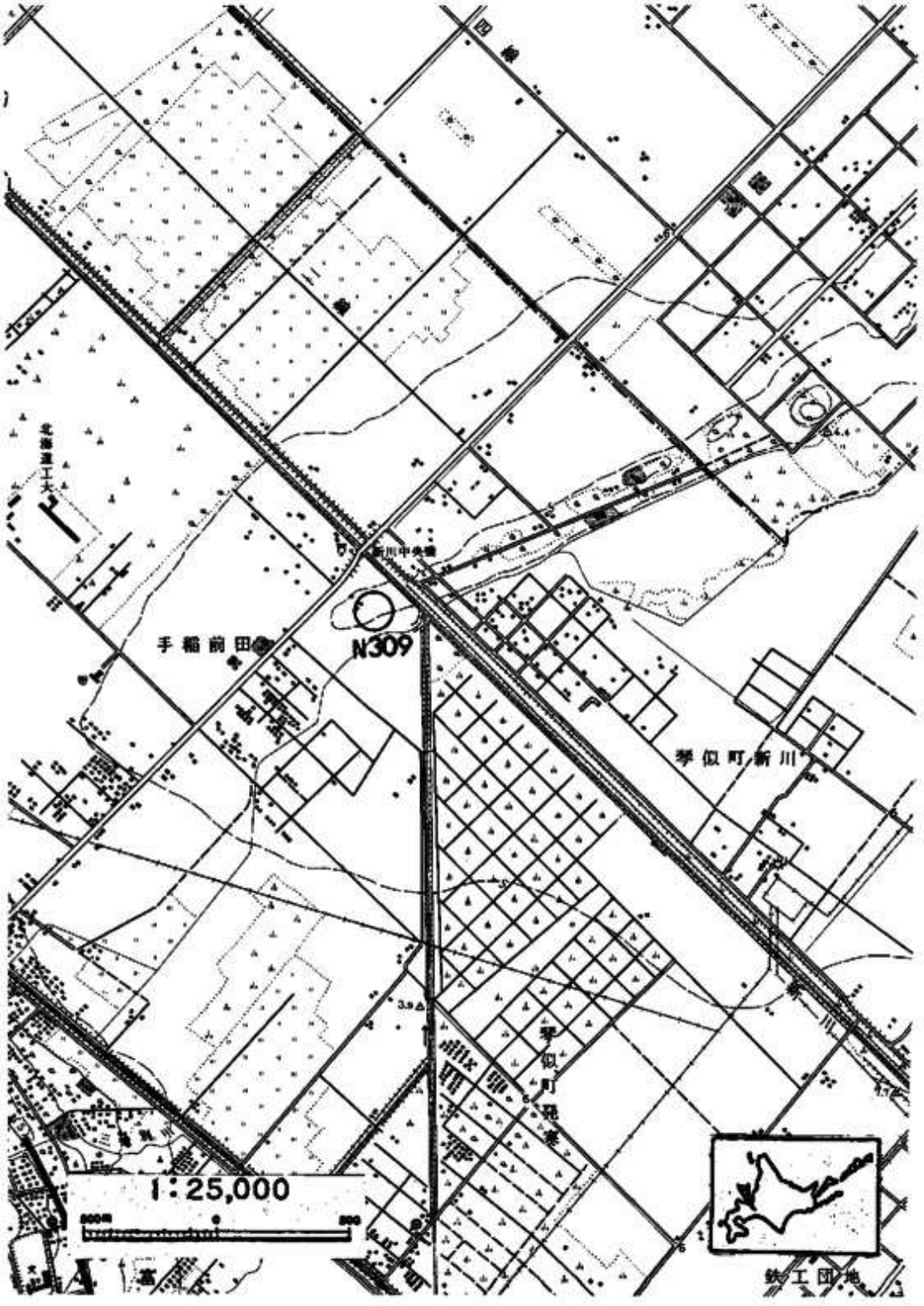
第32図　発掘区出土石器実測図(3)…… 74
第33図　発掘区出土石器実測図(4)…… 75
第34図　発掘区出土石器実測図(5)…… 76
第35図　発掘区出土石器実測図(6)…… 77
第36図　発掘区出土石器実測図(7)…… 79
第37図　発掘区出土石器実測図(8)…… 80
第38図　発掘区出土石器実測図(9)…… 81
第39図　発掘区出土石器実測図(10)…… 82
第40図　発掘区出土石器実測図(11)…… 83
第41図　発掘区出土石器実測図(12)…… 84
第42図　N293、N309（1次、2次）遺跡ピットのタイプ別分布図 …… 87

挿表目次

第１表　第13，14号ピット小ピット一覧表…… 53
第２表　石器石質統計表…… 96
第３表　N309，瀬棚南川遺跡出土の石鏃，石銛の形態の三角図表 …… 98
第４表　N309，加茂川，瀬棚南川遺跡の石鏃，石銛の形態分布図 …… 99
第５表　石鏃，石銛の重量分布図…… 101
第６表　第12号ピット出土の石鏃の剥片剥離技法…… 102
第７表　N309遺跡の剥片の形態分布図 …… 121
第８表　縄文中期の剥片の形態分布図…… 122
第９表　フレーク・コアー計測値一覧表…… 126
第10表　N309遺跡と縄文中期の遺跡の石器百分比累積グラフ …… 142
第11表　N309遺跡と縄文早期～続縄文期の遺跡の石器百分比累積グラフ …… 143
第12表　N309（２次調査）遺構一覧表 …… 152
第13表　N309（２次調査）遺構出土石器一覧表 …… 153
第14表　N309（２次調査）発掘区出土石器一覧表 …… 156

図版目次

1 A　遺跡全景（発掘終了，西より）
　B　遺跡全景（発掘終了，北より）
2 A　第1号ピット断面（北東より）
　B　第1号ピット（北東より）
3 A　第2号ピット
　B　第3号ピット
4 A　第4号ピット
　B　第5号ピット
5 A　第6号ピット
　B　第7号ピット
6 A　第8号ピット
　B　第9号ピット
7 A　第10号ピット
　B　第10，11，13，14号ピット（上方より10，11，14，13号）
8 A　発掘風景
　B　第12号ピット
9 A　第12号ピット遺物出土状態Ⅰ
　B　第12号ピット遺物出土状態Ⅱ
10A　第12号ピット遺物出土状態Ⅲ
　B　第12号ピット遺物出土状態Ⅳ
11A　第1，5，7，9，11，12号ピット出土土器
　B　第12，13，14号ピット出土土器
12　第12号ピット出土土器
13　第12号ピットおよび発掘区出土土器
14A　第12号ピット出土土器
　B　発掘区出土土器部分拡大写真
15A　発掘区出土土器
　B　発掘区出土土器
16A　発掘区出土土器
　B　発掘区出土土器
17A　発掘区出土土器
　B　発掘区出土土器
18A　第1号（1，2），第5号（3）ピット出土石器
　B　第14号ピット出土石器
19　第12号ピット出土石器
20　第12号ピット出土剥片（上，硬質頁岩，下，黒曜石）
21　発掘区出土石器(1)
22　発掘区出土石器(2)
23A　発掘区出土石器(3)
　B　発掘区出土石器(4)
24A　発掘区出土石器(5)
　B　発掘区出土石器(6)
25A　発掘区出土石器（表面）(7)
　B　発掘区出土石器（裏面）(8)



第1図　N 309 遺跡の位置

（本書に掲載した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。承認番号昭51．道複．第628号）

第1章　発掘調査に至る経過

本書に報告する遺跡は，札幌市西区手稲前田の北海道住宅商工協同組合の住宅団地造成予定地内に所在するものである。同協同組合の所有する地域一帯は，いわゆる紅葉山砂丘の南端部であり，縄文時代中期の遺跡がかなり広汎にわたって存在した。同協同組合は，この地区一帯を数工区に分けて，住宅団地を造成して，その遺跡の一部については，過去2回にわたって札幌市教育委員会が主体となり，発掘調査を実施した。昭和48年に札幌市教育委員会文化財調査員上野秀一を担当者として，昭和49年度は，諸般の事情から札幌大学助教授（当時）石附喜三男を担当者とし，実質的な現場作業の遂行者を上野秀一により発掘調査を実施した。そして，その結果についても，上野秀一の編著による「札幌市文化財調査報告書」Ⅵ，Ⅻとしてすでに刊行した。

昭和51年3月に至り，北海道住宅商工協同組合より，同地域の新川寄りの部分についての，住宅団地造成計画が示され，同遺跡の残余の部分の取り扱いについて，種々協議を重ねた。当然のことながら教育委員会としては，遺跡の現状保存についての申し入れをしたわけであるが，すでに工事を完了している地区とのかねあいから道路，上下水道等の設計変更は困難であること等の理由に，造成工事前の事前調査もやむなしとの結論に達した。

発掘調査の実施にあたっては，過去2年度にわたって，上野秀一が実施的な調査を担当しているために，今次の調査においてもその方向で検討を加えた。しかし，上野は，すでに白石区大谷地地区での発掘調査担当者として作業に従事しており，すでに調査が重要な時期にかかっているために，現場を変ることができないとの本人の申し出もあり，内山真澄，高橋和樹の両名を嘱託文化財調査員として任じ，発掘作業にあたることとなった。

また，発掘調査遂行にあたっての調査費の取り扱いについても，補正予算等の措置を講ずる時間的な余裕がないことから，二者の覚書の交換により，北海道住宅商工協同組合が直接予算を執行することとした。

発掘調査の現場作業の遂行にあたっては，同一時期に札幌市教育委員会が主体となる発掘調査が，3地区で同時に進行させることとなり，作業員の確保に困難をきたし，大谷地地区，本遺跡の発掘ともにその従事するもの数名という悪条件に見舞われた日も少なくない。更に，発掘調査地区が牛の放牧地として使用されていたため，その砂層の堅きことは，まるでセメントを思わせる状態にあり，作業の遂行は誠に困難をきわめた。

しかし，予定期間内に無事に調査を終了し一応の成果を納め，ここに報告書を刊行することができるのは，調査員，作業員の努力もさることながら，調査委託者の北海道住宅商工協同組合ならびに道都建設興業株式会社の厚意あふれるご支援のたまものである。ここに記して深く謝意を表する。

（加藤　邦雄）

第2章　遺跡の位置と環境

今回の調査地点は，昭和48年度に調査したN 293遺跡（上野編 1974）および昭和49年度に調査のN 309遺跡（上野・高橋編 1975）の東に隣接する一帯である（第1，2図）。結果的には，今回検出された遺構，遺物はN 309遺跡の一部を構成するものであったと判断され，その分布はやはり，ほぼ標高5.0～5.5 mの紅葉山砂丘の内陸側縁辺沿いであった。

紅葉山砂丘の形成や周辺の泥炭層の形成などについては，上杉陽，遠藤邦彦，五十嵐八枝子，熊野純男，山田悟郎などの諸氏による研究に詳しく（上杉・遠藤 1973，五十嵐・熊野 1973 a，山田 1974 a，b），紅葉山砂丘上にのこされた遺跡の実態などについては，上野秀一による具体的な考察がある（上野編 1974，上野・高橋編 1975）。

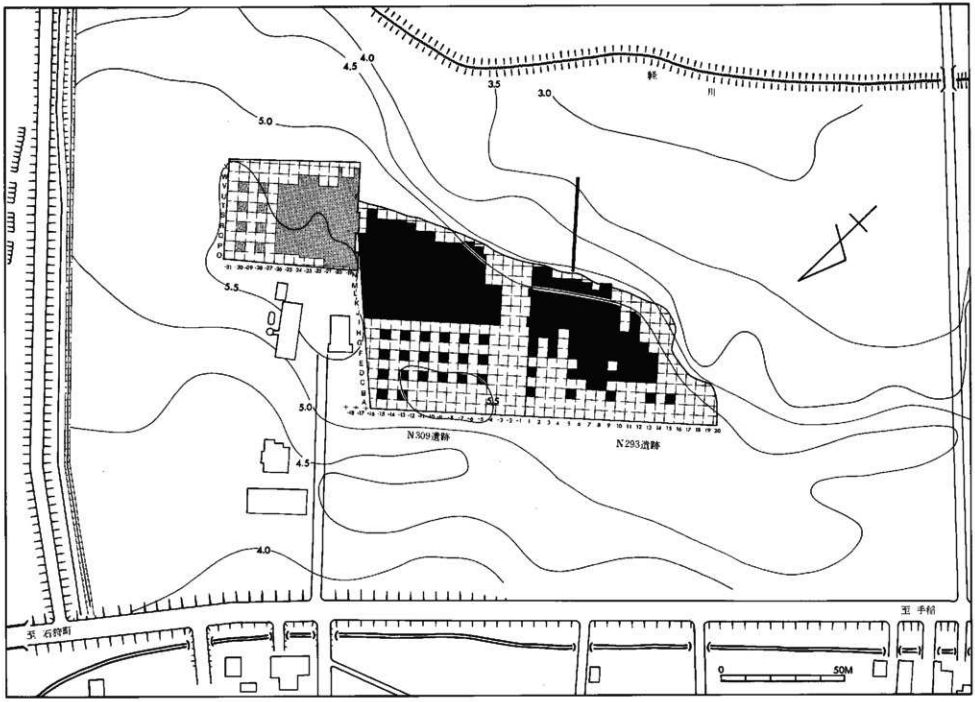
その後の知見として重視されるのは，石狩町生振地区より西側ではこれまで見つかっていなかった花畔砂堤列上の遺跡が，1ヶ所明らかになったことくらいである。札幌市教育委員会は，昭和51年12月，一市民の通報により，花畔砂堤列上に位置する手稲山口において，ほぼ1個体分の縄文中期後半の土器を採集し，ここに遺跡の存在を確認した。現在のところこの遺跡の詳細は不明のままであるが，花畔砂堤列における遺跡と紅葉山砂丘上の諸遺跡との関係は，今後に残された興味深い課題である。

さて，既報のN 293，N 309遺跡は，今や宅地造成がおわり往時の面影もないが，かつてはトウモロコシなどの畑地として利用されていた。一方，その東に続く今回の調査対象区域は，乳牛の放牧地として利用されていた。この放牧地とされていた一帯には，かなりの厚さの盛土が一面に存在した（発掘区内の盛土の状態については第3図参照）。第2図に示した等高線は，この盛土の上面を測ったものであり，かつての砂丘地形をそのまま反映したものとはなっていない。

本調査とそれに先立つ予備調査の結果から推察すると，旧地表面は現地表面より全体に低く，かつての砂丘地形は，今回の発掘区の北側一帯を中心とする最頂5.7～5.8 mの高まりから，より幅狭く，東方へと次第に低くなりつつ続いていたものらしい。どの程度幅が狭くなるかについては，砂丘の海側の部分では十分な資料がない。

ほぼ東北東－西南西にのびる砂丘の内陸沿いの部分については，第3図のX－（－）20区北東壁セクションにその一部をみるように，実際にはほぼ標高4.8～5.0 mを境として，砂丘は低湿地へと比較的急傾斜をなしておちてゆく。この境目に相当する部分の現地表は，標高5.3 m弱となっている。

予備調査によれば，盛土の厚さは，一般に砂丘上では薄く，低湿地の上ではかなり厚くなる傾向がみられたが，砂丘上においても，かなり厚い部分があちこちに不整に拡るなど，場所によって一様ではない。しかし，とりあえず現地表面における標高が5.3 mより高い部分を一応砂丘上として



第2図　遺跡付近地形図

理解することが可能かと思われる。

従って，標高だけからいえば，今回の発掘区の東方にも居住可能な砂丘面が続いていることになるが，予備調査の結果では，この部分に遺跡の存在を認めることはできなかった。ここでは砂丘の幅がかなり狭くなり，砂丘を内陸側と海側とにわけるほどの高まりもなかったようだ。恐らく，北側により高い部分が存在しなかったため，居住その他に不適とみなされたのではなかろうか。

（高橋　和樹）

第３章　発掘調査の方法と層序

第１節　発掘調査の方法

今回の調査では，第２図に網をかぶせて示したＯ－Ｘ－（－）19～30区にかけての部分を完掘した。発掘区の区画は，昭和48年度のＮ293遺跡（上野編1974）および昭和49年度のＮ309遺跡（上野・高橋編1975）における４×４ｍの区画を東へ延長したものであり，調査の方法もまた基本的にそれらと変わるところはない。

ただ，ブリッジを残すことはやめた。その理由は，砂丘に特有の過度の乾燥のため，断面が新鮮なわずかの時間を除いては，ブリッジを残しても断面観察に殆ど役に立たないためである。特に今回の調査では，第２節に説明するように，遺構確認面に至るまでの間に存在する層の大半が攪乱層であったことから，ブリッジを残すメリットは乏しいものと判断された。

発掘区における層序と旧地形の把握に是非とも必要と思われる断面図の作製は，既報の調査によって知られた砂丘地形と遺構の分布との相関関係や昭和51年春の予備調査の結果などに基づいて予め想定したセクションラインを対象に実施した。

また，既刊のＮ309遺跡の報告書に掲載した遺跡付近地形図（上野・高橋編1975，第２図）には不備があったため，発掘調査に並行して，発掘区の東側一帯を中心に水準測量を行ない，等高線の一部を修正した（第２図）。

尚，本報告書における実測図の方位は，国土地理院の原図による第１図を除いて，すべて磁北のままである。

第２節　層堆積について

発掘区における層序と旧地形の把握のため，第３図に掲載した以下の断面実測図を作製した。

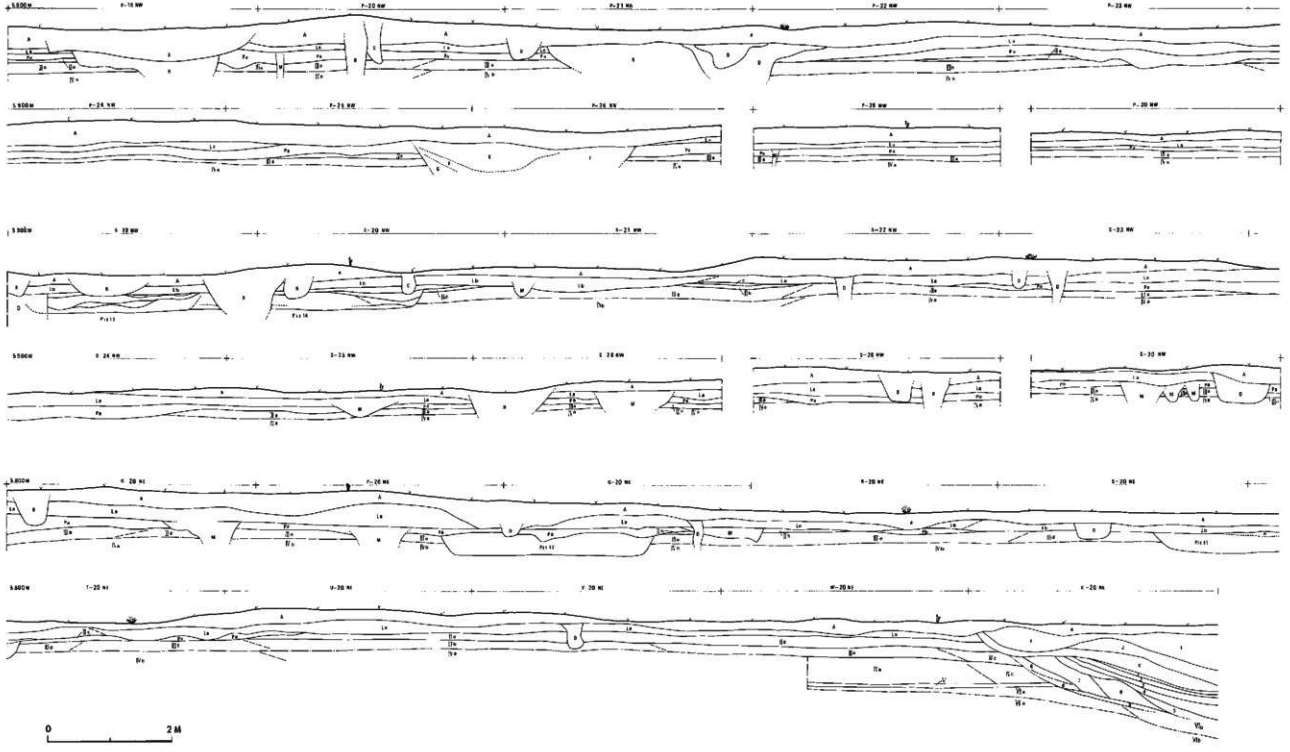
①Ｐ－（－）19区北西壁からＰ－（－）30区北西壁まで（Ｐ－（－）27，29区は未発掘）

②Ｓ－（－）19区北西壁からＳ－（－）30区北西壁まで（Ｓ　（－）27，29区は未発掘）

③Ｏ－（－）20区北東壁からＸ－（－）20区北東壁まで

これらの断面実測図に代表される本遺跡における層堆積の説明に入る前に，各層の識別にまつわる事情について，若干お断りしておきたい。

そもそも考古学が対象とするような比較的薄い単位での砂層の分層は，砂の表面がまたたくまに乾燥して太陽光線をまともに反射し，肉眼観察を妨げるという悪条件の存在もさることながら，一切の人為的攪乱が及んでいない場合でも，通水性，容気性が大きいといった砂の性質のため有機質がすみやかに分解，溶脱されるなど，土壌成分や色調における砂層相互の等質化がすすみ，分層の



第３図　発掘区断面実測図

境界を指摘し難いことが多い。耕作によって砂丘の上部が攪乱された場合には，耕土成分が下部の砂層へと不整に滲透し，耕作土の下限を明瞭に捉えることができないことも多い。

第３図を一見すれば納得されるように，本遺跡では，第Ⅳ層とした地山の砂層にいたるまでの間に存在する層の大半は，攪乱層であった。ツルハシでやっと掘りくずすことが可能な堅い盛土や，放牧地として利用される以前の耕作土が全面に存在し，加えて形容を絶する各種の攪乱が各所にみられるという今回の発掘区にあっては，個々の断面観察に際して，層堆積の状態が殆どつかめないという場合も多かった。

最終的には，本来の自然堆積層の状態については，遺構の存在のみられない発掘区の周辺部における断面観察の結果をよりどころとし，遺構の構築に関連する各層については，第５図に掲載のＲ－（－）21区南西壁セクション（遺憾ながら，第１号ピットの東側半分程を壊してしまった）などを参考にして，個々の断面図作製作業を遂行した。従って，第３図に掲げる断面図は，すべてが事実通りというわけではなく，筆者が模式的に想定した層堆積についての一つの個人的な理解に過ぎない部分もあることを明記しておきたい。

さて，砂丘上における自然堆積層については，大別して以下の６つの層の存在が認められたが，耕作その他の攪乱のため，発掘区の多くの部分では，第Ⅲ層以下の層の現存が認められたに過ぎない。

第Ⅰ層：発掘区および予備調査における試掘区のいずれにおいてもその存在は確認されていないが，耕作の及ぶ以前にみられたはずの旧表土層を仮に認め，第Ⅰ層と呼ぶことにする。これは，上杉陽，遠藤邦彦のいう上部黒土層（上杉・遠藤 1973）に相当する層を主体とするものであったと推測される。

第Ⅱ層：この第Ⅱ層については，上からの耕土成分の滲透により耕作土との識別が甚だ困難な部分があったし，第Ⅲ層との境界も漸移的で一般に不明瞭であったため，第３図には一部に誤認があるかも知れない。

発掘区内に存在した第Ⅱ層は単一なものではなく，大まかにみて，以下に説明するａ～ｃの細別が可能であった。これは，第Ⅱ層がまわりの層からの影響をうけて変質する傾向が強かったために生じた，いわば後天的な差であろうと思われる。

Ⅱａ：暗茶褐色がちの暗黄褐色砂質土。一般に，褐鉄の含有は少なく，ややわらかいが，トラクターなどの通路とされていた部分では，堅くしまっていた。

Ⅱｂ：火山灰を少量含むらしく，やや灰褐色がちな淡黒褐色砂質土。やや粘性に富み，やや堅くしまっている。褐鉄の含有がみられる。

Ⅱｃ：火山灰を少量含み，褐鉄の含有豊富な灰赤褐色砂質土。やや堅くしまっている。

尚，各種のフィルターを使用して撮影したＲ－（－）21区南西壁断面のカラースライドを相互に比較検討した結果，絶対確実というほど明瞭ではなかったが，ほぼ第Ⅱ層の上～中層にかけての部分に，第１号ピットの掘り込み面が存在するものと判断された。ほぼ構築時期を同一

にする他の遺構についても，恐らく掘り込み面は第II層中にあったものと思われる。

第III層：ほぼ発掘区の全域にその存在が認められた黄褐色の砂層であるが，褐鉄分の含有の量的な差などによって，以下のａ～ｆに細分された。それらの変移は漸移的で，明瞭な境界を指摘することはできない。

IIIａ：調査対象区域の一帯にもっとも一般的に分布する砂層で，褐鉄の含有は乏しく，比較的多量の砂鉄を混合して，やや青味がちな色調を呈する黄褐色砂層である。堅さには部分的な差がみられるが，全体的にはやや堅くしまった砂層といえる。

IIIｂ：比較的多量の褐鉄を含み，赤褐色がちな色調を呈する，やや堅くしまった黄褐色砂層である。この褐鉄を含む砂層は，遺構の群在する地域を中心に分布している。遺構の存在と褐鉄分の沈着とが深い関わりを有するらしいことは，先の報告書（上野・高橋編 1975）においても触れたところである。

IIIｃ：砂丘の周縁部などにみられた比較的砂鉄の含有の多い，淡黒褐色がちな暗黄褐色砂層である。若干量の褐鉄を含み，色調はやや赤褐色がちでもあった。やや堅くしまっている。

IIIｄ：第11号ピットの周辺などに認められた，褐鉄を豊富に含む，かなり堅い黄赤褐色砂層である。

IIIｅ：これは，第1号ピットの南西から第13，14号ピットの周辺にかけての一帯や，第12号ピットの周辺などにみられた，褐鉄の含有に富む，比較的堅くしまった，暗茶褐色がちな色調を呈する，暗赤褐色砂層である。

ほぼ同様の褐鉄に富む砂層は，Ｓ～Ｕ－（－）19～20区にも分布し，ここでは砂層というより褐鉄層といった感じの，非常に堅い暗赤茶褐色砂層（IIIｅ′）となっていた。第13，14号ピットの覆土中には，よく発達した高師小僧が数多く見出されたが，この褐鉄層の存在を考え合せると，Ｒ～Ｕ－（－）19～20区一帯には，他とはかなり異なった保水条件が存在したように思われる。

IIIｆ：Ｔ－（－）20区など発掘区のごく一部に認められた，黒灰色がちな色調を呈する暗黄褐色砂層である。ややわらかく，若干量の褐鉄を含有している。

第IV層：いわゆる地山とみなした砂層で，発掘はこの層の上面までで終了とした。多くの場合，既報の調査におけると同様に，この第IV層の上面が遺構確認面となっている。

この地山砂にも，褐鉄の含有の差などによる変移が認められ，以下のａ～ｃに細別した。しかし，それらの変移は漸移的であり，相互の境界は不明瞭である。

IVａ：調査対象区域の一帯に普通にみられる，褐鉄の含有に乏しい淡黄褐色砂層である。ややわらかく，砂鉄の含有の多い部分では，やや青味がちの色調を呈する。

IVｂ：IIIｂ層の直下など，遺構の群在する地域を中心に分布する褐鉄の含有に富む赤黄褐色砂層で，やや堅くしまっている。この層は，Ｓ～Ｕ－（－）19～20区のIIIｅ′層の下では，暗赤茶褐色の砂層（IVｂ′）に変移している。IIIｅ′層とIVｂ′層とは，ともに褐鉄の凝集が顕著で，両者を肉眼によって識別することは事実上困難であった。

Ⅳc：Ⅳa層に泥炭質土壌が多少加わった感じの黄茶褐色砂層で，Ⅲc層の下に分布し，低湿地へと向かうにつれ茶褐色味が増す傾向がみられる。やや堅くしまった砂層で，比較的多量の褐鉄を含有し，少量の玉砂利を点在させている。

第Ⅴ層：これは次の第Ⅵ層とともに，W～X－（－）20区北東壁を深く掘り下げた結果その存在が確認された，層厚5～8cm程の淡黒色砂鉄層である。磁石によって砂と砂鉄とを分離すると，その量比は砂3，砂鉄1ほどであった。

第Ⅵ層：第Ⅴ層の下にみられた，褐鉄の含有の比較的多い淡黄褐色砂層で（Ⅵa），低湿地へ向かうにつれ黄茶褐色味が強くなる（Ⅵb）。

次に，上述の第Ⅰ～Ⅵ層と同様に自然堆積層ではあるが，砂丘上にはその堆積がみられず，砂丘が低湿地へと向う傾斜面においてのみその存在が認められた薄層群について，X－（－）20区北東壁における断面観察をもとに説明する。これらの薄層群と砂丘上に自然堆積した各層との関係については，X－（－）19区南西壁においても断面観察を行なったが，X－（－）20区北東壁におけると同様，上部に加えられた撹乱に阻まれて，両者のつながりを明らかにすることはできなかった。確証は一切ないが，単純に考えるならば，傾斜面に堆積した薄層群は，それぞれ数層ずつが単位となって，砂丘上の自然堆積層とそれぞれ対応するものかと思われる。

第1層：傾斜面にみられた薄層群のうち，最上に位置するものを第1層とする。これは，全体としては，やや粘性のあるやわらかな暗赤茶褐色砂質土層として理解されるが，これをさらに分層することも可能である。すなわち第1層は，腐植しきらない植物の遺骸を主体とするものかと思われる暗赤茶褐色のややわらかな砂質土から成る上層部と，厚さ2～3cmの淡黄白色の火山灰が断続的に連なる下層部とに分けることができ，さらに両者の間には，真黒～灰黒色の非常に微細な粒子から成るやわらかな砂質土の部分的な介在もみられる。これらを分層して断面図に表現することも全く不可能というわけではないが，ここでは，傾斜面における旧表土層として一括して捉えておきたい。

第2層：やや粘性のある，ややわらかな暗灰茶褐色砂質土層。上層における火山灰が滲透したものであろうか，火山灰を含んで，やや灰褐色がちな色調を呈する。また，腐植しきらない植物の残骸の混入もみられる。

第3層：やや粘性に富み，ややわらかい暗灰色砂質土層。かなり多量の火山灰を含むらしく，暗灰色を呈するが，褐鉄の含有も比較的多く，一部には暗灰赤褐色を呈するところもみられる。

第4層：やや堅くしまった暗灰褐色砂質土層。比較的多量の褐鉄を含有し，火山灰も少量含むらしい。

第5層：比較的多量の褐鉄を含有して暗赤褐色がちな黄茶褐色砂層。かなり堅くしまっている。第Ⅵb層との境は不明瞭であった。

第6層：第5層よりもさらに褐鉄の含有に富む，暗赤褐色がちな黄茶褐色砂層。堅くしまって

おり，拳大の玉砂利の点在がみられる。

第7層：褐鉄の含有に富み，暗赤褐色がちの色調を呈する暗黄茶褐色砂層で，やや堅くしまっている。

第8層：第7層とほぼ同様の暗黄茶褐色砂層であるが，ややわらかく，やや茶褐色がちな色調を呈する。

第8 層：第8層とほぼ同様の暗黄茶褐色砂層であるが，第8層より色調が黄褐色がちで，いくぶん堅くしまっている。第8層および第Ⅳc層との境界は，必ずしも明瞭ではない。

第9層：やや有機質に富む暗茶褐色がちの暗黄茶褐色砂質土層であるが，低湿地へと向うにつれて色調が淡くなり，第5層および第Ⅵb層との識別が困難となる。ややわらかく，玉砂利の点在がみられる。

以上が本遺跡に存在した自然堆積層である。続いて，層序の把握や遺構の確認に際して多大の妨げとなった各種の攪乱層について説明する。

A層：発掘区の全域にみられた盛土を一括してA層と呼ぶ。この盛土は，農耕用の客土といった性格のものではなく，単に一帯をより高く平坦化する目的で盛られたもののように思われた。A層には，低湿地から運ばれた泥炭や黒褐色の砂質土を主体とする部分や，石炭殻，淡黄～暗黄茶褐色の攪乱砂を主体とするところなどがあり，その構成は必ずしも一様ではないが，いずれの場合も，破損した器具や木材，貝殻片などの廃棄物，白色の化学肥料のブロック，玉砂利などの介在がみられる。最上層たるA層は，放牧されていた乳牛による踏み堅めなどによって全般に堅くしまっており，トラック，トラクターなどの常用道とされていたO～X－（－）20～21区，O～P－（…）21～30区あたりでは，さらに一層堅く，ツルハシで徐々に掘り崩すのがやっとという有様であった。

B層：泥炭や黒褐色の砂質土を主体とし，部分的に黄茶褐色砂をサンドイッチ状，あるいはブロック状に不整に介在させる攪乱層で，やや堅くしまっており，玉砂利の点在がみられる。

C層：ボソボソとやわらかな黒褐色砂質土がつまった，いわゆる木の根による攪乱層で，腐朽しきらない木の根の残骸がみられたりする。

D層：ゴミ穴かと思われる掘り込みを充填する黄茶～茶褐色のやわらかな砂質土層で，貝殻片など塵芥の混入が認められる。

E層：下記のF，G層とともに，P－（－）26区北西部に見出された大きな攪乱穴を充填していた，泥炭を点在させる淡茶褐色砂質土層である。この層は，ツルハシを用いなければ掘り下げられぬくらい，堅くしまっていた。

F層：黒褐色砂質土をサンドイッチ状に挟む黄茶褐色砂質土層で，E層と同様，非常に堅くしまっていた。

G層：やわらかな暗黄白色砂層である。

H層：P－（－）19区北西部に検出された攪乱穴を充填していた暗赤茶褐色砂質土層で，一部

に黒褐色土を薄く介在させている。やや堅くしまっており、玉砂利を点在させていた。

I層：淡黄褐色砂を主体とし，撹乱土層や玉砂利などを混合する，やや堅くしまった砂層。これは次に説明するJ・K層などとともに，砂丘上と低湿地との段差を解消するため，砂丘縁辺の傾斜地から低湿地にかけての一帯に積まれたものであろうか。

J層：これは，粘性のつよい暗茶褐色泥炭質土層で，褐鉄分に富む砂などを不整に混合している。

K層：砂の混合率や色調などに部分的な差の認められる暗褐色の砂質土層で，堅くしまっている。

L層：発掘区のほぼ全域に分布がみられた耕作土と考えられる砂質土層をL層とする。発掘区の多くの部分では，同じく耕作土と考えられるP層が，L層の直下に分布している。この両者の存在から，乳牛が放牧される以前に，この地が畑として耕作されていた事実が窺われる。

L層は大別して，黄茶褐色砂質土層（La）と，暗灰茶褐色砂質土層（Lb）とに分けられる。両者の境は漸移的で，必ずしも明瞭ではない。

La層は，乾くとわずかな風にも飛散する粒子の微細な泥土と砂とが密に混合した砂質土層から成っている。堅さは一様ではないが，上にのるA層の薄いところでは堅く，厚いところではややわらかいという対応関係が認められるようだ。

Lb層は，堅くしまった砂質土層で，火山灰を含むのか色調が灰褐色味を帯びている。その分布は一般的ではなく，S－（－）19～21区，R～T－（－）20区あたりに限られている。

M層：杭などを抜いた空隙やゴミ穴などを充塡する，やわらかな黄茶褐色砂質土層である。殆どLa層と識別し難いが，この層には，暗茶褐色砂質土のブロックや黄白色粘土の点在があり，貝殻片など塵芥の混入がみられる。

N層：P－（－）21区北西部に見出された撹乱穴の大部分を充塡する砂質土層で，廃棄された重油などによる汚染のため，油くさく，油じみた黒色を呈していた。

O層：第13号ピットの南西部を壊して掘り込まれた撹乱穴を充塡する，石炭殻や黄白色粘土，円礫や玉砂利，レンガ片などを多量に混在させた黄茶褐色砂質土層である。

P層：ほぼL層の直下にその分布が認められた耕作土で，L層に比して，全体に占める砂の量が多く，砂がちな砂質土層となっている。一部には，L層からの泥土の滲透のためか，L層との識別が困難なところも存在した。

P層の大部分は，褐鉄に富む砂を多量に混合した赤黄褐色砂質土層（Pa）であったが，発掘区の一部には，石炭殻であろうか，灰黄色の粒子の点在が顕著な部分（Pb）もみられた。

Pa層の堅さは一様ではなく，La層と同様，上にのる層が薄ければ堅く，厚ければやわらかいという傾向が認められた。

以上で，発掘区にみられた各層についての説明をおわるが，第3図には，第11号ピットの上部をおおうa層，第1号ピットの周辺にあたるS－（－）21～22区北西壁におけるc層など，小文字の

アルファベットによって表記した層がある。これらは，遺構の上部の窪みへと流れ込んだ自然堆積層と考えられ，上述のａ層およびｃ層は，火山灰を含む本質的に同一な砂質土層であるらしい。従って，本来ならば相互に層名を統一すべきであるが，第１号ピットの上部を除いては，攪乱層に阻まれて，それらの全貌を知ることができず，十分な比較検討をなし得なかった。それ故，敢えて統一した層名を用いることはせず，各遺構ごとに独自の層名を付して，それぞれ説明することにした。

第１号ピットを切ったＲ－（－）21区南西壁でみる限り，このような遺構の上部の窪みへ流れ込んだ自然堆積層として理解されるものには３者ある（第５図，ａ～ｃ層）。この３者が揃って現存したのはここだけであり，他の遺構の上部においては，このような自然堆積層の存在が認められても，それぞれ１層ずつに過ぎなかった。それらは，確証はないが，恐らく第５図のｃ層と本質的に同一な層であるものと思われる。また，これらの自然堆積層については，砂丘傾斜面における薄層群との何らかの対応関係が当然認められるべきであろうが，肉眼観察には限界があり，これらの相互の対比は，未だ不十分なままである。

（高橋　和樹）

第4章　遺構およびその出土遺物

今回の調査によって，都合14基のピットが検出されたが（第4図，図版1A，B），これらが既報のN 309遺跡に認められた遺構群（上野・高橋編1975）の一部として理解されるべきことは，第6章に詳述する通りである。先の報告書においては，遺構を竪穴住居址状遺構とピットとに分けて記載を進めている。今回見出された遺構についても，同様に二大別することが可能だが，遺構の性格や分類などについては，第6章において一括して考察を加えることとし，本章では，とりあえず検出された遺構のすべてを一様にピットと呼称し，個々のピットの説明を進めてゆきたい。

第1号ピット（第5図，図版2AB）

本号はR－（　）22区のグリット発掘によって検出されたものであるが，遺構として確認された時点においてはR－（－）22区にかかる遺構の東側部は壙底近くまで削失されており第（－）22列西壁セクションに遺構の落ち込みがあらわにされていた。遺構の規模は壙口部（210）×193cm，壙底部（177）×159cm，深さ（IIb層上面より）53cmを測る不整楕円形のプランを呈するものと思われる。又，平面図中，東側部は大きく掘り逸えており破線で図示されるものが本来あるべき壙底面の範囲と思われる。壁の立ち上り，及び，壙底面をセクションより見るならばゆるやかに立ち上がり，壙底面はやや湾曲している。長軸方向は東北東一西南西にとるものと思われる。

層の堆積は以下の通りである。A層，盛土。Ia層，耕作土。IIb層，暗黄褐色砂層。IIIb層，黄褐色砂層。IIIe層，暗赤黄褐色砂層。IVa層，淡黄褐色砂層（地山）。VIb層，赤黄褐色砂層（地山）。以上，砂丘の自然堆積層及び攪乱層については第3章の遺跡の層序参照の事。a層，灰黒褐色砂層（淡黄白色の火山灰を挟み，火山灰は比較的堅くしまっている）。b層，暗灰色砂層（火山灰の含有に富み，若干の褐鉄分が沈着しており，その為かやや褐色味があり堅くしまっている）。c層，暗灰茶褐色砂質土層（火山灰を若干含む，褐鉄の沈着は多く堅くしまっている）。d層，淡黒褐色砂層（多量の褐鉄が沈着し，赤褐色味が強い）。e層，暗赤褐色砂層（多量の褐鉄分が沈着し堅い）。f層，黒色砂質層土層（比較的やわらかく褐鉄分の沈着は少ない）。g層，淡黒褐色砂質土層（やや堅くしまっているが褐鉄分の沈着は少ない）。h層，淡黒褐鉄砂層（やや，やわらかく黄褐色味強い）。i層，暗茶褐色砂質土層（比較的褐鉄分が多い）。

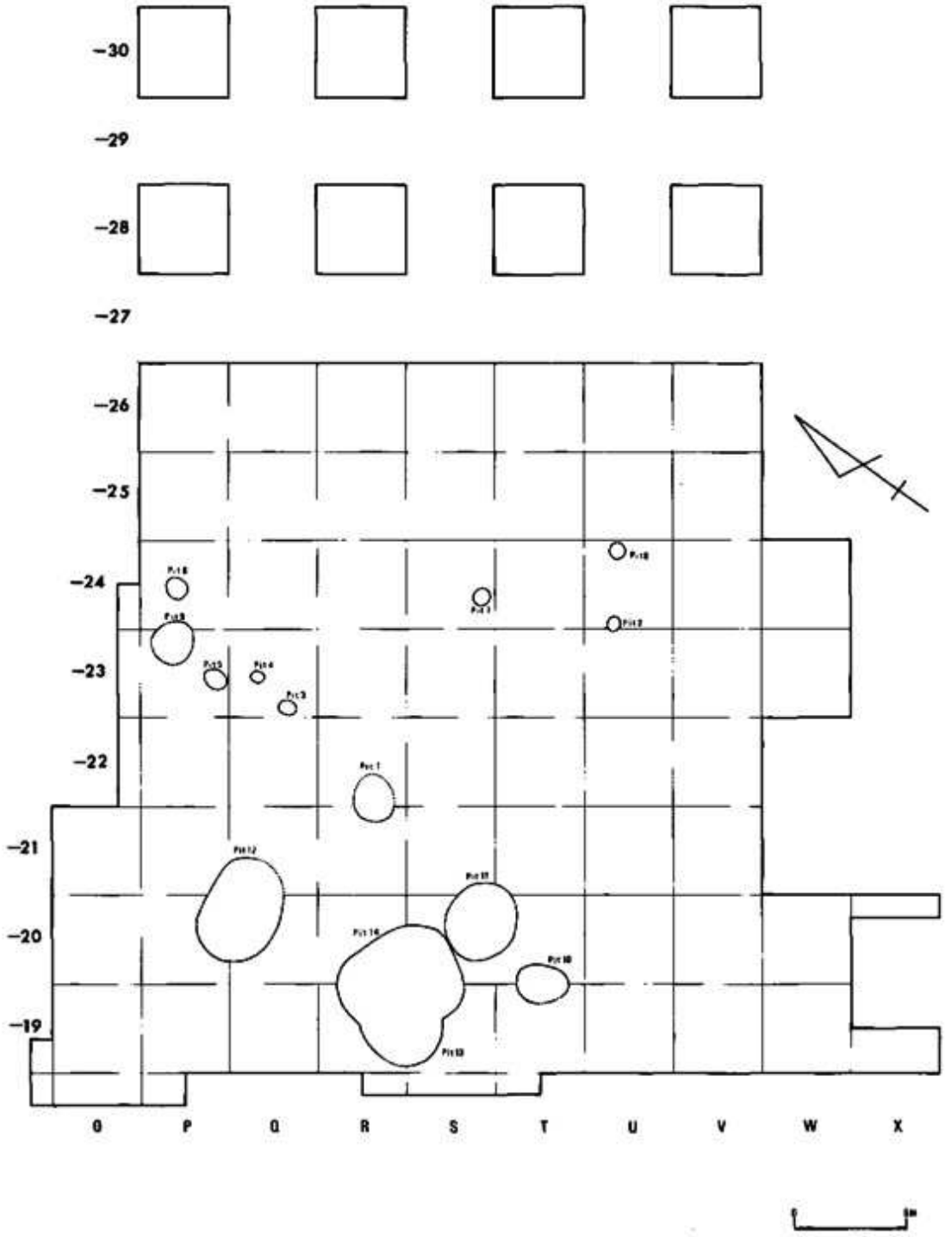
遺物は覆土中より縦長剥片1点，擦石破片1点，土器片4点が出土されている。

（内山　真澄）

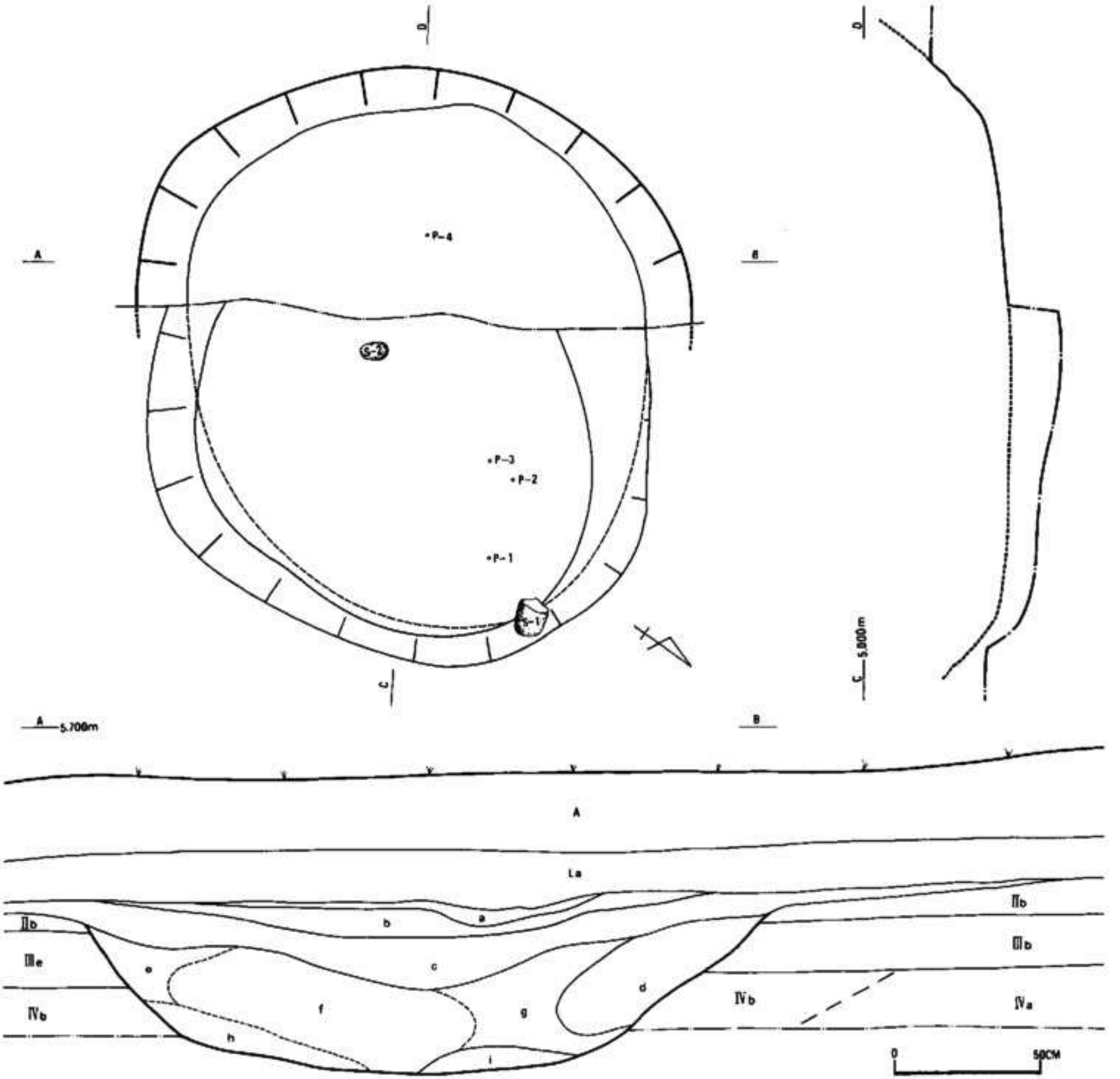
遺　物

土　器　（第25図1～4，図版11A）

第25図1は，結束第一種のある単節の羽状縄文がみられる胴部片で，裏面は滑らかに調整されている。赤褐色を呈し，胎土には繊維を少量含有している。



第4図　発掘区配置図および遺構関連図



第5図　第1号ピット実測図

第25図2～4は，いずれもトコロ第6類の破片と思われるもので，結束第二種のある単節の羽状もしくは斜行縄文を地文としている。裏面は丁寧に調整されることなく粗面のままで，胎土には繊維が含まれている。2には，竹管による円形刺突文が残されているほか，裏面にも縄文がみられる。重複のため不明瞭ではあるが，この施文には，やはり結束第二種のある単節の縄文原体が利用されたものと思われる。

（高橋　和樹）

石　器　（第6図，図版18 A）

本遺構からは，黒耀石の縦長剥片1，複輝石安山岩の擦石1，図示していないが複輝安山岩の小円礫1の計3点が検出されている。

剥　片　（第6図1）

下部を欠損している。原石面がa面下部と左側面に残っている縦長剥片で，全ての剥離が第1次剥離面で切られている。使用痕は認められない。

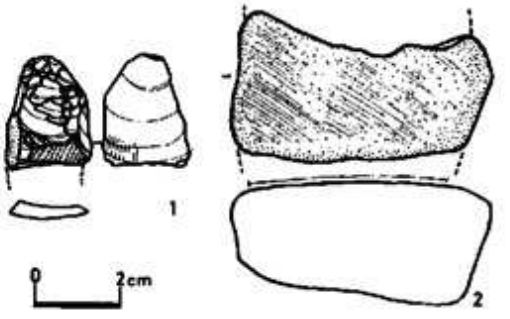
擦　石　（第6図2）

上下部を大きく欠損しているが，やや扁平な複輝石安山岩の礫を利用し，図示した一面は平坦で，軽く擦っている。

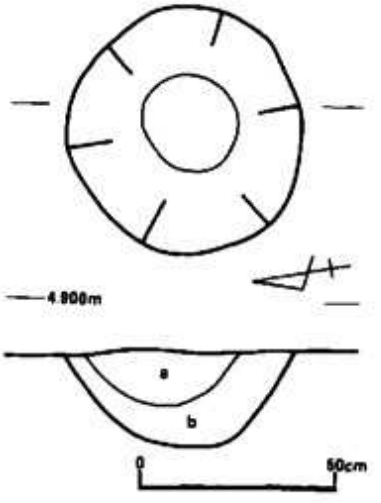
その他

図示していないが，複輝石安山岩の楕円形礫が出土しており，全面黒く焼けている。側面の一部がスベスベとした感触で，擦石として軽度に利用していた可能性もある。大きさは7.4×4.5×4.4㎝であった。

（土用亜佐子）



第6図　第1号ピット出土石器実測図



第7図　第2号ピット実測図

第2号ピット（第7図，図版3 A）

壙口部62×59㎝，壙底部25×23㎝の不整円形のプランを呈し，深さは25㎝を測るボウル状の断面形を示している。

覆土はa，b，2層が見られるだけである。a層，灰黒褐色砂質土層（多量の褐鉄を含有し，暗赤褐色がちで堅くしまっている）。b層，淡灰黒褐色砂質土層（多量の褐鉄を含有し，赤褐色味が強いがやわらかい）。

遺物は何ら検出されていない。

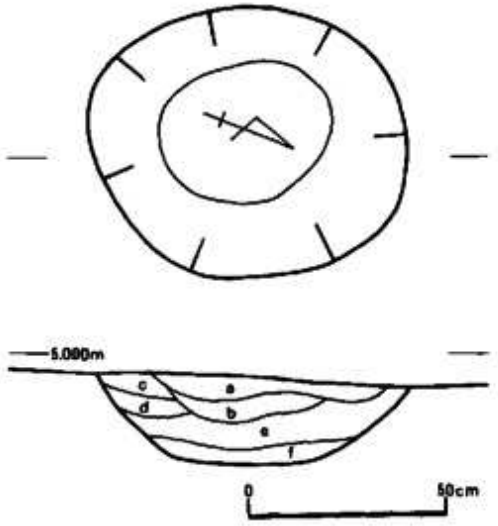
（内山　真澄）

第3号ピット（第8図，図版3B）

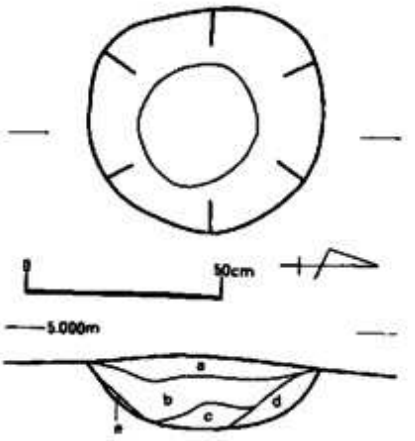
壙口部の最大値方向と壙底部の最大値方向が若干異なる不整楕円形のプランである。壙口部80×69 cm，壙底部45×35 cm，深さ24 cmを測り，壙底面は，ほぼ平坦な状態であるが，壁の立ち上りは，ややゆるやかである。長軸方向は，ほぼ北西一南東に取るものと考えられる。層の堆積は，a層，暗茶褐色砂層（若干，土分を含み，全体的に砂の粒子は細かい）。b層，暗茶褐色砂層（a層に比べやや白っぽく，砂の粒子は粗く堅くしまっている）。c層，褐色砂層（堅く，やや灰色ぽい）。d層，褐色砂層（青灰色味が強くやや堅い）。e層，褐色砂層（全体に褐鉄を少量含み軟らかい）。f層，褐色砂層（やや灰色味の強い色調で堅くしまっている）。

遺物は，何ら検出されていない。

（内山　真澄）



第8図　第3号ピット実測図



第9図　第4号ピット実測図

第4号ピット（第9図，図版4A）

壙口部62×59 cm，壙底部31×29 cm，深さ19 cmを測る不整円形のプランである。掘り込みは全体にややゆるやかで，拡底はほぼゆるやかに湾曲している。層の堆積は，a層，暗茶褐色砂層（火山灰を含み，褐鉄分が多く堅くしまっている）。b層，茶褐色砂層（火山灰を含み，褐鉄が多くみられ所々青色砂が有り堅くしまっている）。c層，暗茶褐色砂層（火山灰を多く含み，非常に汚れた感じ）。d層，明褐色砂層（褐鉄分少ない）。e層，明褐色砂層（褐鉄分多い）。

遺物は，全く検出されていない。

（内山　真澄）

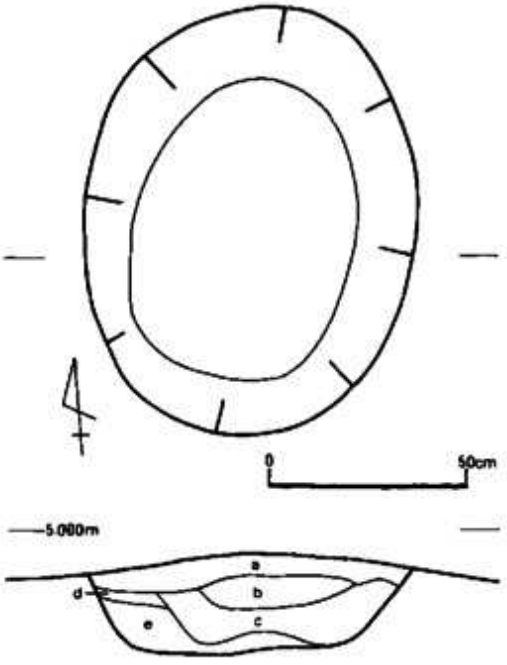
第5号ピット（第10図，図版4B）

壙口部110×85cm，壙底部77×57cm，深さ26cmを測る楕円形のプランである。掘り込みは急角度で行われており，壙底面は若干波打っている。長軸は，略南―北方向に取っている。

層の堆積は，a層，暗茶褐色砂層（火山灰を多く含み，粘質有り，非常に汚染されている）。b層，暗黄青褐色砂層（火山灰を含む）。c層，茶褐色砂層（火山灰を含む）。d層，灰青色砂層（火山灰の含有少なく，a～c層に比べ明るい）。e層，暗灰青色砂層（火山灰の含有少なく，d層より暗い）。

遺物は覆土中より，土器片1点，縦長剥片1点が検出されている。

（内山　真澄）



第10図　第5号ピット実測図

遺　物

土　器　（第25図5，図版11A）

第25図5は，やや外反する口縁部の一部で，肥厚帯直下には円形刺突文が2個現存しており，外傾する平坦な口唇上には，半截竹管を押し引いた連続刺突文が加えられている。円形刺突文のめぐる肥厚帯下を除いて，一面に地文の単節の斜行縄文が施されている。裏面調整はなく，胎土には繊維が少量含まれている。器面は黄茶褐色を呈し，裏面には黒色炭化物の付着がみられる。

（高橋　和樹）

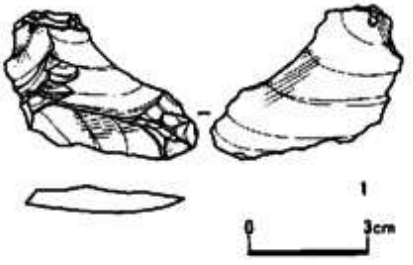
石　器　（第11図1，図版18A）

本遺構からは，硬質頁岩の縦長剥片が1点出土しただけである。上部に打面を残したやや幅広のもので，側縁に加工や使用痕は認められなかった。　（土田亜佐子）

第6号ピット（第12図，図版5A）

壙口部104×90cm，壙底部59×50cm，深さ35cmを測る不整楕円形のプランであるが，特に壙底部の平面は不定形といえよう。掘り込みは急角度で行なわれており，底面は平坦である。長軸方向は，北東―南西をとる。

層の堆積は，a層，暗茶褐色砂層（非常に



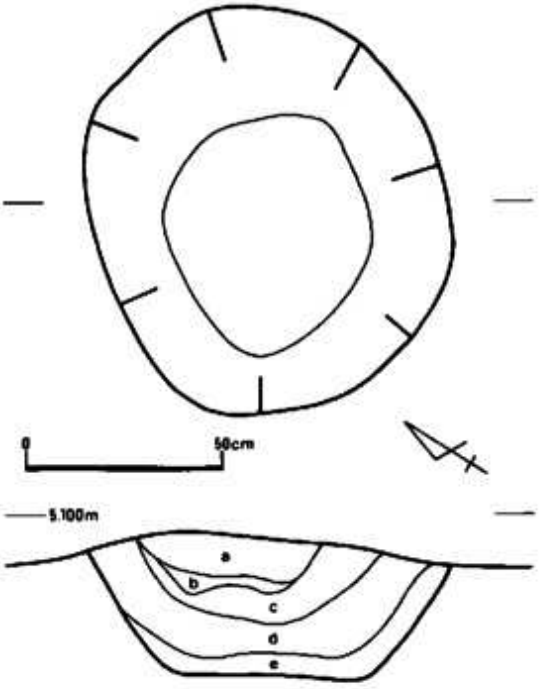
第11図　第5号ピット出土石器実測図

堅くしまっている。若干粘性有り)。b層，暗茶褐色砂質土層（a層より軟らかく，褐鉄と青灰砂が混合した層)。c層，暗茶褐色砂層(a層より暗く，土粒子の量はa層より少なく軟らかい)。d層，青灰色砂層（やや堅く，中央より右側に褐鉄が多い)。e層，青灰色砂層(d層より黄色がかった明るい色をしている。中央より右側に褐鉄分多い)。

遺物は何ら検出されていない。(内山　真澄)

第7号ピット（第13図，図版5B）

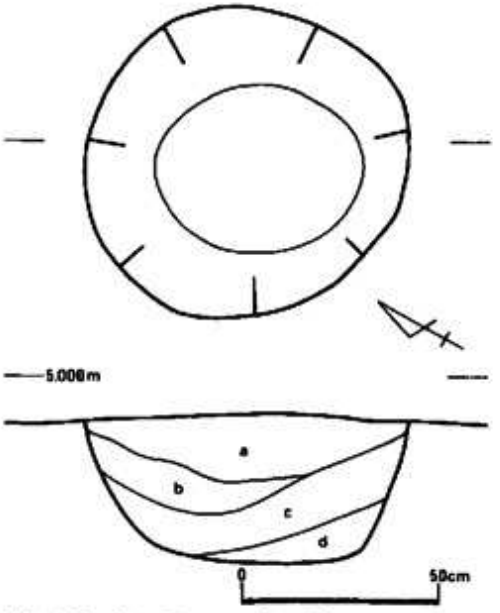
壙口部82×80 cm，壙底部53×42 cm，深さ38 cmを測る壙口部の平面形は不整円形のプランを呈しているが，壙底部の平面形は長軸を北北西—南南東にとる不整楕円形である。堀り込みは急角度で行われており，壙底面は，ほぼ平坦である。



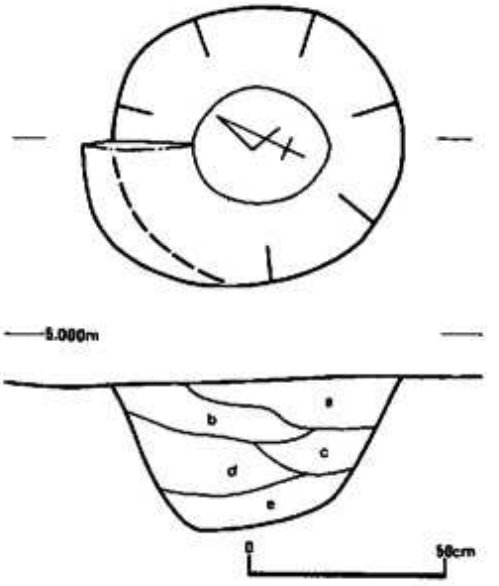
第12図　第6号ピット実測図

層の堆積は，a層，暗赤褐色砂質土層（褐鉄が沈着し，堅くしまっている)。b層，淡黒褐色砂層（堅くしまっている)。c層，暗黄褐色砂層。d層，黄褐色砂層（やや軟らかい)。b，c，d層における褐鉄分の含有はさほど多くない。

遺物は，覆土中より土器片が2点検出されたのみである。　(内山　真澄)



第13図　第7号ピット実測図



第14図　第8号ピット実測図

遺　物

土　器　（第25図6，7，図版11A）

第25図6，7は，共にa層に見出された土器の破片である。6の地文は，結束部より上の部分が現存しないため明確ではないが，結束第一種のある単節の羽状縄文かと思われる。胎土には繊維の含有は認められず，色調は黄赤褐色を呈し，裏面は滑らかに調整されている。

7は，山形の小突起を有する口縁部の破片で，肥厚帯下には3個の円形刺突文が現存している。これらの円形刺突文の刺突は深くて内面に突瘤をつくるが，真中のものでは遂に貫通している。やや平坦な口唇上には，小突起の左側では右下りの，右側では左下りの単節の斜縄文が施されている。突起下右側の肥厚帯上に左下りの縄文がみられるほかは，地文の右下りの単節斜縄文は全面に及んでおり，さらに肥厚帯のなかほどと現存部下端とには，結束第二種の回転押捺による結束文が加えられている。この斜縄文と結束文とによる文様は内面にもみられ，ここでは結束文は縦位に回転押捺されている。　（高橋　和樹）

第8号ピット（第14図，図版6A）

壙口部74×71cm，壙底部35×30cm，深さ41cmを測る，不整円形を呈するプランである。壁の状態は急角度で堀り込まれており，床面は北西側に傾斜している。又，北西部では堀り過ぎている部分があり，破線で示されるものが遺構本来の大きさであろう。

層の堆積は，a層，暗灰茶褐色砂質土層（褐鉄を多量に含み，やや軟らかい）。b層，黄褐色砂層（褐鉄分が多く，堅くしまっている）。c層，暗黄褐色砂層（b層より茶褐色味が強く，b層より軟らかい）。d層，灰茶褐色砂質土層（褐鉄の含有かなり多く，堅くしまっている）。e層，淡黄茶褐色砂層（褐鉄の含有かなり多く，軟らかい。d層が漸移的に色調が薄れてe層となる）。

遺物は何ら検出されていない。　（内山　真澄）

第9号ピット（第15図，図版6B）

壙口部200×179cm，壙底部124×99cm，深さ32cmを測り，不整楕円形～不整五角形を呈するプランである。壁の立ち上りは，壙底近くでは比較的急角度であるが壙口近くでは湾曲して緩やかとなっており，セクションより見るならば段差を有するような立ち上りの状態である。壙底面は，ほぼ平坦な状態と言えよう。長軸方向は，ほぼ東－西方向にとっている。

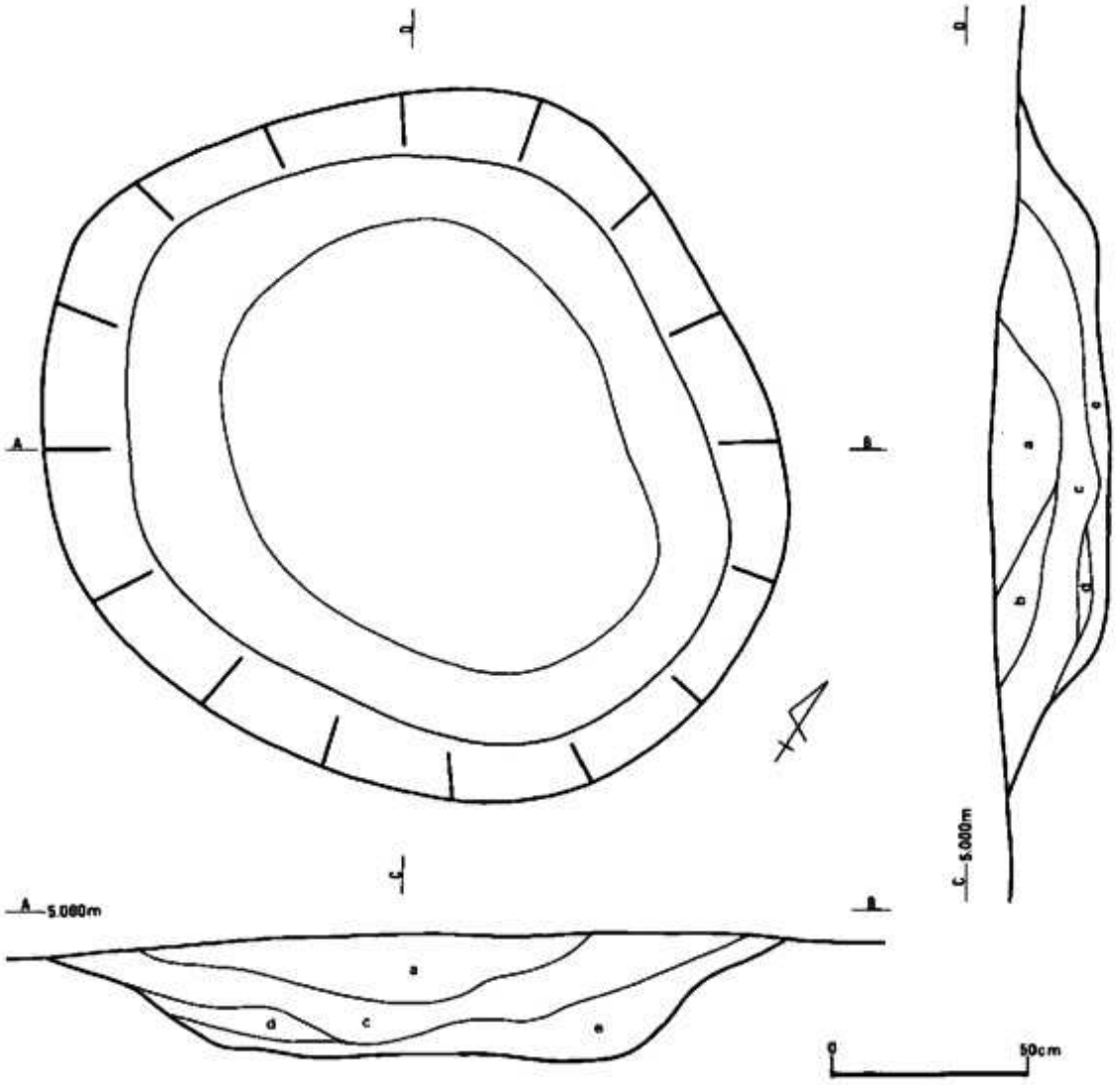
層の堆積は，a層，暗灰茶褐色砂質土層（褐鉄分を多く含む）。b層，暗茶褐色砂質土層（比較的堅く，a層より黒味が強い）。c層，褐色砂質土層（黒色味が強い）。d層，褐色砂質土層（褐鉄分を多く含み，やや青味がある）。e層，灰褐色砂質土層（やや褐鉄分を含む）。

遺物は，覆土中より土器片が5点検出されている。　（内山　真澄）

遺　物

土　器　（第25図8～12，図版11A）

本遺構から検出された5個の土器片のうち，第25図9～12の4例はe層に散在していたものであり，同図8はc層中に見出されたものである。



第15図　第9号ピット実測図

8は，単節の斜行縄文のみられる胴部片で，裏面はやや丁寧に調整されている。9は，結束第一種のある単節の斜行縄文を地文にもつ胴部片で，現存部の上端には平箆状工具によるものであろうか，横位の連続刺突文が2個，断片的に残存している。裏面には，結束第一種のある単節の縄文原体をほぼ縦位に回転押捺した羽状縄文がみられる。器面は暗赤茶褐色を呈し，光沢がある。10も焼成や色調などにおいて9に近い印象を受ける土器片であり，結束第二種のある単節の羽状縄文がみられる。裏面は調整されずに粗面のままである。11，12は，共にトコロ第6類の破片と思われるもので，胎土には細礫を含むほか，繊維の含有もみられる。11は，やや大きく外反する口頸部の一部で，器面には単節の斜行縄文が施されている。12は，結束第一種のある単節の羽状縄文がみられる胴部片である。

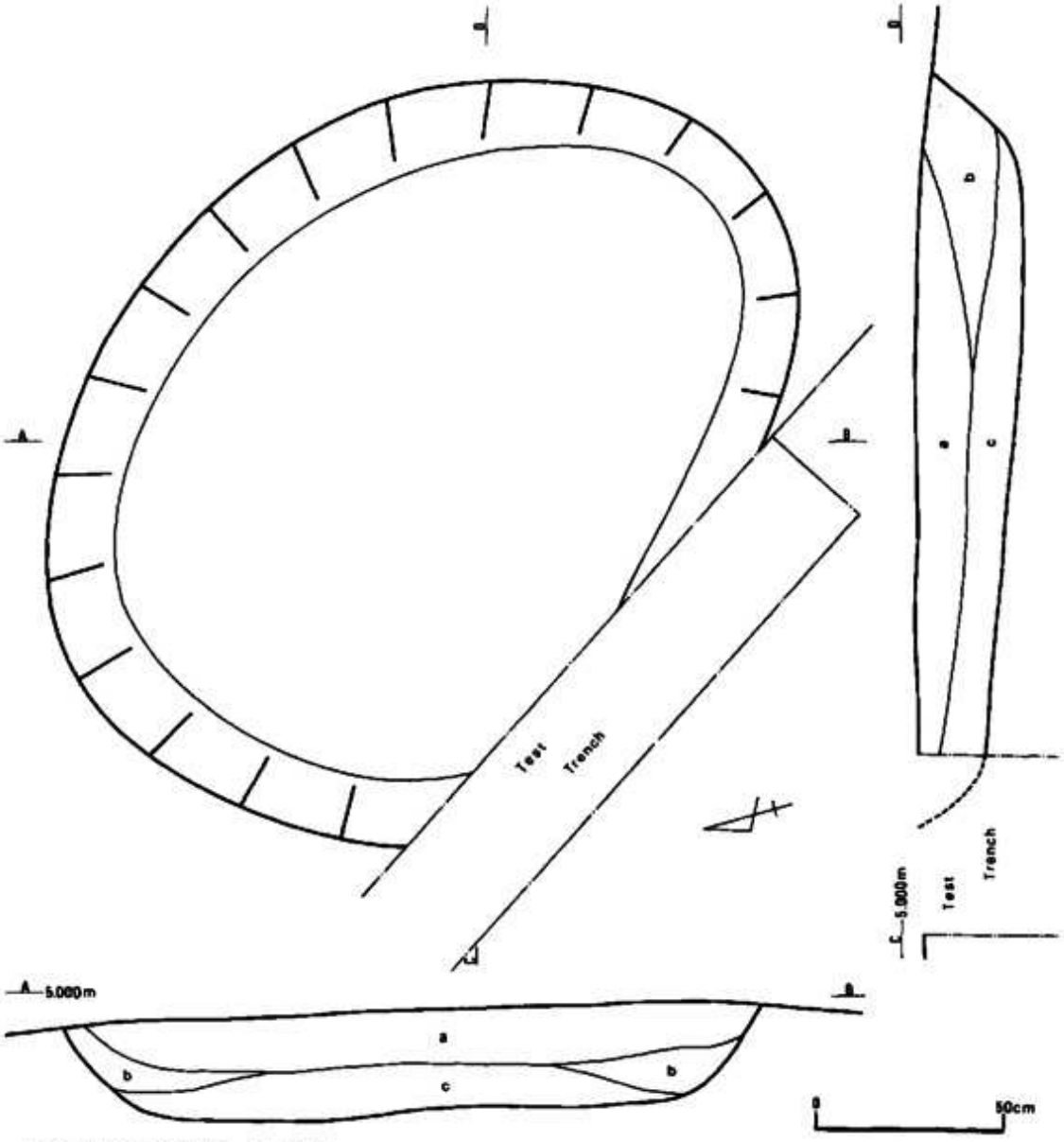
（高橋　和樹）

第10号ピット（第16図，図版7A，B）

壙口部229×（180）cm，壙底部194×（140）cm，深さ27cmを測る，不整長楕円形～不整五角形を呈するプランである。掘り込みは比較的急角度で行われており，床面は，ほぼ平坦な状態である。長軸は，北北西－南南東方向にとっている。

層の堆積は，a層，暗灰赤褐色砂層（火山灰を若干含み，軟らかい）。b層，暗赤褐色砂層（やや堅くしまっている）。c層，暗黄赤褐色砂層（軟らかい）。これらa，b，cの各層は，共に暗黄褐色砂を土体とするが多量の褐鉄分を含み，暗赤褐色がちであった。

遺物は，覆土中より数点の土器片が検出されている。（内山　真澄）



第16図　第10号ピット実測図

遺　物

土　器　（第25図13～15，図版11 A）

第25図13～15は，a層およびb層に散在していた土器片である。

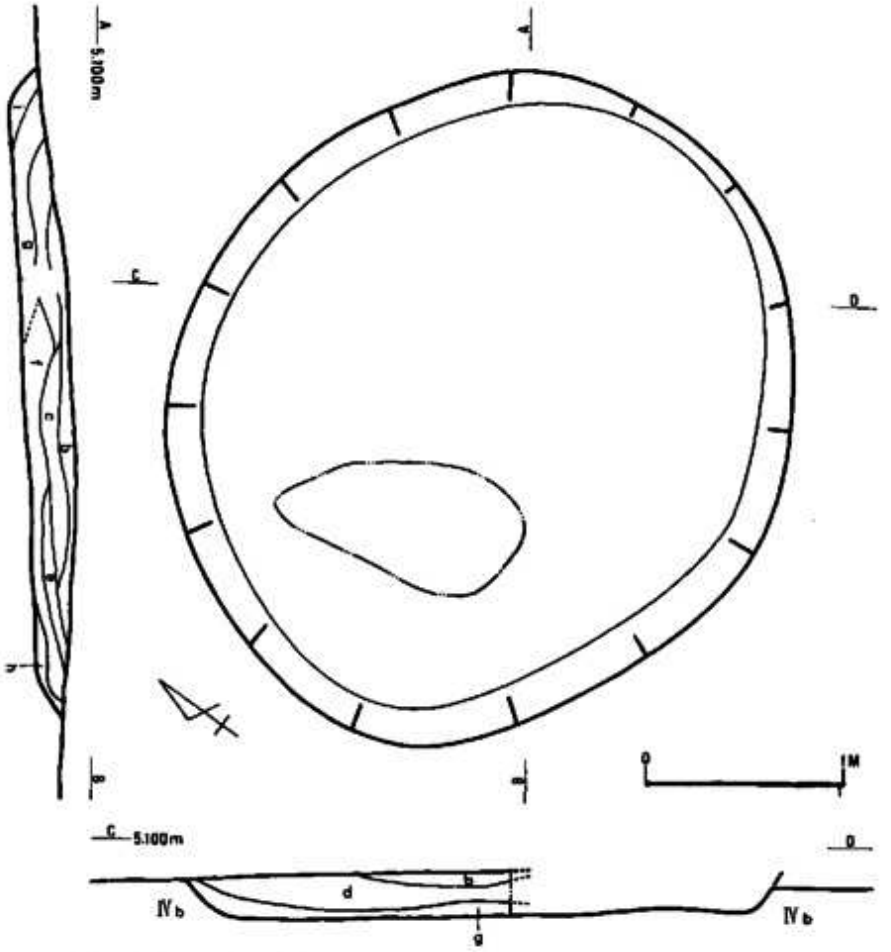
13には，地文の単節の斜行縄文に重ねて細い貼付文が加えられており，貼付文上には，細い縄を利用した撚糸文が施されている。14は，薄手の小形土器の胴部片と思われるもので，摩耗のため不明瞭ではあるが，器面には単節の羽状縄文がみられる。裏面は調整されて滑らかである。15には，単節の斜行縄文がみられ，裏面は滑沢に調整されている。　（高橋　和樹）

第11号ピット（第17図，図版7 B）

壙口部345×312 cm，壙底部317×272 cm，深さ26 cmを測る不整楕円形プランを呈している。長軸方向は略東一西である。

床面の状態は，ほぼ平坦になっており，壁の立ち上りは四周とも約45°の角度である。

本号は遺構の規模から見るならば，竪穴住居址の可能性も考えられるが付属施設は何ら検出され



第17図　第11号ピット実測図

ていない。

平面図中に二点鎖線で示されるのは攪乱壙の範囲である。

層の堆積状況は，a層白灰茶褐色砂質土層（火山灰を比較的多量に含有し，褐鉄の含有もやや多くてやや赤褐色がちな色調を呈する）。これは，第17図における断面実測図にはみられず，第3図にのみその一部が図示されている層であるが，このa層と次に説明するb層とは非常による似ており，あるいは同一の層として理解されるべきかも知れない。b層，灰褐色砂質土層（やや砂がちな火山灰層で多量の褐鉄を含み，軟らかい）。c層，暗赤茶褐色砂質土層（少量の火山灰と多量の褐鉄分を含む）。d層，暗黄茶褐色砂層（褐鉄分を多く含み，堅くしまっている）。e層，淡黒灰褐色砂質土層（c層に比べ火山灰の含有多く，灰色がち）。f層，暗赤褐色砂層（多量の褐鉄が沈着しており，部分的には2～3cm程の褐鉄のみの堅い層が見られ，堅くしまっている）。g層，赤褐色砂層（f層とほぼ同様な層で，f層との境は漸移的で不明瞭である。褐鉄分やや少なく色調も全体的に暗黄茶褐色がちである）。h層，黄茶褐色砂層（若干褐鉄を含み，やや堅くしまっている）。i層，黄赤褐色砂層（若干褐鉄を含み，軟らかい）。

遺物は，覆土中より土器片6点が検出されている。（内山　真澄）

遺　物

土　器　（第25図16～19，図版11A）

第25図16～19は，いずれも西部の攪乱層より検出されたもので，同一個体の破片と思われる。口縁は平縁で，口縁部がゆるやかに外反する，やや小形薄手の土器である。口縁部肥厚帯上には，細い粘土紐が鋸歯状に貼付されている。表裏ともに摩耗がすすみ，16以外では殆んどみえないが，この鋸歯状の貼付文沿いには，それぞれ絡条体圧痕文が加えられている。地文は単節の斜行縄文で，19の裏面には，滑沢に調整されたおもかげが残されている。

西部の攪乱層およびd層からは，このほかにも数点の土器の小破片が採集されているが，剥落や摩耗のため図示に耐えない。（高橋　和樹）

第12号ピット（第18，19図，図版8B，9AB，10AB）

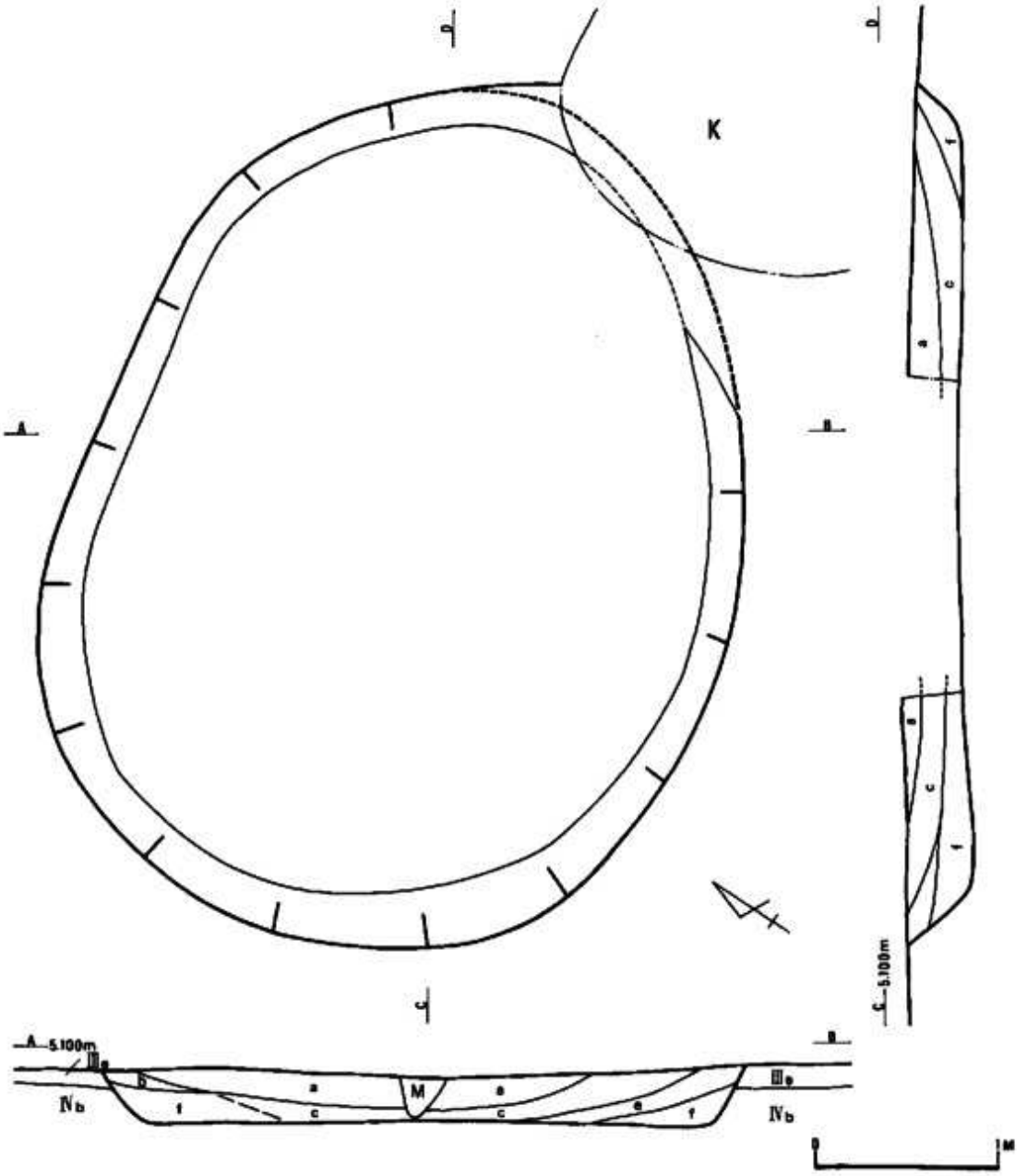
P，Q－（－）20，21区にわたって存在し，東側の壁沿の一部は風倒木によって攪乱を受けている。

壙口部（484）×370cm，壙底部440×330cm，深さ34cmを測る不整楕円形～不整五角形のプランを呈している。長軸方向は不整五角形の先端方向を長軸として，略東－西を示している。

堀り込みは四周とも約45°の角度で成されており，床面はほぼ平坦な状態である。

本号は遺構の規模などから見て竪穴住居址の可能性も考えられるが，付属施設の欠落している点など竪穴住居址とする条件には欠ける面もある。

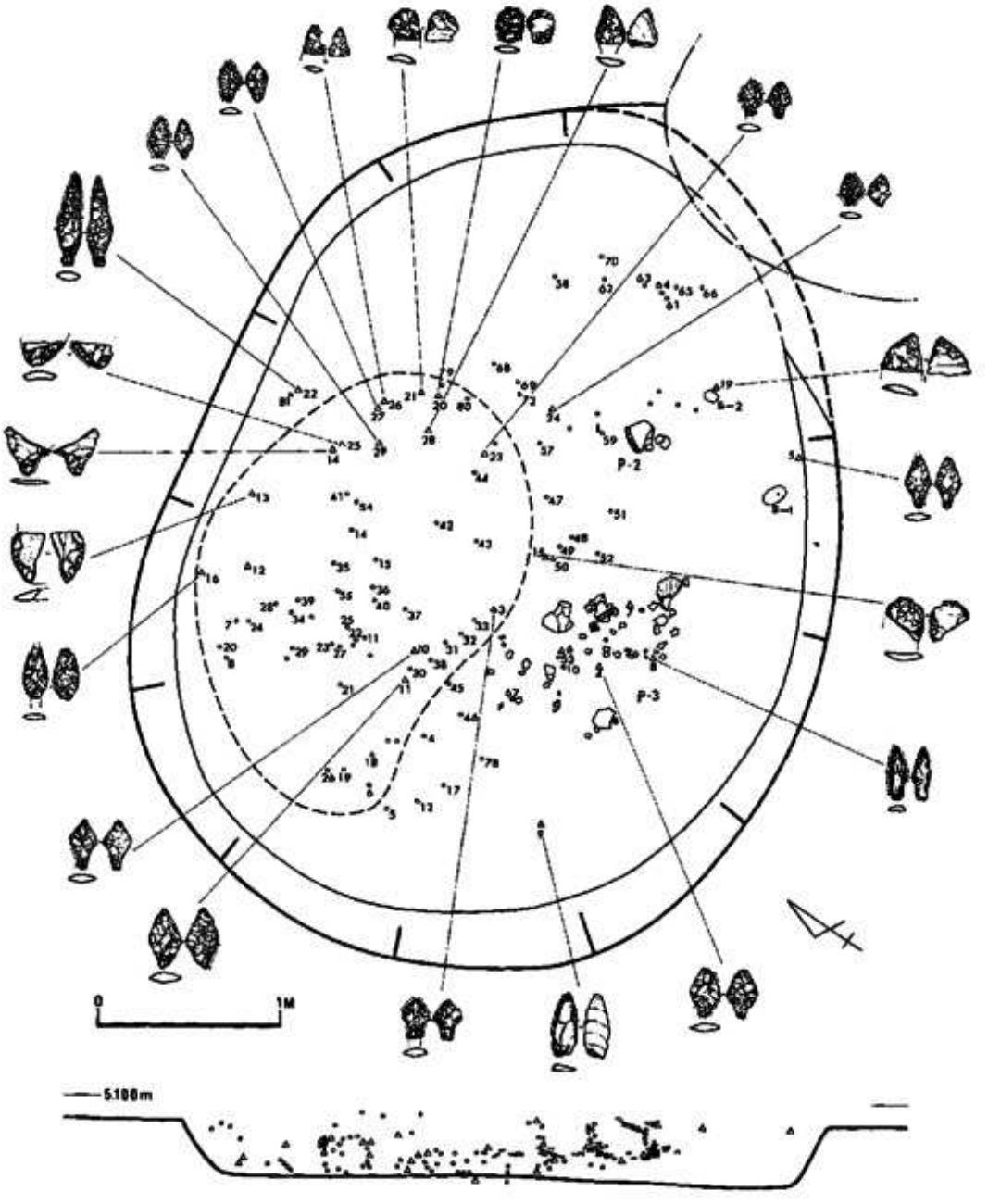
埋没状況は，Ⅲe層，暗茶褐色砂層，Ⅳb層，淡黄褐色砂層，M層，ゴミ穴又は柱穴，（以上の3層は遺跡の層序参照）。a層，淡黒褐色砂層（多量の褐鉄分が沈着し，堅くしまっている）。b層，黄茶褐色砂層（多量の褐鉄を含み，堅くしまっている）。c層，黄茶褐色砂層（褐鉄を含み，b層よりも有機物に富み，やや堅くしまっている）。d層，黄茶褐色砂層（褐鉄分を含み，b，c層との中



第18図　第12号ピット実測図

間的な色調で，やや硬くしまっている)。e層，淡黄茶褐色砂層（比較的多くの褐鉄分を含むが，軟らかい)。f層，黄褐色砂層（褐鉄の含有は少なく，軟らかい)。

遺物は第19図の遺物分布図に示されているごとく数多くの土器，石器，石片が検出されており，今回の調査で確認された14基の遺構中で最も出土遺物に富んでいる。(第19図では，土器の略号Pおよび石器・石片の略号sは，その大部分を省略している）覆土のa層下部よりc，f層中には多



・□ 土器片
△ 石器、石片
⬭ チップの分布範囲

第19図　第12号ピット遺物分布図

量の削片が含有されており，これらの層を水洗分離した結果，黒曜石削片 483 g，硬質頁岩削片 21.7 g，黒曜石縦長剥片 7 点，石器 28 点を得ている。分布図中に破線で示されるのは削片が特に集中的に得られた範囲である。又，この様に多量の削片が覆土中に存在している場合，北西壁部などでは削片の検出される層位は明らかに覆土であり，壁に達すると削片の出土は見られなくなり壁確認の一要素でもあった。（内山　真澄）

遺　物

土　器（第 20 図 1 ～ 5，第 25 図 20～31，第 26 図 32，33，図版 11 A，B，12，13，14 A）

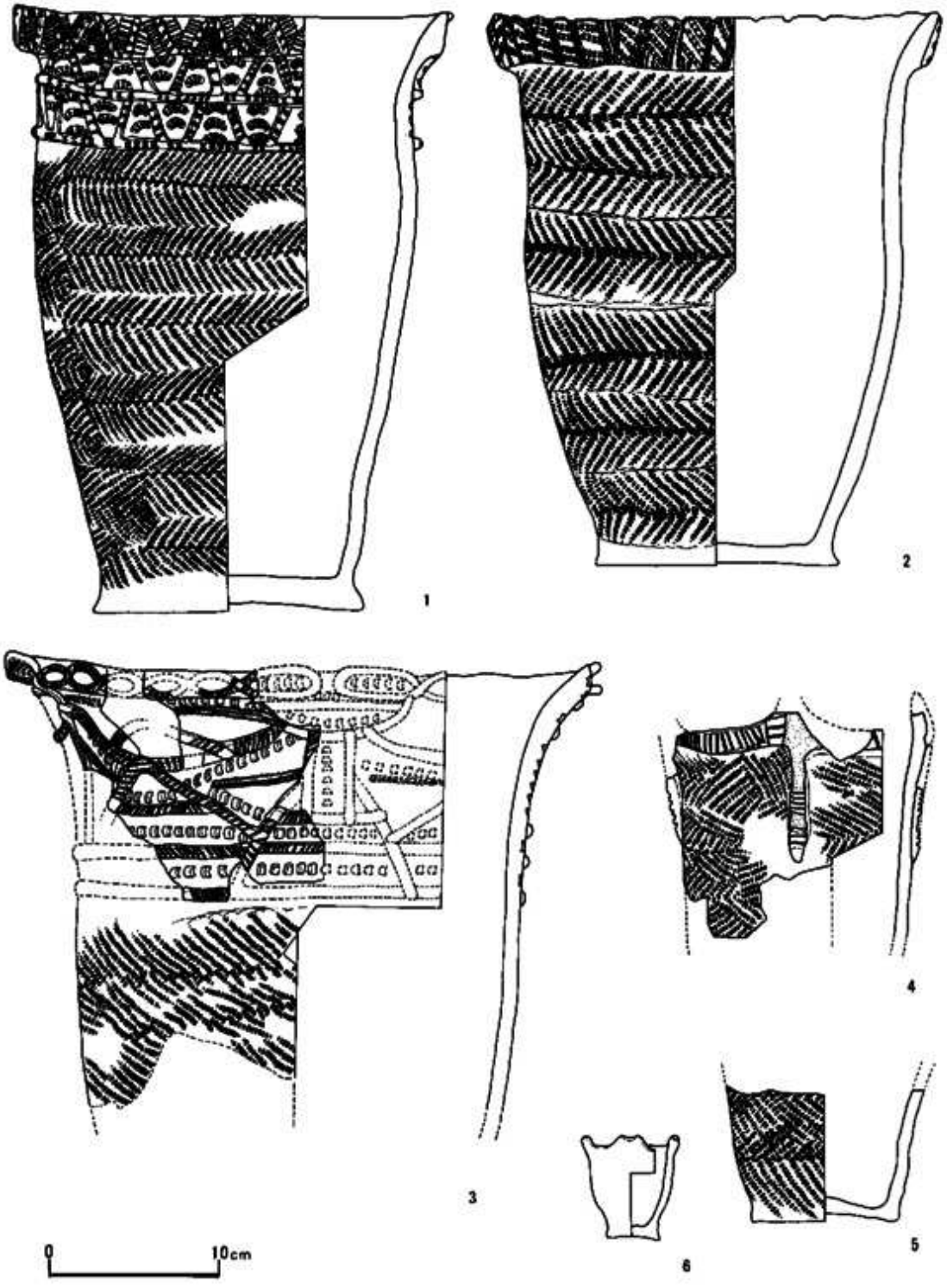
本遺構における土器片の分布は，第 19 図に示す通りである。第 19 図のうち○印ではなく，破片の形のままに図示した土器片は，別に縮尺 1/10 で実測した，比較的大きな土器片のまとまりを全体の分布図に組み込んだものであり，東側のまとまりはP－2に，中央南寄りのそれはP－3として一括して取扱っている。また，第 19 図には欠番があるが，これはいわゆる風倒木痕や遺構外から検出された若干の土器片にも通し番号が付されているため，それらを除去した第 19 図には欠番が生じた次第である。

第 19 図にみられるように，土器片は本遺構のほぼ全域に分布するが，比較的大きな破片のまとまりは，どちらかといえば東側にその分布がより顕著であり，一見，チップの西側を主体とする分布と対照的にみえる。ただ，個々に後述するように，土器片相互の接合関係はかなり広域的であり，同一個体に属する土器片が，それぞれかなり離れて遺存していた例も少なくない。

土器片は，a，b，c，f の各層からそれぞれ検出されているが，大半は a 層中に見出されたものであり，残りの大部分は c 層中に遺存していた。しかし，同一個体に属する土器片が，a，b，f の各層より見出されたり（第 20 図 4 など），a，c，f 層（第 20 図 3 など），a，c 層（第 20 図 5 など），a，b 層（第 26 図 33 など）から検出されるなどしており，土器片相互の接合関係からみると，主として視覚にたよった覆土の分層は，大きな意味をもたないことが理解される。本遺構に見出された土器にはいくつかの形式が認められるが，それぞれの土器形式と出土層位との間には，何らの相関関係も見出されてはいない。

さて，本遺構に見出された土器のうち，ほぼ完形に復元されたものは，第 20 図 1，2 に図示する 2 点である。

1 は，第 19 図のP－61～66，70 などの土器片のまとまり（図版 10 A）を主体に，P－57（図版 10 B），P－59 およびQ－（－）21 区攪乱層より採集の破片などが接合したもので，体上半部には若干の欠損部分も散見されるが，ほぼ完全に復元されている。これは，口縁部がゆるやかに外反し，わずかに張む胴半部から底部へとやや急激なすぼまりのみられる深鉢形土器で，高さ 36.5 cm，口径 25.7 cm，底径 16.0 cm，器厚 1.0 cm 程を測る。口縁は平縁で，底部はやや外側へ張り出している。器面は黄赤褐色を呈し，裏面は滑らかに調整されている。口縁部には断面が三角形をなす肥厚帯がめぐり，この肥厚帯上および横環する 2 本の粘土紐によってほぼ肥厚帯と同じ幅に区画された肥厚帯下の文様帯には，それぞれ粘土紐が「ハ」の字状に連続して貼付されている。これらの貼付文上には，それぞれ絡条体圧痕文が加えられている。肥厚帯上を鋸歯状にめぐる貼付文のそれぞれは，



第20図　第12号ピットおよび発掘区出土遺物　（1～5：第12号ピット、6：R－19区）

わずかに回転押捺された絡条体圧痕文に縁どられており，肥厚帯下の三角形に区画された貼付文間には，絡条体圧痕による弧状の圧痕文が，それぞれ縦位に2～3個重ねて加えられている。文様帯下の器面には，地文の結束第一種のある単節の羽状縄文が一面に施文されている。

2は，第19図のP－2およびP－3（図版9A，B）を主体とし，これにP－15，33，47などが接合してほぼ完形に復元されたもので，口縁部は⅓周程が，そのほかは½～⅔周程が現存している。推定口径は25.5cmで，器形はほぼ1と同様だが，器高が33.0cmとやや低いわりには胴半部の張みがやや大きく，1に比して全体にずんぐりとした印象が強い。推定底径14.3cm，器厚1.1cm程である。器面は黄赤褐色を呈し，裏面は滑らかに調整されている。口縁部肥厚帯上には，やや幅広の斜位の貼付文が並列しているが，その傾きは右下りから左下りへと途中で転換されている。これらの貼付文上には絡条体圧痕文が，貼付文間には撚糸文がそれぞれ加えられている。肥厚帯下の地文は，やはり結束第一種のある単節の羽状縄文である。

想定復元を含めても，体上半部がほぼ復元されたのは，第20図3，4の2点に過ぎない。

3は，図版14Aにみられる2つの大きな接合破片から想定復元された，推定口径35cm程のやや大形な土器の体上半部である。これは，個々の破片の形のまま第19図に図示したP－3一括のうち，西方のやや嵩なまとまりを主体に，P－33，37，44，45，79，81などが接合したものである。口縁は平縁で，やや張みに乏しい胴上半部から口頸部が比較的大きく外反している。器面は赤茶褐色を呈し，裏面は滑沢に調整されている。

口縁部肥厚帯上には，対向する長楕円状の貼付文から左右に分れて，それぞれ鎖状に組み合せられた貼付文がめぐっている。長楕円状の貼付文は，対向部へと向うにつれ次第に高くつくり出されており，長楕円状に区画された内部には，半截竹管による刺突文列が横位に加えられている。それぞれの貼付文上には撚糸文が施されているが，これは肥厚帯下の貼付文についても同様である。

肥厚帯下では，肥厚帯上に対向する長楕円状貼付文の下にみられる2本の縦位の貼付文と，胴上部にやや間隔をおいて横環する2本の貼付文とによって文様帯が大きく区画されており，この間には，それぞれ弧状および斜位の貼付文による文様が展開されている。各貼付文間や貼付文沿いには，半截竹管による刺突文列が加えられており，3本単位の撚糸圧痕文の添加もみられる。地文は，結束第一種のある単節の斜行縄文である。

4は，第19図にP－20とした6個の破片を主体に，P－24，P－34，P－39などが接合したもので，推定口径16cm弱，器厚6～7mm程の比較的小形，薄手な深鉢形土器の体上半部で，½周程が現存している。肥厚帯を有する口縁は波状を呈し，波頂部には全周で4個の小突起があったものと思われる。突起の頂部が現存しないため，その形状については不明であるが，突起下には懸垂状貼付文がみられる。突起部および懸垂状貼付文の上には，平篦状工具を刺突したものであろうか，ほぼ横位の刻みが連続して加えられ，口縁部肥厚帯上には，右下りぎみに加えられた縦位の刻みが並列している。地文は，結束第一種のある単節の羽状縄文原体の回転押捺によるものと判断されるが，器面の摩耗に加えて，もともとの施文がややぞんざいになされているため，一部に不明瞭な箇所もみられる。裏面は丁寧に調整されており，光沢がある。

尚，第26図33は，接合こそしてないが，出土地点や器形，地文などから判断して，第20図4と同一個体に属するものと思われる。これは，やはり第19図のP－20に一括された土器片を主体とし，これにP－7，8，24などが接合したもので，胴半部から底部にかけての⅔周程が現存している。地文や裏面における調整などの様相は，第20図4と全く変わるところがなく，側面に殆ど屈曲の認められない点も両者に共通している。

次に，口縁部を主体とする小破片や胴部の大片，底部などの資料について説明するが，この中には一部，本遺構の縁辺における攪乱層や遺構外から採集された土器片も含まれている。

第25図20，22は，口縁部に肥厚帯のめぐる平縁の土器で，肥厚帯上に文様のみられる例である。20は，東部のいわゆる風倒木痕に見出されたもので，肥厚帯上には現存1個の縦位の貼付文と，肥厚帯の上端および下端をめぐる横位の貼付文とがみられ，それぞれの貼付文上および貼付文間には，径の小さな半截竹管による刺突文列が加えられている。表裏ともに摩耗がすすみ地文は不明であるが，裏面は滑沢に調整されたおもかげをとどめている。色調は黄茶褐色を呈し，胎土には繊維の含有が認められる。22（第19図P－5）の肥厚帯上には，矩形の貼付文と並列する縦位の貼付文とがみられ，矩形の貼付文上には絡条体圧痕文が，縦位の貼付文間には，横位にやや回転押捺された絡条体圧痕文がそれぞれ加えられており，後者の施文は貼付文上にも及んでいる。肥厚帯下には，縦位にやや回転押捺の加えられた絡条体圧痕文が，密に施文されている。淡褐色を呈し，裏面は滑らかに調整されている。

第25図21，24は，やはり口縁部肥厚帯を有する平縁の土器で，肥厚帯上に地文のみられる例である。21，24には，ともに結束第一種のある単節の羽状縄文原体による地文がみられ，24の肥厚帯下には，径の小さな半截竹管による横位の刺突文列が3段めぐっている。ともに裏面は滑らかに調整されている。

第25図23は，肥厚帯の下縁と器面とが段差なく連続し，口縁部がやや内屈するという特異な器形を呈する，やや小形な平縁の土器の一部である。色調は暗黄茶褐色を呈し，肥厚帯上およびその下には，単節の斜行縄文が施文されている。胎土には繊維の含有がみられ，裏面は滑らかに調整されている。

第25図25には，小突起が1個と，突起下を縁どる貼付文，そして弧状にのびる2本の貼付文が現存している。貼付文の様相から判断すると，現存する小突起と同様の小突起がもう2個並んで，突起部が構成されていたものらしい。それぞれの貼付文上には撚糸文が加えられており，地文は単節の斜行縄文で，裏面は滑沢に調整されている。

第25図29，30，第26図32は，円筒上層式に属する土器の胴部片と思われるもので，胴半部にやや膨みが認められ，いずれも裏面は滑沢に調整されている。29は，東部のいわゆる風倒木痕より検出されたもので，結束第一種のある単節の斜行縄文がみられる。30（第19図のP－17を主体とし，P－19，78などが接合）は，器面の摩耗がすすみやや不鮮明ではあるが，地文は結束第一種のある単節の羽状縄文である。32（第19図のP－32，38，68などが接合）にみられる地文も，結束第一種のある単節の羽状縄文である。

第20図5，第25図31は，円筒上層式に属する土器の底部で，ともに裏面は滑沢に調整されている。5（第19図P－3の一部）は，底径8.7cm，器厚0.6cm程を測る比較的小形，薄手な土器の底部で，全体の¼周ほどは欠損している。地文は，結束第一種のある単節の羽状縄文であり，底面の中央部は接地しない。31は，やや外側へ張り出しのみられる底部の破片であるが，これは第19図のP－78の一部であり，第25図30と出土地点を同じくする。地文の結束第一種のある単節の羽状縄文の様相や器面の摩耗の程度から判断しても，これが30と同一個体であることは，ほぼ間違いない。

第25図26は，遺構外から採集された小片で，半截竹管の外面を器面にあてて押し引いた，横位および縦位の連続刺突文がみられる。地文は，無節の細縄を利用した撚糸文であろうか。器面は赤茶褐色を呈し，黒色炭化物の付着した裏面には，裏面調整は認められない。

第25図27は，口唇直下に平篦状工具による連続刺突文のめぐる口縁部の破片で，裏面は剥落している。地文は，単節の斜縄文である。同図28（第19図P－21）は，山形の小突起を有する口縁部の破片で，肥厚帯下には，竹管による円形刺突文が5個現存している。肥厚帯上および肥厚帯下に，結束第二種のある羽状縄文原体によると思われる地文がみられ，裏面にも同一の原体をほぼ縦位に回転押捺した縄文が施文されている。（高橋　和樹）

石　器（第21，22図，図版19，20）

本遺構からは，a層およびc層などの削片（chip）が多量に含有された層から石器が検出されている。その内訳は，石鏃14，石鏃破片および石器未成品36，ナイフ状石器1，剥片2，擦石破片1，砥石破片2の計56点で，この他に図示していないが，石斧片1，小円礫3点（うち1点は焼けている。硅岩1，複輝石安山岩2）が覆土から出土している。石器総数では，他の遺構に比較して多いが，石器未成品および欠損品がその大部分を占め，うち28点は，削片を含む層を水洗選別した中から検出されたものである。

石鏃および石器未成品（第21，22図49～51）

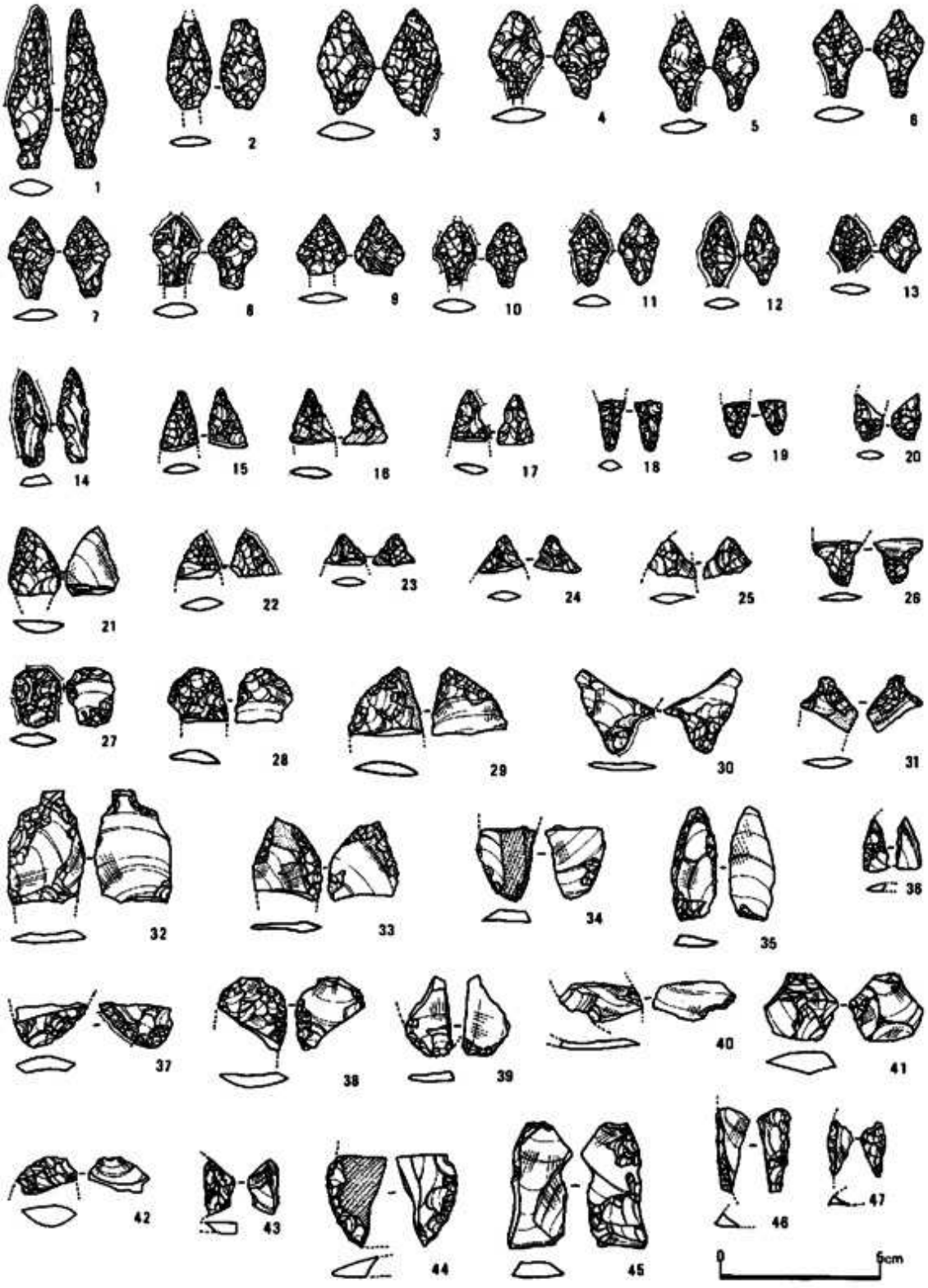
石鏃は，形態の伺えるものが1～14まで，破片は15～20，石鏃あるいは他の用途の石器の破片および未成品と考えられるものが21～47，49～51である。石質は，49，50例を除いて黒曜石製である。

1は，入念な両面加工で，尖頭部の指数が2.3と細身に仕上げられたものである。尖頭部の形態は，a面左にふくらんだ形で逆刺は明瞭ではなく，また茎部の両側がやや深く抉るように加工が入り，つまみのような形態になっており，さらに尖頭部先端は，やや丸みを帯びる点から，小形のナイフ状石器であったかもしれない。やや厚手で断面形はレンズ状を呈する。a面尖頭部両側縁に刃つぶれが顕著に認められる。

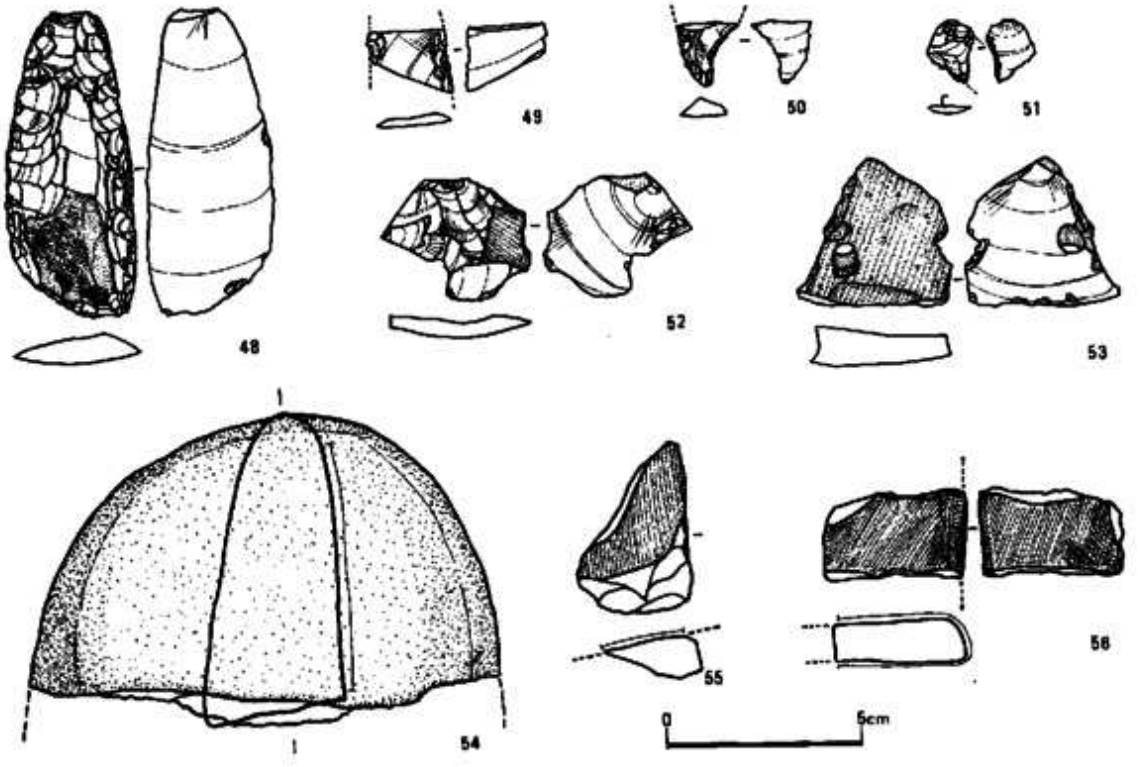
2は，尖頭部先端と茎部を欠損しているが，指数は2.1とやはり狭長であり，逆刺は丸みを持って茎部に続いている。全体に薄く，b面中央に縦長剥片の素材面を残している。

3は，幅広の尖頭部と茎部を有するひし形の例である。

4，5は，やや幅広の尖頭部で，茎はやや細身に仕上げられ，5の基底は平坦である。4は，a面左縁に素材面を残しており，加工もラフである。5は，両面中央に幅広く縦長剥片の素材面を残



第21図　第12号ピット出土石器実測図（1）



第22図　第12号ピット出土石器実測図（2）

している。

7～13までは，幅広の寸の短い尖頭部と太く長い茎部を有するものである。全体に小形で部厚く，特に11～13の3点は，両側縁のエッジに刃つぶれが著しく認められ，また尖頭部とか茎部縁に背の高い，ネガティブ・バルブを残す剥離が入っている点から，再加工が施されたことも考えられる。

14は，狭長で両面中央に縦長剥片の素材面を残した側縁加工で刃角は高い。茎部は太く，逆刺はa面右側に突き出た格好で，刃つぶれが両側縁に認められる。全体形は1例に類似している。

15～17は，尖頭部の破片と思われるものである。16は，欠損後全体に熱作用を受けている。

18～20は，茎部破片である。

21～28は，石鏃未成品と思われる。いずれも一面または両面に幅広く素材面および原石面を残しているもので，27，28例を除いて，両面ないし片面に剥離を入れ，尖った部分を作出しようとしているものであるが，27を除くほかは，いずれも欠損品のため形態ははっきりとしない。21は，やや部厚くa面のみに加工が入っており，b面下部の剥離は欠損面により切られている。26は，茎部を作出中に欠損したものとみえる。27，28は，全体に丸みを持ったもので，石鏃の未成品かどうか明確ではない。

29～45は，欠損品が多く，形態は不明なものが多く，またいずれも中途半端な加工で，器種は明確にできないが，何らかの石器の未成品と思われるものである。

29～31は，いずれも両面に加工を入れ，尖った部分を作出しようとした例で，それ以外の所は素材面のままである。

32は，扁平な縦長剥片を素材としたもので，上部につまみを作出している。加工はつまみ周辺の両側縁のみで，つまみのついたナイフ状石器の類を作る意図があったかもしれない。

33，34は，a面に幅広く原石面を残しており，33は両面上部に側縁加工，34はb面右側に加工が認められる他は素材面である。

35は，下部に原石面を有した打面を残し，a面両側縁に寸の短い加工を施しており，尖頭器類を作り出そうとしたものかもしれない。

36は，小破片で判然としないが，側縁加工の入ったもの，37は，両面加工品の破片である。

38は，上部に打面を残し，a面側に大まかな加工が施され，b面側縁にも加工がある。

39～45は，形態・加工とも不規則である。45のb面上部右には，バルブの高まりを取ろうとする加工が入っている。

46，47は，両面体石器を縦に剥いだスポール状のもので，a面側の加工は角度があるが，b面のものは平坦である。

49，50は，石質が硬質頁岩で，49は両側縁のみに加工が施されたナイフ状石器の未成品と考えられる。50は，a面中央に稜線を持ち，両側縁に背の高い加工が施されているが，a面右側縁は抉り状に剥離が入っている。これも，同様にナイフ状石器の一部かもしれない。

51は，打面を残す扇状削片で，a面に不規則な剥離があるだけで，b面は素材面を残している。

ナイフ状石器および剥片・削片類（第22図48，52，53）

48は，柄のないナイフ状石器で，硬質頁岩の縦長剥片を素材としている。a面右にやや片寄った刃部を有し，側縁全周に背の高い加工を施している。a面下部には幅広く原石面を残しており，その一部に短軸・長軸方向の擦痕が認められる。

52は，a面左右に原石面を残す剥片で，a面左のものはa面と90°の角度をなす。b面は素材面のままで，a面右側縁には，使用による小剥離がコンケーブ状に入っている。

53は，a面左に穴のあいた，ほぼ四角形の原石を剥いだものである。b面左にノッチ状のくびれがあり，若干の剥離が認められる。

a層およびc層などからは，前述した如く多量の削片が出土している。サンプリングした覆土の砂を水洗選別したところ，黒曜石削片483 g，同じく黒曜石の縦長剥片7点，硬質頁岩削片21.64 gという膨大な量を検出することができた。削片の形状は，ほとんどが扇状削片で，大きさは0.2×0.2 cmの小形なものから1.0×1.0 cmのものまでである。

擦　石（第22図54）

複輝石安山岩の扁平な円礫で，図示した一面の中央に擦ったあとが認められるが，擦痕の方向は不明である。半截しているが，重量は400 gである。

砥　石（第22図55，56）

ともに砂岩で，55は大きく欠損しているため，形態は不明である。長軸方向に擦痕が認められる。

56は，扁平なもので欠損面の他は全面使用している。短軸方向に斜めの擦痕が認められる。

以上みてきた通り，削片と石鏃の未成品などが多数を占めること，台石などの大形礫器が認められないことなどから，本遺構は石器製造址，それも剥片石器の調整・再加工などの作業を主として行った場所か，或は未成品・削片の廃棄場所と考えることも可能であろう。　（土田亜佐子）

第13号，第14号ピット（第23図，図版7B）

本発掘区のR～S，(－)19～20区にわたって存在し，第13号，第14号の2基が重複した遺構である。

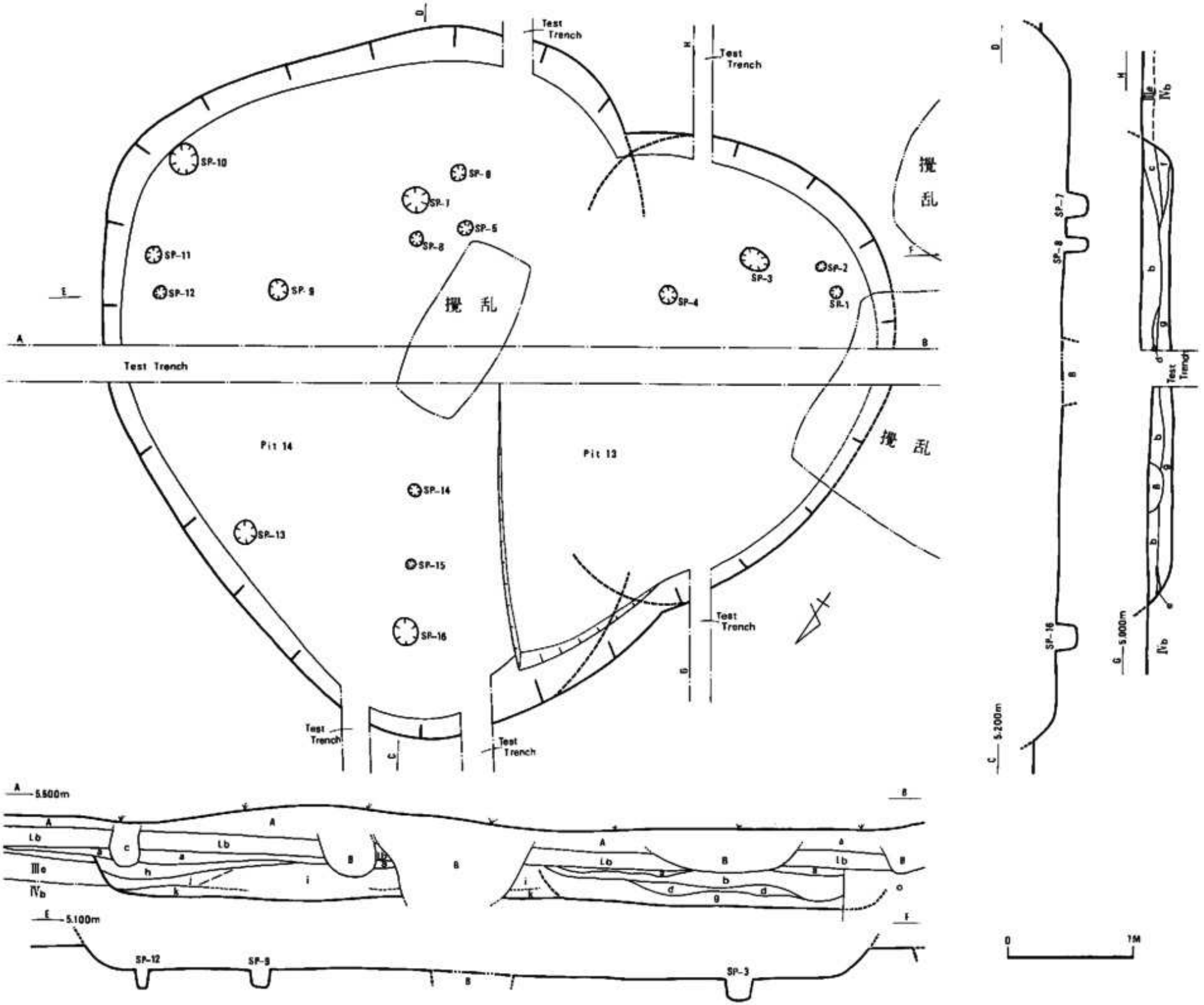
第13号，第14号の構築されているこの附近一帯は数多くの撹乱壙と耕作，盛土，加えて著しい褐鉄分の沈着が見られ保存の条件を非常に悪くしており，遺構の確認においても不明瞭な点が多い。このような条件の中で遺構の確認は非常に困難を極めており，平面図中に1点鎖線で示される壁確認のための小トレンチが6本，遺構を切る撹乱壙が2ヶ所，遺構近くにも1ヶ所撹乱壙が見られ，これらの撹乱壙は2点鎖線で図示したが，この外にも柱穴状の小撹乱が数多く見られた。

第13号は，壙口部（370）×（300）cm，壙底部（320）×（260）cm，深さ26cmを測る。平面形は不整楕円～不整五角形を呈するものと思われ，五角形の先端は北を指しており，長軸方向は南－北に取っている。掘り込みは約45°の角度でおこなわれており，床面はほぼ平坦である。

第14号は，壙口部554×（460）cm，壙底部500×（430）cm，深さ38cmを測る。平面形は不整五角形を呈し，五角形の先端は北西を指しており，長軸は北西－南東方向である。掘り込みは約45°の角度でおこなわれ，床面はほぼ平坦である。

この2遺構の付属施設として16個の小柱穴が確認されているが，規則的な配列は認められない。SP－1～4の柱穴は第13号に付属し，他の12個については第14号に付属するものと思われる。新旧関係については地層の断面観察においても不明瞭で一線を画し難いが，一応，セクション図の破線の如き状態で第13号が第14号を切って構築されているものと理解しておきたい。遺構の性格については規模などから見て竪穴住居址と考えられるが不明な点も多い。

埋没状況は，A層，盛土。B層，盛土（ブロック状に存在する）。C層，木の根による撹乱。Lb層，暗灰茶褐色砂層。D層，ゴミ穴による撹乱。IIb層，淡黒褐色砂質土層。IIIe層，暗赤黄～暗茶褐色砂層。IVb層，淡黄褐色砂層。以上，砂丘の自然層位及び撹乱層については遺跡の層序参照の事。a層，白灰茶褐色砂質土層（火山灰を多く含み，褐鉄分も多くやや堅くしまっている）。b層，淡黒灰褐色砂質土層（褐鉄の含有多く，赤褐色がちで堅くしまっており，高師小僧が点在する）。c層，暗赤褐色砂層（褐鉄を多量に含み非常に堅い）。d層，灰赤茶褐色砂質土層（褐鉄を多く含み堅くしまっている）。e層，淡灰褐色砂質土層（淡灰褐色火山灰含みの砂質土小ブロックを主体とし，高師小僧が点在する）。f層，暗黄褐色砂層（若干の褐鉄を含む）。g層，淡黄茶褐色砂層（若干の褐鉄を含み，やや赤褐色がち）。h層，黒灰色砂質土層（褐鉄を含むが，やわらかい）。i層，暗茶褐色砂質土層（褐鉄を含み堅くしまっている。やや黒味がちなところから淡い褐色を呈するまで漸移的に変化しているが分層しうるほど明瞭な境は認められない）。j層，淡赤茶褐色砂質土層（褐鉄を含みやや堅くしまっている，i層との境は漸移的で不明瞭）。k層，黄茶褐色砂質土層（褐鉄分を若干



第23図　第13,14号ピット実測図

含み，やや堅くしまっている．ｉ層との境は漸移的で分層し難い部分も多い。又，ｉ，ｋ層とｇ層との境界も不明瞭で一線を画し難いが，一応ｇ層がｉ，ｋ層を切るものと理解しておきたい)。

遺物は若干の土器片と石器11点，石片数点が検出されている。出土層位はいずれも覆土上層である。

（内山　真澄）

第1表　第13，14号ピット小ピット一覧表

No.	平面形	規模	深さ	内容物	備考
1	不整円形	11×10cm	10.6cm	暗黄茶褐色砂	木の根，褐鉄粒を多く含む
2	不整楕円形	8×7	10.4	黄茶褐色	褐鉄粒を含む
3	不整楕円形	25×18	19.0	暗茶褐色砂	カーボンを若干含む
4	不整円形	16×15	8.9	黒褐色砂	褐鉄を若干含る
5	不整円形	13×13	10.7	黄褐色砂	
6	不整楕円形	15×13	6.1	黄褐色砂	
7	不整円形	22×22	17.0	暗青褐色砂	
8	不整円形	13×13	20.0	暗青褐色砂	カーボンを若干含む
9	不整円形	18×16	20.0	黄褐色砂	
10	不整楕円形	26×23	23.3	暗褐色砂	木の根，カーボンを若干含む
11	不整円形	15×14	16.4	黄褐色砂	カーボンを若干含む
12	不整円形	12×11	17.0	暗黄褐色砂	
13	不整円形	21×19	11.0	暗青灰色砂	地山砂？
14	不整楕円形	13×11	8.7	黄褐色砂	
15	不整楕円形	9×8	12.7	黄褐色砂	褐鉄を多量に含む
16	不整楕円形	24×20	18.0	黄褐色砂	褐鉄を含む

遺物

第13号ピット出土土器（第26図34～36，図版11Ｂ）

第26図34～36は，ほぼｂ層中に散在していた土器片である。34は，やや薄手の口縁部の破片で，推定口径は18cm程である。口縁は平縁で，口縁部は比較的ゆるやかに外反している。口縁部肥厚帯上には，絡条体圧痕による馬蹄形圧痕文が並んでおり，ここには地文はみられない。肥厚帯下の地文は，結束第一種のある単節の羽状縄文である。裏面は滑沢に調整されている。35，36は共に胴部の小片で，単節の斜行あるいは羽状縄文がみられる。35には，裏面調整が加えられているが，36の裏面は剥落して現存しない。

（高橋　和樹）

第14号ピット出土土器（第26図37～44，図版11Ｂ）

本遺構に見出された土器の大部分は，ｉ層の上層部より検出されたものであり，第26図に図示したもののほかにも，円筒上層式に属すると思われる小破片が10点近くある。

第26図37は，肥厚帯を有する口縁部の破片で，現存部でみる限り，口縁部の外反はゆるやかである。肥厚帯上には，縦位に幅5mm前後の粘土紐が並列していた痕跡が認められ，それぞれの粘土紐の縁沿いに加えられた絡条体圧痕文が現存している。肥厚帯下には，横位にめぐる半截竹管による馬蹄形の刺突文列が2段残されており，両者の中間には，粘土紐が横位に貼付されていた痕跡が窺われる。現存部には地文はみられない。

38は，やや薄手小形な土器の口縁部破片で，口唇部はやや先細りに丸くつくられている。口縁上部の幅1.2cm程の単節斜行縄文帯の下には，粘土紐をやや押し潰しぎみに貼付したやや幅広の隆帯がめぐり，さらにその直下には，半截竹管による馬蹄形の連続刺突文がみられる。

39は，横環する貼付文間に半截竹管による馬蹄形の刺突文列がめぐるもので，貼付文上には撚糸文が施されている。馬蹄形の刺突文は，竹管の外面を器面にあてるようにして施文されたもので，それぞれ左側の開いた馬蹄形となっている。地文は単節の羽状縄文かと思われる。

40には，地文の単節斜行縄文に重ねて，横位および縦位に粘土紐が貼付されており，横位の貼付文上には，それぞれ絡条体圧痕文がやや左下りに並列して加えられている。

41は，比較的大きく外反する口頸部の破片で，口縁部肥厚帯上には，鋸歯状にめぐる粘土紐が貼付されている。摩耗のため判然としないが，この粘土紐の上には撚糸文が加えられているようだ。肥厚帯下の地文は，結束第一種のある単節の羽状縄文である。

42は，肥厚帯を有する口縁部の破片で，この肥厚帯の下端部は，器面と直角に近い角度をなすほどに鋭く削られている。肥厚帯上および肥厚帯下には，それぞれ左下りや右下りに斜走する縄文がみられるが，これらの施文には，同一の結束第一種のある単節の羽状縄文原体が利用されたものと思われる。

43は，結束第一種のある単節の羽状縄文を地文とする胴部片である。44は，外側へやや張り出しのみられる底部の破片で，器面には，恐らく結束第一種のある単節の羽状縄文原体によると思われる斜行縄文が施されている。

以上の37～44の裏面は，いずれも清沢に調整されている。　（高橋　和樹）

第13号，第14号ピット出土石器（第24図，図版18B）

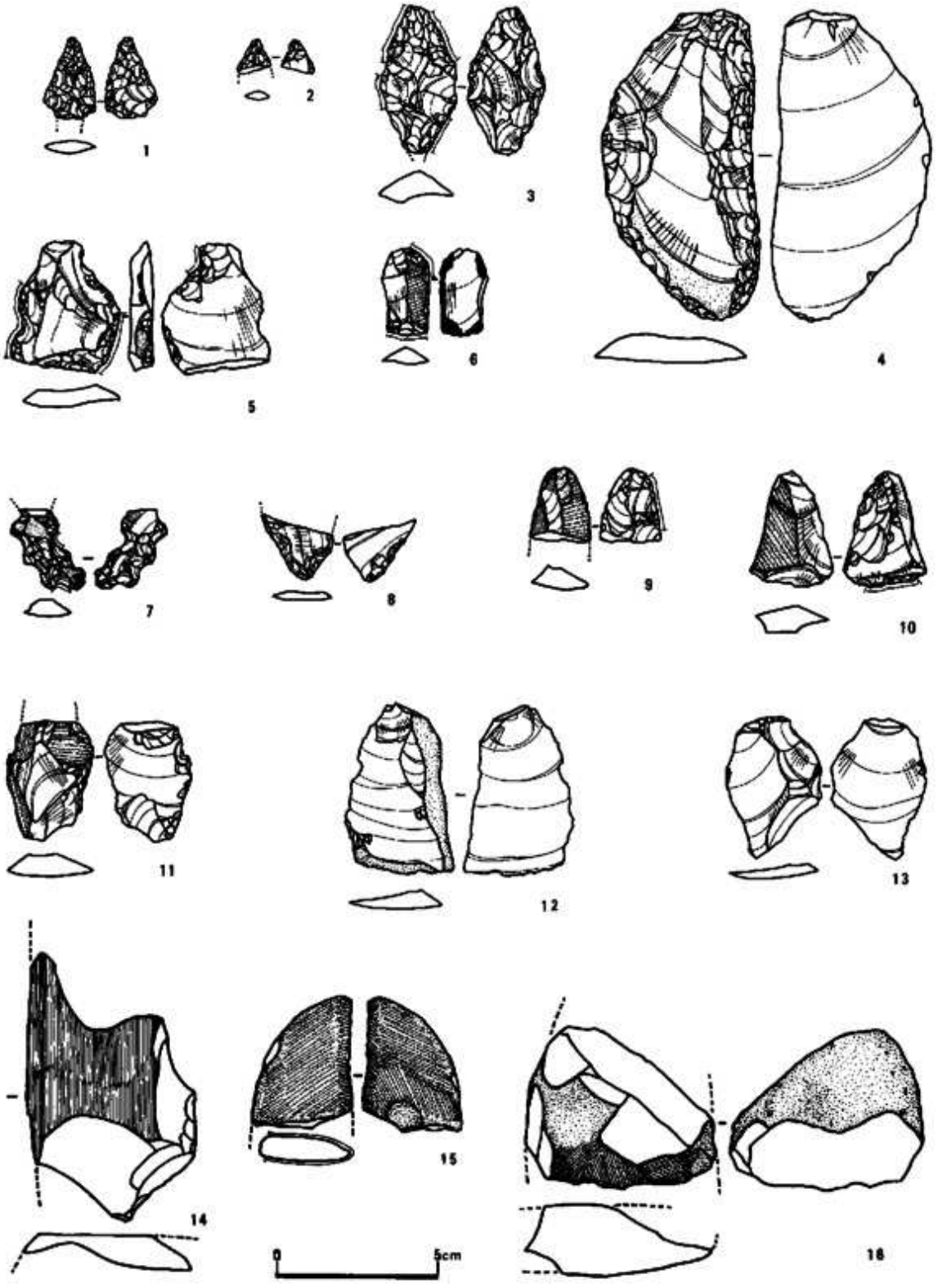
本遺構からは，石鏃3，石鋸1，削器1，掻器1，異形石器1，剥片5，石斧破片1，擦石破片1，砥石（擦切用石鋸）1の計16点の石器が出土している。他に図示していないが，覆土から石斧片1，小円礫3，削片50余片が検出されている。

石　鏃　（第24図1，2，8）

全点黒曜石製である。

1は，茎部を欠損している。入念な両面加工で，尖頭部の指数は1.56とやや幅広の形態を示す。茎部は現存しているものから推定して，太いものであったろうと思われる。尖頭部のa面上部には，先端から使用による狭長な剥離（facet）が入っており，打点はその後に入った同様の2つの小剥離で切られている。

2は，尖頭部の小破片である。



第24図　第14号ピット出土石器実測図

8は，未成品でa面上部を欠損している。横長剥片を素材として，a面下部とb面右側縁に加工を施し尖った部分を作出しようとした意図が窺える。

石　銛（先）　（第24図3）

柄部下端を欠損している。尖頭部の指数は1.3と幅広で，柄部も同様に幅広であるため，全体にひし形を呈する形態である。両面加工であるがb面の加工は大まかで，a面側に盛り上がった断面形である。a面尖頭部左エッジと柄部右エッジに刃つぶれが認められた。

ナイフ状石器および削器（第24図4～6）

4は，上部が細くなってはいるが，明瞭な柄の作出は認められない。硬質頁岩の縦長剥片を素材として，a面の側縁に入念な加工を施したもので，左側の刃縁はカーブしている。側面観は，全体に薄くa面側に彎曲している。遺構外から出土しているため，本遺構に伴うものかどうかは不明である。

削器と掻器は各1点で，黒曜石製である。

5は，削器と思われるもので，縦長剥片から作られている。a面下部は切損面であるが，この面にも両面から小剥離が入っている。a面右側面にも直角に剥離が入っており，原石面を残している。その他，両側縁に加工があり，a面左側縁にはノッチ状のくびれが認められる。この石器は，a面右エッジに細かい剥離が入っていて，刃角も高い所から掻器的用途も考えられる。

6は，掻器と思われるもので，縦長剥片のa面右側縁と下部に加工を施しており，下部は背の高いものである。a面左はフレーク・コアー段階での剥離面で，右半分には原石面を残している。b面下部から両側縁にかけては顕著な擦痕が観察される。

異形石器　（第24図7）

横長剥片のバルブ付近の部厚い部分を素材として，a面左右にノッチ状のくびれを2～3個入れたもので，a面側に盛り上がった断面形である。a面は背の高い側縁加工で，原石面が中央に残っている。b面にも同様の側縁加工が入り，やはり中央に素材面が残っている。上部を欠損している。

剥　片　（第24図9～13）

全点縦長剥片である。9～11は，黒曜石製でa面に原石面を残している。a面側はほとんど剥離はなく，b面側には使用痕的な剥離がみられるが，9例に関しては，バルブの高まりを除去する長い剥離が入っていて，石器の未成品の可能性もある。9は，a面下部，10はa面上部を欠損している。

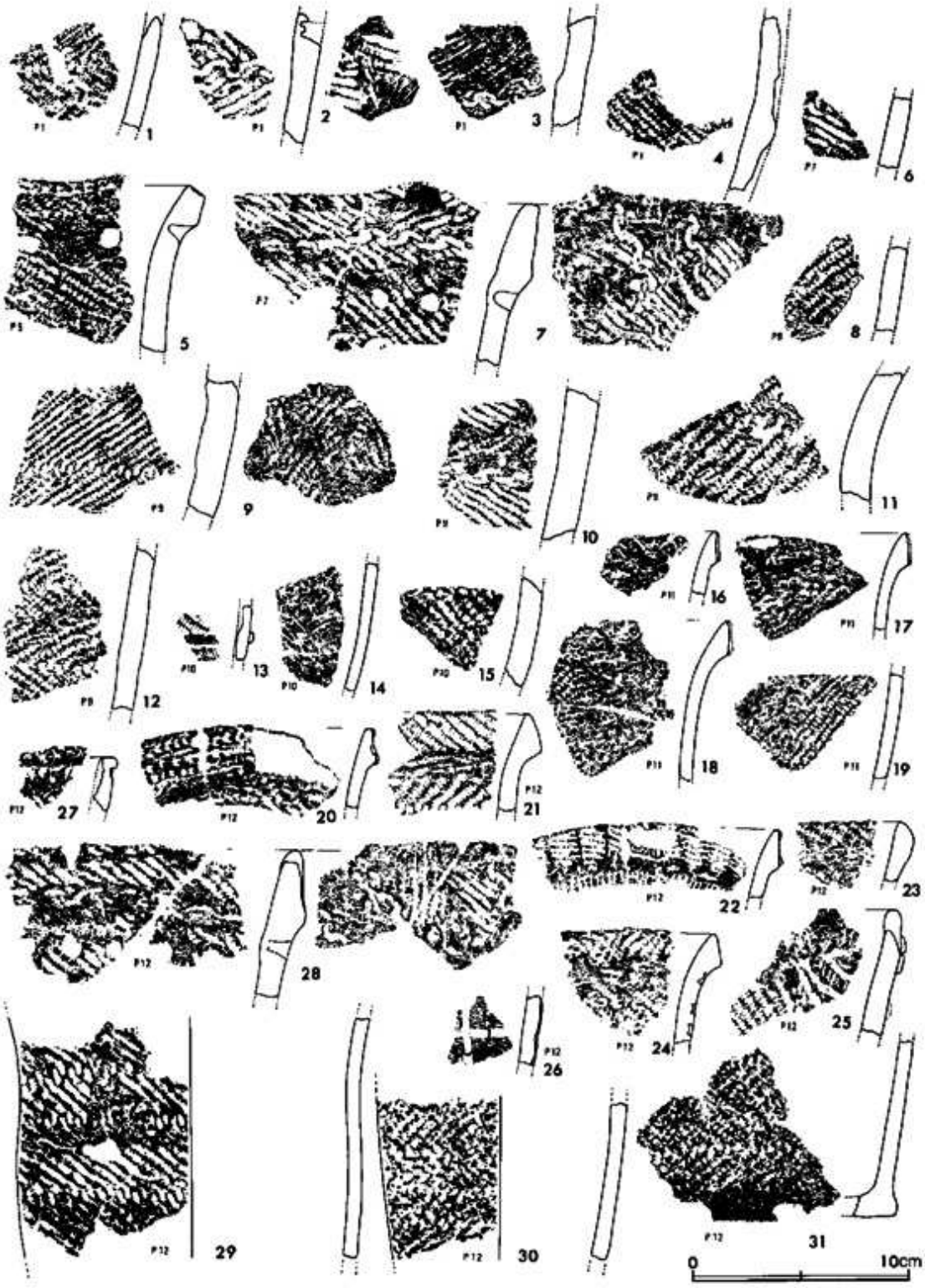
12は硅岩，13は硬質頁岩で，共に加工・使用痕は認められない。

石　斧　（第24図14）

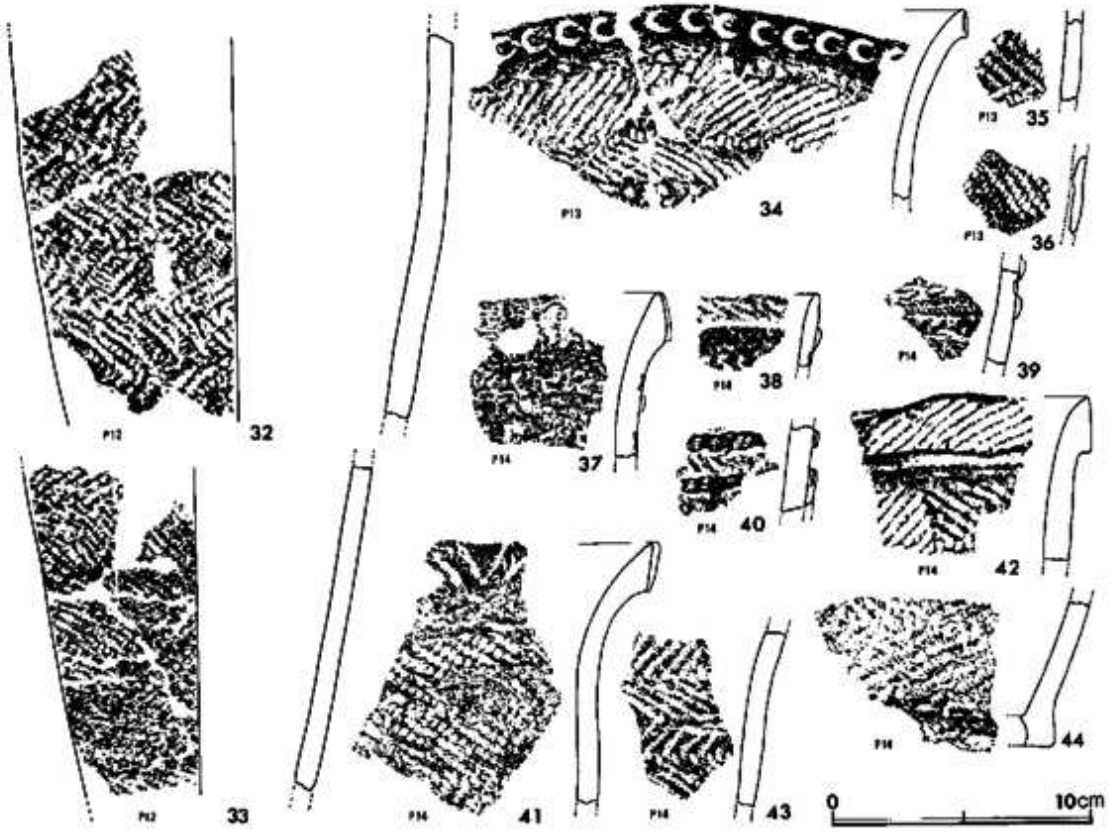
緑色片岩の石斧破片で，そのほとんどを欠損している。入念に研ぎ込まれたもので，a面左側面は急角度に研がれて一線を画している。研磨痕は長軸方向である。

砥　石　（第24図15）

砂岩の扁平な素材を用いて作られたもので，a面右側縁はV字状の刃になっている。a，b両面全面が擦られている。擦切用石鋸と思われる。



第25図　ピット出土土器拓影図（1）



第26図　ピット出土土器拓影図（2）

擦　石　（第24図16）

上下部を大きく欠損しているが，a面下部に軽い擦痕が認められ，全体がスベスベした感触である。全面焼けている。複輝石安山岩製。　（土田亜佐子）

第５章　発掘区出土遺物

第３章に触れたように，今回の発掘区には多くの撹乱層が存在し，これらの撹乱層からは比較的数多くの遺物が採集されている。その数は土器1000余片，石器110数点などである。ただし，土器については小さく破砕された小破片がその大半を占めており，量的には，小平箱に１個足らずの量に過ぎない。これらのうちから図示するに足るものとして抽出された土器片と，石器の全例について以下に説明する。

第１節　土　　器

発掘区より採集された土器は，円筒上層式，トコロ第６類などを主体としており，その様相は，既報のＮ 309遺跡と殆ど変わるところがない。従って，今回も土器の分類については，既報のＮ 309遺跡における上野秀一による分類（上野・高橋編 1975）を基本的に踏襲して，以下にそれぞれの土器について説明してゆきたい。尚，既報のＮ 309遺跡における第Ⅵ群土器は，今回は全く見出されていない。

第Ⅰ群土器（第20図６，第27図１～20，第28図21～36，図版13，14Ｂ，15Ａ，Ｂ，16Ａ，17Ｂ）

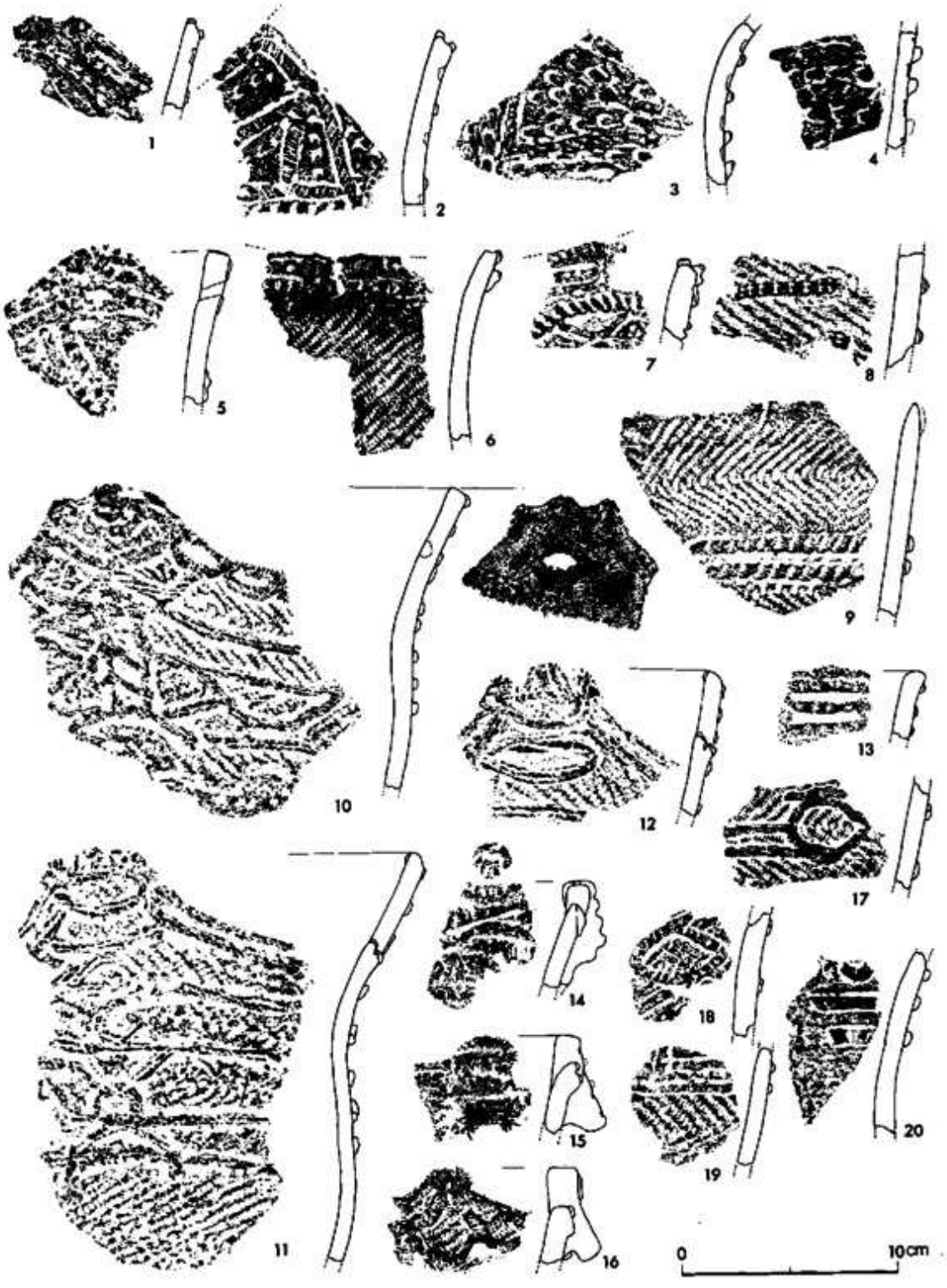
いわゆる円筒上層式の系列をひくものを第Ⅰ群に一括するが，便宜上ａ類からｇ類までの７つに細分して説明を加えたい。第Ⅰ群土器は，いずれも焼成良好で器質は堅緻，色調は赤味を帯びた黄茶褐色を呈するものが多い。胎土に少量の繊維を含むものも少なからずみられる。表面は，いずれも滑らかに調整されており，光沢がある。

ａ類（第27図１～４）

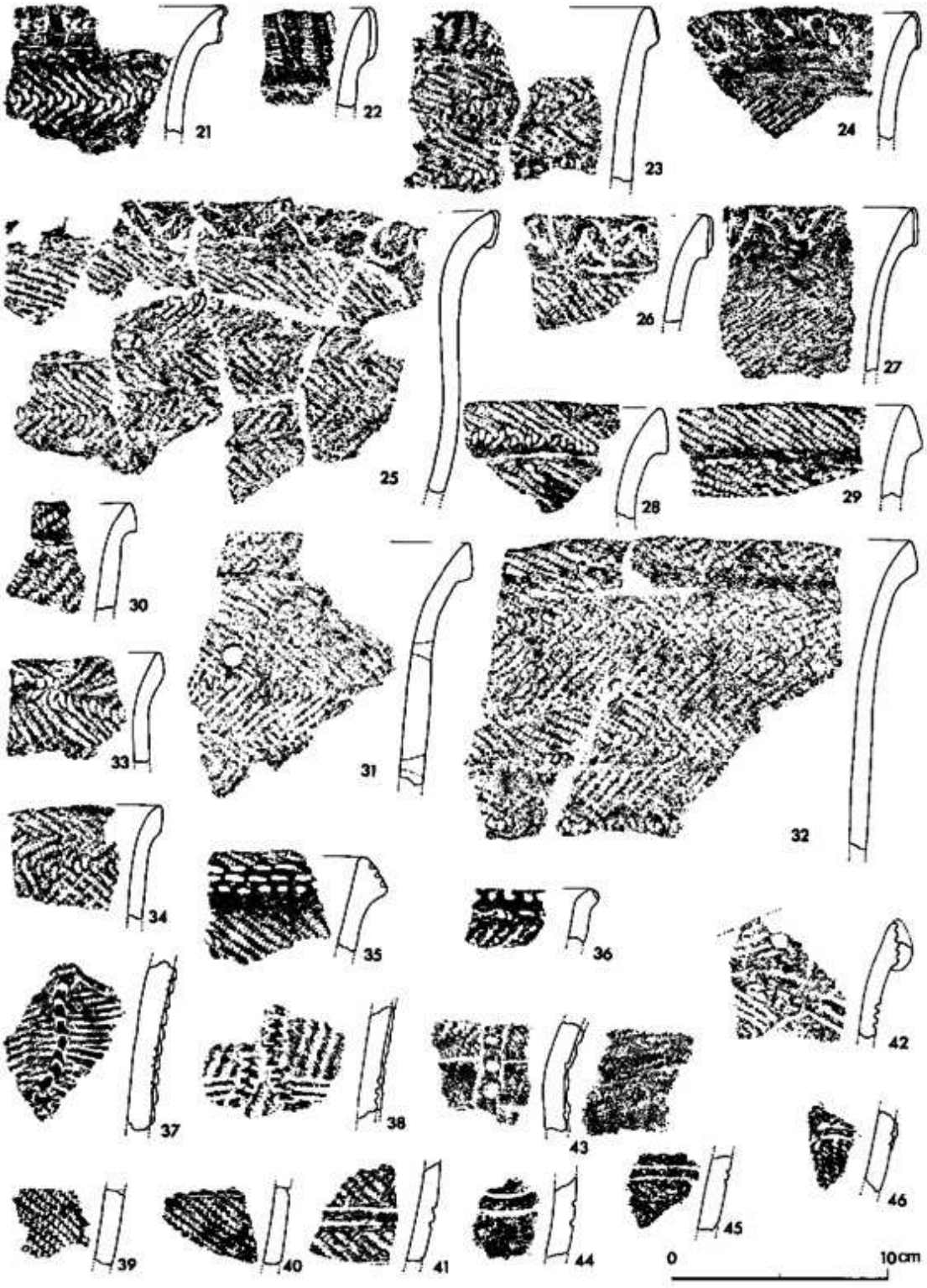
主として貼付文と馬蹄形の刺突文列とによって文様が構成され，文様帯に地文のみられないものをａ類にまとめる。

第27図１は，弁状突起を有する口縁部の破片であり，弁状突起の先端は「山」字状に分れるものであったと思われる。口辺部につくり出された肥厚帯上に貼付されていた粘土紐の大半は剥落している。器面をめぐる刺突文列は半截竹管によるものであり，その下に現存する貼付文上には撚糸文が加えられている。

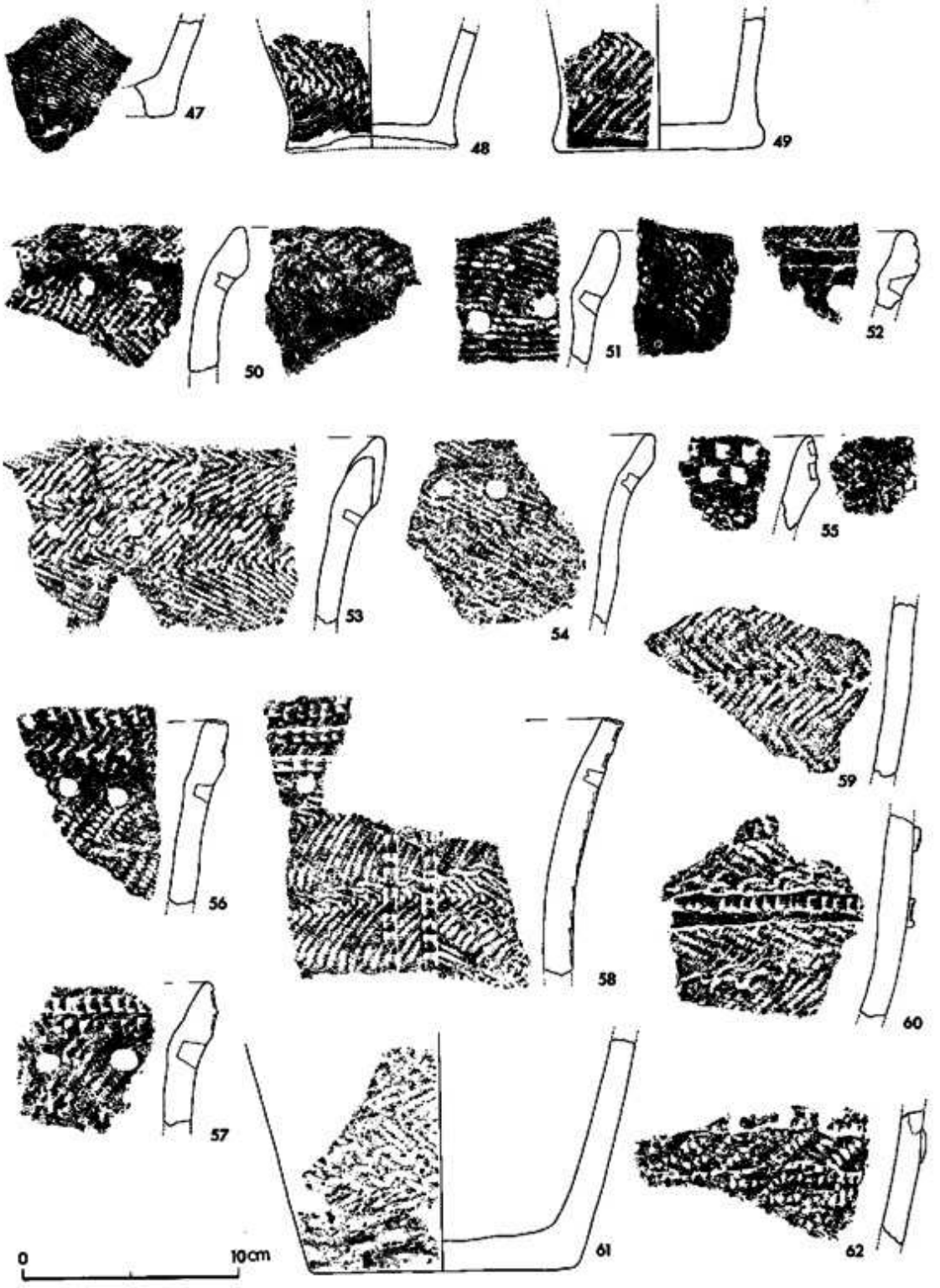
同図２は，突起部分が欠損して現存しない口縁の一部で，口辺部にみられる２本の貼付文の間には，半瓶状工具によるものであろうか，溝が刻まれている。器面にみられる文様は，貼付文と半截竹管による刺突文列とから構成されており，逆Ｖ字状に施された貼付文を対称軸としている。それ



第27図　発掘区出土土器拓影図（1）



第28図　発掘区出土土器拓影図（2）



第29図　発掘区出土土器拓影図（3）

ぞれの貼付文上には，撚糸文が加えられている。

同図3は，比較的大きく外反する口頸部の破片で，現存部には，縦位に並列する2本の貼付文と，これを中心としてほぼ横長の菱形状に配されていたと思われる貼付文帯の右側半分とが残されている。貼付文間にはそれぞれ絡条体圧痕による馬蹄形の刺突文列が加えられ，それぞれの貼付文上にみられる圧痕は，単節の斜行縄文かと思われる。

同図4は，ほぼ横位に施された貼付文と，各貼付文間に加えられた半截竹管による刺突文列とがみられる口頸部の破片である。貼付文上には，それぞれ撚りの方向の異なる原体による単節の斜縄文が施されている。

b類（第27図5～13，17～20）

貼付文によって文様が構成されるもののうち，刺突文列のみられないものをb類とする。粘土紐は，地文に重ねて貼付される場合が多い。

第27図5は，ほぼ平坦な頂部を有する弁状突起のみられる口縁部の破片で，突起部には横位の紡錘状に穿たれた透しがあり，これを取巻くように配された貼付文が口辺部をめぐっている。その下には右下りに施された2本の貼付文が現存している。突起の頂部や口辺部をめぐる貼付文間，そしてそれぞれの貼付文上には，絡条体圧痕文が加えられているが，器面の摩耗のため不明瞭な部分が多い。現存部の左下に辛うじてみられる地文は，恐らく単節の斜行縄文である。

同図6は，突起部へと向う途中の口縁片で，口辺部には2本の貼付文がめぐっている。この2本の貼付文の間の溝には，絡条体圧痕文が加えられており，それぞれの貼付文上には，縦位の絡条体圧痕文が刻まれている。地文は単節の斜行縄文である。

同図7も，突起近くの口縁片である。口辺部には3本の粘土紐が貼付されており，貼付文間のそれぞれの溝には，やや太めの沈線が加えられている。また，これらの貼付文上には，それぞれ絡条体圧痕文が施されている。器面には，弧状の貼付文に構成された文様がみられるが，現存部下端のそれは，半截竹管の内面を引いて隆線状につくり出したものらしい。口唇部直下の弧状の貼付文に加えられた並列する刻みは，刺突ぎみに押捺された独特の絡条体圧痕文かと思われる。地文は，不明瞭な部分が多いが，単節の斜行縄文であろう。

同図8は，横位および弧状に施された貼付文の一部が現存する破片で，貼付文上には，それぞれ絡条体圧痕文が加えられている。地文は，結束部の上では単節に，下は無節に撚った，結束第一種のある特殊な斜行縄文である。

同図9は，地文の結束第一種のある単節の羽状縄文の上に，2本の横環する粘土紐が貼付されている例で，貼付文上には，それぞれ絡条体圧痕文が刻まれている。現存部上端には，やや幅広の貼付帯がめぐっていたことを思わせる色調の変化が認められ，或いは，この部分に肥厚帯のめぐる口縁部として理解されるべきかも知れない。

同図10～13には，いずれも頂部が「山」字状に分れた弁状突起がみられる。これらが，やや膨んだ胴半部からゆるやかに口頸部が屈曲し，口縁部が比較的大きく外反するといった器形を有する深鉢形土器の一部であったことは，10，11の断面形などから即座に理解されるところである。10～13

では，いずれも突起下では梯状や円，楕円状の貼付文が縦に重ねて施されるというやや複雑な文様構成が認められるものの，そのほかの部分では，横位あるいは口縁に平行してめぐる単純な貼付文が文様の主体を占めている。それぞれの貼付文上には，10～12では撚糸文が，13では絡条体圧痕文が加えられている。10～12の波状をなす口辺部には，突起の頂部近くで連結する2本の貼付文や，鎖状に連なる貼付文がみられるが，これらの貼付文間には，10では長楕円状の刻線が，11，12では小さな楕円状のやや深い刺突文列がそれぞれ加えられている。10，11にみられる地文は，結束第一種のある単節の羽状縄文である。尚，10の突起部内面には，横位のやや不整な楕円状を呈する圧痕がみられるが（図版14 B），これは胎土に夾雑していた小礫などの偶発的な離脱痕といった感じのものではない。或は，意識的にこの位置に埋め込まれた堅果といった類のものが，土器の焼成に際して焼失した痕かとも想像される。

同図17～20は，円，楕円状もしくは菱形状，そして横位の貼付文などによって構成された文様がみられる例で，貼付文上には，17では撚糸文が，18では絡条体圧痕文が，それぞれ加えられている。17～19の地文は，結束第一種のある単節の羽状縄文であるが，20の現存部には地文はみられない。

c類（第27図14～16）

口縁形態がほぼ平縁，あるいはごくゆるやかな波状を呈し，肥厚帯のめぐる口辺部に，肥厚帯を跨ぐように貼付された縦長の小突起がみられるものをc類とする。

第27図14の小突起の頂部には，環状の貼付帯が冠せられており，口辺部には，2本の貼付文が突起部をのりこえてめぐり，この貼付文の下の突起部には，さらに横位の貼付文が2段みられる。突起下の器面にも貼付文の一部が残存している。各貼付文間などには，それぞれ横位の溝をつくって絡条体圧痕文が加えられている。

同図15，16にみられる小突起は，突き出した頂部と下端部とが平坦につくり出されたものである。15の突起部には，横位に加えられた絡条体圧痕文が4段みられ，上から2段目のそれを楕円状に取巻く貼付文の剥落した痕跡が認められる。口辺部にめぐる2本の粘土紐の間には，絡条体圧痕文による溝が刻まれている。16の突起部を含む肥厚帯上には，単節の斜行縄文が施されており，この地文に重ねて，突起の上端から左右に分れて，それぞれ波状にめぐる粘土紐が貼付されている。突起下の器面にも弧状に貼付された粘土紐の一部が現存している。これらの貼付文上には，やや回転押捺された絡条体圧痕文が加えられている。

d類（第28図21～36）

口縁部肥厚帯を有する平縁の土器をd類に一括するが，d類としたもののうちには，突起部をはずれたc類の破片が含まれている可能性もないわけではない。

第28図21は，横位および縦位の貼付文に区画された肥厚帯上に絡条体圧痕によるやや小さな馬蹄形圧痕文の並ぶ例である。同図22の肥厚帯上には，やや右下りぎみの貼付文が並列しており，各貼付文間および貼付文上には，それぞれ絡条体圧痕文が加えられている。同図23は，殆ど外反のみられない口縁部の破片で，肥厚帯上には縦位に施された絡条体圧痕文が並列しており，それぞれの絡条体圧痕文の間の素文部が，結果的に浮彫りにされている。21，23の肥厚帯下にみられる地文は，

結束第一種のある単節の羽状縄文である。

同図24は，やや低めにつくり出された肥厚帯上に，右下りから左下りへとその傾きが途中で転換される斜位の貼付文が並列する例で，それぞれの貼付文上には撚糸文が加えられている。貼付文下の肥厚帯上と，幅2cm程の素文部を隔てた肥厚帯下とには，単節の斜行縄文が施されている。

同図25～27には，肥厚帯上を波状にめぐる結士紐の貼付がみられる。25では素文の肥厚帯上に，26では単節の斜縄文に重ねて，それぞれ貼付文が施されており，両者の貼付文上には撚糸文が加えられている。器面の摩耗のため，27では肥厚帯における地文や貼付文上の刻みの有無は不明である。25の推定口径は25cm程で，肥厚帯下にみられる地文は，結束第一種のある単節の羽状縄文である。

同図28～32の肥厚帯上には，地文のみが施文されている。28，31，32などにみられる地文は，結束第一種のある単節の羽状縄文原体によるものである。31には補修孔が2個現存し，32の推定口径は27.5cm弱である。

同図33，34は，やや粗製の小形の土器の口縁片で，口辺部にわずかに肥厚帯がつくり出されており，両者とも，結束第一種のある単節の羽状縄文原体による地文が一面に施文されている。

同図35，36は，類例に乏しいやや特殊な例である。35は，断面が三角形を呈する顕著な肥厚帯がめぐるもので，肥厚帯上および肥厚帯下に単節の斜行縄文が施されているほか，肥厚帯上には，丸棒状工具によるものであろうか，3段に加えられた横位の連続刺突文がみられる。36では，口辺部が「く」の字状に急激に外反して，一種の肥厚帯が形づくられており，この肥厚帯上には，やや不整な刺突文列がめぐっている。肥厚帯下の地文は，単節の斜行縄文である。

e類（第20図6）

第20図6は，頂部をへこませた台形状の突起を有する無文小形の土器で，成形は全体にややいびつであるが，器高6.0cm，推定口径5.5cm，底径3.2cm，器厚0.3～0.4cm程を測る。底部は全周現存しているが，口縁から胴部下半にかけての部分では，½～⅔周程が欠損している。器形は，胴半部がやや張み，ゆるやかに屈曲する口頸部から口縁部がやや小さく外反する深鉢形を呈する。底は平底で，底部はやや外側へと張り出している。文様は全くないが，器面は比較的丁寧に調整されており，表裏ともに滑らかである。

尚，このほかにも，このような小形土器の破片が1点採集されている。それは，図示してはいないが，底径3.4cm程と推定される現存⅓周程の底部の破片である。

f類（第28図42）

主として沈線文によって文様が構成されるものをf類とするが，今回の調査においてはf類の検出はいたって少ない。

第28図42は，突起を有する口縁部の破片であるが，突起部分の欠損や器面の摩耗のため，文様のモチーフは十分明らかではない。口辺部の肥厚帯上には，先端が球状を呈する工具によった円形の刺突文と，4本を単位とする沈線文とがみられ，肥厚帯下には，単節の斜縄文に重ねてやや不整な鋸歯状に施された，3本単位の沈線文がみられる。

g類（第29図48，49）

第1群土器に属すると思われる底部の破片をgとする。

第29図48は，推定底径8cm程の底部の破片で，全周の¾程が現存するが，底面は剝落している。地文は，結束第一種のある単節の羽状縄文である。同図49は，48と同様に外側へとやや張り出しのみられる底部の破片で，現存部は全周の¼程に過ぎないが，底径は10cm程であったと推定される。器面には，結束第一種のある単節の羽状縄文原体による地文が施されている。

第II群土器（第28図37～41，45，第29図47，図版16B）

半截竹管を利用した文様が多用されているものを第II群土器とする。採集された第II群土器の破片は数が少ないうえに，いずれも小破片で，器形や口縁形態を知るに足る資料は殆どない。焼成や色調，裏面調整の様相などは，第I群土器とほぼ同様である。

第28図37には，それぞれ半截竹管による連続内面突引文の加えられた，S字状にゆるやかに蛇行する縦位の貼付文と，現存部下端における横位の貼付文とがみられる。縦位の貼付文には，半截竹管の内面をひいた斜位および横位の平行沈線文が連結しているが，貼付文の左側では平行沈線文はみられない。地文は，O段1の撚紐3本を右撚りにした1段Rを2本合せて2段Lに撚った縄文原体によるもので，原体はほぼ左上から右下へと回転押捺されたものと思われる。

同図38では，それぞれ半截竹管の内面圧痕文（畑 1966）に縁どられた2本の貼付文がY字状に配されており，貼付文には，2段重ねに施された半截竹管による横位の平行沈線文が連結している。地文は，左上から右上へと回転押捺された単節の斜行縄文であるが，原体をつくるO段1の撚紐は3本，ないしはそれ以上であったろう。

同図39～41，45は，いずれも横位に施された沈線文が現存する小破片であり，40の現存部下端には，斜位の沈線文が痕跡的に残されている。45にみられる沈線文は，明らかに半截竹管の内面をひいた平行沈線文であるが，41のそれは，角棒状あるいは平篦状工具による2本単位の沈線文である。39および40にみられる地文は，複節の斜行縄文である。

第29図47に示す底部片は，全体的な印象から，恐らく第II群土器に属するものと思われる。器面には，無節の細縄による斜行縄文が一面に施されている。

第III群土器（第28図43，44，46，図版16B）

沈線文による文様がみられ，内面にも縄文の施されるグループを第III群土器とするが，本遺跡における当該土器の検出は，ごく稀であった。いずれも焼成はやや不良で，色調は暗茶褐色を呈し，胎土には多量の砂が含まれている。裏面は，第I，II群土器におけるほど滑沢ではないが，比較的丁寧に調整されている。

第28図43は，比較的屈曲の大きな口頸部の破片で，器面には，指頭による押圧が加えられた縦位の貼付文と，これに連結する，ややぞんざいに施された横位の沈線文とがみられる。表裏に施された縄文は，単節の斜行縄文である。

同図44，46には，ともに2本単位で弧状に施された沈線文がみられ，46では，指頭押圧の加えられた貼付文の一部が残されている。両者とも，現存部の内面には縄文はみられず，46の器面における単節の縄文は，縦走している。

第Ⅳ群土器（第29図50～61，図版17A，B）

口縁部に円形の刺突文列のめぐる土器を第Ⅳ群に一括する。第Ⅳ群土器では，口縁部に肥厚帯のみられるものが多く，また口縁部の内面にも縄文の施される例が多い。上述の第Ⅰ～Ⅲ群土器に比して，一般に厚手のものが多い。整形はやや粗く，裏面調整は認められない。色調は，黄褐色のものもみられるが，暗茶褐色，黒褐色など暗い色調のものが多い。胎土に繊維の含有の認められる例も少なくない。

第29図50，51は，口縁の一部に突起を思わせるやや不整な高まりの認められる口縁片で，口縁部には肥厚帯がめぐっている。50では，横走もしくは斜走する単節の縄文がみられ，裏面にも単節の斜行縄文が施されている。51には，結束第一種のある単節の羽状縄文がみられるが，裏面にも，同一の原体を縦位に回転押捺した縄文が認められる。

同図53，54は，肥厚帯上および肥厚帯下，そしてほぼ丸くつくられた口唇上に縄文が施され，口縁部の内面には縄文のみられない例である。小突起を有する53の縄文は，結束第一種のある単節の羽状縄文原体によるものであり，54の地文は，単節の斜行縄文である。

同図52の肥厚帯上にみられる半截竹管による内面突引文は，器面の摩耗のため，一見，平行沈線文の如くみえる。やや丸くつくられた口唇上には，単節の斜行縄文が施されている。

同図55，57の肥厚帯上には，平篦状工具による連続刺突文が2段めぐっている。55の裏面にみられる縄文は，無節の原体によるものであろうか。

同図56は，殆ど外反の認められない口縁片で，円形刺突文列の上方に肥厚帯的な高まりがみられる。平坦な口唇上には，平篦状工具による連続刺突文が加えられており，口辺部に並列する刻みは，同様の工具を斜め上方から連続的に刺突したものであろうか。地文の単節の斜行縄文には，綾絡文が加えられている。

同図58も，平坦につくり出された口唇上に平篦状工具による連続刺突文のみられる例で，口縁部肥厚帯はない。口辺部では横位に，胴上半部では縦位に，それぞれ2列単位に施された平篦状工具による連続刺突文がみられる。地文は，結束第一種のある単節の羽状縄文であるが，これに重ねて加えられた，ほぼ横位の綾絡文も一部にみられる。

同図59，60は胴部の破片で，59には結束第二種のある単節の羽状縄文が施されており，60には，それぞれ平篦状工具による連続刺突文の加えられた，やや幅広な横位の貼付文が2本現存している。60にみられる地文は単節の羽状縄文であるが，この羽状縄文の結束もしくは結節部に重ねて，56，58にみられる綾絡文とは逆結びの綾絡文が加えられている。

同図61は，全周の½程が現存する底部の破片で，底径は12．5cmと推定される。器面には，結束第二種のある単節の羽状縄文原体による地文がみられる。

第V群土器（第29図62，図版17A）

幅広の低い貼付帯の横環がみられる土器を第V群とするが，第V群土器に属する破片は，今回の調査では，第29図62に示す1点が採集されただけである。

62には，縄文原体を利用したと思われる刺突文列と，その下に横環する幅1.5～1.8cm程の貼付帯とがみられる。地文は，太めの単節の原体による横走縄文で，貼付帯上には，同様の原体による斜行縄文が施されている。裏面は比較的丁寧に調整されているが，滑沢というほどではない。焼成は良好で，器質は堅緻，色調は灰黄褐色を呈する。胎土には，多量の細礫が含まれている。

（高橋　和樹）

第2節　石　　器（第30～41図，図版18A～25B）

本遺跡2次調査で得られた石器資料の総数は，112点を数える。石器器種としては，石鏃，石銛および石槍，各種のナイフ状石器および削器，掻器，両面体石器，フレーク・コアーおよび使用痕のある剥片，石斧，砥石，擦石，石皿，礫器などからなっている。発掘区出土の石器分類に関しては，1次調査（上野・高橋編　1975）の報告に準拠して記述を進めたが，後述する第6章第3節のまとめの項では，両面体石器として，器種型式の明確にできなかった資料を分類しなおし，また削器として一括していた，特に二次加工のない使用痕のある剥片を別器種として独立させたため，器種分類の仕方と個々の資料の所属が一部変わっていることを，予めお断りしておく。

1　石　鏃　（第30図1～12，図版21）

出土した石鏃は，全点黒曜石製で，有茎石鏃7点（1～7），柳葉形石鏃1点（8），破片2点（9，10），未成品2点（11，12）の計12点で，無茎石鏃は検出されていない。

1，2は，全体に狭長で，弱い逆刺を有し，茎の先端は丸い。共に両面加工である。1のa面左側縁には，横長剥片の素材面が残っている。欠損部位は，1がa面右逆刺，2が尖頭部先端である。

3，4は，半両面加工で，3はb面中央，4はa，b両面中央に横長剥片の素材面を残している。共に，幅広い尖頭部と，基底が平坦でやや太い茎を有し，逆刺は明瞭である。

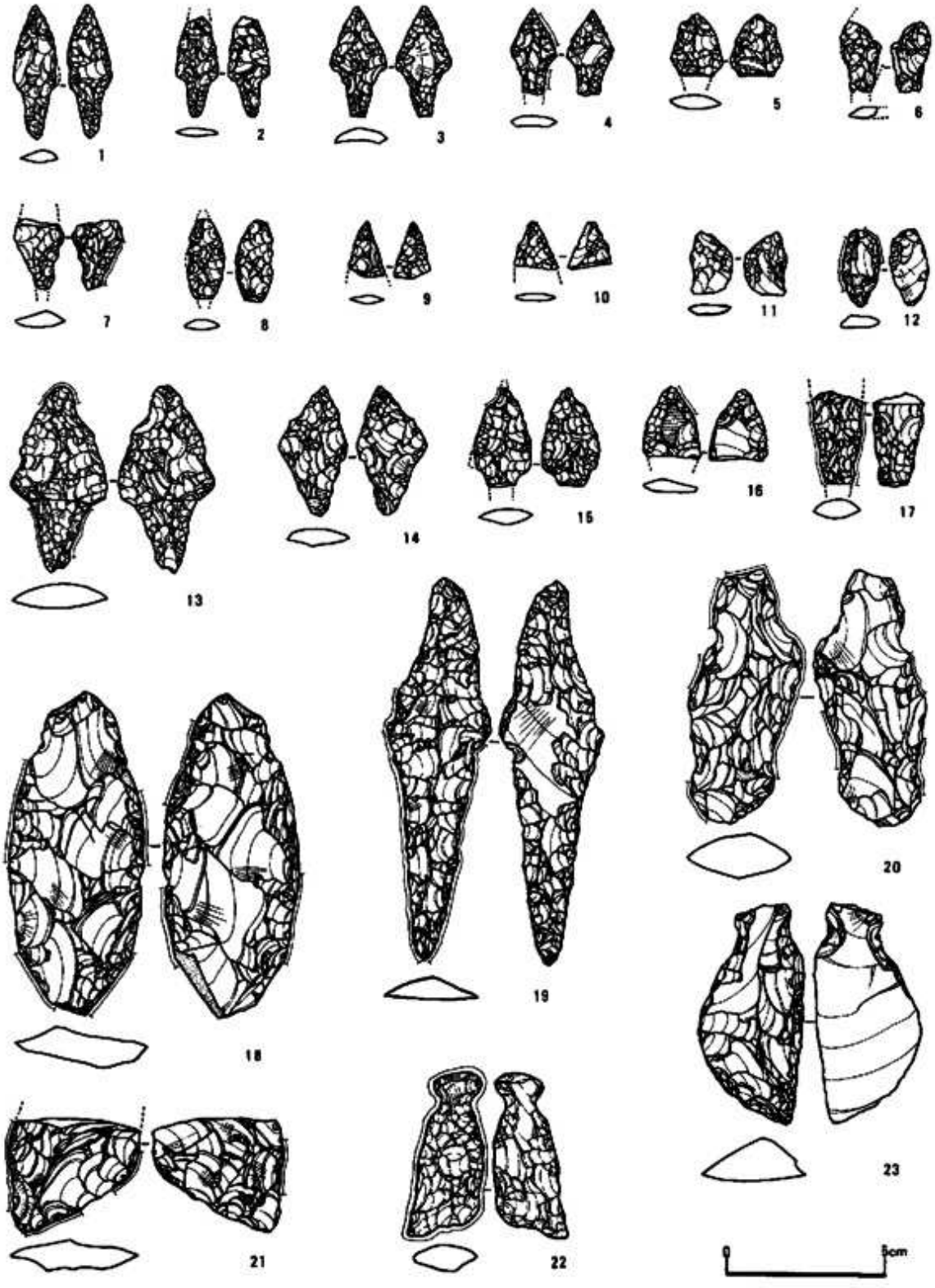
5は，尖頭部と茎部を欠損しているが，尖頭部先端の欠損は，a面側に左右から入った剥離で，茎部のものは，欠損後b面下部に下から調整が加えられており，再加工しようとした可能性も考えられる。

6は，尖頭部と茎部を大きく欠損しているため，形態は不明であるが，石鏃としては太い茎を有し，逆刺は弱い。

7も，尖頭部と茎部下端を欠損したもので，逆刺は弱く，茎がa面右寄りになった非対称形である。両面加工で，b面茎部右エッジには刃つぶれが認められる。

8は，柳葉形で，両面に入念な加工が施されたものである。尖頭部先端，a面左側縁一部と尖頭部下端を欠損している。

9，10は，尖頭部の破片で，9は両面に加工が施され，鋭く尖った尖頭部を有するが，a面右側縁には一部原石面を残している。10は，b面左側縁に縦長剥片の素材面を残しており，現存部での



第30図　発掘区出土石器実測図（1）（石鏃・石銛・ナイフ状石器）

エッジの刃つぶれは全くなく，未成品の可能性もあろう。

11，12は，石鏃未成品と思われる資料である。11は，両面に縦長剥片の素材面を残し，上部の両面には入念な加工を入れ，尖頭部様に細く仕上げている。12は，側縁加工で，b面に縦長剥片の素材面を残し，a面の上部と中央には原石面が残存している。a面全周には，背の高い加工が施されているため，a面側に盛り上がった断面を呈している。また，b面右下縁のバルブ付近にも剥離が入っている。下端はやや細くくびれており，さらにa面両側縁は刃つぶれ状に小剥離が入っている点から，完成品として錐の可能性も考えられる。ただし，尖頭部は特に摩耗はしていない。

2　石　銛（先）および　石　槍（第30図13～17，図版21）

石銛（先）は，破片を含めて5点出土しており，石鏃同様，すべて黒曜石製である。

13は，尖頭部と柄部が二分していたものを接合した資料で，入念な加工が両面に施されている。柄部基底はやや平らで，幅広の尖頭部を有する。b面の尖頭部上部左側縁と柄部端には欠損が認められるが，パティナが古いため，古い時代のものであろう。柄部両側縁と尖頭部先端には刃つぶれが認められ，摩滅している。

14は，a面右の逆刺が突き出た，幅広の非対称形（ひし形）の尖頭部を有するもので，柄部下端はやや平坦である。両面加工で，a面尖頭部先端には背の高い加工が施されている。再調整であろうか。

15は，両面加工で，先端，逆刺，柄の部分が各々欠損している。尖頭部のa面上部左側縁にくびれがあり，刃つぶれが認められる。

16は，側縁加工で，a面中央に原石面，b面に縦長剥片の素材面を残している。a面右側縁は切断面で，銛先の未成品とも考えられ製作段階で下部を大きく欠損したものかもしれない。

17は柄部破片で，入念な両面加工が施されている。全体に太く，部厚いレンズ状の断面を呈するもので，石槍の可能性が高い。両側縁は刃つぶれしている。

3　ナイフ状石器および削器　（第30図18～23，第31図24～28，図版21）

発掘区から出土したものは11点で，石質の内訳は，黒曜石7点（18～22，26，27），硬質頁岩3点（24，25，28），硅岩1点（23）である。

18～22は両面加工，23～27は片面または側縁加工のものである。

18は，上部両側縁に，くびれを入れて太く短い柄を作出している。刃部は下部中央に尖頭部を作出しているが，両側縁に原石面を残しているため鋭さはない。a面両側縁の中央と下部，b面左側縁上・下部と右側縁下部に刃つぶれが認められる。柄部上端にも原石面が残っている。

19は，b面中央に縦長剥片の素材面を残すほかは，両面に入念な加工が施されている。全体に狭長で，上部に尖った柄を有し，刃部と柄部との境は逆刺状に左右にふくらみ，刃部は下端にゆくに従って先細りとなっている。柄部のb面側の加工は，他の剥離よりパティナが新しく，また右側縁は背の高いもので再加工したものと思われる。刃部側の全周エッジは刃つぶれしている。

20は，b面上部に素材面を残すほかは，両面に加工が施されているが，全体に大まかな加工である。太い柄部を作出し，刃部は先端が丸みを持っている。また刃部両側は，浅くコンケーブしてい

る。断面は，a面側に盛り上がった部厚い形で，柄部から刃縁にかけて刃つぶれが認められ，b面左上部の剥離の稜線は摩滅している。

21は，上部を大きく欠損しているため，本来の形態は不明であるが，a面左に突き出た形の刃部と思われ，刃縁には刃つぶれが認められる。

22は，両面加工で上部につまみを作出している。水中でローリングしたように全面は激しく摩滅しており，刃縁全周もエッジがほとんどつぶれて全体に光沢を失っている。

23は，硅岩製で，a面中心に稜線をもつ側縁加工で，上部にやや太いつまみを作出し，a面右に突き出た刃部を有する。断面は部厚い三角形である。b面は縦長剥片の素材面（一次剥離面）で，つまみの部分だけ左右から加工が入っている。

24は23と同形態であるが，23より小形，狭長で加工は入念で片面加工に近い。

25は，a面の側縁のみ背の高い加工が施されている。素材は縦長剥片で，打点と反対方向につまみを作出している。全体に扁平で，a面上部と下部を欠損している。

26もa面両側縁に背の高い加工が施され，やや太いつまみを上部に作出している。a面左に突き出した刃部を有するが，右刃縁はヒンジ・フラクチャー（hinge fracture）で終っており，加工はない。a面左側縁は刃つぶれしており，左側剥離稜線および上面は摩滅し光沢を失っている。

27は両面の側縁に加工を施したもので，縦長剥片を素材とする。a面右上部には原石面と打面を残している。柄とかつまみの作出はなく，下部は欠損後に再加工したと思われ背の高い剥離が入っている。a面左刃縁上部とb面左右刃縁に刃つぶれが認められる。

28は，a，b両面の側縁のみに粗い加工が施されたもので，b面は縦長剥片の一次剥離面で，打面には原石面を残している。全体に狭長で，柄の作出は認められないが上部はやや細身である。下部は尖頭部様であるが，a面左下部に原石面を残しているため鋭さはない。部厚い三角形の断面を呈する。

削器としたものは29～40の12点であるが，加工を施したと思われるものは，30，32，33，35，36，40の6点のみで，あとは使用の結果による剥離が認められる剥片類である。

30は，a面両側縁に加工が入っているが特に左側縁のものが入念で深いものである。上部と下部の一部を欠損しており，a面には原石面を残す。

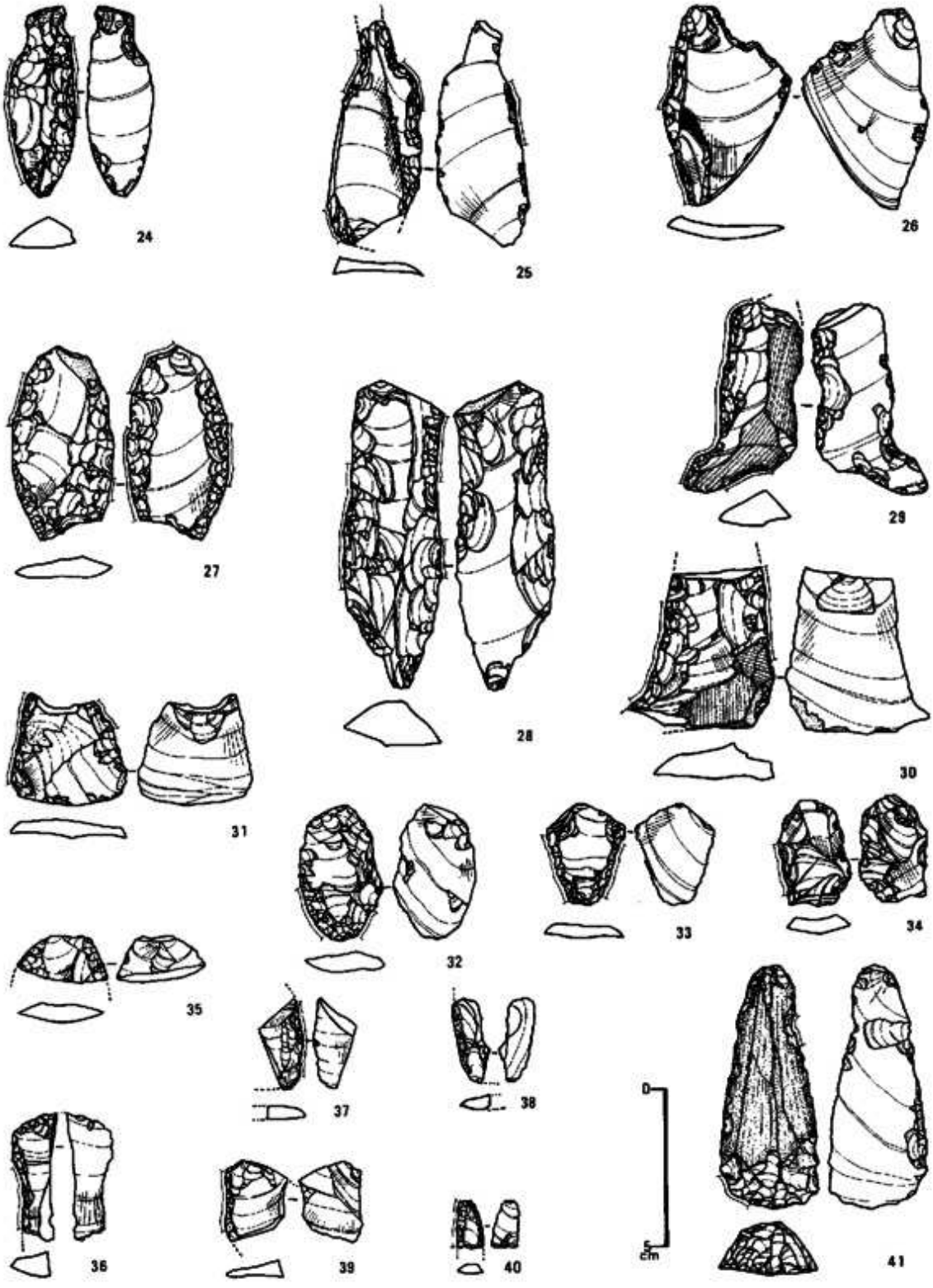
32は，硬質頁岩製のもので両側縁と下部に浅い刃角の加工が施されている。b面には，上部にバルブの高まりを取ろうとした剥離が数条認められる。

33は，同様にa面両側縁と下部に背の高い加工が認められる，細長い五角形のものである。寸の短い縦長剥片を使用している。

35は，剥片のバルブ部分の破片で，a面両側縁に加工が施されている。扁平な断面を呈する。

36は，a面の右と下部を欠損しているが，a面上部と左側縁に背の高い加工が施されている。a面上部に一部原石面を残している。

40は，小形でa面右上部側縁に原石面を残しているが，両側縁に背の高い加工が施されており，1次調査の際，第1号竪穴住居址状遺構から出土した狭長な削器と同類の破片と思われる。



第31図　発掘区出土石器実測図（2）（ナイフ状石器・削器・掻器）

残りの6点は，いずれも使用痕的な剥離のあるもので，後述する使用痕のある剥片の類に含まれるものである。

29は，断面三角形の部厚いものでa，b両面の両側縁に，不規則な剥離がノッチ状に入っている。また，a面左側縁の刃つぶれが激しい。

31は，a面両側縁に剥離の入っているものでb面下端はヒンジ・フラクチャーで終っている。

34は，a，b両面に不規則な剥離が入っており，a面左下部に刃つぶれが認められる。

37～39は，いずれも破片であるが，背の高い使用痕が側縁に認められる。

4　掻　器（第31図41，第32図42～44，図版21）

発掘区から掻器は4点出土しているが，全点黒曜石製である。

41は，a面下部に刃角がほぼ直角の刃部を作出している。a面左側縁にも加工がみられ刃つぶれしている。a面全面に刃部を除いて原石面が残っている。

42は，横長剥片を素材として，横の一端に刃角の高い刃部を作出している。a面上部には浅い加工がある。全面の剥離稜線が摩滅しており，刃部には刃つぶれもみられる。

43は，上部を欠損しているが，長方形の三面全周に背の高い加工を施しており，刃つぶれも認められる。

44は，全面に熱作用を受けているが，a面左の欠損は熱作用を受けたのちに切損したものである。a面には原石面が残っており，a面下部縁の刃部加工は背が高い。

5　両面体石器（第32図45～52，図版21）

両面体石器としたものは，両面に加工が入っているが欠損や不規則な加工のために，その性格・形態が明らかでないものを1次調査の報告にならって，この中に包括したものである。全点黒曜石製。

45は，a面側に盛り上がった断面形を呈し，両面に入念な加工を施している。a面の両側縁には刃つぶれが認められる。尖頭器類あるいはナイフ状石器の柄の部分であったろうか。

46は，両面に粗雑な加工が入っている。

47は，上下部を欠損している。全体に大まかな加工でa面側に盛り上がった部厚い断面を呈する。a面右側縁はやや細かい加工を施し，刃つぶれでエッジが完全に摩滅している。

48は，a面に原石面を残し，a面左は切断面である。下部は尖頭部様に突き出ていて，a面右側縁に背の高い加工をしている。b面は粗い剥離で，三辺に刃つぶれが認められる。

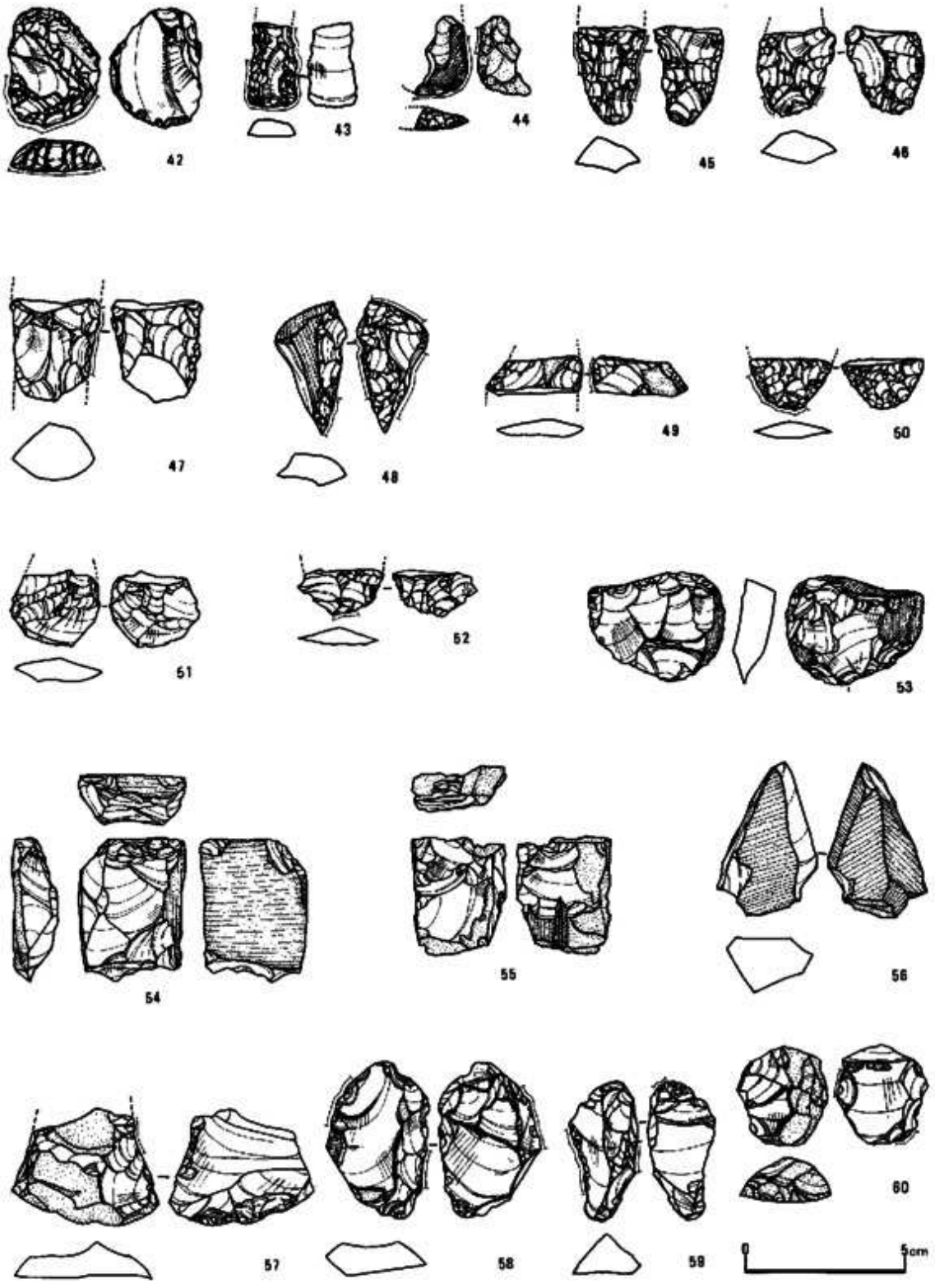
49は，薄形で両面に原石面を残している。上下部を欠損しているが，加工は大まかな側縁加工である。

50は，下部に丸みをもった薄形のもので，両面に入念な調整が行なわれている。

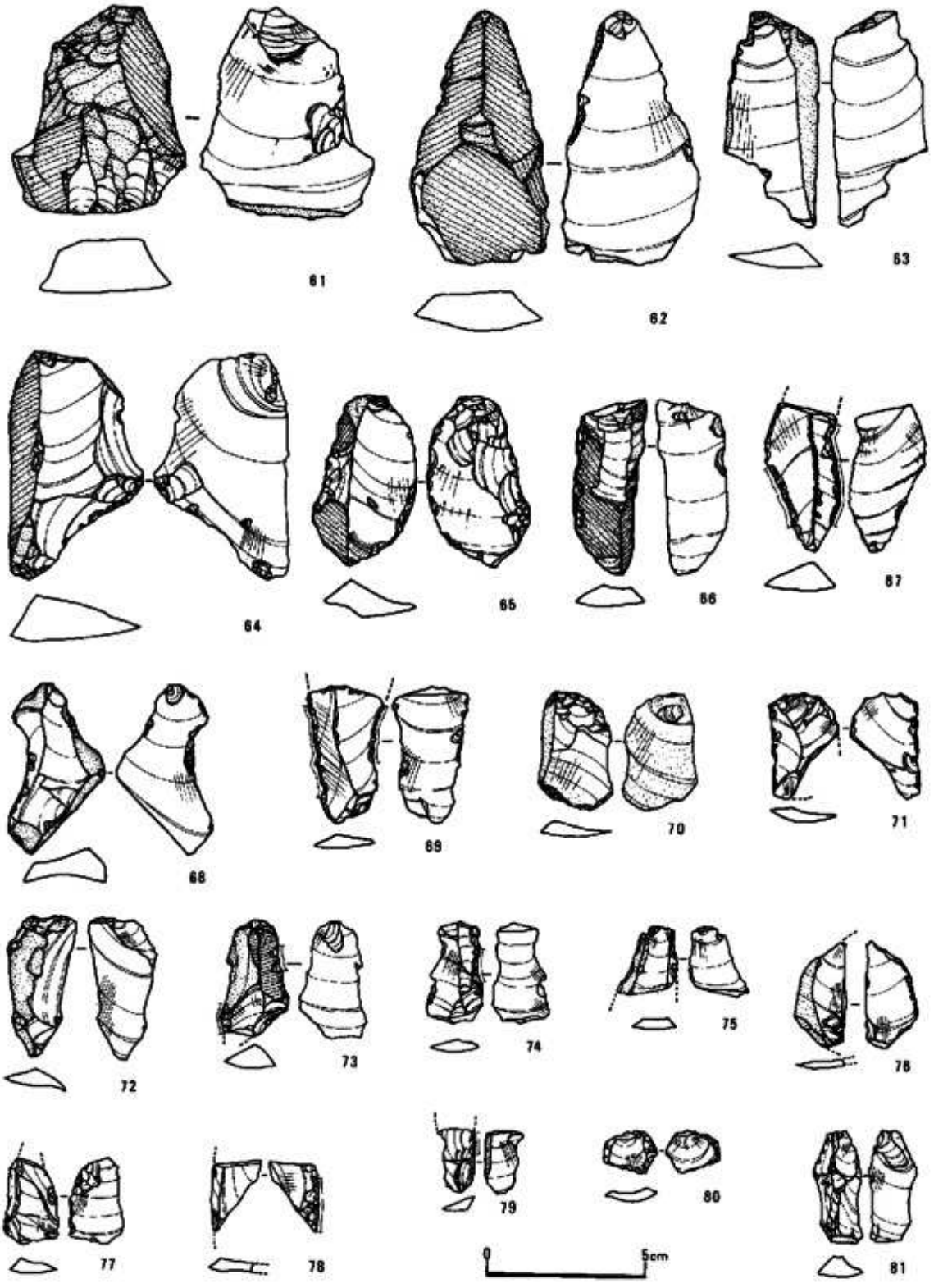
51，52は，両面に不規則で粗い剥離が入っているため，器種は不明であるが何かの石器未成品であるかもしれない。

6　フレーク・コアーおよび剥片（第32図53～56，第33，34図，図版21）

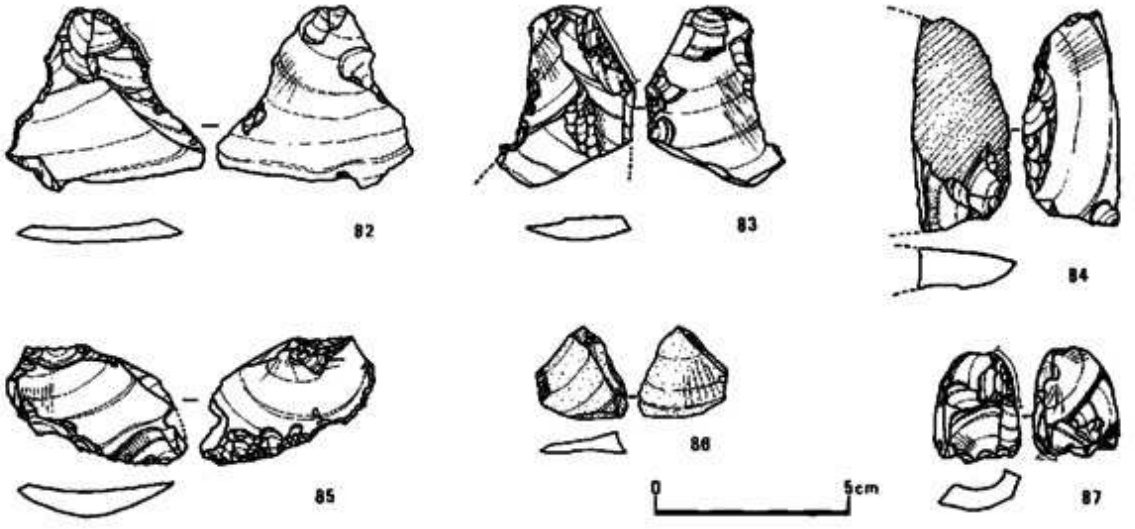
発掘区から出土したフレーク・コアーは4点で，全点黒曜石製である。



第32図　発掘区出土石器実測図（3）（掻器・フレーク・コアー・剥片）



第33図　発掘区出土石器実測図(4)（剥片）



第34図　発掘区出土石器実測図（5）（剥片）

56を除く3点は，打角がいずれも直角に近いもので，高さ3～4cmの扁平な角礫を素材としている。また，打面および剥片を剥取したあとの他は全て原石面を残しており，打面には一切調整が認められない。

53は，原石面を打面として，主にa面上端から縦長剥片を生産しているが，後に下から剥離が入っている。b面側には，大きな剥離が入っているが，パティナの古い面である。

54は，同様に原石面を打面として，a面から縦長剥片を剥取しているのみで，a面右側面とb面は原石面を残している。下部からも不規則な剥離が入っている。

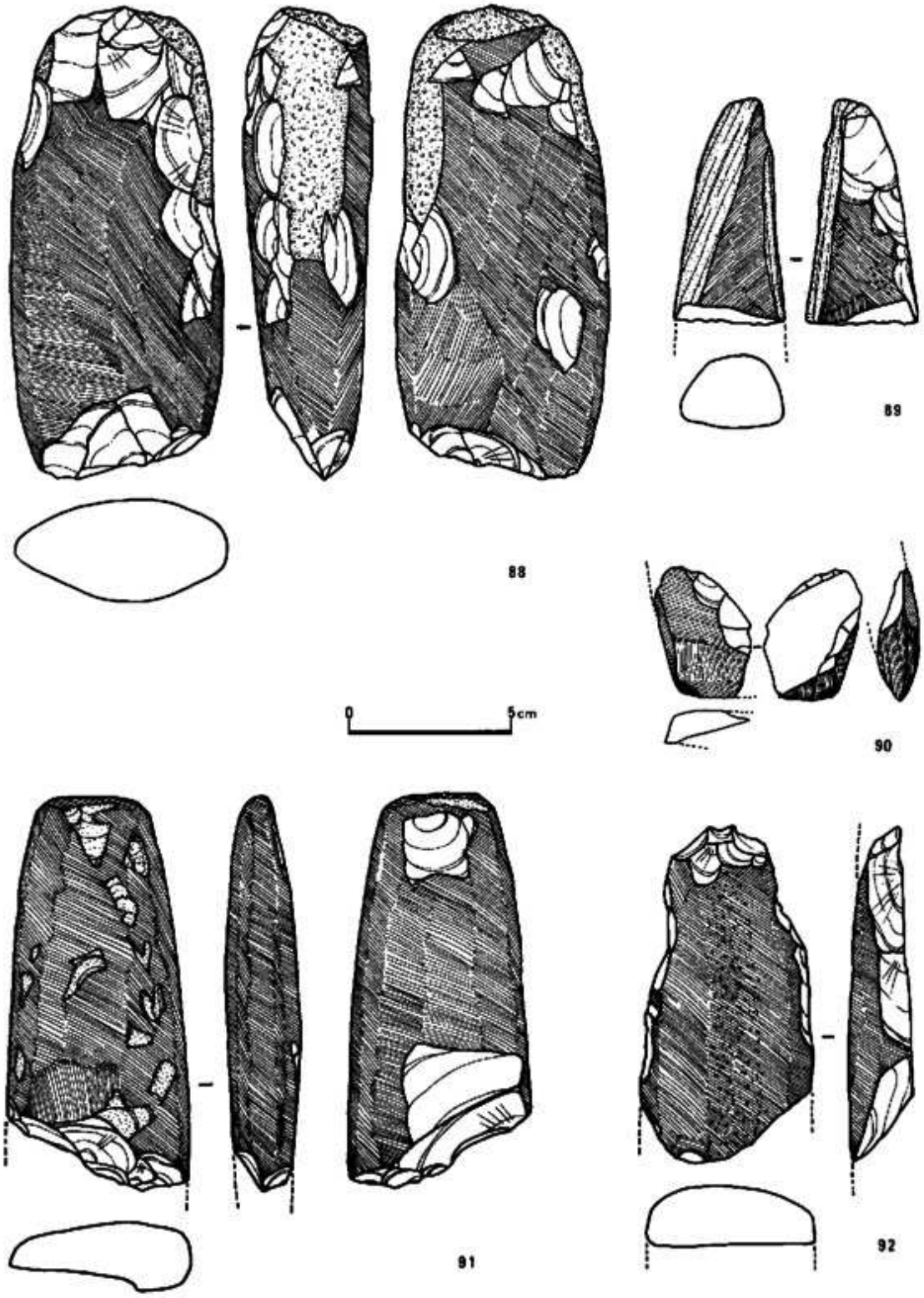
55は，やはり原石面を打面として寸の短い剥片を生産している。a面左側面と下部に原石面を残し，b面も剥片数片を剥取した痕の他は原石面である。a面からの剥片を剥取した後に上面からの剥離が入っていて，打面の転位が行なわれている。

56は，断面三角形の角柱状の原石の側縁二ヵ所に剥離痕があるが，a面左側のものはパティナが新鮮で欠損と思われる。この資料だけではフレーク・コアーとすることは難しい。

剥片類は，30点検出されているが，これらは両側縁あるいは一側縁に意図的加工とは別な，不規則で使用痕的剥離あるものを抽出したものである。フレーク・コアー同様全点黒曜石製である。

84，85は横長剥片で，あとは皆縦長剥片である。

57～60は，両面に不規則な剥離を数回加えたもので，その側縁に使用痕的な小剥離があり，断面形はいずれも部厚い。その他は，素材をほぼそのまま使用したものである。57は，a面中央に大きく原石面を残していて，a面右，b面左と下部に不規則ながらも大きめの剥離が認められる。58は，全面が摩滅のために光沢を失っている。部厚く，a面左に切断面を残している。また，a面両側縁に刃つぶれが認められる。59は，部厚い断面三角形のもので，a面左側縁に背の高い使用痕が認められる。60は，a面右半分に原石面を残しており，b面の周辺に不規則な剥離が認められるだけで



第35図　発掘区出土石器実測図（6）（石斧）

ある。

65は，a面右側縁に大まかな加工が認められ，下方のものは背の高い細かな加工が施されているが，その他は側縁に使用痕が認められるだけである。

68は，a面右側縁上部にノッチ状のくびれが認められる。

80は，扇状剥片のb面右側縁に使用痕の認められるものである。

剥離の稜線，素材面などに擦痕あるいは摩滅痕のあるものは，58，60，61，67，87の5点である。熱作用を受けているものは，70と86で，70は下部両面に，86は全面である。また，原石面を残すものは，57，58，60～66，68，72，73，75，76，81の15点であった。

7　石　斧（第35，36図，図版22）

石斧は，発掘区のみから11点出土している。全点磨製石斧である。欠損品はそのうち10点で，柄部破片は6点（89，91，92，95，97，98）である。

88は，原材は棒状の部厚い河原石かと思われ，柄頭と両側面には細かい敲打痕と剥離痕があり，原材を大まかに打ち欠いて敲打整形した後に，研磨したものと思われる。部厚く大形で，大形蛤刃の刃部を有するが，刃縁は使用の衝撃で大きく欠損している。重量は550 gと重い。複輝石安山岩製。

89は，下部を大きく欠損している。黒色片岩製で石質の走行が縦にある石材を丸棒状に割り，b面右側縁に粗い敲打を加えてから両面を研磨したもので，断面は部厚い。

90は，刃部破片である。片刃で，上部は右下がり，下部は縦方向に整形痕が認められる。また，刃縁には長軸方向の短い使用痕がみられ，やや摩滅している。緑色片岩製。

91は，原材は節理面に沿って部厚く板状に剥離されたもので，素材を粗く整形敲打したのちに全面を研磨したものと思われる。a面上面には所々に敲打痕がみえる。刃部は過度の使用により欠損している。整形痕はa面の下部の一部が長軸方向である他は，右下がりのものである。黒色片岩製で重量は250 gであった。

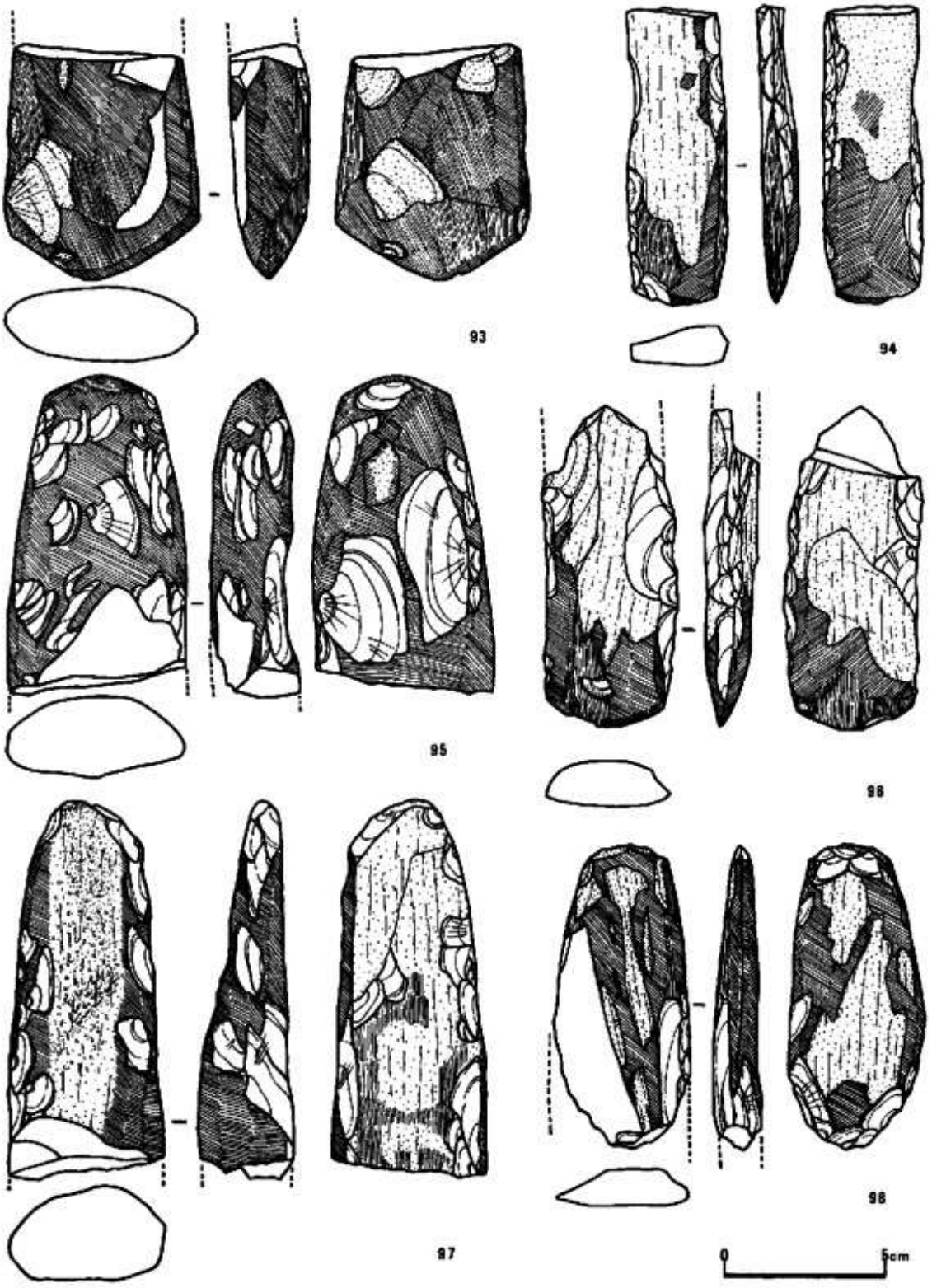
92は，a面上面だけを残してほとんど欠損している。両側縁を敲打整形したのちに研磨したもので，a面柄部上部には両側にくびれが認められる。緑色片岩製。

93は，泥岩の原材を細かく敲打整形した後に，全面を入念に研磨したもので，a，b両面に敲打痕が残っている。刃部は中央に突き出した刃縁をもつ両刃で，刃縁は再度砥ぎ直され使用したものかと思われる。重量は現存部分だけで162.5 gである。

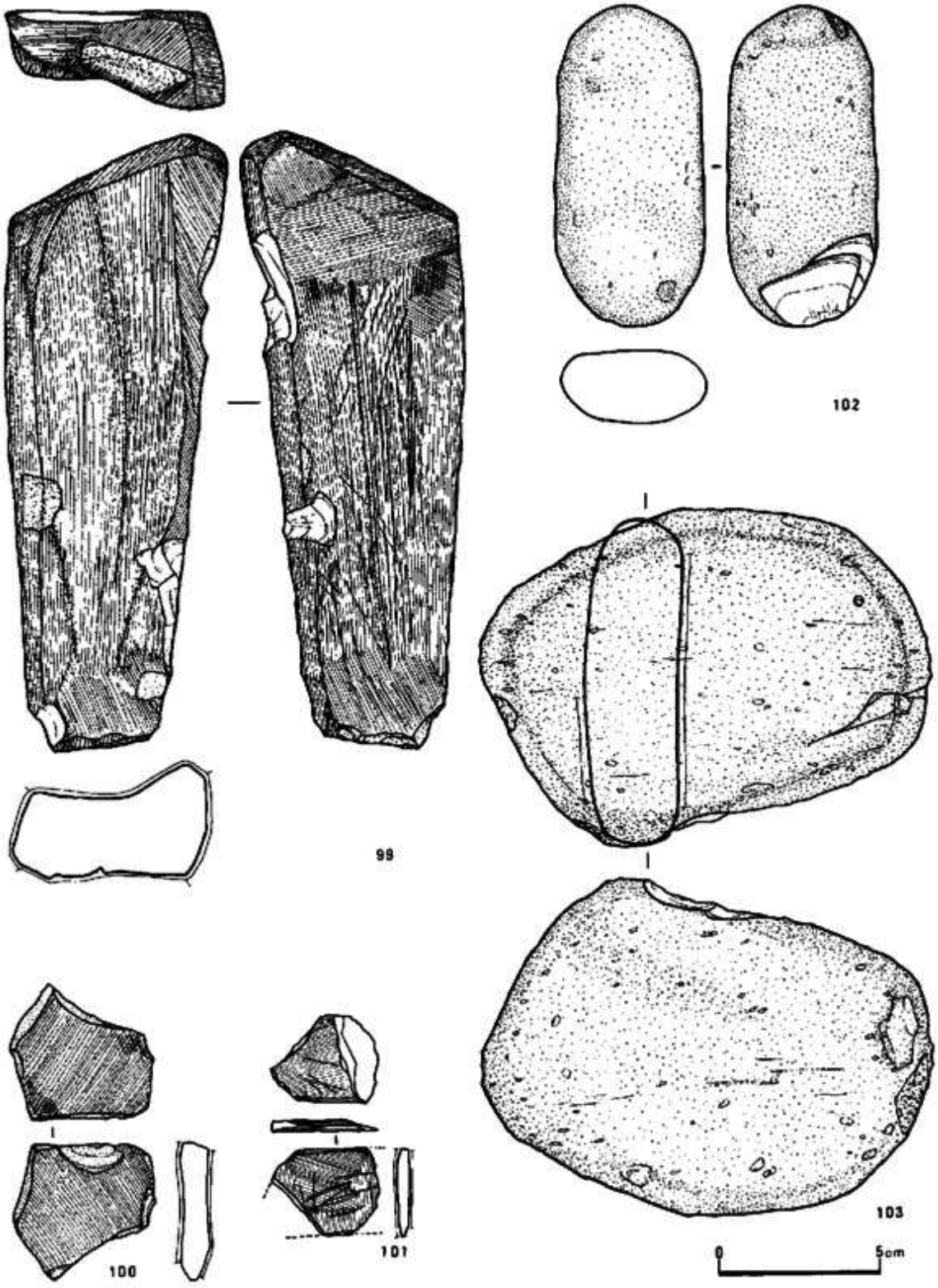
94は，扁平板状の素材の両側縁に敲打を加えて整形し，両面刃部とb面全面を研磨したもので，a面上面には素材面をb面上面には幅広く原石面を残している。刃部は片刃で，a，b両面の刃縁には再砥ぎした痕がみられるる。黒色片岩製。

95は，緑色片岩の素材を全体に粗く敲打し研磨したものであるが，両面に敲打痕を残している。断面は部厚く，カマボコ型に近い。

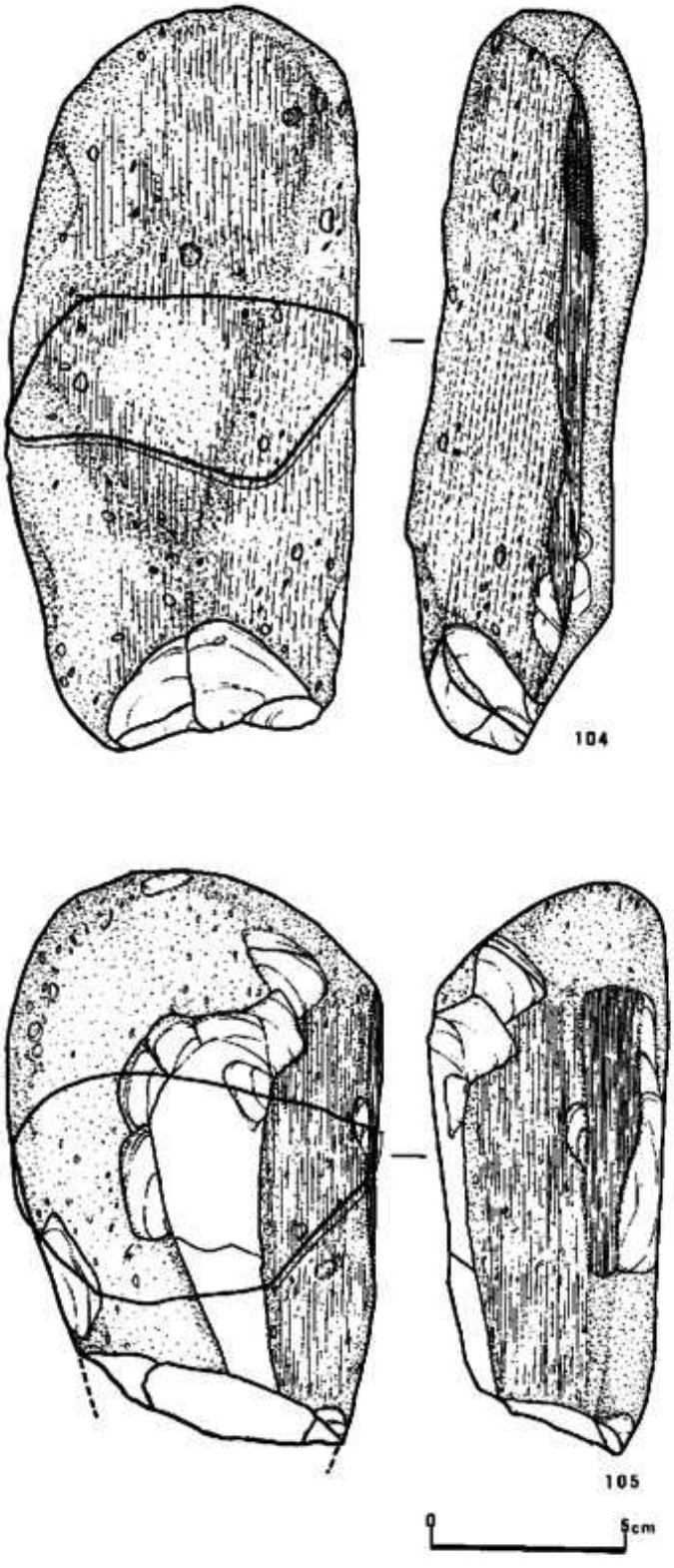
96は，緑色片岩の石質が縦に走行する板状の原材の両側縁を敲打整形し，刃部を研磨したもので，a，b両面には素材面を幅広く残している。断面はカマボコ型を呈する。刃部は片刃的で，刃縁は



第 36 図　発掘区出土石器実測図（7）（石斧）



第 37 図　発掘区出土石器実測図（8）（砥石・擦石）



第38図　発掘区出土石器実測図（9）（擦石）

丸くカーブしており，長軸方向に短い使用痕が認められる。

97は，緑色片岩の素材を石質の走行に沿って縦にそいで板状にしたもので，側面および柄部上端に敲打を加えて整形研磨したものである。a面中央に幅広く原石面が残っており，b面にも素材面が残っている。

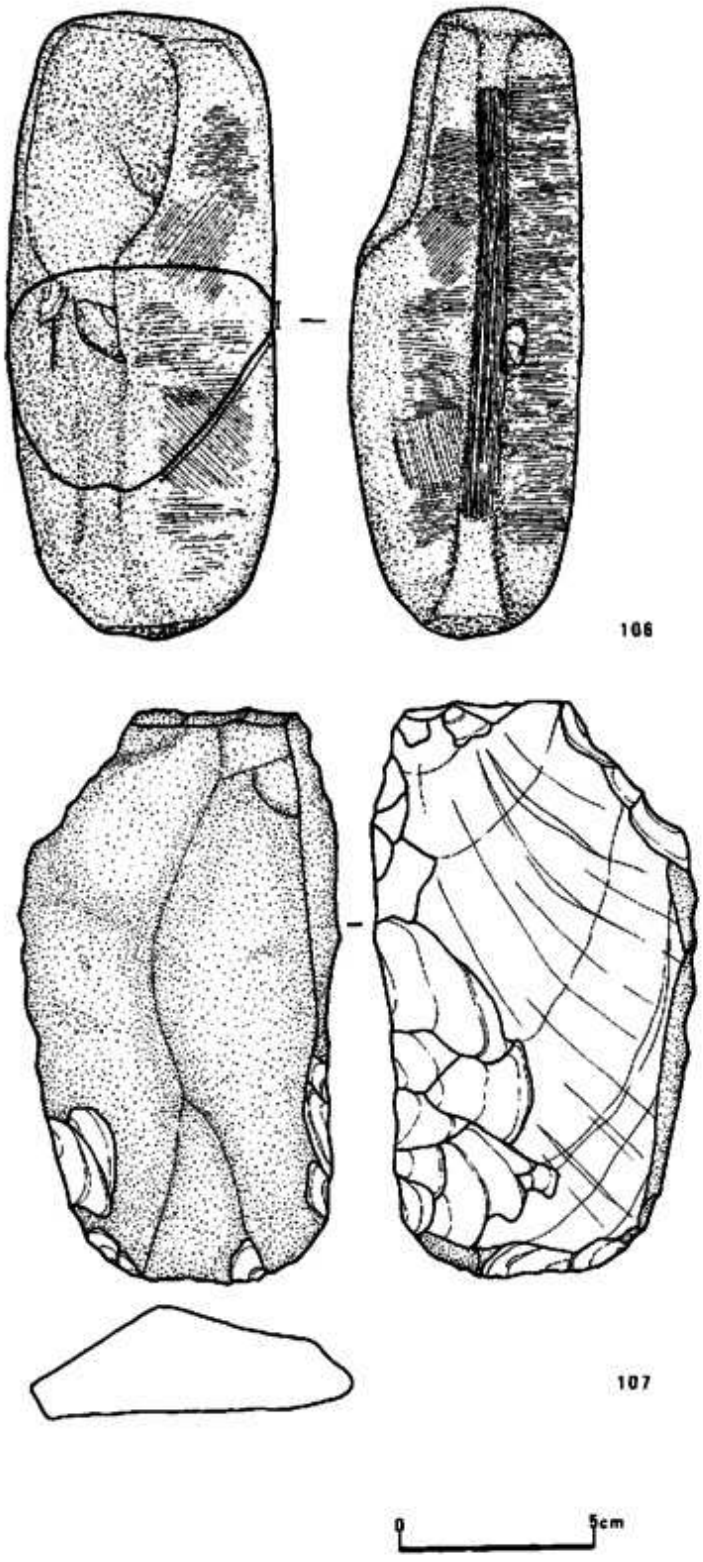
98は，板状に節理した素材に敲打を加えて，研磨したものである。両面に幅広く，素材面を残している。黒色片岩製。

8　砥　石（第37図99～101，図版22，23A）

99は，大きさが，19.5×6.5×3.6cmのやや扁平な長方体の砂岩で，全面を使用している。a面は中央に向かって深く凹んでおり，擦痕はほぼ長軸方向である。b面には長軸方向に二条の深い溝があり，特に左側の1本が深く凹んでいる。擦痕は，上部は短軸方向で他は長軸方向である。重量は400gであった。

100も，砂岩製で両面に斜行する擦痕が認められ，全体に浅くコンケーブしている。扁平な断面を呈する。

101は，黒色片岩製で上下部を欠損している。両面ともに入念な研磨を施し，両面に数条の不規則な方向に伸びた細かい溝が認められる。全体に扁平で幅が狭く，両側面には砂岩製の石鋸の擦切痕とは



第39図　発掘区出土石器実測図（10）（擦石・礫器）

違う鋭利な感じの擦切りの溝が認められる。この資料に関しては，古い時代の所産であるかどうかは判然としない。

9　擦　石（第37図102，103，第38図104，105，第39図106，図版22，23 A，B）

発掘区からは，2点の擦石と，3点の断面三角形の擦石が出土している。

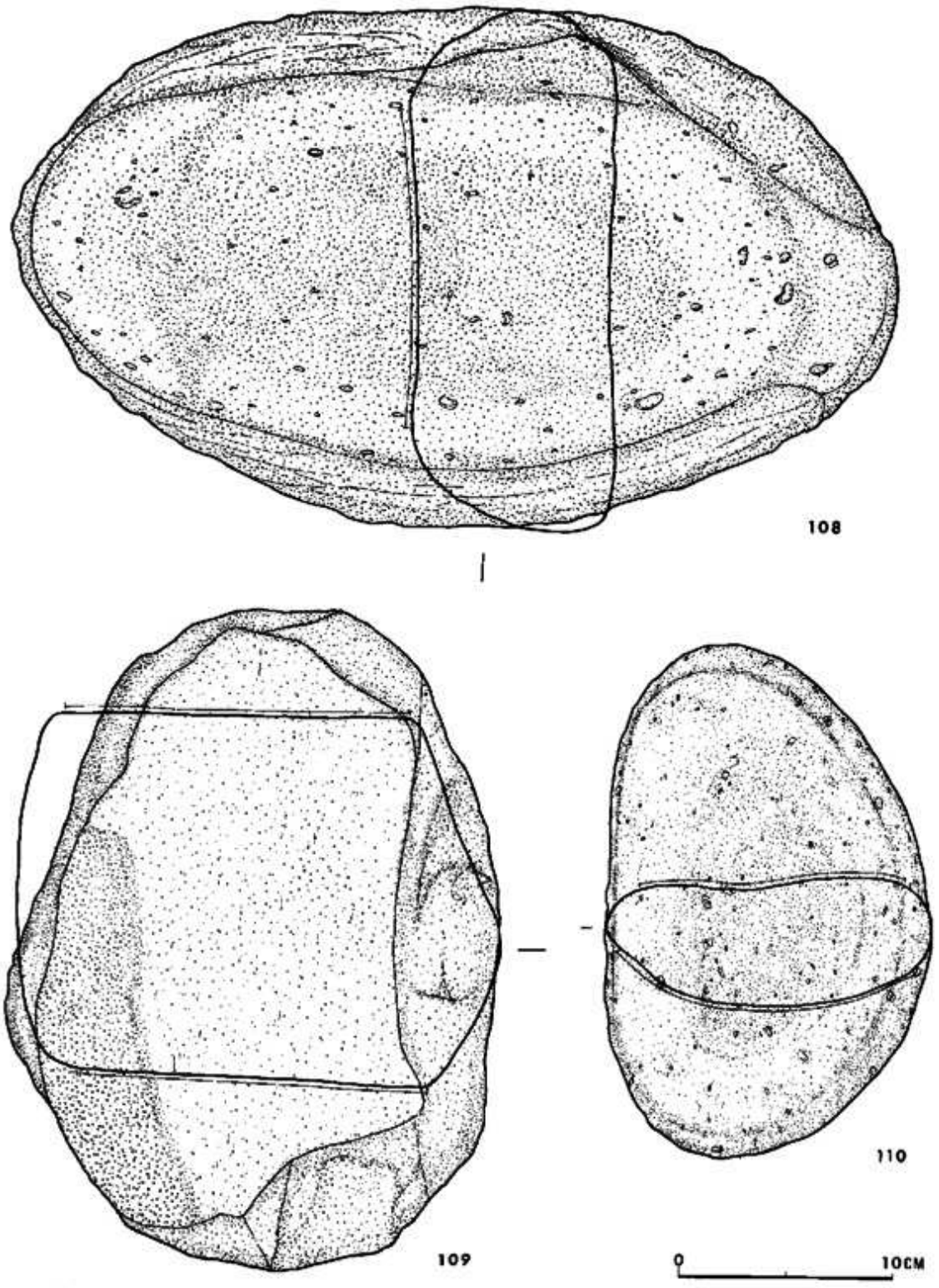
102は，複輝石安山岩の長楕円礫で，a面が多少平らになっている程度で明確な擦痕は認められない。b面上部に打ち欠いた剥離がある。

103は，安山岩の扁平な円礫で両面を軽く擦っている。大きさは，14×10.4×2.8cmで，重量は650gであった。

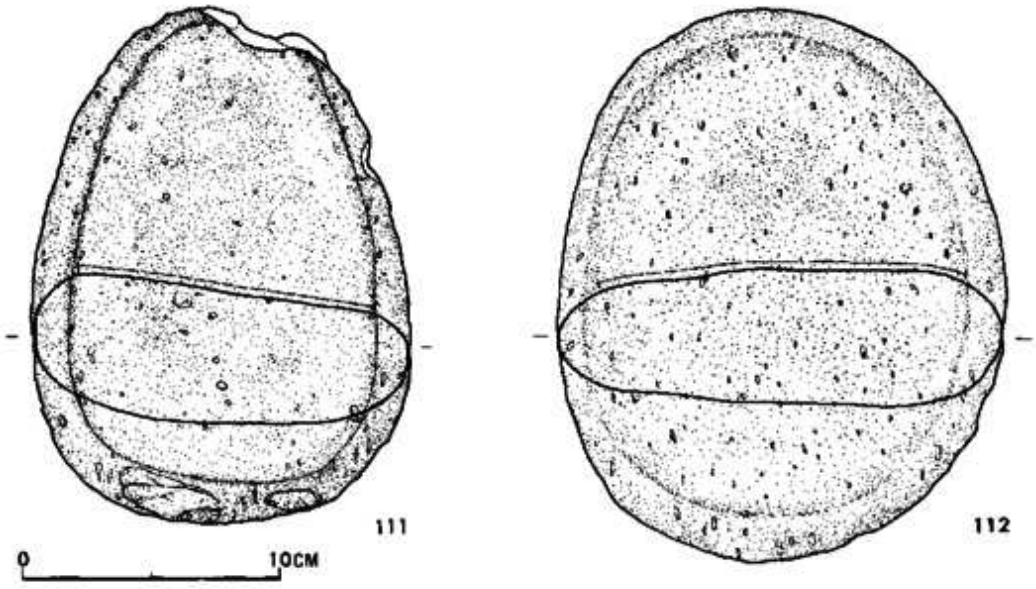
104～106は，断面三角形の一稜を擦面とした擦石である。重量は，ほぼ1,000g前後に集中している。

104は，a面下部に打ち欠いたあとがあり，上面には長軸方向に明瞭な擦痕が認められる。擦面幅0.8cm，長さ14cmで，擦面の側縁に一部剥離痕が認められる。複輝石安山岩製。

105は，a面下部を欠損しており，上面にも新しい時代の剥離が認められる。a面右は，長軸方向に擦痕が認められる。擦面は長さ7.5cm，幅1.5cmで，擦痕は長軸方向である。欠損後，焼けたもの



第40図　発掘区出土石器実測図（11）（石皿）



第41図　発掘区出土石器実測図（12）（石皿）

で，全体にすすけている。安山岩製。

106は，擦面の両側面を短軸方向に軽く擦っている。また，長軸の一端は，細かく敲打してつぶれている。擦面は，長さ11cm，幅0.8cmで，他には人為的加工は認められなかった。複輝石安山岩製。

10　石　皿（第39図108～110，第40図111，112，図版23A，24，25）

発掘区からは，5点の石皿が出土しており，石質の内訳は，複輝石安山岩4点（108～110，112），安山岩1点（111）である。

108は，扁平な楕円形礫で，側縁全周を細かく敲打して整形しており，石質がボソボソになって剥脱している。図示した面は中央がコンケーブしてスベスベしている。裏面は，表面が剥脱して側面同様にボソボソとしているが，何らかの加工であるかもしれない。重量12.5kgである。

109は，部厚い大形の角礫を使用し，両面は擦られたために平坦になっている。擦痕は明瞭ではないが，長軸方向と斜め方向にある。また，図示した面の左側，点の多い部分は焼けて黒くなっている。重量は20.6kg。

110は，24×15.3×5.2cmの扁平な楕円形礫で，図示した面の中央に向かって凹んでいる。礫全面が擦られていて，裏面はコンベックスしている。重量3kgである。

111は，20×14.6×5.5cmのやはり扁平な楕円礫で，図示した面は擦られてコンケーブしている。礫上下端，裏面の上端には剥離痕がある。重量2.36kg。

112は，扁平な楕円形礫で全面は面取りした如くであるが，石質が脆く発掘時の欠損などもあり，明確には石皿と断じ難い。重量は，2.5kgである。

11 礫　器（第39図107）

107は，大きな硅岩の原材を縦長に剝取して素材面の左側縁に大まかな剝離を入れたものである。a面には散発的な剝離の他には加工は認められず，スベスベした原石面を広く残している。全体にパティナが古い。どの様な用途をもったものか想定し難い。

（土田亜佐子）

第6章　まとめ

第1節　遺　　構

本遺跡において検出された14基の，遺構の構築位置は第2章においても触れているごとく，標高約5.0～5.5mを測る，紅葉山砂丘の内陸側縁辺沿に構築されている。

全体的な遺構，遺物のありかたは，昭和49年度に調査の行なわれたN 309遺跡（上野，高橋編1975）とほぼ同様な分布の状態が認められ，今回の2次調査で検出された14基の遺構はN 309遺跡より一連となって続く遺構群の一部を構成しているものと判断される。

本遺跡において検出された14基の遺構は，住居的機能の可能性を完全に否定することの出来ない第11号，第12号，第13号，第14号ピットの4基を除き，規模よりみて二群に分けることが出来るが，N 293遺跡（上野編1974）やN 309遺跡のピット群に比べ，円(楕円)形擂鉢状を呈する単純な掘り込み構造のものが多い。

遺構の規模や差異によってなされる分類の基準を本調査に先して行なわれ，遺跡の主体部を成す，N 309遺跡の分類基準に求めた場合，長径約50～130cm，短径約45～110cmとするI型には第2号，第3号，第4号，第5号，第6号，第7号，第8号の7基が属し，長径約120～210cm，短径約85～160cmとするII型には該当するものがなく，長径約190cm以上，短径約130cm以上とする大型のIII型ピット群には第1号，第9号，第10号の3基が含まれる。又，これら10基のピットのうち何らかの遺物が検出されたものは第1号，第5号，第7号，第9号，第10号ピットの5基である。しかし，これら各ピットの出土遺物はすべて覆土中に点在していたもので遺構の性格を明らかにするにはほど遠く，構築意図は不明であると言わざるをえない。

第11号，第12号，第13号，第14号ピットの4基は規模などからしてN 293遺跡，N 309遺跡において竪穴住居址状遺構としたものに該当し，おそらくは住居的機能をはたしていたものとおもわれるが，恒久的な住居とするには施設及び構造的な面において欠けるところが多く，積極的に住居址として取りあつかうには根拠薄弱と言わざるをえなかった。

上記の分類結果にもとずきN 293遺跡，N 309遺跡のピット群のタイプ別分布図に本調査区のピット群の分布を加えたものが第42図にかかげるものである。第42図に示されるタイプ別分布図より知られることはN 293遺跡，N 309遺跡，および本調査区においてはピットのタイプによって異なる分布を示すものではなく混在して構築されていると言うべきであろう。又，N 309遺跡と本調査区は，明らかに同一の遺跡としてとらえることが出来，今回の調査において検出された14基の遺構はN 309遺跡より一連となって続くピット群の一部を構成しているものとして考えている。

今回の調査において遺構と遺物の検出が顕著に認められた地域が1ヶ所ある。遺構の事実記載の

第42図　N 293, N 309（1次，2次）遺跡ピットのタイプ別分布図

中でも若干触れているが，第12号ピットを中心とする地域である。

遺構や遺物が特定の地域に集中して見られる事実は，N 309遺跡の報告において高橋和樹が指摘しており，本調査区の第12号ピットを中心とする遺構，遺物の集中地域を加えてみるならば，N 309遺跡の2地域に本調査区の1地域を加えて3地域に分かれて存在していることを知ることが出来ると思う。

このように住居的機能をはたしていたと考えうる遺構と多数のピット群が特定の地域に集中するという事実は，N 293遺跡，N 309遺跡，加えて本調査区における遺跡，遺構のありかたを特徴ずけるものと言えるのかもしれない。又，N 309遺跡，本調査区をあわせ3つのグループに分かれて遺構，遺物の集中が見られると言うことを，N 293遺跡の遺構群の存在とを考えあわせるとき，土器の廃棄行為あるいは生活の場といったものの移動，変遷として捉えられるものかもしれないが，今回の調査を含め3度に亘る調査の中で得られた情報は，具体的なイメージからかなりの隔たりが感じられ具象化することが出来ないところがあまりにも多く，逆のぼって想像することが困難な状況であった。

しかしながら，N 309遺跡や本調査区におけるピット群の性格について不明な点が多いとはいいながらも，この地域一帯が，これらの遺構や遺物を残した人々の生活空間であったことだけは忘れることの出来ない事実であろう。

（内山　真澄）

第2節　土器群について

本節では，本遺跡に見出された土器について，第5章第1節の分類に沿って，一通りまとめておきたい。

第Ⅰ群土器

第Ⅰ群土器には，村越潔の分類[注1]（村越 1974）でいう，円筒上層c式，d式，e式土器を一括したが，実質的にはe式は僅かで，大半はc式およびd式に比定される土器によって占められている。

a類

a類は，江坂輝弥（江坂編 1970）や村越潔（村越 1974）のいう円筒上層c式，高橋正勝（高橋 1972，高橋・小笠原 1976）のいうサイベ沢Ⅴb式に相当すると思われる土器である。貼付文間に刺突文列が配されるという文様構成は，第27図1～4のほか，第12号ピット出土の第20図1，3，第14号ピット出土の第26図37など，平縁の深鉢形土器にもみられる。これらのほかに，第Ⅰ群d類に一括した平縁土器の一部も，円筒上層c式に伴出する可能性があるが，現時点では，これを明確な根拠にもとづいて摘出することはできない。

尚，このa類にまとめた土器にみられる刺突文には，絡条体圧痕によるものと，半截竹管によるものとがあり，或はこの違いを重視して，既報のN 309遺跡における第Ⅰ群A類とB類の如く，両者を峻別すべきかも知れない。しかし，今回は資料が少なく，刺突文の施文具の変化に対応して，撚糸圧痕文の出現率などにも差が認められるものなのかどうか判断できないため，一括して取扱うことにした。

b類

b類は，江坂輝弥のいう円筒上層d，e式，村越潔のいう円筒上層d式，高橋正勝のいうサイベ沢Ⅵ式の一部に相当する土器である。b類には，第5章に挙げたもののほか，第10号ピット出土の第25図13，第12号ピット出土の第25図25，第14号ピット出土の第26図40などが含まれる。第27図7～9はやや特殊で，この類に含まれるものか否か確信はないが，他はほぼ村越のいう円筒上層d式とみなして差支えないものと考える。既報のN 309遺跡においても，第27図10～13にみらるような弁状突起を有する器形のものは少ないが，比較的多量のb類土器が検出されており，第1群E類およびF類などに分類されている。

c類

c類とした小突起を有する土器は，今回の調査では第27図14～16に示す3点のみであるが，既報のN 309遺跡では，第Ⅰ群E類およびH類に分類されているもののなかに，比較的多くの類例を見出すことができる。すなわち，第3号竪穴住居址状遺構出土の第12図23，第3号ピット出土の第31図2，第14号ピット出土の第34図21，発掘区より採集された第42図49，第44図136，第46図179などがそれである。これらにおける突起の様相や，肥厚帯上および肥厚帯下にみられる文様などを相互に比較するならば，単純なものからやや複雑なものまで，かなりの多様性が認められるが，

口縁がほぼ平縁で，口縁部にはやや幅の狭い肥厚帯が明瞭につくり出され，この肥厚帯を跨ぐように配された縦長の小突起がみられるといった口縁形態における大局的な共通性こそ重視されるべきと思われる。

c類にまとめた土器は，ほぼ江坂輝弥のいう円筒上層e式，村越潔のいう円筒上層d式2類に対比させうるものと考えるが，既報のN 309遺跡における第12図23，第44図136など，肥厚帯下に地文以外の文様のみられないものについても，同等に取扱われるべきものと確信する。そして，筆者もまた，村越と同様に，円筒上層d式1類と2類とは，時間的な差によって説明されるべきものではないと考える。

既報のN 309遺跡および本遺跡より検出された円筒上層d式土器の器形には，b類のように弁状突起を有するものと，c類のように小突起（小突起と橋状把手とが連結する例もある）を有するほぼ平縁のものとがあることは明白だが，このほかに，純然たる平縁のものも共存していたと思われる。純然たる平縁の土器のうち，肥厚帯下にも貼付文を主とする文様が展開される類例は，殆ど見出されていないが，後述のd類に一括したもののなかには，円筒上層d式に伴出するものが含まれているに違いない。

d類

口縁部肥厚帯を有する平縁土器のうちでも，肥厚帯下に貼付文を主体とする文様が展開されているものについては，この文様帯の様相からより多くの手懸りが得られるゆえ，比定さるべき形式を知ることも可能だが，d類に一括したものの如く，肥厚帯下に貼付文を欠く場合には，現状では，所属形式の判別は極め難い。

既報のN 309遺跡第54号ピットや，今回の第12号ピットなどからは，それぞれ数個体ずつの平縁の完形土器が検出されており，これらにおける共伴関係が明確にされれば，d類に一括した平縁土器のそれぞれの位置づけについても，飛躍的な前進がみられたことであろう。しかし，いずれの調査においても，遺構が褐鉄分の多い砂丘上に営まれていたという悪条件などがあって，遺憾ながら調査の精度の低さは自認するところであり，共伴関係については一切の断言を差し控えざるを得ないのが実状である。

さて，d類に一括した平縁土器の出土量はかなり多く，文様構成にもそれぞれ多様性が認められるので，便宜上8グループに分けて説明してゆきたい。

i）肥厚帯上に貼付文などによる繰返しの文様がめぐるが，要所に異種の文様が挟まれて，肥厚帯上の文様が4等分されるもの。これは，さらに2者に分けられる。

㋐ 第12号ピット出土の第25図22や第54号ピット（既報）出土の第32図3などのように，並列する縦位の貼付文の途中に，矩形の貼付文が配されているもの。発掘区より採集の第28図22は，この種のものの破片であろうか。

㋑ 第12号ピット出土の第25図20や発掘区より採集の第28図1などのように，肥厚帯の上端および下端をめぐる横位の貼付文と，要所に配された縦位の貼付文とに区画されたなかに，刺突文列が加えられているもの。

ii）肥厚帯上に，縦位の貼付文が並列したり，途中で右下りから左下りへと変換する斜位の貼付文がみられるもので，これにも2者が認められる。

㋐ 第12号ピットの出土の第20図2や第54号ピット周辺（既報）出土の第32図4などのように，やや幅広の貼付文が並列し，貼付文間に撚糸文の施されているもの。

㋑ 発掘区より採集された第28図24などのように，やや細めの粘土紐が貼付されているもの。

iii）肥厚帯上に，細めの貼付文が鋸歯状もしくは小波状にめぐるもの。第11号ピット出土の第25図16～19，第14号ピット出土の第26図41，発掘区より採集の第28図25～27などが一般的なものだが，第1号ピット（既報）出土の第31図1のような，口縁部肥厚帯が顕著ならざる例外的なものも認められる。

iv）口縁部肥厚帯上に粘土紐の貼付はみられず，絡条体圧痕文や組紐圧痕文などを並列して押圧し，その間の素文部が結果的に浮彫りにされるという文様構成のみられるもの。発掘区より採集の第28図23や第54号ピット（既報）出土の第32図6などが類例として挙げられる。

v）口縁部肥厚帯上に粘土紐の貼付はみられず，絡条体圧痕による馬蹄形圧痕文が並べられているもの。このグループの類例は少なく，既報のN 309遺跡および今回の調査を通じて，第13号ピット出土の第26図34が検出されたのみである。

vi）肥厚帯上および肥厚帯下に地文の縄文が施され，肥厚帯下には，地文に重ねて加えられた圧痕文あるいは刺突文列がめぐっているもの。圧痕文や刺突文の施文具の差による2者が認められる。

㋐ 既報のN 309遺跡において第I群I類に分類された土器のように，肥厚帯下に絡条体圧痕による馬蹄形圧痕文がめぐるもの。

㋑ 第12号ピット出土の第25図24や第34号ピット（既報）出土の第31図4などのように，肥厚帯下に半截竹管による横位の刺突文列が3段めぐっているもの。

vii）肥厚帯上および肥厚帯下に地文の縄文がみられるほかは，一切の文様の施文がみられないものである。このグループの土器の出土量はかなり多く，今回の調査では，第12号ピット出土の第25図21，第14号ピット出土の第26図42，発掘区より採集の第28図28～32などが検出されており，先の調査においても，第54号ピット（既報）出土の第32図7をはじめとして，第I群J類に分類されたもののなかに，同様の平縁土器が数多く見受けられる。また，第12号ピット出土の第25図23，発掘区より採集の第28図33，34，第21号ピット（既報）出土の第33図26などの小形の土器も，このグループの特徴を具えたものとみなすことができようか。

viii）発掘区より採集の第28図35，36などのように，上述してきた第I群土器には殆どみられない特異な要素の加わった例外的なもの[注2]。

既報のN 309遺跡および今回の調査からは，以上のような多様な平縁土器が検出されている[注3]。これらの土器の形式上の位置づけについては不明な点が多いが，いずれにせよ，既報のN 309遺跡の場合でも，今回の調査においても，検出された円筒上層式土器の大半が円筒上層c式あるいはd式であったことから，これらの平縁土器の大多数もまた，円筒上層c式あるいはd式に比定されるものと思われる。さらにいうならば，いずれの調査においても円筒上層d式土器の出土量がc式のそ

れを上回っており，このことから，d類にまとめた平縁土器のうち，より多くのものが円筒上層d式に比定される可能性が強いと推測される。

尚，上磯郡知内町森越遺跡では，第II群土器第V段階（峰山，大島ほか 1975）などに，上述のiii），vii）などの類例がみられるし，松前郡福島町館崎遺跡からは，「出土状況から円筒上層c式土器に伴うものと思われる」（佐藤 1975，24 頁）とされる，iii），vii）などの類例が報告されている。

e類

前述したように，本遺跡に見出された円筒上層式土器の大半は，村越潔のいう円筒上層c式およびd式に比定されるものであり，発掘区より採集の第 20 図 6 についても，円筒上層c式あるいはd式に伴ったものと考えたい。胴半部にやや膨みのみられる深鉢形を呈すること，台形状の弁状突起を有することなど，器形上の特徴から判断しても，これを円筒上層c式あるいはd式に位置づけることは妥当と思われる。

f類

f類は，沈線文による文様がみられる円筒上層式最終末の土器群で[28,4]，ほぼ山坂輝弥のいう最花式，村越潔のいう円筒上層e式，高橋正勝のいうサイベ沢Ⅶa，Ⅶb式などに比定されるものと思われる。

既報のN 309 遺跡第 34 号ピットより検出された第 31 図 5，6 など，突起下の縦位の貼付文と，これに連結する弧状の沈線文とから文様が構成されている土器の類例は，例えば青森県三戸郡三戸町泉山遺跡出土の縄文中期第 3 群土器a類（市川ほか 1976）などにもみられるところであり，細部の差異に拘泥しなければ，両者の間により多くの基本的な共通性を認めることが可能と思われる。

ところが，これらの土器との同時的存在が推測される，第 12 号ピット出土の第 20 図 4 や，発掘区より採集の第 28 図 42 などの類例は，道外では検出されていないようであるし，道内においても多くはない。第 28 図 42 のように，口辺に平行な数条の沈線文が口縁部肥厚帯上あるいは口辺部にめぐる土器は，既報のN 309 遺跡においても第I群K類に分類されたもののなかに類例がみられるが，他遺跡からの報告は殆どなく，管見の限りでは，函館市見晴町遺跡出土の 1 例（高橋 1966，第 2 図 9）が挙げられるくらいのものである。また，第 20 図 4 のような，三角状の波頂部を有する波状縁と，波頂部の下に続く懸垂状の貼付文とがみられる土器の類例は，島牧郡島牧村栄磯岩陰遺跡I群 1 類土器（峰山ほか 1973）のなかにみられる。

吉崎昌一（1965）や高橋正勝（1972）などの説に従えば，これらの土器は，この時期の道央部に主体的な位置を占める天神山式土器やトコロ第 6 類土器と併行関係にあったものと理解される。

第II群土器

第II群土器は，いわゆる天神山式土器（高橋 1972）で，発掘区より採集された第 28 図 37～41，45，第 29 図 47 などのほか，第 12 号ピット出土の第 25 図 26 などが含まれる。既報のN 309 遺跡においても，第II群土器に分類されたもののなかに，比較的数多くの類例がみられる。

既報の第 6 号竪穴住居址状遺構出土の第 11 図 3 は，当初，天神山式土器であるとされたが（上野・

高橋編 1975, 97 頁)，翌年，サイベ沢Ⅶ式土器のグループであると訂正された（上野ほか 1976, 171 頁)。このような中間的な様相のみられる土器の存在からも，天神山式土器とサイベ沢Ⅶ式土器との併行関係（吉崎 1965, 高橋 1972 など）が窺われる。従って，第Ⅱ群土器は，第Ⅰ群土器 f 類と共存していたものと考えられる。

第Ⅲ群土器

第Ⅲ群土器は，手稲砂山式Ｂ類（石川 1967）との類似が認められるものである。既報のＮ 293 遺跡およびＮ 309 遺跡，そして今回の調査においても，このグループに属する土器片の検出がみられるが，土器片の絶対量が少ないうえに，小破片に砕けたものが多く，これらの資料から，器形や文様の全貌を明確に知ることは難しい状態にある。

石川徹は，恵庭市西島松南Ｄ遺跡第２地点における調査所見から，手稲砂山式土器と伊達山式土器などとの共存を考えているが（大場・石川 1966)，この点については未だに他遺跡での確認がなく，手稲砂山式土器の位置づけは，今後にその解明が待たれる。

第Ⅳ群土器

第Ⅳ群土器は，いわゆるトコロ第６類（駒井編 1963）に比定される土器である。発掘区より採集された第 29 図 50～61 のほか，第１号ピット出土の第 25 図２～４，第５号ピット出土の第 25 図５，第７号ピット出土の第 25 図７，第９号ピット出土の第 25 図 11，12，第 12 号ピット出土の第 25 図 27，28 など，比較的多くの土器片が検出されている。既報のＮ 293 遺跡，Ｎ 309 遺跡においても，第Ⅳ群土器の出土は比較的多く，第Ⅳ群土器の広汎な分布が注目される。トコロ第６類土器と天神山式土器などとの併行関係が，吉崎昌一（1965）や高橋正勝（1972）などによって説かれていることは，既に述べた通りである。

第Ⅴ群土器

第Ⅴ群土器は，いわゆる伊達山式（岩崎ほか 1963, 1970）に比定される土器であるが，今回の調査では，第 29 図 62 に掲示した１片が，発掘区より採集されたに過ぎない。これは，縄文原体を利用したと思われる刺突文を有するものであるが，このような刺突具による刺突文のみられる類例は，他に余りないようである。

伊達山式土器の検出は，既報のＮ 309 遺跡においても僅かなものであったが，これに反して，Ｎ 293 遺跡では比較的多くの伊達山式土器が見出されている。このような伊達山式土器における分布域の偏りなどから，Ｎ 293 遺跡の方が，Ｎ 309 遺跡の営まれた時代よりも若干新しく位置づけられるものと推定されることは，既報のＮ 309 遺跡の報告においても述べられている通りである。

註）　円筒上層式土器の細分については，江坂輝弥（江坂編 1970）や村越潔（村越 1974)，高橋正勝（高橋 1972，高橋・小笠原 1976）などの代表的な論考があり，これらの論考に例示された典型的な資料を通覧する限り

では，あたかも円筒上層式土器における形式分類は確立されているものの如くである。しかし，既に大島直行が指摘したように（峰山，大島ほか 1975，大島 1976），青森県三戸村中の平遺跡（鈴木ほか 1975）や上磯郡知内町森越遺跡（峰山，大島ほか 1975）などから，数多くの円筒上層式土器が報告されるに至った今日，これらの分類が，円筒上層式土器の多種多様な実態に，必ずしも即してはいないことが，次第に明らかとなってきた。

従来の分類基準をもってしては，適切かつ有効な形式分類を期し難いという現実に直面した大島は，森越遺跡の土器の分類に際して，特に文様のモチーフを重視する新たな視点から設定した"型式"と，土器の出土状況から確認されたという"段階"とを，縦横に組合せて体系化するという，極めて意欲的な試みを実施した（峰山，大島ほか 1975，大島 1976）。この試みは，あくまでも曖昧さを払拭せんとする科学性に根ざしたものであり，高く評価されるが，森越遺跡の報告書においては，縄文パターンそれ自体の説明は詳しいにもかかわらず，写真や実測図の示された多くの土器の出土状況や層位についての説明は不足で，6号住居址およびK，L，Mグリッドにおける土器の出土状況から確認されたという，円筒土器上層式土器様式の発生から終末に至る6つの段階を，報告書を読むことによって具体的に追認することはできない状態にある。むろん第61図にまとめられた各段階を代表する土器から，それぞれの段階の大要を知ることは可能だが，これによってそれぞれの段階を決定づける普遍的な表徴を見極めることは，読者には困難である。第61図を瞥見すると，第Ⅳ，第Ⅴの両段階で，従来の基準からすれば円筒上層c式とされるグループと，上層d式とされるものとが重複しており，特にこのあたりの資料が多い本遺跡の土器を取扱う際，第Ⅳ，Ⅴ段階を識別する基準を明確にしてもらいたいものと痛感した。各段階の存在を導いた具体的な調査所見と，各段階についての報告者による最終的な見解とが，一日も早く詳述されることを期待してやまない。

形式分類についてはこのような状態で，未だ統一見解はないもののように思われる。層位的事実や遺構における共伴関係といった有力な手懸りに乏しい，既報のN 309遺跡や今回の調査の所見の下では，独自に土器の細分を進めることが殆ど不可能なため，いろいろ問題は多いが，一応，従来の代表的な分類にあてはめるかたちで，記述をまとめてゆきたい。

註2　これらの土器の形式上の位置づけについては，全く不明であるが，或は円筒上層d式よりも後出するものかも知れない。

註3　これまでに公刊された，円筒上層式土器を多出する諸遺跡の報告書を見る限り，文様の展開がどちらかといえば簡素なこれらの平縁土器の類例は，さほど多くない。しかし，このことが直ちに，これらの平縁土器の出土量の少なさを意味するものとは思われない。恐らく，報告書から外された類例が多いのではなかろうか。

註4　この段階になると，道南地方などにおいて大木8b式土器が伴出することは，青崎昌一の指摘（青崎 1965）以来，定説化している。森越遺跡の報告では，円筒上層e式土器に大木系土器の影響が強いとし，これを円筒土器上層式土器様式から除外し，森越式土器様式を新たに提唱している。円筒上層e式土器と大木系の土器の関係については，最近の資料の急増のなかで，中の平Ⅰ式，榎林Ⅰ式などの提唱（鈴木ほか 1975，鈴木 1976）もあり，今後，それぞれの遺跡における具体的な調査所見を相互に検討してゆく過程で，十分な論議がつくされる必要があるものと思われる。

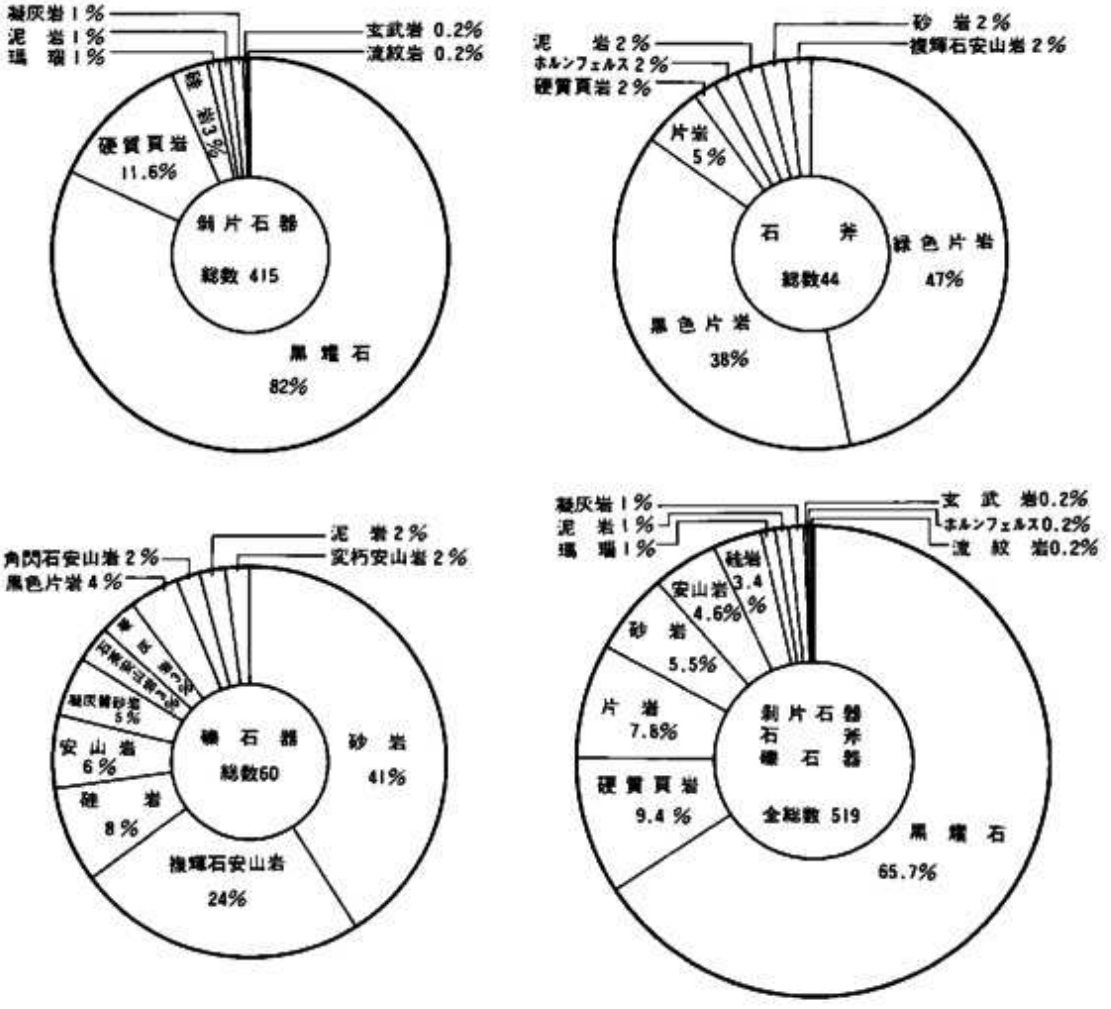
（高橋　和樹）

第3節　石器群について

本遺跡から出土した石器は，1974年度の1次調査と今回の2次調査を合わせると，総数519点であった。ここでは，両次の資料をまとめて，本遺跡の石器群について，(1)各器種毎の問題，(2)器種セットの問題の2点について検討を加えてみたいと思う。1次調査の資料に関しては，「N 309遺跡」（札幌市文化財調査報告書Ⅲ，上野・高橋編 1975）の報告を参照して頂きたい。

第1項　各器種について

本遺跡出土の石器群を，以下の(1)～(12)の器種に分けて考察を加えてみるが，事実記載の所でも述べたように，「両面体石器」と称されていたものを再検討し各器種に分類しなおしたため，本項ではこの項目を除いた。逆に削器として一括していたものの中から，使用痕的剥離のみの剥片は抽出し



第2表　石器石質統計表

て「使用痕のある剥片」として独立した項目にまとめている。さらに，以下の文章中を遺物番号で，ゴチック体で表記した数字は，1次調査のものであり，また1次・2次調査を通じて，遺構出土遺物に関しては挿図番号を示し，発掘区出土のものは挿図番号を抜いて区別している。

さて，個々の器種について触れる前に，本遺跡の石器の石質について考えてみたいと思う。

第2表は，本遺跡1・2次調査で検出された石器総数519点を対象にその石質の比率を円グラフで示したものである。

剥片石器は総数415点で，そのうちの82%が黒曜石である。次いで硬質頁岩11.6%，硅岩3%，瑪瑙，泥岩，凝灰岩は各1%で，泥岩は石鏃と削器，凝灰岩はナイフ状石器と削器にのみ用いられている。玄武岩は0.2%で，後述する通りナイフ状石器として分類した1点のみで，また流紋岩も同様0.2%で，掻器において1点使われているだけである。

石斧は44点で，緑色片岩47%，黒色片岩37%で，片岩系統だけで合わせて90%とその大半を占め，剥片石器同様，石材の選択はかなり限定されたものであることが判る。その他，硬質頁岩，ホルンフェルス，泥岩，砂岩，複輝石安山岩が各2%ある。

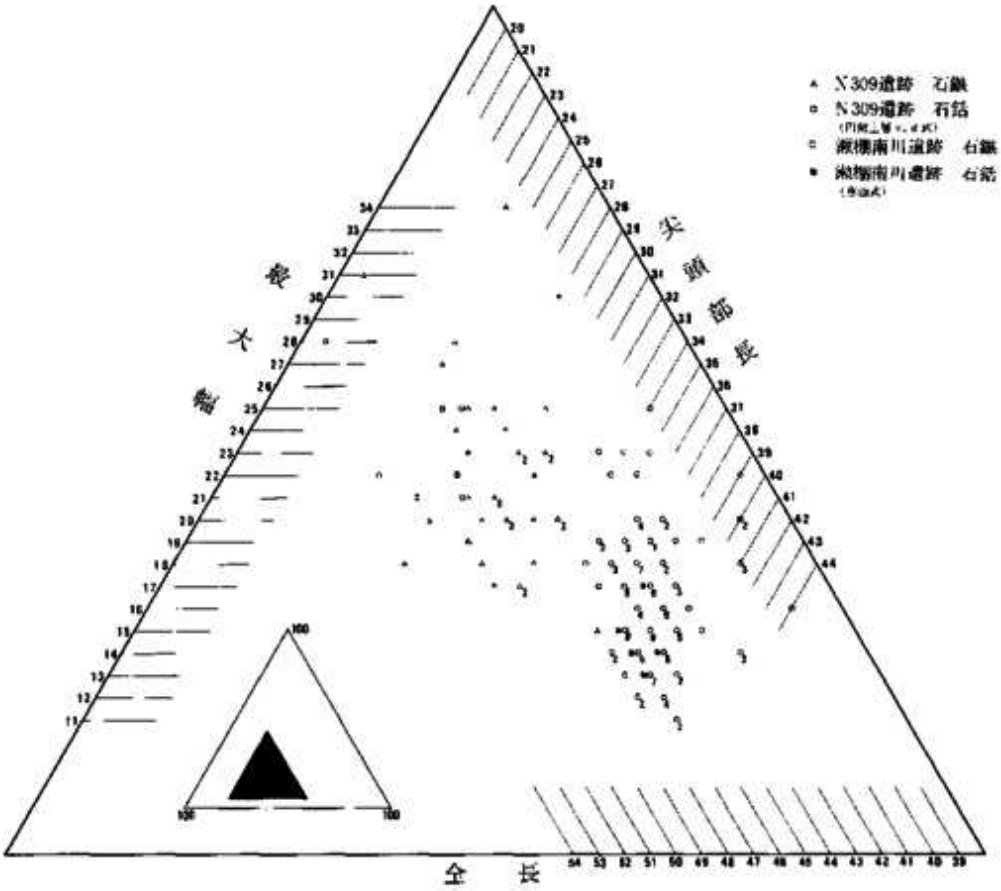
礫石器の場合は，砂岩が41%を占めるが，これは砥石が数量的に多いためと思われる。その他は安山岩系統が大半を占めている。

石器全般をみると，剥片石器に多用された黒曜石が65.7%で高い比率を示し，次に硬質頁岩が9.4%，片岩系統のものが7.8%あり，砂岩，安山岩，硅岩などが各5%前後でこれに続いている。

(1) 石　鏃

石鏃の出土数は，1次調査で破片を含めて65点，2次調査では未成品を入れて46点で，その総数は111点とかなりの数にのぼっている。石質は，黒曜石が圧倒的優位を占め，硬質頁岩と泥岩わずかに各1点という結果であった。形態的には，柳葉形のものが若干認められるほかは逆刺を有する有茎石鏃で，無茎のものは皆無である。

さて，第3表は，全長・尖頭部長・最大幅の3つの要素を各々百分率に置き換えてグラフに表わしたものである[注1]。尖頭部長と最大幅は尖頭部の形態を表わし，尖頭部指数（尖頭部長/最大幅）と同様の意味をもつもので，尖頭部長の百分率が高く，最大幅のものが低くなると狭長なもの，逆に尖頭部長が低く，最大幅が高くなると幅広なものであることが示される。一方，全長の百分率は，高くなるほど必然的に茎部の長さが長くなることを表わしているもので，3つの要素の比率を合成した点が近似値であるほど，形態的に相似形であることが示される。このグラフでの本遺跡資料の位置をみると尖頭部百分率は27～33%，最大幅は17～25%に集中しており，やや寸の短い幅広な形態を示す。また，全長の百分率は46～52%に集中し，茎部のやや長いものであることが判かる。これに，瀬棚郡瀬棚町南川遺跡（土田・上野 1975）の石鏃の資料を加えると，その特徴がより明確となる。南川遺跡では，尖頭部百分率は35～42%，最大幅は11～20%に集中していて狭長であり，全長は43～48%で，茎部も全般に短いもので，一段階斜め横に位置する。さらに，両遺跡の石鏃の形態集中範囲についてみると，本遺跡では，尖頭部長5%，最大幅8%，全長6%の幅に囲まれる所に全計測石鏃中の78%（28/36）が入り，一方南川遺跡では，尖頭部長6%，最大幅8%，全長5%の範



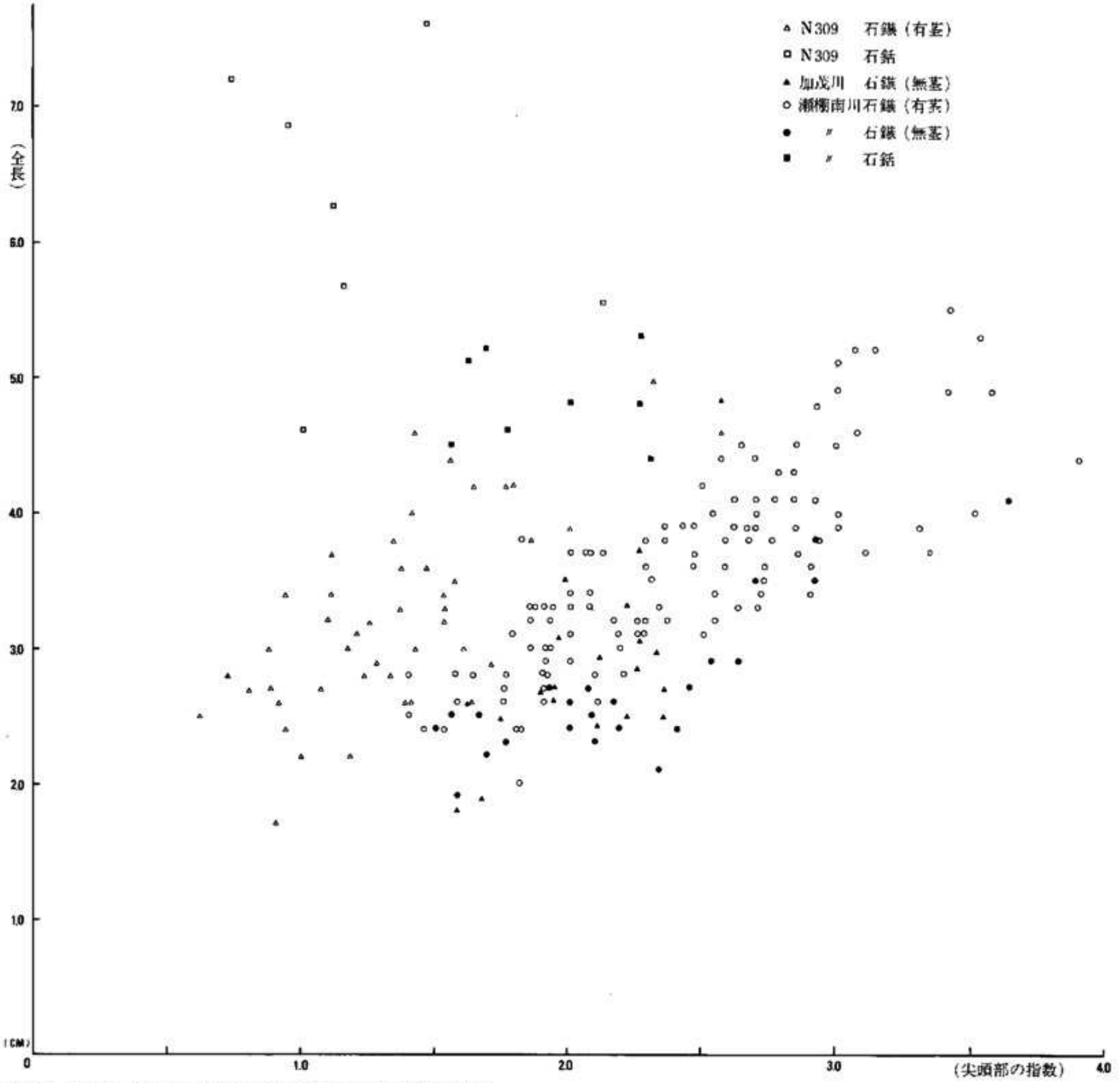
第3表　N 309, 瀬棚南川遺跡出土の石鏃・石鋸の形態の三角図表

（記号の下の数字は個数を示す）

囲に入るものは88%（115/131）で，第3表でみる限り両遺跡共石鏃製作においては規格性があったことが判る。しかし，この表では示しえない，剥片剥離技術とか側縁ラインの形状などを考慮すると，南川遺跡の方が，より規格性が高かったと判断される。

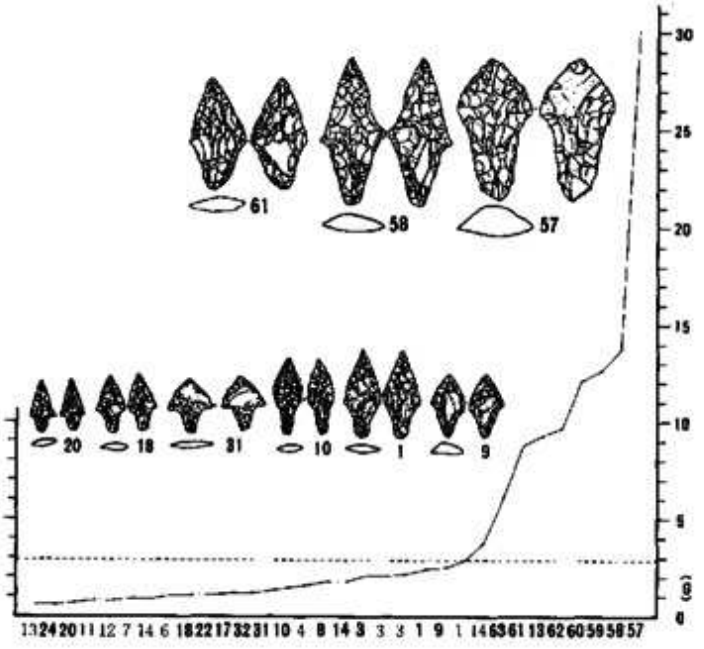
第3表では，形態そのものを知ることはできるが，大きさの違いがわからないため，尖頭部の指数を横軸にとり，縦軸に全長を入れて実際の大きさを加味して示したものが第4表である。この表は，瀬棚南川遺跡の報告で使用した「第6表」に，本遺跡の2次調査の発掘区と遺構出土の資料を追加・修正したものである。全長の幅をみると，本遺跡は5.0～1.4 cm，南川遺跡は5.5～2.4 cmで，やはり本遺跡の方が，やや変異が大きい。

本遺跡の1次と2次のものを合せた全体の傾向は，瀬棚南川遺跡の「石器分類基準表（第15表）」で示した分類[注2]に従えば，AⅥ，Ⅵ′タイプが73%で極端に多く，それにAⅤ，Ⅴ′，Ⅴ″タイプ，AⅦタイプ，AⅧタイプが各々6，10，11%の比率で認められる。すなわち，尖頭部指数が小さく，やや幅広で，全長は3～4 cm付近のものが主体を占めるということである。ただ，2次調査の第12号ピット出土資料は，AⅦタイプが主体である。しかし，後述する通り，1個の石器が廃棄される



第4表　N 309，加茂川，瀬棚南川遺跡の石鏃・石銛の形態分布図

までの過程を考えると、特に損耗の激しい尖頭部は、再調整され、長さが次第に短くなり、製作された段階と最終的に廃棄された段階とでは、形態が違っていることを考慮せねばならない。その意味で、AⅦタイプとしたものの内、茎部が太い例は、基本的にはAⅥ、Ⅵ′タイプと同様のものとして考えられる。



第5表　石鏃・石鋸の重量分布図

（横軸の数字は遺物番号で、ゴシック体の数字は1次調査の資料、□で囲った数字は、2次調査第12号ピットの資料である。なお（　）でくくったものは石鋸である。）

第5表は、重量分布図である。石鏃は0.8～1gの間に集中し、特に重いものでも3g以内に含まれる。各個体間の差異は0.1～0.2g程度のもので大きな変異はなく、ほぼ一定であるといえよう。

以上、1・2次調査の資料を形態を中心に分析したが、今回の2次調査では、第12号ピットより多数の石鏃およびその未成品が出土しており、石鏃の剥片剥離技法の点でも興味のもたれるものである。ここでは、その中から特徴的な例を9点抽出し、記述を進めたい（第6表）。

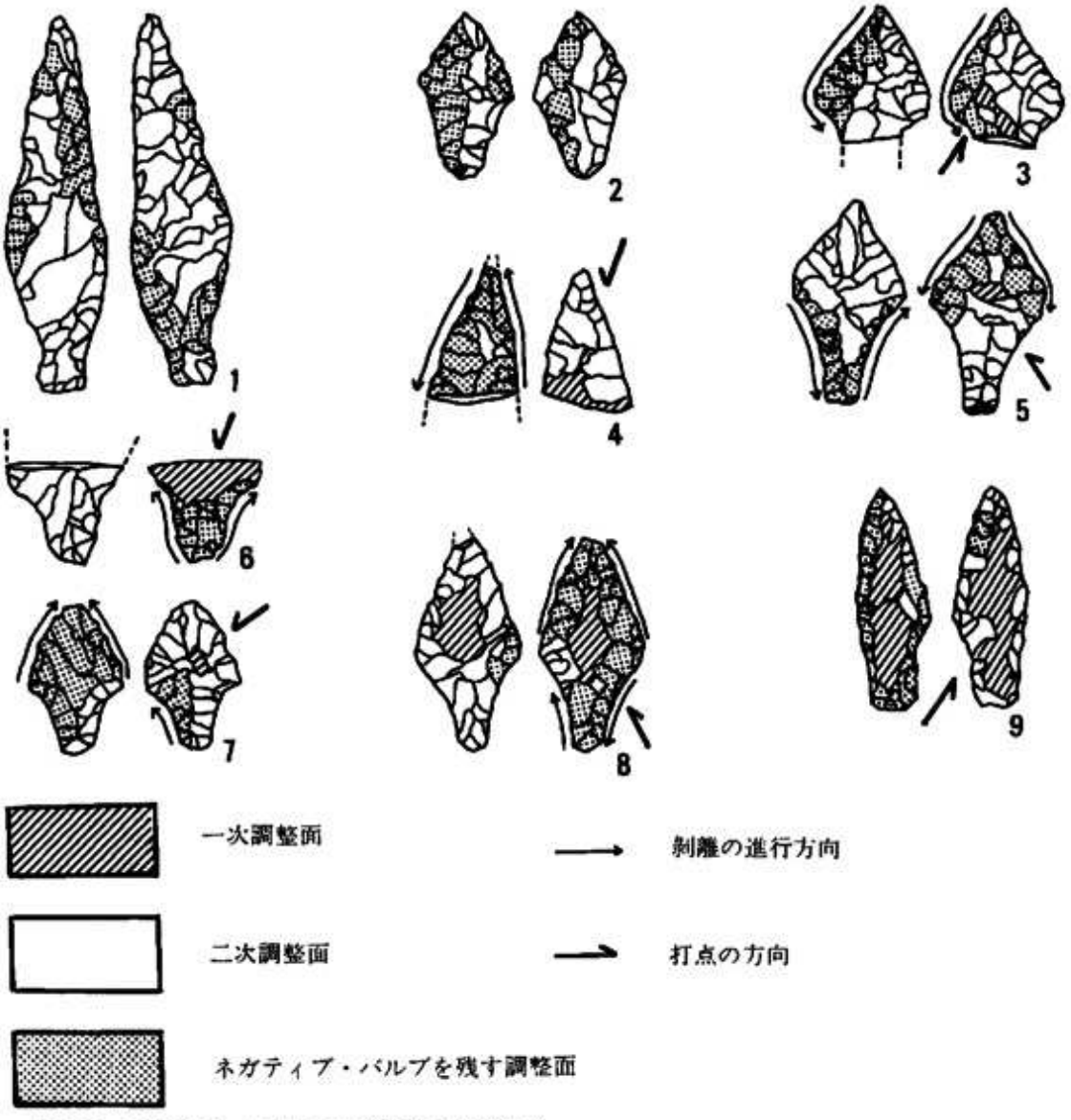
9点の内、素材面を残すものは3～9の7点である。打点の方向を示したがそれは上下いずれも斜め方向からのもので、打点方向と石鏃の長軸は一致していない。これは、実験的に石鏃を作った結果によれば、多くの場合打面付近はポジティブ・バルブがあるため厚く、この部分を尖頭部先端ないし茎部として細身に仕上げることが非常に困難なためと思われる。このことは、逆にいえば、石鏃の素材利用にも関連してくるもので、1例のような狭長な例を別にすれば、3～9例にみられる如く、いずれも尖頭部先端と茎部は、打面のバルブ部分をはずし、それ以外の比較的薄い部分を利用していることが判る。

調整については、素材面を1次調整、ネガティブ・バルブを残した剥離を最終的な調整、その他のものは皆2次調整として、都合3種類に分けて図示した。

1は、両面に入念な加工を施したもので、両側縁は刃つぶれが著しく、剥片剥離の過程は、明確には復元できない。

2、3は、ネガティブ・バルブを残す最終的な調整が両面の片側一側縁にあるもので、この資料では両面の左側縁になっている。このような例は、他に5例認められた。

4～6は、ネガティブ・バルブを残す剥離が片面に偏ってあるもので、5では、尖頭部はb面側、



第6表　第12号ピット出土の石鏃の剥片剥離技法

茎部はa面側で，尖頭部と茎部とで，最終調整部分を変えている。4は，尖頭部未成品ではあるがa面両側縁，6は茎部未成品であるが，b面両側縁に最終剥離が入っている。

7～9は，片面のほぼ全周に最終的な剥離が残されているが，若干裏面にも認められるものである。7はa面の尖頭部と茎部左側縁，b面茎部左側縁，8はb面尖頭部および茎部とa面左の逆刺の部分に若干，9はa面右側縁上部を除く全周とb面左側縁の一部に同様の最終剥離が認められる。剥離の進行方向は，判別可能な限り示したが，3は両面とも尖頭部先端から下へ，4は右側縁下部から尖頭部先端，左側縁下部へと進む。5は，尖頭部のものは先端から両側縁下部へ，茎部のものは左側縁から右側縁へと一周している。6は，茎部下端から上部へ，7，8は尖頭部のものが

両側縁とも先端へ，８の茎部はｂ面側縁から左側縁へと進んでいる。

以上の事実から，最終調整に限ってみても，その調整剥離は，交互剥離状に入れられるのではなく，逆刺部分を分岐点として尖頭部ないし茎部の一側縁を連続して調整していることが判る。

さて，縄文中期における石鏃の形態について，道内の資料を中心に概観すれば以下の如くである。

東北地方北部から道南，道央部などに分布する，縄文中期初頭～中葉の円筒上層式系統の土器群の遺跡は，東北地方では，青森県西津軽郡森田村石神遺跡（江坂編 1970），同県東津軽郡三厩村中の平遺跡（鈴木・市川ほか 1975）などがあり，道内では，亀田市サイベ沢遺跡第一地点 14～２層，第二地点４～１層（児玉・大場・武内 1958），上磯郡知内町森越遺跡（峰山・大島ほか 1975），函館市見晴町遺跡（高橋 1966），亀田市サイベ沢Ｂ遺跡（森田・高橋 1967），浦河郡浦河町浜荻伏遺跡（黒崎・橋本 1965）などがある。しかし，いずれの遺跡も，石器全点が報告されておらず，また層位関係とか共伴関係などが不明瞭なものが多いが，報告に従ってその傾向をみてみたい。

石神遺跡では，第 10 図１～４がこの時期の資料で，円筒上層ｂ，ｃ式に伴ったとされているものは，尖頭部の指数が 1.9～3.8 で非常に長く，茎部は短いものであり，一方最花式のものは 1.4 で，やや幅広である。これら４点の資料の全長は 4.2～5.2 cm で，全体に大きい。タイプ分類すると前者は，ＡＶ′，Ｖ″タイプ，後者はＡⅥタイプである。

中の平遺跡第Ⅲ文化層（円筒上層ａ～ｅ式）の資料とされているものをみると，全長４～５cm と３～４cm の２種の大きさのＡＶ，Ｖ′，Ｖ″タイプの石鏃が主体で，それにＡⅦタイプが続き，ＡⅥ，ＡⅧタイプは顕著ではないようである。なお，スペード形の無茎鏃も２点出土しているらしい。第Ⅱ文化層（大木系，榎林式）では，ＡＶ，Ｖ′，Ｖ″タイプが多いという点は変らないが，それにＡⅥタイプの小形鏃とＡⅧタイプの柳葉形鏃が比較的多くあるようである。この文化層からも，狭長な無茎鏃が出土している。

道内のサイベ沢遺跡第一地点５層（Ⅵ文化層）では，３点の石鏃が図示されているが，全長は 3.9～5.3 cm，尖頭部の指数 2.1～2.6 で，茎部は狭長で，ＡＶ～Ｖ″タイプに入る。また，第二地点４層（Ⅴ文化層）出土の２点は，全長 3.2～2.2 cm，尖頭部指数 1.4 で，ＡⅥ，Ⅵ′タイプに属する。

森越遺跡では，円筒上層ｂ～ｄ式と「森越式」と仮称されているサイベ沢Ⅶ・見晴町式に対比される土器が出土しているが，この時期の竪穴住居址出土の資料 19 点をみると，大きさは，平均値 4.2 cm のものと 3.1 cm のものの２種類があり，タイプは，ＡＶ′５例，ＡⅥ，Ⅵ′６例，ＡⅦ３例，ＡⅧ５例の比率である。この内，ＡⅧタイプのものの中には未成品と考えられる資料を含むので，その比率は，もう少し低くなるかと思われる。また，細かくみるとＡＶ′，ＡⅦタイプとしたものの尖頭部は，五角形状に尖頭部下半の両側縁が平行で，茎部も細身に仕上げている例が多い。ＡⅥ，Ⅵ′タイプは，茎部がやや太く逆刺は不明瞭で，尖頭部側縁はやや脹んでいる。

見晴町，サイベ沢Ｂ遺跡では，前者は，ＡＶ″，ＡⅥ′タイプ各１例，ＡⅧタイプ３例に無茎のＡ１′タイプが１例伴う。なお，ＡⅧとしたものの内，報告の４と７は逆刺的なものを認めることもできる。後者は，ＡＶ′，Ｖ″タイプ２例，ＡⅥ，Ⅵ′タイプ３例である。

浜荻伏遺跡出土の土器は，既型式の範疇にあてはまらない特異なものであるが，おおむねサイベ

沢Ⅶ・見晴町式と併行関係にあるものと考えられる。報告された15例は，AⅦタイプが7例で一番多く，AⅥ，Ⅵ′タイプ5例，AⅥ′タイプの変形で茎部が細く長いもの2例の比率である。

以上の諸遺跡は，森越と浜荻伏遺跡を除いては，全般に資料数が不足で，その特徴をつかまえることは難しいが，AⅤ～Ⅴ″，AⅥ，Ⅵ′の2種のタイプが共通して認められ，それがサイベ沢Ⅶ・見晴町式段階に近づくとAⅦ，AⅧタイプのものが幾点か入ってくるという状況である。

ところで，道央部では，サイベ沢Ⅶ・見晴町式の段階になると「天神山式」とか「智東B式」といわれる「円筒土器の地方型式」が出現する。名寄市智東B遺跡（山崎・長谷川 1967，1968）では，智東B式とトコロ第6類が混存してみつかっているが，ここで出土した石鏃は，AⅤ′タイプがやや多く，それにAⅥ，Ⅶタイプが若干ある。

また，道東北部から道央部にかけての縄文中期中葉以降の時期には，北筒式土器群が分布する。この内，共伴石器の明確なのは，その中で一番古いトコロ第6類だけである。これを比較的資料の揃っている常呂郡常呂町朝日トコロ貝塚（駒井編 1963）のA～Fトレンチの貝層出土の計測可能な9点の石鏃でみると，7例（第33図1，第48図1，第53図1，2，第59図1，第95図1，2）が尖頭部の指数は1.6～1.8（平均値1.7）とまとまりがあるが，全長は3.0cm±のものと4.1cm±のものの2者があり，前者は茎部は短く細身のもので，AⅤタイプに入るが，後者は全般に茎部は太くて，長いものである。また，残る2例（第53図3，11）は，尖頭部指数が各々1.2，0.9であるが，茎部が太くしかも長く，後述する石銛の形態に似ている。全長は，各々4.0，3.8cmである。

一方，トコロ第6類期のあとには，道央部～道南部では余市式土器群が出現する。

石狩郡当別町伊達山遺跡（岩崎・三宝・室田 1970）では，伊達山式土器に伴った石鏃は，全長2.5～3.7cmの比較的小形品が多く，そのタイプは，AⅤ，AⅥ′，AⅧの3種で，ほぼ同比率で存在する。また，同時期といわれる厚田郡厚田村聚富遺跡（岩崎・藤村 1964）では，AⅤタイプの3cm前後の石鏃が2点出土している。

余市式土器群も，中期終末近くになると「天祐寺式」とか「ノダップⅡ式」とかいわれる土器になる。函館市煉瓦台遺跡（大場・蛯子 1965），函館市紅葉山西股遺跡（松下編 1974）は，この時期のもので，煉瓦台では，やや茎部の太いAⅦタイプのものとAⅤ′タイプのものが各1点報告されている。西股では，ノダップⅡ式に伴ったとされる9点の資料でみるとAⅤ，Ⅴ′タイプ5例，AⅦに近いAⅥ′タイプ3例，AⅦタイプ1例の比率である。

以上のトコロ第6類，伊達山，ノダップⅡ式などのグループも，基本的には，前述した円筒上層式土器群の中の中期中葉頃の土器グループに伴うものと，形態の種類と大きさはほぼ同じである。ただ，トコロ第6類，伊達山式の時期は，AⅤ，Ⅴ′タイプが多く，ノダップⅡ式段階では，これにAⅦタイプが若干混じっている。

以上通観して判断されることは，道内の縄文中期の石鏃は全般に逆刺の作出が不明瞭なものが多いが，サイベ沢B遺跡で，1点の無茎鏃が出土しているという唯一の例外を除けば，すべて有茎石鏃である。しかも，そのタイプは，大きく4種類の組み合せからなっている。ただ，資料不足で断言はできないが，円筒上層a～d式――縄文中期前半の段階には，AⅦ，AⅧタイプは殆どなく，

逆に後半になると、上記2者の出土率がやや増してくる[注3)]。

本遺跡は，出土土器の幅は森越遺跡に近いもので，タイプ分類するとAⅤ5例，AⅥ，Ⅵ′60例，AⅦ8例，AⅧ9例で，圧倒的にAⅥ，Ⅵ′タイプが多く比率の点で大きく異なるが，組み合わせとしては，縄文中期中葉以降のセットである。

注1）本表は、尖頭部長(a)、最大幅(b)、全長(c)の3つの要素の大きさを合計し、各要素毎に、その比率（パーセンテージ）（例：尖頭部長の比率 $\frac{a}{a+b+c}\times100$）を出し、それを3軸に投影したものである。3つの要素の比率を合計すると100%になる。左下の三角形は、1軸を0～100%にとったグラフの中で本表が占める位置を表わしたもので、本表はこれを部分拡大したものである。

注2）石鏃のタイプ分類は、瀬棚南川遺跡の第15表石器分類基準表に準拠するものでこの報告では、特に有茎石鏃関係では誤植と脱落部分が多いので、ここで訂正しておく。

6　AⅤ　石鏃。有茎（尖頭部指数1.5～2＜，3cm±および以下）。

7　AⅤ′石鏃。有茎（尖頭部指数1.5～2＜，4cm±）。

8　AⅤ″石鏃。有茎（尖頭部指数1.5～2＜，5cm±および以上）。

9　AⅥ　石鏃。有茎（尖頭部指数1.2～1.5±，全体に狭長で，AⅤに近いもの）。

10　AⅥ′石鏃。有茎（尖頭部指数1.2～1.5±，全体に幅広で，AⅦに近いもの）。

11　AⅦ　石鏃。有茎（尖頭部指数1±）。

12　AⅧ　石鏃。柳葉形。

なお，この分類は，南川遺跡の石器群を分けることを主目的としたために，それ以外の時期の器種型式で，この分類に適合しないものとか，中間的なタイプが数多くある。今後，訂正・追加し，整理し直さねばならない。

注3）なお，細かくみるとAⅦタイプとしたものは，道内の縄文後期に特徴的に認められる尖頭部が正三角形に近く，茎部は細身で短く，従って逆刺も明瞭に作出している例をタイプ設定のモデルにしている点からというと，中期の例には，このタイプに完全にあてはまるものは少なく，多くは茎部が太く，長いもので，従って逆刺も明瞭ではない。さらに，AⅧタイプとしたものは，柳葉形のものを本来分類するために設定したものであるが，同様に中期の資料の中には，典型的な柳葉形の石鏃は殆ど認められず，狭長な菱形とか，茎部部分をやや細身に調整することによって，不明瞭ながら逆刺的なものを中央部に作出している例が主体を占める。また，今回の形態分類では，瀬棚南川遺跡の「石器分類基準表（第15表）」に準拠しようとしたために，茎部の形態とか長さを，尖頭部に比べてあまり考慮しないで述べてきたが，尖頭部の形態の違いに関りなく茎部が一般に長く，かつ幅広であるというのもこの時期の1つの特徴と考えられるので，機会を改めてより正確な形態分類を示したいと考えている。

(2) 石　銛（先）

石銛（先）は，1次調査では23点，2次調査では6点の計29点が検出されている。石質は，やはり黒曜石が圧倒的に多く，硅岩と硬質頁岩が各1点あるが，この2例に関しては，後述するように破片であるため石銛と断定し得る資料ではない。

全般の形態としては，尖頭部が幅広く正三角形に近くなる形で，逆刺は弱く，胴部中央が脹らんでそのまま太い柄部へと続き，尖頭部指数と柄部指数がほぼ等しくなるものである。第3表に示した如く，形態的には石鏃とほぼ同傾向で相似形であるが，全長が長いため，第4表では石鏃よりも上に位置している。全長は，7.2～4.0cmまであるが，平均値は5.8cmである。

2次調査で得られた資料は少ないものであるが，形態的には，柄部が1次に比較してやや細く逆

剌の強いもので，全体に薄手，小形品である。

第5表は，重量のグラフで（　）に囲んだ数字の資料が石銛である。5～15 gの間に集中するが，個体間の差異は1～2 gで，石鏃の0.1～0.2 gに比べると大きい。

57は，カマボコ型の断面を呈する厚手のもので重量も30 gととび抜けて重い。尖頭部は寸の短い幅広なもので，柄部は太くて長く全体に鋭利さの感じられない資料である。**58～60**は，入念な両面加工で，整った形態を示している。第**15**図**1**は，全長がやや小形ではあるが形態的には相似形である。**61～63**は，形が前述のものよりやや小さくなり側縁の加工は背の高いもので，**61**，**62**においては再調整剥離が認められ，また**63**のa面右側縁は，刃つぶれが著しい。第**39**図**16**は，小形で柄部も細く本遺跡の石鏃に近い形態であるが，4 gとやや重い。**64～70**は破片で，中にはナイフ状石器の柄部が混じっている可能性もある。

154，第**14**図**6**，第**38**図**5**，**14**は，1次報告では「両面体石器」として分類していたものであるが，本稿では未成品として石銛の器種に含めた資料である。**154**は，加工がステップ・フレーキングで，側縁に多少の刃つぶれが認められる以外，その他はほとんど原石面を残しているもの。第**14**図**6**は，硅岩製のもので，尖頭部様のものを作出しているが，厚みがあり，また第**38**図**5**も，硬質頁岩製の両面加工の小片である。

これらの資料は，石鏃と同様に，瀬棚南川遺跡の「石器分類基準表」にあてはめると，本遺跡例はBⅢ，BⅣタイプに属するものである。

縄文中期において，「石銛」といわれる器種が出土している遺跡は，東北地方には現在の所見い出すことはできないが，道内では森越，智東B，浜荻伏，恵庭市柏木川遺跡5号住居址（高橋編 1971），朝日トコロ貝塚（トコロ第6類期），札幌市T 77遺跡（羽賀 1974），伊達山，聚富遺跡などが列挙できる。

森越では，4号住居址内（報告第69図7）と発掘区（同第74図5）から各1点出土しているが，共に6.3，7.8cmをはかる大形品である。尖頭部指数と柄部の指数が近似値を示すもので，タイプはBⅢ，BⅣに相当するが，発掘区出土例は，かなり狭長に仕上げている。

智東B遺跡では9点図示されているが，Cトレンチ第21図14例を除いて，全長は6.6～9.3 cmで，全般に大形品が主体を占め，尖頭部の指数は1.3～2.2で，狭長なものが多いようである。柄部の指数は，0.9～1.3のものが多く，やや短い傾向にある。ただ，Bトレンチ上層出土の第14図14は，柄部が長く，BⅣタイプの中でも狭長の仲間である。第21図14の資料は，全長4.2cm，尖頭部指数1.3，柄部指数0.6で，全体に寸の短い例である。

浜荻伏遺跡発掘区では，1点しか報告されていないが，全長約5.0cm，尖頭部指数0.96のBⅢタイプのものである。

柏木川遺跡5号住居址からは，「天神山式」の破片と共に全長5.8cmのBⅢタイプの資料が1点出土している。やや柄部は短い。

朝日トコロ貝塚の第6類の文化層からは，合わせて24点の石銛と考えられる資料が出土しているが，計測可能な15点でみると大きさは5.0～6.0cmのものと，7.0～8.0cmの2者がある。大形例は，

尖頭部の指数は1.3～1.9で狭長なものが多いが，柄部の指数は，0.7～1.0のものと1.4～1.5の柄の長いものと短いものの2種類があるようである。柄部の短いものは，BIIに近いタイプ，長いものはBIIIタイプとして分類できる。小形の例は，尖頭部指数0.7～1.4で，全体に寸の短く幅広のものが多く，柄部指数も0.7～1.0で，これも比較的短いものである。すなわち，BIII，BIVタイプに属する例である。なお，Eトレンチ第4層第74図9は，尖頭部の下半の両側縁が平行なもので，狭長な五角形に近い。

札幌市T 77遺跡でも，発掘区出土土器の主体はトコロ第6類であるが，これに若干の縄文早期の土器片を伴っている。この遺跡から出土した石銛の内，計測可能な例は，第11図4～14の11例で，その全長は3.8～6.0cmまでの幅があるが，5.0cm前後が多い。尖頭部の指数は0.7～1.5で，比較的寸の短いものが多く，柄部指数も0.8～1.3で，尖頭部とほぼ同値を示し，BIII，BIVタイプに属する。

伊達山遺跡では，石銛と考えられるものは11点（報告第6図1～10，12）図示されているが，その全長は，4.1～5.6cmで，比較的小さいものばかりである。細かくみると5.0cm前後のグループと4.5cm前後の2つのサイズがある。尖頭部の指数は，両サイズ共1.1～1.7で特にまとまりはなく，また柄部の指数も0.9～1.6で特に傾向性はないが，全体として小形のサイズは狭長なものが多いようである。問題は，報告第6図6の例で，尖頭部の指数は1.7と長いものであるが，柄部は逆刺の下にノッチ状の剥離を入れ，柄部基底は平らで最大幅と同じ長さのものである。全長が5.0cmで小形であるが，ナイフ状石器の可能性もある。

以上みてきて判断されることは，石銛といわれる器種の全石器群における占める割合は，トコロ第6類，伊達山式期の遺跡では，12～18%で高い比率になり，他方円筒上層式およびその系列を引く天神山式などの地方型式の遺跡は，一遺跡数点しか出土しておらず極めて低いものである。なお，N 309遺跡とか智東B遺跡は，円筒上層式およびその系統を引く土器群を主体とした遺跡であるが，石銛の全石器群に占める出土率が5%程でやや高いが，これは両遺跡とも道北部と道央部北部の遺跡で，かつまたトコロ第6類とか伊達山式などの土器片も共に出土していることが影響しているかと思われる。以上の事実を考慮すると，この石銛の出土率の傾向は，地域的な違いとしてもとらえることもでき，道南～道央南部の遺跡には少なく，道東北から道央北部（石狩平野側）では多いともいえるようである。

また，縄文中期における石銛先の形態は，前述した分類のBIII，BIVタイプが主体を占めており，時代とか地域による差異はあまりない。ただ，その大きさは，道東北部のものは7.0～8.0cmの大形の例が多いのに対して，道央～道南の資料は比較的小形品が多いようである。

(3) 石　錐

本遺跡での石錐の出土は，1次調査の6点のみで，2次調査では検出されていない。

石質は，黒曜石，硬質頁岩が各3点という内訳である。形態的には，大きな柄はなく，尖頭部と柄部の境が不明瞭なもので，中央がやや幅広で柳葉形を呈し，a面側に盛り上がった断面を呈する。

51～56は，下部に尖頭部を作出し末端は使用により摩滅しているが，**54**は細身である。**51**，**54**は

両面加工、**52**、**53**は半両面加工であるが他は、いずれも素材面を残しているが、尖頭部の部分だけは両面に加工が入っている。**55**は、扁平な剥片の両側縁と尖頭部両面に加工を入れたもので、エッジはやはり摩滅している。**56**は、部厚い断面三角形の棒状の素材を利用し、三面の側縁に刃つぶれ的剥離が入っている。尖頭部下端はエッジが摩滅して丸みを呈するかなり大形のものである。

縄文中期における石錐の報告例は比較的少ない。東北地方北部の円筒上層式系統の遺跡では、中の平遺跡第II文化層（大木系、榎林式）出土品の中に1点報告されているだけである。長さ5.5cmの大きな柄がないもので、尖頭部の断面は三角形で、尖頭部以外の柄部（この場合は、ソケットに入る部分をいう）にも、半両面に亘って加工が入っている。石質は、珪質頁岩である。

森越遺跡では、6号住居址から1例（報告図版84－8）、7号住居址2例（第70図20、図版85－12）の3点が報告されている。写真図版の例は、各々3.5、4.3cm程の大きさで、やや太めであるが、大きな柄がない例、第70図20は全長6.0cmで、狭長な両面加工品で、尖頭部は非常に細く鋭く仕上げているが、柄部端は平坦である。

朝日トコロ貝塚のトコロ第6類期の文化層からは、錐は4点（報告第74図1、第33図133、第74図10、11）出土している。石質は第33図13が玉随質石英脈製であるが、あとは黒曜石である。いずれも、大きな柄はなく断面楕円形で、厚さ0.5～0.8cmをはかり部厚く、欠損している第74図1例を除いては、尖頭部は細身に仕上げ、尖頭部と柄部の境に最大幅がくる。加工は、みな粗雑な両面～半両面加工で、全長は4.5～5.0cmである。

西股遺跡では、6点（報告第38図15、16、22～25）の錐が出土している。出土場所は、15、24、22が各々1号、2号、4号竪穴住居址床面、16は8号竪穴住居址埋土、23、25は遺構外である。22、23、25は、剥片の一部の両側縁ないし片側縁に剥離を入れ、小さな尖頭部を作出した大きな柄を有する例である。尖頭部以外は殆ど素材面のままである。24は、部厚い縦長剥片のバルブと反対の端に、両面から剥離を入れ鋭利な尖頭部を作出したものである。15、16例は、両面ないし半両面加工のもので、尖頭部は細身に仕上げられていて、柄部側はやや幅広く、全長は5.2～5.3cmである。

以上のことをまとめると、西股遺跡の22、23、25の明瞭な尖頭部を作出していない例を除くと、両面ないし半両面加工および側縁加工の差があるが、幅広の柄はなく、全体形は柳葉形ないし棒状で、その一端に尖頭部を作出しているもので、尖頭部と柄部は明瞭には峻別できないものである。尖頭部は細身に仕上げられ、多くの場合その先端とか側縁エッジは摩耗している。この種の錐は、恐らく柄部にソケットを差し込み使用されたものかと考えられる。

(4) 掻　器

1次調査20点、2次調査5点の都合25点が検出されている。石質は、流紋岩が1点ある他は全点黒曜石製である。これらの掻器は、大きく次の2つのタイプに分類することができる。

I：縦形で、下端に背の高い加工を施したもの。

a）入念な片面加工で、a面側に盛り上がった部厚い断面形を呈するもの。……**94**、**98**

b）a面下端に背の高い加工を施した他は、広く原石面を残すもの。……**95**、**96**、**100**、41

c）Iタイプの中ではやや扁平で、高い刃角がa面全側縁に入っているもの。……**97**、**99**、第39

図18，42～44

II：薄手の素材を用い，円形または四角形の一端あるいは全周に寸の短い加工を施したもの。

a）側縁の全周ないし半周に背の高い加工を施したもので，円形掻器と思われるもの。……**101，102，104～106**

b）全体に厚みのある素材を用い，下端に刃角はあまりないが寸の長い加工を施しているもの。……**111，第14図5**

c）下端と両側縁に加工があるが，右に突き出たコーナーを有するもの。……**103，107**

Ⅰaタイプは2例であるが，部厚く刃縁は丸みをもってカーブしている。**94**は，a面全周に入念な加工を施しており，部厚い。**97**は，a面左右両側縁にノッチが認められる。**98**は，上部が細長くなっていて，この部分はb面にも加工が施されている。**94，97**に比べてやや扁平である。

Ⅰbタイプは4例あり，縦長剥片の一端のみに加工を施したもので，刃縁はⅠaタイプ同様丸くカーブしている。**96**は，縦長剥片の上端に刃部を作出しており，b面のリング稜線は著しく摩滅している。**41**は，細長い縦長剥片の下端に加工を施しているが，両側縁にも使用痕的剥離が認められる。**95，41**は，側面観がa面側に彎曲している。**100**は，縦長剥片の上部端に背の高い加工が整然と入っている。

Ⅰcタイプは，この中では最も多く6例を数える。Ⅰa，bに比較すると扁平で小形である。第**39**図**18，42**は一端に丸いカーブを描く刃縁を有し，**42**は横長剥片の横の一端に刃角のある背の高い加工が整然と入っている。**99，43，44**は，共に下端両端にコーナーを持つもので，**43，44**は特に小形である。**99**は，縦長剥片の上端を除く三周に寸の短い刃角のある加工が巡らされており，a面左のコーナーは特に突き出た格好である。

IIaは，5例で所謂「円形掻器」と称されるものである。全周あるいは半周の側縁のみに，寸の短い背の高い加工を施したものである。全点薄形で，**102，106**は，刃縁はコーナーを持つが，他は丸味がある。また，**101，102**は特に扁平で刃角も他に比べて浅いものである。いずれも寸の短い縦長剥片を使用している。

IIbは，厚手であるが，加工は寸の長い大きなもので，原石面を残している。**111**は，縦長剥片の横と下端に加工を施したものであるが，刃角のあり方などからみて，掻器の機能を果たしたものか疑問である。

IIcは，2例で，IIaと加工の点では同類であるが，形態的に一方に突き出したコーナーを有するため，独立したタイプとした。**103**は扁平で寸の短い加工である。

以上の他に，上述したタイプに含まれないものが3例ある。**109**は，一次剥離面側の下部に細かい剥離が巡っており，上部のバルブ部分には高まりを取ろうとした剥離が入っている。**110**は，縦長剥片の上端に背の高い加工が施されている他は，素材面と原石面を大きく残している。**246**は，縦長剥片の下端に細かい剥離が認められる。使用痕的なものとも考えられるが，刃縁がかなり摩滅し光沢を失っているため掻器的働きをしたものと考えられる。

全般に，寸が長く刃角のある加工が施されたものは，縦形，円形ともに形態が一応整っているの

に対し，刃角はあるがその剥離の幅が短い加工のものは，形態的にはやや不規則な感じである。また，２次調査で得られた資料は，わずか４例であるが，いずれも縦形掻器で円形のものは検出されなかった。

掻器と考えられる器種は，東北地方北部の円筒上層式土器群の遺跡では明確な形で見いだすことはできないが，それに代わって所謂「石篦」といわれる器種が存在する。中の平遺跡の報告では第ⅢおよびⅡ文化層出土の資料が幾点が図示されているが，いずれもｂ面全面ないし両側縁にも加工が入っている。なお，図版25の中央下部に図示された柄部を作出した資料などは掻器としても分類可能である。

森越遺跡では，8.6～6.8cmに及ぶ大形の縦形掻器と思われる石器が報告されているが，ｂ面側の加工状態が不明のため，その中に石篦的なものもある可能性がある。図でみる限り，ａ面側のみ片面調整したものとａ面側縁全周に加工のあるものとがある。

サイベ沢Ｂ遺跡では，円形掻器と思われるものが１点報告されているが，刃角の状態は明確ではない。

見晴町遺跡では，両側縁にも加工のある縦形掻器が１点報告されている。なお，後述する如く横形石匙の刃角は高いもので，掻器的用途として使われたものかもしれない。

智東Ｂ遺跡では，掻器と考えられる器種型式は抽出することができない。

浜荻伏遺跡では，報告第４図22の資料は，一端に丸みを帯びた剥離を入れており，縦形掻器かと思われる。

朝日トコロ貝塚のＥトレンチ第４層のトコロ第６類の文化層からは２点の掻器（第75図３，４）が出土している。３は，上部を欠損しているが，ａ面両側縁とｂ面左側縁にも加工を入れたものであり，４は寸の短いやや幅広の掻器で，本遺跡のⅡタイプに属するものである。

Ｔ77遺跡では，報告の第13図44～48が掻器で，44，46，47が縦形，45，48は円形掻器である。全例，ａ面側に入念な側縁加工が入っている。なお，47例は，上端にも刃角の高い加工を入れたものであり，さらに２点の円形掻器のｂ面バルブ付近には，バルブの高まりを除去する剥離が入っている。

伊達山遺跡でも，掻器と考えられる器種の抽出は難しいが，報告第６図50，51は下端付近にやや背が高く，長い剥離が入っていて掻器的用途をもった石器であったのかもしれない。

西股遺跡では，ノダップⅡ式に伴った掻器と考えられる石器は11点報告されている（報告第38図27，29，30，第29図６，23，第41図５，７，９，12，第42図９，第46図10）。ただ，この中で第39図23，第41図９，第42図９などは，「石篦」といわれる器種型式に近いもので，第42図９は，下端に特に二次加工はない。これ以外の掻器と考えられるものの大きさには，２種類あり，第38図27，29，30，第39図６は全長2.7～3.7cmの小形のもので，前３例は円形掻器である。ただし，27，30の加工はｂ面側，29はａ面側であるがｂ面右側縁にも加工が入っている。６は，上部を欠失したもので，ａ面側の全側縁に，背が高く比較的長い二次加工がある。第41図７，12，第46図10は全長7.0～9.0cmで大形の縦形掻器で，５，12例ではａ面側全側縁とｂ面の一部側縁に不規則な剥離が

ある。10は，a面下端にのみ刃部作出の二次加工を入れ，あとはb面両側縁に短い剥離が整然と入っている。第41図7は，やや幅広の剥片の長軸側一側縁に丸みをもった刃部を作出したもので，刃縁が長い所から削器の可能性もある。

縄文中期における掻器のあり方は，大きく分けて縦形と円形の両者のタイプが共に出土するが，東北地方の影響の強い道南地域は，時代に関係なく，所謂「石篦」に近い器種型式が存在するようである。しかも，「石篦」は，b面側全面ないし両側縁にも加工を施す例が多いが，掻器もこの影響をうけて，b面側にも側縁加工があったり，b面側に刃部加工を入れているものがある。道東北部では，与えられた報告を信じる限り，その出土率はあまり高くない。

本遺跡においては，各種形態・加工の掻器があって，6つに分けたが，現段階では他の遺跡の掻器の報告例は少なく，細かく対比することは不可能である。

また，ナイフ状石器の所でも触れるが，所謂「石匙」といわれる器種型式の中にもそれが縦形・横形を問わず，刃角がナイフ状石器としての用途に適さない程高いものがある。これらは，掻器の1つの型式——すなわち，つまみ状の柄のついた各々縦形，横形掻器として，改めて分類を検討してみなければならない問題である。

(5) ナイフ状石器[注41]

ナイフ状石器は，発掘区と遺構を含めて，1次調査44点，2次調査20点と計64点の資料を得ることができた。

石質を分類すると，黒曜石28例，硬質頁岩23例とこの2者が大半を占め，他は硅岩6例，瑪瑙，凝灰岩が各1例という内訳であった。素材は，一次剥離面を残すもの34例中，横長剥片のものは1次の1例のみで，残りは皆縦長剥片から製作されたものである。

1・2次で得られた資料を，1次報告（上野・高橋編 1975）の形態分類に従って分けたところ下記の如くであった。

Ⅰ：上部につまみ状の柄を作出し，多くはつまみと反対の端に尖頭部的なものを作出し，片寄った刃部を有するもの。

a）両面加工のもの。……**71，72，85**

b）側縁・片面加工のもの。……**73～84，112，113，第14図7**，8，**17，18，第15図12，第38図10，第39図1**，22～26

Ⅱ：上部につまみ状の柄はなく，関の有無はあるが太い柄部を作出しているもので，一般に刃角の高い加工は入っておらず，刃縁はカーブし鋭利である。

a）両面加工のもの。……**86～88**，18～20

b）片面・半片面加工のもの。……**89，90**，27，第22図48，第24図4

Ⅲ：両面加工，側縁加工の違いがあるが，一端に尖頭部的なものを作出し，明瞭な柄部が認められないもの。

a）粗雑な両面ないし半両面加工で，部厚いもの。……**151～153，247**

b）素材の剥片の形状をあまり変えずに，その片面ないし両面の側縁にのみ二次加工を施し尖頭

部を作出したもの。……**91**～**93**，48

Ⅳ：欠損のため分類できないもの。……**155**～**158**，**160**，**162**，第15図8，第38図18，第39図3，21，45～47，49，50，52，

Ⅰａは，一部に多少素材面を残すものもあるが，両面に入念な加工を施したもので，Ⅰｂのタイプに比べて幅広の刃部とつまみを有する。全体にやや厚みがあり，刃部先端に尖頭部を作出しており対称形に近いものが多い。**85**は，小形で刃部が短いので錐先とも考えられるが，尖頭部は尖鋭には仕上げておらず，柄部にはくびれ的なものがある点から，ここでは一応ナイフの仲間にしておく。

Ⅰｂは，片面および側縁加工で，「縦形石匙」と称されるものである。刃部の刃縁は，一辺が直線的で他方が外側にカーブする形で，カーブを持つ刃縁の刃角が他方に比べて高く直角に近いものも見受けられる。第**15**図**12**は，やや幅広であるが上部につまみを作出し，ａ面両側縁に加工を施したものである。**80**は，非常に部厚い断面形を呈し，刃角はほぼ直角に近く，刃部だけをみると掻器とも考えられるものである。同じく，**77**も刃部下端が掻器的な高い刃角のあるものである。**112**は，上部を欠損しているが，下部が尖っていて，ａ面右側縁の加工は特に刃角のあるものであることから，上部につまみがあった可能性が高い。**113**は，上下部を欠損しているが，加工の入り方，刃角などの点から同類と思われる資料である。

Ⅱａは，柄部の作出が認められるもので，柄の形状によりさらに２分することも可能である。**86**，18，20は，両面加工で，幅広で厚みのある断面を呈する。太い柄を有し，刃部の先端は丸みを持ち尖鋭ではない。19は，柄部の先端が尖って一方に片寄った形であり，刃部も同様に片寄っている。他方，**87**，**88**は，関の作出のないものであるが，一端に尖頭部を作出している。**87**は，上部を欠損しているが，両面加工でａ面左に突き出した尖頭部を有するものである。加工は，ｂ面側が特に入念なものである。**88**は，細身で両面に入念な加工が施された左右対称形のものである。

Ⅱｂとしたものの内，**89**，**90**は，不明瞭ながら関の作出が認められるもので，柄部・刃部共に非対称形で，特にａ面刃部左側縁はゆるいカーブを描いている。また，**90**例はカーブする刃縁のｂ面側にも加工が入っている。一方，27，第22図48，第24図4は，関の作出のないもので素材面を残す側縁加工である。第22図48，第24図4は，共にａ面右に突き出した幅広の刃部を有し，特に48の加工は背の高いものである。また，48はａ面の原石面上に擦痕が認められ平らになっている。原石面の凹凸を取るための整形痕なのか，使用による擦痕のいづれかは不明である。上記の２点は，片面加工であるが，27は両面の両側縁に加工が施されている。下部は古い時代の欠損面に再加工を施した部分であり，刃部の本来の形は不明である。

Ⅲａは，１次で報告済みの「両面体石器」を検討し直した結果，尖頭部作出のあるものをこのタイプに含ませたものである。**151**は，石材を玄武岩に求めており，石斧製作上の剥離痕が入っただけの未成品とも考えられるが，ａ面右側縁の剥離が鋭利なためナイフ類に分類した。上部は欠損している。**152**，**153**は，共に上端と両面に原石面を残している。**153**は，側面の原石面を打面としたフレーク・コアーの残核を利用した可能性も考えられるが，石核としては扁平すぎるきらいもある。**247**は，１次報告の図では下部が切損面のように示されているが，これは原石面である。一側縁は直

線的で，他方はカーブした刃縁を有している。

Ⅲｂは，片面に素材面を残す側縁加工で，刃角は高い。１次の報告でⅢタイプに分類したもの全てを含む。**92**は，ａ面側縁とｂ面左側縁に加工がみられ，上部にはバルブの高まりを取ろうとした剥離が認められる。

Ⅳタイプは，両面体石器としていたものが主体であるが，欠損品のためその性格・形状は不明で，ナイフ状石器あるいは尖頭器の柄部と思われるものをこの中に包括した。**155**～**158**は，いずれも上部を欠損しているが，やはり下部に尖頭部を作出したものである。**159**は，小形品で加工も規則的ではない。**160**は，刃つぶれが認められないことから，ナイフ状石器の柄の部分かもしれない。**21**は，**247**と同様の形態であるが上部を欠損している。第**15**図**8**は，両面に入念な加工を施したもので，ナイフ状石器の柄部と考えられる。45～47は，厚みのある断面を呈し，尖頭器，ナイフ状石器いずれの破片かは不明である。49は扁平なもので側縁に加工が入っている。52は，不規則な剥離で石器未成品と思われる。

ナイフ全般を通じてみると，数量的にはⅠｂタイプが最も多く24点を数えるが，形態的には多様である。この中で，小形ではあるが部厚く刃角の高い掻器的刃部を有したものがあり，ナイフ類というよりも掻器的機能を果たしていたものがあった可能性は十分ある。

なお，２次調査で得られた資料に関しては，加工・形態ともに粗雑なものが多く，ステップ・フレーキングによって製作されたものとか，全体に部厚く，幅広大形のものが目立ち，１次のものと異質な感じを受ける。

なお，本遺跡におけるナイフ状石器のタイプ分類は，瀬棚南川遺跡の「石器分類基準表（第15表）」に合せると，Ⅰａ，Ⅰｂは各々ＥⅠ，ＥⅡに，Ⅱａの内，関のあるもの（Ⅱａ－１）はＥⅫ′（両面加工），関のないもの（Ⅱａ－２）はＥⅤ，Ⅱｂの内，同様に関のあるもの（Ⅱｂ－１）はＥⅫ，ないもの（Ⅱｂ－２）はＥⅥに相当し，Ⅲａと Ⅲｂに関しては該当するものがない。

さて，円筒上層式土器群の遺跡におけるナイフ状石器の組み合わせは，中の平遺跡第Ⅲ文化層（円筒上層ａ～ｅ式）では，両面加工の関の作出のない縦長のもの（本遺跡のⅡａ－２タイプ），所謂「縦形石匙」，それに「横形石匙」が若干数伴う。

同遺跡第Ⅱ文化層（大木系，榎林式）では，Ⅱａの関のあるタイプとないタイプ，「縦形石匙」，「横形石匙」があるが，やはり「横形石匙」の占める割合は低いようである。

石神遺跡では，時期の示された資料は少ないが，円筒上層ｂ式に伴って「縦形石匙」，上層ｃ式に伴って「横形石匙」が報告されている。

道内では，森越遺跡の第Ⅱ，Ⅲ群（円筒上層ｂ～ｄ，森越式）に伴ったものは，Ⅱａ－２の両面加工のものと，「縦形石匙」が多く，それに若干「横形石匙」を共伴している。

見晴町遺跡では，左右非対称形の両面加工のナイフ（Ⅱａ－２）と「横形石匙」が各１点報告されているが，「横形石匙」の刃角は高いもので，掻器的用途も考慮せねばならない。サイベ沢Ｂ遺跡の石槍とされた幅広の両面加工の石器も，同種のナイフの可能性もある。

浜荻伏遺跡では，「縦形石匙」が１点報告されている。

智東B遺跡では，2点（報告第25図1，10）の「縦形石匙」が報告されているが，共に狭長な縦長剥片を素材にして，そのa面両側縁に浅い二次加工を施しただけのもので，素材の形状をあまり変えていない。つまみの作出も，10はb面側にも加工を入れ明瞭であるが，1はa面右側縁にのみノッチ状の加工を入れただけのものである。あとは，ナイフ状石器か削器なのか峻別できないような資料が幾点かある。報告の第10図5，第18図7，8，第21図19，第43図13などがそれで，第18図7，第21図19，第43図13などはb面上部に剥離が入っている所から，つまみ的なものを作出しようとした意図が伺え，「縦形石匙」とすることもできる。

道東の朝日トコロ貝塚のトコロ第6類期の文化層からは，数多くの大形の両面加工のナイフ（本報告のⅡaタイプ，報告第48図4～6，第59図4，第74図13～17）が出土しており，この中には，関の作出が明瞭なもの（Ⅱa－1）と不明瞭なもの（Ⅱa－2）の2種類がある。非対称形のものが多いが，刃部端には，尖頭部を作出し，やや細身に仕上げているものが多い。「縦形石匙」に近いものも10点（報告第33図14，15，第48図10，第53図8，9，15，16，第59図2，第75図1，2）出土しているが，第33図15（Aトレンチ第6層）出土の片面加工の「縦形石匙」を除いては，いずれも縦長剥片を素材にして，上部にノッチ状の剥離を入れ，その下の刃部に相当する所は，剥片の形状を殆どかえないで，浅い不規則な剥離痕があるだけのもので，特にその一端に尖頭部を作出するということもない。なお，第53図7は，Ⅱb－2タイプのナイフであろうか。

伊達山遺跡では，報告による限り，明確にナイフ状石器といえる資料は抽出できない。ただ，同型式の土器の遺跡とされている厚田郡厚田村聚富遺跡では，両面加工の種々のナイフ状石器と思われるものが出土している（報告1，4～6，9など）。大きくは，本遺跡のⅡa－1，Ⅱa－2タイプに属するかと考えられる。

ノダップⅡ式に伴ったとされる西股遺跡の石器群の中で，ナイフ状石器と考えられるものは明確ではなく，第38図19，20の2点を挙げうるのみである。全長4.1～4.8cmで，縦長剥片の両側縁に二次加工を施し，一端に尖頭部を作出したものである。本遺跡のタイプ分類にしいてあてはめれば，Ⅲbタイプになろうか。

資料不足で，問題ある所が多いが，以上の事実をまとめると，東北地方の円筒上層式土器群と森越遺跡では，ⅡaとⅠaタイプのナイフ状石器が主体で，それに「横形石匙」を若干伴う。本遺跡でも，同様の傾向を示しているが，ただ「横形石匙」（EⅧ）はみつかっていない。

道東の朝日トコロ貝塚では，やはり「横形石匙」といわれるものはなく，大形の両面加工のⅡaと縦長剥片につまみを作出し，刃部調整が粗雑な「縦形石匙」を伴う。この種のものは，智東B遺跡でも認められ，円筒上層式土器群に伴うものとは型式的に明らかに異ったものである。

余市式土器群に伴うナイフ状石器といわれる器種は不顕著で，聚富遺跡ではⅡaタイプの資料が，西股では，Ⅲbタイプに属すると思われる資料が若干抽出できるだけである。

すなわち，Ⅱaタイプの両面加工のナイフは各時期・地域に亘って伴うようであるが，「縦形石匙」（Ⅰbタイプ）に関しては，入念な側縁ないし片面加工のものと，粗雑なものが地域を異にして分布するようである。なお，この両面加工と片面ないし側縁加工の2種のナイフは，恵山式文化にお

いても「靴型石器」A・B類（千代1962）という形で認識されているもので，両者は使用目的が異なっていた可能性がある。

なお，IIIタイプとしたものは，その型式把握も明瞭でないということもあり，その拡がりとか時期は確定できない。さらに，IIaタイプの両面加工のナイフ状石器の中で，対称形に近い資料は，石槍としての機能ももったものもあったかと思われる。ただ，1つの石器で，槍先とナイフの両者に利用されていたことも考えられるので，今後使用痕などの観察を通じて，さらに検討する必要がある。

註4） ナイフ状石器と削器（side scraper）については，その区分の根拠は，必ずしも明確ではなく，さらに器種の定義も曖昧なまま用いられ，特に「削器」と称せられる器種に関しては，様々のものを無差別に入れる傾向がある。さらには，「削器」という言葉を用いないために，ナイフ状石器の一器種型式にすぎない「石匙」とか「靴型石器」などという特異な例にのみ，他と区別して扱い，その他のナイフ状石器とか削器に関しては，「不定形石器」として一括する例もある。このような取扱いは，単に石器の名称付けでしかなく，形態型式論の立場から石器を分類することとは何ら関連しないことである。もとより，石器の器種ないし器種型式というものは，当時の社会的要求と伝統に根ざし，定形化し定着したものである以上，「不定形石器」という器種は存在するものではない。具体的にいえば，つまみとか柄を明瞭に作出したものだけがナイフ状石器なのではなく，これらと共に今迄一般に「石槍」と称せられてきたものの幾つかも，共にナイフ状石器のセットとして当然あったと考えられる。勿論，機能的な観点からみた場合，石鏃とか石槍もナイフとして用いられた事例は数多くあるが，それらは1つの確固たる器種型式として識別できる以上，本来的用途ではなく副次的なものであり，これをもって，社会的伝統に根ざした器種型式というものを無意味な認識として退けることはできない。ただ，形態型式論の限界は，個々の器種型式の認識行為の中でしばしば問題になる属性（attribute）抽出ないし分析というものが，当時の社会に照らしてどれだけ有意なものであるかの検証が非常に難しいという点である。すなわち，属性分析が細かくなればなる程，現実的意味を失う可能性もあり，また逆に，我々が認識しえないような細かな違いが，当時において器種ないし器種型式の違いとして大きな意味をもっている場合もあるかもしれない。従って，石器の器種分類を正確に行っていくことは，偏に綿密な調査によって明らかにされた，当時の自然環境，社会組織そして生産形態とその方法を明らかにする作業と同歩調のものであるということである。なお，最近の傾向として，各器種を用途別に，直接生産用具，間接生産用具の如く分類し，当時の生産形態とか棲み分け（settlement pattern）の問題を明らかにしようとする試みがみられるが，この方向は1つの試行錯誤としては大きな意味をもつにしても，前提となる機能型式論を無視してはできないことで，安易に行うべきことではないと思われる。

なお，現時点におけるナイフ状石器と削器の違いについては，『札幌市文化財調査報告書』XVのS265遺跡の発掘区の石器群の項で若干触れている。

(6) 削器および使用痕のある剥片

削器は，1次で報告されたもののうち，使用痕的剥離のあるものを除外した結果30点となり，2次の7点と合計すると37点になる。石質は，黒曜石が28点と多数を占め，硬質頁岩5，瑪瑙2点という内訳であった。素材は，圧倒的に縦長剥片が多く，横長剥片は3例である。

これら削器は，加工・形態をもとに次の5タイプに大きく分けることが可能である。

I：両側縁に比較的刃角の浅い加工を施したもので概して大形のもの。……**115～117, 139, 142, 163**, 30, 第24図5

II：横長剥片の下端に加工を施したもの。……**143**

Ⅲ：狭長で，刃角がある背の高い加工を施しているもの。……**145**，第**14**図**9**，**10**，第**39**図**2**，36，40

Ⅳ：両側縁と下部に加工を施したもので，尖頭部を作出しているものと，丸みをもっているものの2種がある。……**114**，**122**，**123**，**128**，第**14**図**19**，第**15**図**13**，**15**，第**38**図**4**，第**39**図**7**，**19**，32，33

Ⅴ：何らかの石器未成品と考えられるもの。……**165**，**166**，第**14**図**12**，第**15**図**11**，第**38**図**3**，**12**，**16**，**18**，第**39**図**20**，35

Ⅰタイプは8例である。**115**は，扁平な縦長剥片の両側縁にほぼ直角に近い剥離が整然と入っており，上面には打面を残している。**142**は，フレーク・コアー段階での剥離面をa面とb面下端に大きく残すもので，a面両側縁にのみ加工がある。

Ⅱタイプは，**143**の1例のみである。大形の横長剥片から製作したもので幅広く部厚い。扇状の形態で，下端のカーブした部分に大きめの加工が整然と施されている。

Ⅲタイプは，狭長な縦長剥片の両側縁に直角に近い刃角のある加工を施したもので，6例ある。第**14**図**9**，**10**は，共に第1号竪穴住居址状遺構内出土のもので，両側縁の刃つぶれが激しい。36は，下と横を欠損しているがやはり直角に近い角度の刃部を有する。40も，下部を欠損しているが，加工のあり方などから同様の形態のものではないかと思われる。**145**は，幅広で一側縁にしか加工がないが，やはり刃角のあるものなので，このタイプの中に含めた。第**39**図**2**は，大きく片側を欠損しているため形態は不明である。背の高い加工の他は素材面であることから，何かの未成品であるかもしれない。このタイプの刃部縁はいずれも刃つぶれが激しい。

Ⅳタイプは，最も多く12例を数える。ただし，これらはナイフ状石器の未成品の可能性もある。**122**，**123**，**128**は，下部に尖頭部を作出したもので，特に**122**，**123**は入念な加工である。**128**は，上端を除く側縁に細かい剥離があり下部の尖頭部も刃角のある加工を施している。**114**，第**14**図**19**，第**15**図**15**，第**39**図**7**，32の下端は丸みをもってカーブしている。遺構から出土した3点は扁平で刃角の浅い加工であるが，**114**は部厚く，他に比べて背の高い加工で，上端に原石面を残している。第**15**図**13**，第**38**図**4**は，側縁と下部に加工があるが，下部のものは平坦である。

Ⅴタイプは，10点出土している。いずれも欠損品で，加工も途中で途切れていたり，形態が多様なものであり何らかの石器の未成品と考えられるものである。第**38**図**18**は，横長剥片上部に加工が施されたもので，b面のバルブ部分には高まりを取ろうとした剥離が何度も入っている。**165**は，扁平な縦長剥片を利用し，下部に柄部を作出していることから石鏃などの尖頭器の未成品の類であろうと思われる。第**38**図**3**も，a，b両面の上部に特に入念な加工を施しているが，尖った尖頭部を作出するまでに至っていないもので，同様の未成品かと思われる。第**39**図**20**例などもこの仲間に入る。同種のものは，2次調査の第12号ピットからも数点検出されている。

これら石鏃などの尖頭器類の未成品と思われる資料を除いては，いずれも，b面側には二次加工は入っていない。

一方，使用痕のある剥片とは，剥片の側縁に人為的加工ではなく，使用によってできた不規則な

剥離を有する剥片のことで，ここでは削器とは別な器種として扱う。1次・2次調査での事実記載の項で削器と分類されていたものの中で，使用痕と考えられる剥離を有するものはこの中に分類し直した。1次・2次調査とも各々38点，計76点が検出されている。石質は，削器同様圧倒的に黒曜石が多く65点，その他に硬質頁岩6，硅岩2，瑪瑙1，泥岩1，凝灰岩1点の内訳であった。このうち，縦長剥片は大小様々ではあるが，69例を数え，横長剥片はわずかに7例であった。

これらの資料は，大きさ，剥離のあり方などにより，以下の5つに分類できる。

Ⅰ：a，bいずれかの面の長軸両側縁に剥離のみとめられるもの。……**118**，**124**，**127**，**129**，**130**，第**14**図**11**，31，67～69，73～75，82

Ⅱ：a，bいずれかの面の長軸一側縁に剥離のみとめられるもの。……**119**～**121**，**131**，**134**～**138**，**140**，**147**～**150**，第**14**図**20**，第**15**図**14**，**16**，第**38**図**1**，34，37～39，59，61～64，66，72，76～81，84～86

Ⅲ：a，b両面の一側縁または両側縁に剥離のみとめられるもの。……**125**，**126**，**132**，**133**，**144**，**146**，第**14**図**13**，**23**，29，65，71，83

Ⅳ：剥片の下端に剥離のみとめられるもの。……**108**，70

Ⅴ：やや厚みのある剥片の一側縁あるいは両側縁などに剥離のみとめられるもの。……**141**，**164**，第**38**図**15**，**20**，第22図53，57，58，60，87

Ⅰタイプは14例で，いずれも寸の短い剥離である。**124**，**127**，第**14**図**11**，31，69，74，75，82の8例は扁平な縦長剥片を素材としたもので，31は，寸の短い縦長剥片の両側縁に背の高い剥離がある。**130**，67，68，73は，部厚い断面三角形の縦長剥片で，68，73は原石面を残している。67のa面左側縁上部にはノッチ状のくびれが認められる。**118**は，扁平な縦長剥片で，a面右側縁のものは大きな剥離であるのに対して，左側縁のものは細かくて散発的である。

Ⅱタイプは，最も多く38例で，大きさの点から，大形，中形，小形に細分できる。

大形例は，全長6.0～7.0cm内外のもので，**119**～**121**，**134**，**140**，**148**，**149**，第**14**図**20**，61～64の12点である。**148**，**149**の横長剥片を除く他は皆縦長剥片で，いずれもa面の一側縁に短く，不規則な剥離のあるものであるが，61～64のものは新しい剥離と思われる。第**14**図**20**は，フレーク・コアーの角を剥離した剥片で，その一側縁を利用したものと思われる。**148**は，剥片の下端，**149**は剥片の一側縁に剥離がある。欠損品は，**134**，**140**，**148**，**149**の4点で，原石面を残すものは**120**，**121**，**134**，**149**，第**14**図**20**，61～64の9点である。

中形例は，全長4.0～5.0cmの間のもので，**136**～**138**，**147**の4例であるが，いずれも大きく欠損しているため，本来は大形に入るものかもしれない。いずれも寸の短い縦長剥片が素材でa面側に剥離痕が認められる。**138**は，a面左側縁に2ヵ所，ややくぼんでノッチ状になった箇所が認められる。**147**は，b面下部は，剥離下部がヒンジ・フラクチャーになって剥がれているため，b面下部にコアー段階での剥離面が残っている。

小形例は，全長3.0～4.0cmのもので，**131**，**150**，第**15**図**14**，**16**，第**38**図**1**，34，37～39，59，66，72，76～81，84～86の21例である。84，85は，横長剥片のa面側，76～78，80は，縦長剥片

のb面側，その他は縦長剥片のa面側に剥離がある。いずれも狭長である。77は，b面左側縁上部に長い剥離が4本入っているが，その下は細かい剥離が続いている。79は，a面右側面に原石面を残しており，その側縁に細かい剥離が認められることから，フレーク・コアーの角の部分を剥いだものであろうか。

Ⅲタイプは12例である。**144**，**146**，29，83は，4.0～5.0cm前後でやや大形である。

144は，寸の短い幅広の剥片のa面下端とb面右側縁に剥離痕のあるもので，b面のものは刃角があるものである。**146**は，横長剥片のバルブ付近の破片で，部厚く，a，b面側縁に相対して剥離痕が認められ，エッジがつぶれたようになっている。29は，断面三角形の部厚いもので，a，b両面の上端を除く三周に大きめの剥離痕が認められるが，散発的である。**125**，**126**，**132**，**133**，第14図**13**は，剥片の下部が尖っているもので，そのうち，**125**はa，b両面の両側縁，**126**はa面下部先端とb面左側縁，**132**はa面左側縁とb面の相対する側縁，第14図**13**と**133**はa面左側縁とb面右側縁に剥離が認められる。いずれも，刃角のある細かい剥離である。第14図**23**は，a面左側縁下部から下端，右側縁に亘り，またb面右側縁に同様の剥離痕が認められる。

Ⅳタイプは2例と少ない。70は，a面下端は幅広く，そこに細かい使用痕があり，上端はコアー段階での剥離が若干認められる。**108**は，寸の短い縦長剥片でa面下端と左側縁に，刃角のある短い剥離が認められるが，その他は原石面である。

Ⅴタイプは9例で，いずれも部厚く，原石面を残している。使用痕のある部位は様々であるが，**141**，第22図53を除いては，刃つぶれ的な剥離である。**141**は，a面右側縁下部にやや長い剥離が認められる他は原石面である。**164**は，両面がポジティブ面で断面はレンズ状になっている。第22図53は，b面左側縁の一部にノッチ状のくびれがあるが，剥離は全く入っていない。

削器として分類できる資料は，石神，中の平，サイベ沢遺跡などでは報告例が少ないか，全くなく実体は不明であるが，中の平遺跡の報告図版25の下から2段目の左端の例とか，サイベ沢遺跡の第一地点4～2層（Ⅶ文化層）の第71図の右下の資料は，比較的幅広の縦長剥片の一側縁に二次加工を入れたものである。

森越遺跡では数多く報告されているようであるが，与えられた挿図および図版から，細かなタイプ分類をすることは困難である。しかし，判断のつくものだけでみるとタイプの種類は，本遺跡の分類のⅠ～Ⅳまですべてあるようである。ただ，半数以上は使用痕のある剥片かと考えられる。

サイベ沢B遺跡では，1点の欠損品が報告されているのみである。見晴町遺跡では，報告の9，11，13，15，16の5点が削器ないし使用痕のある剥片であるが，実測図で判断する限り確実に削器と思われるのは9の1例のみである。本遺跡の分類のⅢタイプに属する。なお，15例はノッチ状に剥離が入っている。全長は7～8cmの大形のものである。

智東B遺跡では，剥離のある剥片を数多く図示していて貴重な報告であるが，その内96%以上は剥離が短く不規則なもので，使用痕のある剥片と思われる。削器として認めうるのは，報告第10図8，第21図7，18，25の4点などである。4点共，縦長剥片の片側ないし両側縁に二次加工を入れたものであるが，第10図8にはb面側にも加工が入っており，また第21図7と18にもb面側に剥

離（使用痕？）がある。刃角の状態が明確でないので，タイプ分類は難しい。なお，使用痕のある剥片の剥離は，コンケーブ状ないしノッチ状に入っているものが多い。

朝日トコロ貝塚のトコロ第6類期の資料では，第48図7，8，第75図5などが，Ⅰタイプの削器である。全長は6.0～6.9cmである。それ以外の剥片の側縁に短い剥離の入った第33図19～21，第53図14，16などは，使用痕のある剥片で，全長は5.8～7.4cmである。

伊達山遺跡の報告でも，数多くの縦長剥片が図示されているが，明確な二次加工が入っていると判断されるものはなく，その殆どは使用痕のある剥片かと思われる。

煉瓦台遺跡では，報告の第15図5，18，28，第16図1，2などが削器および使用痕のある剥片であるが，この中で削器と考えられるのは，第15図5と18で，前者はb面側の両側縁に二次加工が入っているもの，後者は刃角の高い加工が入ったもので，本遺跡のタイプ分類に従えば大きくみて，各々Ⅰ，Ⅲタイプに属するかと考えられる。なお，使用痕のある剥片の剥離はこの遺跡例でも，いずれもノッチ状ないしコンケーブ状に剥離が入っている。全長は，5.0～5.5cmが主体を占める。

函館市天祐寺貝塚（石川 1963）も，煉瓦台遺跡と同時期の遺跡であるが，ここで報告されている第3図4，5，7，8の4点は，削器および使用痕のある剥片である。7は，唯一削器の可能性があるもので，a面全面を押圧剥離によって調整し，b面両側縁に浅い二次加工があるものである。しかし，下部を欠失していて，全体形は不明で，「石篦」と呼ばれる器種かもしれない。

西股遺跡では，150点に及ぶ削器ないし使用痕のある剥片が報告されている。これらは，分類すると以下の7つに分けられる。

Ⅰ：a，b両面の相対する側縁，あるいはa面，b面交互に側縁加工の面をかえながら，剥片のほぼ全側縁ないし片側縁に二次加工を施したもので，このタイプの多くは，一端に尖頭部的なものを作出しており，ナイフ的な石器である可能性がある。……第38図33，第39図14，22，39，第41図11，第42図3，10，11，第45図10，13，第46図4，11の12点

Ⅱ：縦長剥片を素材にして，主にa，bいずれかの面の両側縁ないし片側縁に整然とした二次加工のあるもので，その刃縁はほぼ真直ぐなものが多いが，幾つか全体に心持ちコンケーブしているものもある。

a）主にa面側に二次加工のあるもの。……第39図1，第43図2，4，8，9，11～14，17，19，26，第44図1～6，10～13，16～18，第45図2，5～8，12，第46図1，2の33点

b）主にb面側に二次加工のあるもの。……第38図31，34，37，第41図4，6，8，第42図4，5，第43図23，24，第44図9，14の12点

Ⅲ：縦長剥片を素材にして，主にa，bいずれかの面の両側縁ないし片側縁に不規則な短い剥離が入っているものである。

a）主にa面側に剥離が入っているもの。……第39図2，11，第40図6，7，第41図1，第43図1，5～7，10，15，16，18，20～22，25，第44図7，第45図3，4，11，第46図6，8，9の24点

b）主にb面側に剥離が入っているもの。……第43図27，第44図8，15，第46図3の4点

Ⅳ：逆三角形ないし三角形から多角形の，幅の割りに寸の短いポイント・フレーク状の剥片および横長剥片を用い，そのa面ないしb面の側縁に不規則な剥離が入っているもの。

a）ポイント・フレーク状の剥片の主にa面側に剥離があるもの。……（逆三角形のもの）第39図9，15，16，20，21，第40図16，第41図2，3，10，第44図19，第45図1，9の12点，（三角形のもの）第39図12，17，19，24，25，第40図1，2，5，9，11，13～15，18の14点で，都合26点

b）横長ないし不整正方形の剥片を用い，主にb面側に，比較的整った剥離が入っているもの。……第39図7，第40図3，4，8，10，12，17，第42図13の8点

Ⅴ：3～5cmの比較的小形の素材（剥片ないし削片）を用い，その多くは相対する両側縁に二次加工のあるもので，さらに2種に分かれる。

a）素材のほぼ全側縁に亘って，両側縁に整然とした二次加工の入ったもので，一端には尖頭部状のものを作出している。……第38図10～14，18～21の9点

b）素材の相対する，ないしは逆位置の一側縁ないしその一部に二次加工の入ったもので，形状は一定していない。……第38図17，26，28，32，35，36の6点

Ⅵ：上述のⅠ～Ⅴタイプのどれかに属するものであるが，破片のため細かなタイプ分類ができないもの。

a）Ⅱタイプに入る可能性のあるもの。……第39図3，4，13の3点

b）ⅢないしⅣタイプの可能性のあるもの。……第39図5，8，10，第42図1，第43図3，第46図5の6点

Ⅶ：高さ5～7cm，幅3～7cmの不整四角形状の形態を呈した，大きな剥離を両面に入れた資料で，多くは1面の相対する側縁に細かな剥離が入っているものである。……第42図2，6～8，12，14，第46図7の7点

さて，以上7タイプに分けて説明した資料は，本遺跡の器種分類に照らすと，どの仲間に属するであろうか。

Ⅰとしたものは，刃縁がなめらかでなかったり，刃部に相当する所の加工が粗雑なものが多いが，形状・加工のあり方はナイフ状石器に近いもので，本遺跡の削器の分類にしいてあてはめれば，Ⅳタイプとしたものが一番近い。Ⅱa，bとしたものは，削器と考えられるもので，Ⅱaは本遺跡の分類のⅠ，Ⅲタイプに，ⅡbはⅠタイプに属するものである。

Ⅲa, b，Ⅳa, bとしたものは，使用痕のある剥片である。

Ⅴは，その位置付けは明らかにできないが，第38図19，20などは小形であるがナイフ状石器としても分類可能であることは前述した通りである。あとは，現状では石鏃の未成品などの可能性を指摘できるだけである。

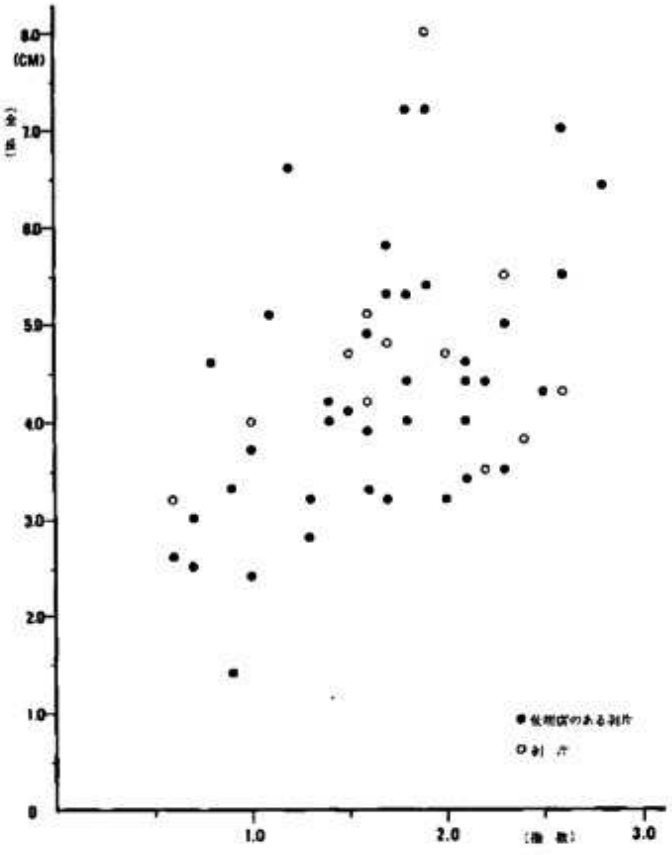
Ⅶは，主に剥片から作られた所謂「ピエス・エスキーユ」に相当するものであろう。

結局150点の資料は，削器60点（40%），使用痕のある剥片68点（45%），ピエス・エスキーユ

7点（5%），その他15点（10%）の比率になる。

すなわち，全体を通してみると，円筒上層式土器群の遺跡では，報告例が少なく不明な点が多いが，本遺跡のⅠ，Ⅲタイプを主体とした削器と使用痕のある剥片が，ほぼ同比率で認められる。智東B，伊達山遺跡では，削器と考えられる資料は全くないか，比較的に少なく，殆どが使用痕のある剥片であるのが特徴である。西股遺跡においては，数多くの資料が報告されているが，削器と使用痕のある剥片の比率は各々40，45%で，ほぼ同点数である。なお，N 309遺跡では，削器31%，使用痕のある剥片69%の比率であった。

さて，第7，8表は，本遺跡および道内における縄文中期の遺跡で比較的多くの剥片類（二次加工，使用痕のあるものを含む）を報告している4つの遺跡の資料を，横軸に剥片のおおまかな形態を示す指数（全長／最大幅）をとり，縦軸に全長の絶対値を入れたものである。

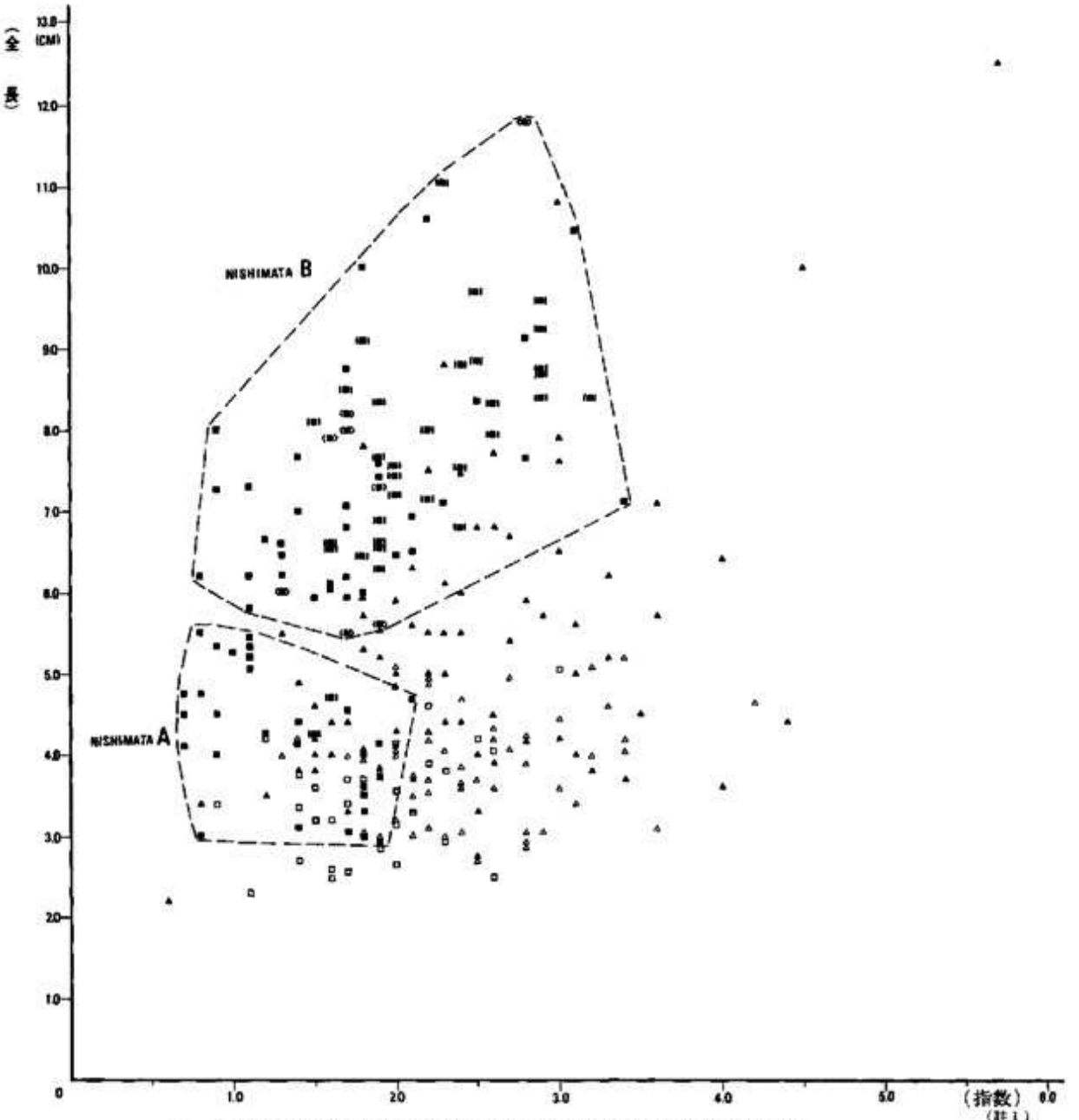


第7表　N 309遺跡の剥片の形態分布図

まず，第7表の方は，本遺跡の剥片の形状のわかる使用痕のある剥片，未使用の剥片の2者をグラフにしたものであるが，これでみると，全長は1.4～8.0cm，指数0.6～2.8と約24.5cm²に亘って楕円形に分布しているが，特に集中するのは，全長2.4～5.8cm，指数0.6～2.6の約13.5cm²の所で，44点（86%）が入っている。これをさらに具体的にいえば，全長2.0～4.0，指数0.6～1.3の横長剥片ないし幅広で寸の短い剥片が左に1つのグループ，全長3.0～5.5cm，指数1.4～2.8の縦長剥片がその右上に1つのグループを作っているといえる。なお，全長7.0～8.0cm，指数1.5～2.6でこれらの上にくるものは，大形の縦長剥片である。なお，本遺跡の資料では，器種による剥片選択の問題は，資料が少なく傾向性をつかむことはできない。

第8表は，縄文中期後半期の智東B遺跡，T 77遺跡，伊達山遺跡，西股遺跡の資料を同様にグラフに示したものである。

まず，「智東B式」とトコロ第6類を主体とした智東B遺跡では，報告された138点の二次加工な



凡例

▲印：名寄市智東B遺跡（智東B式，トコロ第6類）78点（山崎1968）

△印：札幌市T77遺跡（主体トコロ第6類）60点（羽賀1974）

□印：石狩郡当別町伊達山遺跡（伊達山式）31点（岩崎ほか1970）

■印：函館市紅葉山西殷遺跡（ノダップII式）106点（松下編1974）（註2）

第8表　縄文中期の剣片の形態分布図

（註1：指数とは全長／最大幅の比である）

（註2：（■）は、P.119のタイプ分類のI、（■）印は同様にIIa、IIbの剥器である）

いし使用痕のある剥片の内78点が欠損のない資料である。これらの剥片の全長，最大幅の平均値は各々5.0，2.4cmで，指数の平均値は2.3であり，この付近を中心に分布する資料が多く，報告第43図13，第25図1，第18図6の3点を除く75点（96%）は，指数0.6，全長2.2cm（第41図5）と指数4.4，全長4.4cm（第35図16），そして指数2.6，全長8.8cm（第60図1）の3点を結ぶ約33cm²の三角形の範囲に含まれる。大きく離れる3点は，指数幅3.0～5.7，全長10～12.5cmの範囲のもので，狭長大形の例である。特に第43図13は，全長12.5cm，幅2.2cm，厚さ0.8cmをはかり，粗雑なつまみのついたナイフ（縦形石匙）として利用されている。なお，この遺跡でも，二次加工のある石器が少ないため，器種による剥片選択の問題は明確にはできない。

T 77遺跡の資料は，報告の第19図に示された60点の縦長の剥片のみを取り扱ったもので，いずれも未使用の剥片であるらしいので，他の3遺跡のものとは同質には扱うことができないかもしれないが，同様に分析すると，与えられた資料の全長は2.7～5.5cm（平均値3.9cm），最大幅0.85～3.0cm（平均値1.7cm），指数の幅1.3～4.2（平均値2.5）のものである。ただ，第19図A－3，C－8の2点のもの以外の98%の資料は，指数1.3～3.4の所に集中している。その面積は，8cm²である。

伊達山遺跡の資料も，全点図示されているかどうか明らかではないが，報告の第6図に示された31点の資料を検討すると，その全長は2.3～5.1cm（平均値3.5cm），最大幅1.3～3.9cm（平均値2cm），指数幅0.9～3.0になるもので，それらの分布範囲の面積は約12cm²である。ただ，24，38，46，48，50の5点の資料を除くと全長2.3～4.6cm，指数1.4～2.6の5cm²の所に84%の資料が集中し，かなり規格的な剥片を生産する剥片剥取技法があった可能性がある。

西股遺跡では，128点の二次加工ないし使用痕のある剥片が報告されているが，その内計測可能なのは106点である。剥片の分布は，全長3.0～11.8cm（平均値6.6cm），最大幅1.6～9.1cm（平均値4.0cm）で，指数の幅は0.7～3.4とその面積は27.2cm²で幅広い拡がりをみせる。しかし，これらの剥片は，大きく以下の2つに分けることができる。

Aグループ：全長3.0～5.5cm，指数0.7～2.1の範囲に入る小形～中形のもので，30点ある。この面積は8.5cm²である。

Bグループ：全長5.5～11.8cm，指数0.8～3.4の範囲に入る大形のもので76点を数える。その占める面積は28.5cm²である。さらに，このグループを細かくみると2つの集中が中にある。1つは（**B 1**），全長5.5～9.1cm，指数0.8～2.4の12cm²の範囲に入るものと，もう1つ（**B 2**）は，全長7.6～9.7cm，指数2.4～3.2の3.3cm²の中に入るものである。**B 1**は56点，**B 2**は14点の資料からなるが，残りの6点は，これらの上に5点（第45図4，5，11，第46図3，4）と右に1点（第43図22）ある。

この**A**，**B**両グループの際立った特徴は，前述したI，IIa，IIbの削器の資料が，第38図31，34の2点を除いては，すべて**B**グループに入ることである。特に**B 2**では，14点の内11点までがIIa，bの縦長剥片のa，b面どちらかの側縁に二次加工を加えた削器として利用されている。**B 1**でも，削器の比率は48%（27/56），**B**グループ全体では約53%（40/76）で，この仲間の剥片は，

半数以上意図的に二次加工を入れ，削器などの石器の素材として利用していることが判る。なお，Ⅵとした資料は，全例欠品のため表には出てこないが，すべてAグループに包含されるものと考えられる。

すなわち，西股遺跡における剥片生産の状況は，後述するトコロ第6類，伊達山式の遺跡などに認められた3～5cm前後の縦長剥片と共に，5～12cmの大形の縦長剥片を生産し，その両者は判断される限り，削器と石鏃などの小形品とで，剥片選択を行っていたことが伴る興味ある事例である。ただ，後述する通り，この遺跡では，縦長剥片を生産したと思われるフレーク・コアーは，1点しかなく，具体的にその様相をトレースできない。

また，森越遺跡においても，剥片の形状の判る資料（ナイフ状石器，掻器，削器，使用痕のある剥片）は，第69図13，第73図12の横長剥片を除くと殆んど縦長剥片を素材としており，その全長は5.3～11.1cmまで幅があるが，平均値7.5cm前後の所に集中するものが多い。すなわちナイフ状石器，掻器，削器などは，前述のBグループの剥片を素材としていることが判る。

一方，トコロ第6類，伊達山式期の遺跡においては，報告例でみる限り生産されている剥片は，2～5cmの規格性をもった縦長剥片が主体である。このことは，後述する（A）タイプのフレーク・コアーが，これらの遺跡から比較的数多くみつかっていることからも了承される。ただ，これらの遺跡においては，これらの規格性をもった縦長剥片をどのような器種の石器の素材として用いていたのかという点になると，未検討で明確にはできないが，ただ縦長剥片を素材にした二次加工のある石器の数に比べ，縦長剥片の生産量は異常に多く，しかもそれらは，必ずしも使用痕的剥離が認められない。このような問題は，旧石器時代における石刃技法の遺跡の状況とも関連させて今後検討しなければならない。なお，智東B遺跡でも，前述した如く生産している剥片は，いずれも単に使用痕的剥離のあるものばかりで，そのあり方としては，トコロ第6類とか伊達山式の遺跡とかなり類似している。

このように，西股遺跡で分離されたA，B2つのグループの剥片の内，Aグループの剥片は，各遺跡において認められるが，Bグループとした大形の例は，トコロ第6類，伊達山式の遺跡においては不顕著である。しかし，朝日トコロ貝塚においては，大形の石銛とか両面加工のナイフ状石器そして削器は，その多くはBグループに属する大形の縦長剥片を用いているので，前述した西股遺跡のBグループの剥片の利用状況を加味して考えると，上述の遺跡でBグループの大形剥片の出土率が低いのは，欠除しているのではなく，多くは剥片石器の素材として利用されているためとも考えられる。ただ，伊達山遺跡では，報告された限りでは，完成された石鏃とか石銛の大きさも最大で約4.4cmである点は，朝日トコロ貝塚とは異なっている点である。

以上の事例だけからでは，縄文中期における剥片生産の問題を論じるには資料不足であり，また，土器群ないしは地域の違いによってその大きさは2，3種類に分かれるが，少なくともこの4遺跡における剥片生産は，ある程度の規格性をもって連続的に剥片を多量に生産していた可能性が高いといえる。このことは，後述するフレーク・コアーの（A）タイプとしたものが，遺跡により出土量に差はあるが，共通して含む一つの型式である点からもいえる。

なお，各遺跡で，若干数みつかっている寸の短い，やや幅広の剥片は，それが（A）タイプのフレーク・コアーから，偶然的に生産されたのか，あるいは西股遺跡例でみる限りポイント・フレーク状のものが多いことから，何らかの両面加工の石器からとられた剥片なのか，はたまた後述する（B）タイプのものが，この種剥片を生産するために用意されたフレーク・コアーなのかは，剥片石器の素材が主にどのような剥片であったかを1つ1つ明らかにしていく作業を通じて，はじめて解決されることで，今回は結論を保留しておく。

ひるがえって，本遺跡の例は，全剥片の拡がりの中央約14 cm² の所に86%の剥片が集中することは前述した通りであるが，この範囲は，ちょうどトコロ第6類，伊達山式期の遺跡の剥片の分布と一致するものである。ただ，大形の例は，西股のBグループの下部と重複している。

(7) フレーク・コアーおよびピエス・エスキーユ

フレーク・コアーおよびピエス・エスキーユは，1次調査で15点と2次調査で4点の計19点が出土しており，いずれもその石質は黒曜石である。なお，1次調査報告には10点しか報告していないが，新たにフレーク・コアー4点（第9表(1)〜(4)），ピエス・エスキーユ1点が検出されたので，ここでまとめて報告する。なお，フレーク・コアーとピエス・エスキーユは器種としては全く別のものであるが，形態的に類似した所があり，1次報告ではピエス・エスキーユをフレーク・コアーとして取り扱った経緯があるので，本項では両者を比較検討する意味を含めてこの2つの器種を一括して記載することを了承して頂きたい。また，1次報告で「両面体石器」としたものの内の2点（**159**，**161**）は，確実にピエス・エスキーユといわれる器種に属するもので，ここで一緒に取り扱う。

本項で扱う資料は，以下の3つに分類できる。すなわち，

I：素材は，主に高さ3〜4cmの部厚い角礫で，残核の横断面形は角柱状で，上面に幅広い平坦面を有し，この面を打面として2面以上に亘って，連続的に縦長剥片を生産しているもの。……**170**

II：素材は，高さ3〜5cmの板状の角礫を用い，上面に多くの場合原石面からなる狭長な平坦面を有するもので，その横断面形は，板状（長方形）である。この仲間はさらに剥離の入り方から2種類に分けられる。

a）異なった面で打面を転位する例はあるが，1つの剥離面内では，殆ど同一方向からしか剥離を行なわないものである。生産している剥片は，やや幅広ですが短く，Iタイプのように連続的な剥片剥離は行なわれていない。本遺跡例では，a面の右ないし左側面は切断面のものが多く，その正面観は三角形に近い。打角は，70〜90°の範囲である。……**167〜169**，**171**，(1)〜(4)

b）上面に平坦な面を有する点は，aタイプと同様であるが，a面およびb面に入っている剥離は，同一方向からのもの以外に，それに直交する側からのもの（**173**，55）もあり，その生産している剥片は，やはりやや幅広の寸の短いものである。また，aタイプに比べてb面側にも剥離が入っている例が多い。なお，これ以外にこの仲間の大きな特徴は，幾つ

第9表　フレーク・コアー計側値一覧表

No.	タイプ	最終および主要剥離痕の打面	打面転位（旧剥片剥離面）	原材 全長	原材 最大幅	原材 最大厚	最終ないし主要剥離痕 全長	最終ないし主要剥離痕 最大幅	主要剥離痕打角	備考
				mm	mm	mm	mm	mm	°	
167	IIa	原石面	—	—	—	14	33	21	78	
168	IIa	原石面	b	—	—	15	7	27	65	
169	IIa	調整面	—	—	—	—	23	16	71	散発的調整痕で，原石面も残す。
170	I	原石面	c	—	—	—	33	10	60	
171	IIa	旧剥離面	e	—	—	—	14	20	83	
173	IIb	打面欠損	a右.b.c.f	—	42	-	—	—	—	
53	IIb	原石面	—	34	32	—	26	18	82	
54	IIb	原石面	-	40	27	7	30	20	97	
55	IIb	原石面	a左.b	36	28	18	-	—	90	
56	—	打面欠損	—	—	27	—	42以上	11	—	
(1)	IIa	原石面	—	—	—	—	27	33	69	
(2)	IIa	原石面	—	—	—	—	26	19	72	
(3)	IIa	原石面	—	—	—	—	13	15	78	
(4)	IIa	調整面	—	—	-	—	26	20	86	打点付近に細かな調整が若干認められる。

註）打面転位の項目で使用したa～fの面呼称は，a面は最終剥離痕の打面を上部にもってきた左側正面図で，b面は右側正面図，c面はa面右側面図，d面はa面左側面図，e面は上面図，f面は下面図を指す。

かのもの（53，54）に，a面上下縁に細かい剥離が入り，剥片剥離痕のネガティブ・バルブが消失している点で，下縁のものはステップ・フレーキング状で，ステップ・フラクチャーが認められる。これは恐らく，台石の上において上から直接打撃を行った結果生じたものと考えられる。これらの資料の正面観は四角形を呈し，a面両側面は原石面か，上下方向からの狭長な剥離面である。……**173**，53～55

Ⅲ：高さ3～5cmの正面観が四角形に近い資料で，多くの場合a，b両面に大きな剥離が種々の方向から入り，相対する上下ないし左右の側縁には細かな剥離が入っている。上面には平坦面はなく，その縦断面形は凸レンズである。ただし，相対する細かい剥離以外は原石面の例（**172**）もある。……**159**，**161**，**172**，第38図**17**，ほか1点。

Ⅰタイプは，**170**の1例だけであるが，a面からc面にかけて連続的に剥片剥取を行っており，最終的剥離痕の大きさは，長さ3.3cm，幅1.0cmの狭長なものである。

Ⅱaタイプのものはb面側にも，a面と同一方向ないし逆方向の剥離があるが，いずれも小さいもので，剥片を剥取する目的があったのかどうかは疑問である。また，**169**，**171**の打面は旧剥離面であり，さらに**168**のa面には斜め下からの大きな剥離が一枚入っている。主要剥離痕の大きさは，**168**と**171**が各々0.7×2.7，1.4×2.0cmで，寸の短い小形の横長剥片を，**167**と**169**は各々3.2×2.1，2.3×1.6cmで，寸の短い縦長剥片を取っている。

Ⅱbタイプの上面の平坦面――主要剥離痕の打面は，**173**の欠損品を除いては原石面である。打角は，打面転位しているものもすべてほぼ直角に近いものである。b面は，54は原石面，**173**，53，

55 では剥離が入っているが，53 例では下と左からやや大きめの剥離がある以外に上下に細かい剥離が入っている。55 は上からだけ，**173** は上下からやや大きい剥離が数枚入っているが，共にあとは幅広く原石面を残している。53，24 例について，a 面の主要剥離痕の大きさをみると各々2.6×1.8，3.0×2.0 cmで，極めて小さく，石器の素材として用いられたものかどうか問題がある。

Ⅲタイプは，相対する細かい剥離以外の比較的大きめの剥離も，1.5～1.7×0.9～1.8 cmで，いずれも小さく，目的的な剥片を取ったとは考え難いものである。この 5 点の内 **172** と **159** の一側面は切損面（ないし切断面）である。

なお，今迄説明しなかった 56 例は，角柱状の原材を用いたものであるが，長軸一側面に縦長の切損面（ないし切断面）と 1 本の狭長な剥離痕があるだけで，あとは原石面のままで，打面に相当する部分も欠損しているため，コアーとして用意されたのかどうかも不明である。

以上説明してきたように，Ⅲタイプは明らかに「ピエス・エスキーユ」といわれる器種であるが，問題はⅡbとしたタイプの資料で，これが，フレーク・コアーなのか，あるいは「ピエス・エスキーユ」ないしその未成品なのか判断がつかない。

ところで，フレーク・コアーないしピエス・エスキーユといわれる石器の報告は，誠に少なく，特に円筒上層式土器群の遺跡における報告例は皆無であるが，縄文中期のものでは，以下に記す諸遺跡のものがある。

智東B遺跡では，2 種のフレーク・コアーが報告されている。1 つは，第 18 図 9，第 55 図 11 の 2 例で，各々の高さは，5.2，2.0 cmで，平坦な幅広の打面を有し，そこから約 65～70°の角度で，縦長剥片を連続的に生産しているものである。11 例は，円礫を素材にしている。もう 1 つは，円礫を原材として用い，a，b 面どちらかを打面として，鋭角な角度で，剥片をとっているもので，打面転位をして，今迄の剥片剥取面を打面として，旧打面側から剥片を生産している例もある（第 18 図 10，第 25 図 20，21，23～25，第 31 図 10，11，第 55 図 9，10，12，33）。その高さは，5.4～2.9 cmまでであるが，3.0～4.0 cmのものが一番多い。この後者の例は，朝日トコロ貝塚の報告（駒井編 1963）で，「礫核から作られた削器」とされた石器と同一のものである。なお，第 10 図 15，第 12 図 7，第 21 図 15，16，27，第 55 図 5 などの 6 点の石器は，両面ないし半両面加工で，正方形～長方形の形態を呈するもので，与えられた図だけからでは細かい観察はできないが，所謂「ピエス・エスキーユ」という石器に相当するものかもしれない。

朝日トコロ貝塚のトコロ第 6 類の文化層出土品の中で，ここで扱いうるものは，「礫核から作られた削器」（第 33 図 24，第 75 図 10），「剥片から作られた削器」（第 75 図 9，第 95 図 5），そして「粗製石核」（第 33 図 25，第 48 図 11，第 53 図 5，10，第 59 図 3）の 3 種類の資料である。「粗製石核」は，「黒曜石の小円礫を半割し，その結果できた面をそのまま打撃面として，周辺からほぼ垂直に打撃を繰りかえして剥離を行なった」もので，報告者は，「こうした技法は，特定の面を常に打撃面として利用していることと相まって，明らかに，いわゆる石刃技法とつながりをもつものである」（p. 184）と述べている。また，C 4 区石器製造址中の石器の説明の項では，前述した「礫核から作られた削器」と同様の資料について「石核もしくは礫核から作られた削器のグループは，いずれも小円

礫を原材としており，技術的に，……第6類土器に伴って認められる粗雑な石刃技法にやや近い点がみられる。」と述べて，フレーク・コアーの可能性を示唆している。ところで，前述の2点の分厚い「剥片から作られた削器」の内，第75図9に関しては，円礫を原材としたもので，上面に平坦面がある点から，本遺跡のⅡbタイプに近いものであり，第95図5は，所謂「ピエス・エスキーユ」に近いものであろうか。

T 77遺跡で，フレーク・コアーとして報告された，報告第14図66～74の9点の資料は，本遺跡の分類に従い，再吟味すると以下の如くなる。

Ⅰタイプ……68，71

Ⅱaタイプ……67，69，70

Ⅱbタイプ……72，74

Ⅲタイプ……73

なお，66は「礫核から作られた削器」といわれるものに相当する。この中で，Ⅱb，Ⅲタイプとしたものは「ピエス・エスキーユ」であると考えられるが，いずれも，ⅠないしⅡaタイプのフレーク・コアーの残核を利用したものである可能性がある。

伊達山遺跡でも，13例のフレーク・コアーが報告されているが，報告の第7図59，65，67例を除いて，平坦な打面を上部にもち，そこからほぼ全面に亘って連続的に縦長的剥片を生産したもので，その残核の形態は円錐形に近いものが多く，前述した朝日トコロ貝塚でいう「粗製石核」と同種のものであろう。59，65は，扁平で，正面観が横に長いもので，剥片剥離にも規則性がなく，フレーク・コアーであるかどうかも疑問が残るが，59例は本遺跡のⅡaタイプに近いものである。65は，a面左側縁と右側縁下部に細かい剥離があり「ピエス・エスキーユ」かもしれない。67例は，「礫核から作られた削器」に相当するものである。

西股遺跡では，報告の第47図5～10の6点がフレーク・コアーとして註記されているだけで，説明は全くされていない。与えられた実測図と図版から判断すると6点の資料は，以下の2種類に分けられる。

Ⅰ：上面に幅広い平坦な面を有し，これを打面として55±°の角度で，縦長剥片を生産しているもので，横断面は三角形を呈する。……5

Ⅱ：b面側の状態は，9例を除いて不明であるが，a面側にはあらゆる方向からの大きな剥離が全面に入っていて，その後報告図の上下ないし左右の相対する側縁に細かに剥離が入り，その縦断面は，10例を除いて凸レンズ状のもので，図上部においては少なくともジグザグの稜線をなして，a面とb面は鋭角の角度で交っているもの。……6～10

Ⅰタイプとした5の資料は，高さ3.6cm，幅4.5cm，厚さ2.7cmで小形のもので，前述したこの遺跡出土の剥片の大きさの平均値6.6×4.0cmに比べて，かなり小さいもので問題を残すが，一応フレーク・コアーとして考えてよいものである。他方，Ⅱタイプとしたものは，比較的大形のものであるが，剥片剥離に統一性がなく，しかもいずれも相対する面に細かい剥離が入っているもので，フレーク・コアーと考えることは難しい。特に7例は，上下から大きな剥離，左右は細かに剥離が

相対して入ったものであり、この種の資料は今迄繰り返し述べてきた所謂「ピエス・エスキーユ」といわれるものであろうと考えられる。なお、第47図1は、大形ではあるが「礫核から作られた削器」に相当するものである。

以上、通観して判断されることは、本遺跡の分類で、IIa、bとしたものの取り扱いには、まだ問題を残すとしても、それ以外の資料に関しては大きく以下の3タイプに分けられよう。

(A)：朝日トコロ貝塚の報告でいう「粗製石核」

(B)：同様に「礫核から作られた削器」

(C)：「ピエス・エスキーユ」

この3者は、本遺跡で、(B)タイプの資料が欠除する以外は、トコロ第6類および智東B式期、伊達山式、ノダップII式期に共通して認められるセットである。

大井晴男（大井 1965）によれば、「石刃技法とは、連続的に多数の同形の剥片 ―― 石刃 ―― を剥離することを目的とするものであり、石核の一端または相対する両端に打撃面を限り、その周縁に連続的に一定方向からの打撃を加えて剥片を作ってゆく手法である。また、石刃とは、前述の石刃技法によって作られる剥片で、結果として一般に1ないし数条の稜を有し、かつほぼ平行する2側縁を持つ縦に長い形をとる。」（P.4）と定義されている。この定義に照せば、朝日トコロ貝塚でトコロ第6類と共に出土したコアーおよび縦長剥片は、石刃技法と全く同様のもので、得られた剥片も、明らかに石刃と呼ぶにふさわしいと述べている。すなわち、(A)としたものは、大井のいうように石刃技法に近い方法によるフレーク・コアーと考えられる。

(B)とした「礫核から作られた削器」は、前述した通り報告者は、(A)タイプのような粗雑な石刃技法に技術的にやや近いフレーク・コアーの可能性を示唆しているが、(A)タイプのものに比べて、剥片剥取面は限られ、連続的な剥片生産量は少なかったと考えられる。ただしその高さは、(A)タイプと同様か、やや高い。すなわち、(A)タイプの高さは、N 309遺跡では、1.5～3.2cm（平均値2.4cm）で、智東Bでは、(A)タイプが2.0と5.2cm、(B)タイプが5.4～2.9cm（平均値は3.7cm）で、朝日トコロ貝塚では、(A)タイプは2.5～4.5cm（平均値3.5cm）(B)タイプ2.6～3.1cm、伊達山では、(A)タイプ2.1～5.0cm（平均値3.9cm）、(B)タイプは5.0cm、西股では、(A)タイプ3.6cm、(B)タイプ7.0cmである。

この(B)タイプのものが、フレーク・コアーであると考えると、智東Bなどの資料では、その原材となった円礫は、(A)タイプのものに比べて、比較的扁平なものが多いようで、この原材を(A)タイプのように半割（稀に平坦な原石面をそのまま利用する場合もある）して、幅広い平坦面を作らずに、将来の剥片剥取面と反対の面の上部に打面調整的な剥離を入れるだけで、そこからやや鋭角な角度で、剥片を生産したことになる。さらに、このタイプは、打面を転位し、剥片剥取面と打面を逆にして、かつての打面側から剥片生産を行っている例が多いようである。従って、残核としての形態は、(A)タイプとは全く逆のものになる。(A)と(B)タイプの違いは、多分に原材の形状に左右されている可能性がある。なお、本遺跡のIIa、bタイプとしたフレーク・コアーは、(A)と(B)タイプの中間

的なもので，扁平な角礫を原材として，角礫の平坦な原石面をそのまま打面として60～90°の角度で剥片生産を行ったもので，その意味では，(A)タイプに近いが，剥片剥取面は主にａ面ないしｂ面のみで，剥片剥取面は(B)タイプと同様狭いものである。

さて，残る問題は「ピエス・エスキーユ」とした(C)タイプの資料である。「ピエス・エスキーユ」とは，岡村道雄（岡村 1976）によると，

(1)平面形態は，主に四辺形を呈し，剥離痕の連続する縁辺を上下に置いた場合，上下両端いずれにも打面のような平坦部を残さないのが普通である。縦断面と多くは横断面も凸レンズ状をなし，上下縁辺の上面観は波状または丸のみ状を呈する。

(2)素材には，礫核と剥片の２種類があり，礫核利用のものは紡錘形または長方形を呈し，長さは幅の約２倍以上，厚さと幅はほぼ等しい。剥片素材のものは，正方形からやや横に長い長方形の範囲で，薄手で断面は整った凸レンズ状をなす。剥離の進んだものの両面は，うろこ状の剥離面で覆われている。

(3)上下縁辺または両尖端からほぼ平行に剥離痕が入り，両端には細かい砕屑の剥落した痕跡が連続して残され，多くはステップ・フラクチャーを残す。特に，剥片素材のものは，上下・左右と相対して四辺に剥離痕を残す場合がある。

(4)製作技法に関しては，両極打法によって作られている。

そして，この種の石器が石核と異なる点として①この石器より剥離された剥片には使用痕や二次加工がない，②両極打法で，剥片を生産する必要性が説明できない，③とくに剥片素材のものの剥離面の大きさは，半数以上が縦横とも２cm以下で，目的的な剥片を剥離した痕跡とは考えられないという３点をあげている。そして，この種の石器の機能に関しては，細石核説，彫刻器説，楔形石器説などがあるが，岡村は，両端が尖って縦断面が凸レンズを呈すること，両端には製作・使用のためにできた微細なつぶれがあること，従って尖ってさらにつぶれて強くなっている両端が作業縁と考えられることから，「何かを割るための楔」と考えられるとしている。

このように定義にあてはまる資料は，札幌市域で筆者らが報告してきた中では，掻器とか削器と分類した中で，フレーク・コアーの残核を利用したものと説明されているものとか，フレーク・コアーとしたものの内で，打角が鋭角なもの，そして「両面体石器」として仮称してきたものなどが入るかと思われる。特に，Ｔ210遺跡（上野編 1976）で報告した中には，数多くのこの種の資料が入っている。

具体的資料に当たって，この定義を検討すると種々の疑問点が出てくるが，この石器に関しては，検討すべき資料が未整理のため後日改めて述べたいと考えている。

(8) 石　斧

石斧は，１次調査で32点，２次調査で12点の計44点が出土しているが，柄部破片で刃部の形態の不明なものもあるため，ここでは刃部の形態が判別できるもの26点を取り上げ，形態・素材・加工の問題について記述を進めたい。

石質は，緑色片岩21，黒色片岩17，片岩２点と片岩系が多数を占めるが，砂岩，複輝石安山岩，

泥岩，ホルンフェルス，硬質頁岩が各1点あった。

形態をもとに，以下の2類4種に分類できる。

I：両刃的石斧……**188**，**193**，**198**，**199**，**202**，**204**，**207**～**212**，**214**，88，93

II：片刃的石斧…(1)扁平片刃……**191**，94，96

(2)狭長片刃（平のみ型）……**194**

(3)幅のあるもので，刃部は明瞭な片刃ではない……**186**，**195**，**196**，**201**，**205**，**206**，90

1タイプのものは15点である。やや幅広で刃部は両側から砥がれ両刃となっている。刃稜は丸みをもち，一方に片寄ってカーブしている。これらをさらに細分すると，**188**，**193**，**199**，**204**，**207**，**209**，**210**，88，93は，断面が部厚く，いずれも入念に全面を研磨しているため，素材は不明なものが多い。加工は，大方全体を荒く打割した後に，繰り返しの敲打を加えて研磨したものと思われる。なお，**193**は，柄上部に小孔がまばらに拡がった傷がみられ，柄頭は何度も敲打され摩耗しているものである。

198，**202**，**208**，**211**，**212**，**214**の6点は，上記のものに比べるとやや薄手で，**202**，**208**，**211**は板状の素材を焼割りし研磨したもので，半磨製に近い。特に，**208**，**211**は，刃部のみ入念に研磨したものである。

II(1)は，3点のみである。**191**は，非常に薄手の板状の石材を研磨したものである。a面は全面，b面は柄部上部と刃部のみ研磨したもので，刃部はa面と一線を画している。全体形は，柄部と刃部の幅がほぼ同じで長方形を呈する。94，96は，薄い板状の素材の刃部を研磨したもので，94は，b面刃部に再砥ぎした面がある。

II(2)は，**194**の1点で，狭長な片刃石斧である。6.3×1.5×0.9cm，重量12gの小形品で，鋭利な刃部を有する。入念な研磨が全面に施されているため，素材は不明である。

なお，第**14**図**16**，第**39**図**4**は，柄部破片であるが，同様に小形品でありこの類に属していたものかもしれない。

II(3)は，このタイプの中では横幅のあるものである。板状の扁平な素材を用いているが，前者2種に比較すると断面は厚い方である。刃部は片刃的ではあるが，明瞭なものではない。**195**，**196**は，刃稜が丸くカーブしたもので，**195**のb面刃部は面取りしている。**201**は，a，b両面上部に原石面を残していることから，扁平な河原石を素材に用いて刃部部分を主に研磨したことが判る。

2タイプを通じて扁平なものが多いが，これは，板状に剥がれる片岩系を利用しているため，素材が必然的に薄手になることに起因していると思われる。欠損の状況は，刃部が，打撃により破砕しているものと，石斧中央部から真二つに折れたものとがあり，その使用方法に何らかの示唆を与えてくれるものかもしれない。

円筒上層式土器群の遺跡における石斧の報告例は多い。すなわち，中の平第III文化層，サイベ沢第一地点14～7層，4～2層，森越，サイベ沢B，見晴町遺跡などがある。

中の平遺跡では，第III文化層から9点出土しているが，ほとんど折損品で，器面全体を研磨し刃

部は両面からの研磨で鋭いと報告されている。また、打製石斧が出土していると報じられているが、写真図版から判断する限りでは、「石篦」の可能性もある。

サイベ沢遺跡では、14～7層（Ⅴ文化層）で報告された2点は、やや扁平な両刃石斧と扁平片刃石斧である。4～2層（Ⅶ文化層）出土例も、やや扁平な両刃（？）石斧で、一側縁に擦切痕を残している。いずれも、石質は緑泥岩である。

森越遺跡では、数多く報告されているが、大きく分けると(1)両刃石斧、(2)扁平片刃石斧、(3)狭長片刃（平のみ）石斧の3つである。いずれも磨製で、打製石斧とされているもの（第72図2）は磨製石斧の未成品かと思われる。これらの石斧は、擦切手法によるものと「適当な礫を打調や磨研により形を整えた」ものとがある。

サイベ沢B遺跡では、報告された5点はすべて「蛤刃」（両刃？）の石斧と記載されている。

見晴町遺跡では、2点報告されているが、1点はやや扁平な両刃、もう1点は狭長な片刃石斧である。

縄文中期後半に入ると、柏木川3，5号住居址、桧山都上ノ国町大安在B（倉谷・小笠原 1972)、智東B遺跡などと朝日トコロ貝塚、伊達山、煉瓦台、西股の諸遺跡である。

柏木川遺跡3号住居址出土例は、図で判断する限り、棒状の河原石を原材として、その一側縁などに敲打剥離調整したもので、一端に刃部を研磨作出したものである。5号住居址出土の2，3は、磨製石斧で、2はやや扁平な両刃石斧である。大安在B遺跡は、磨製の両刃石斧である。

智東B遺跡では、5点図示されているが、扁平片刃石斧が主体を占めるようである。

朝日トコロ貝塚では、大形の両刃石斧とやや扁平な両刃石斧、扁平片刃、平のみ型の狭長片刃石斧などが出土している。なお、第33図23、第34図1、第48図12、第75図11～13、第76図1、第95図6などの研磨痕のない資料の内で、第33図23、第34図1、第75図11などは石斧の未成品の可能性もあるが、残りのものは所謂「礫器」とか「打製石斧」といわれるものの範疇に入るものかもしれない。

伊達山遺跡では、扁平片刃石斧とやや扁平な両刃石斧が主体を占め、それに大形厚手の石斧が伴う。煉瓦台遺跡では、両刃石斧が数点図示されている。

西股遺跡では、大形両刃石斧と扁平片刃、狭長片刃石斧などがある。

なお、森越遺跡の第68図1，12、第70図11，12、T 77遺跡の第16図97，100、伊達山遺跡第図79、煉瓦台遺跡第17図41、そして西股遺跡の第48図5，7例は、刃部側ないしその両端が欠損したもので、その欠損面には欠損後に入った繰り返しの敲打剥離痕があるもので、破損品を敲石として再利用したものであろうか。

以上通観して判断されるのは、各遺跡共、①大形蛤刃の両刃石斧、①'やや扁平な両刃石斧、②扁平片刃石斧、③狭長な平のみ型の片刃石斧の4種があることになる。現在与えられた資料による限り、土器型式・地域による差は確認されない。ただ、朝日トコロ貝塚出土の「打製石斧」は特異なもので、検討の余地を残す資料である。

さて、本遺跡出土の**193**の資料の柄部上部には、小孔状の傷痕があるものである。この種の資料

に関しては，瀬棚町南川遺跡の報告で，「石器の二次加工具としてのstone retoucherとして再利用ないし副次的利用」したものと述べたことがある（p．160，161）。すなわち，この傷は，扁平円礫を利用した敲石の中央などに認められるものと同一の傷である。

ところで，岩手県大船渡市碁石遺跡（芹沢編 1974）は，後期旧石器時代の遺跡であるが，ここから数多くの台石が報告されている。報告者によると，「比較的ごろっとした礫の平坦面の中央に1～3 mmの深さの凹みをもつものと，重さ3 kgを越えた非常に安定感のある礫の平坦面に6～10 mmの深さの凹みをもつものとがある」と説明され，その「敲打痕は，石器製作に石材を台石にぶつける技法（台石技法）」によるものであるとしている。写真図版でみると，その敲打痕はいずれも比較的深いものが多く，一見所謂「凹石」を思わせるものである。石質は，硬質頁岩である。一方，南川遺跡における扁平な円礫に傷痕のある資料の石質は，角閃石安山岩，緑色片岩，緑色砂岩，玄武岩などで，同様に比較的硬質のものが多いが，しかしその傷痕の深さは浅く，また散発的で，一ヵ所に集中し凹み状のものができるまでに至っていない。すなわち，碁石遺跡で出土した台石の傷痕と南川遺跡などで出土している扁平円礫とか石斧などに認められる傷痕とは，性格の異なった作業行為の結果できたものと考えてよいものである。ただ，後者例がstone retoucherとしても，その使用方法は必ずしも明確にはできない。今後実験的研究などをとおして明らかにしたいと思っている。

(9) 砥石および擦切用石鋸

砥石は，1次調査で16点，2次調査では5点出土している。砂岩系統が多く，中には若干凝灰岩，泥岩なども認められる。1次調査報告の際の分類に従うと，以下の2タイプとなる。

I：長方体に近い形態で，2～4面を利用しているもの。……**224～232**，第**14**図**4**，第**15**図**17**，第**38**図**22**，第**39**図**5**，99～101，第22図55，56

II：円礫の一面のみを利用し，砥面は凹んでいるもの。……**233～235**

Iタイプは，18例である。両面および側面を使用し，平坦あるいはややコンケーブしている。この中でも，さらに部厚いものと扁平なものに分けることができる。前者は，**224**，**226～231**の7例で，ほぼ4面を利用したものが多い。このうち，**224**は小形で上下両面の砥面はコンベックスしているが，側面2面はコンケーブしている。後者の板状なものは，**225**，**232**，第**14**図**4**，第**15**図**17**，第**38**図**22**，第**39**図**5**，99～101の9例である。第**39**図**5**は，一面が大きくコンケーブしているが，あとのものは皆コンベックスした砥面を有するものである。**232**は，長楕円礫の両面に砥面を有するが，その他は原石面である。99は，2次調査の資料であるが，全面をまんべんなく使用しており，一面は中央がコンケーブし，もう一面には数条の溝が長軸方向に認められる。101は，黒色片岩を用いた珍らしいもので，両側縁に鋭利な感じの擦切痕が認められる他，両面にも数条の溝がある。しかし，古い時代の所産かは不明である。2次調査の100，101の2例は，かなり扁平な小形品である。

IIタイプのものは，1次調査のものばかりで，**233～235**の3点である。円礫の一面のみを擦ったもので砥面はいずれも深くコンケーブしている。その他には，何ら加工は認められない。

以上2タイプに分類した以外に扁平な砂岩の全面を研磨した擦切用石鋸が出土している。

1次調査で10例，2次調査で1例の計11例である。全例砂岩製で，石材は砥石同様限定された

ものである。薄い素材を用い，その一端をU字あるいはV字状に研磨したものである。全面を擦っている例が多く，**217**は，その他に両面に各1条の溝が認められる。第**38**図**11**と**223**は，断面が厚いもので，特に**223**は刃部が他に比べて丸みをもったものである。2次調査で得られたものは，第24図15の1例のみであるが，やはり全面に擦痕が認められ，刃部はV字状に研磨されている。

砥石は，今迄述べてきた縄文中期の各遺跡からみつかっている。すなわち，森越，浜荻伏，柏木川，朝日トコロ貝塚，T 77，伊達山，西股の諸遺跡などで，多くは板状ないし断面四角形で，その砥面は浅くくぼんでいる。ただ，本遺跡でIIタイプとした例は，上記の遺跡では検出されておらず，逆に有溝のある例が森越とか柏木川5号住居址などでみつかっている。

また，本遺跡で数多く出土した擦切用の石鋸は，朝日トコロ貝塚のトコロ第6期の文化層から4点（第33図27，第76図2～4）みつかっているだけである。なお，サイベ沢遺跡第一地点4～2層出土品として図示されている第71図3．3の資料は「石庖丁」として報告されているが，その使用面の断面がV字状を呈することからこれも擦切用石鋸の可能性があるのではないかと考えられる。石質は石英粗面岩である。

(10) 擦石および礫器

擦石は，1次調査5例，2次調査8例の計13例が出土しているが，2次調査のものは破片が多い。安山岩系統の石を利用したものばかりで，その中でも特に複輝石安山岩使用例が多い。

擦石を形態，擦面などの点で細分すると以下の3タイプに分けることができる。

I：長楕円形の断面を呈し，全周を打調してその一稜を擦面としたもの。……**236**，**238**，**239**

II：三角形の断面を呈し，その一稜を擦面としたもので，擦面に打調が認められるものもある。……**237**，**240**，104～106

III：扁平な小円礫を素材に，一面あるいは両面に擦った面のあるもの。…102，103第6図2，第22図54，第24図16，102，103

Iタイプは3例で，いずれも1次調査の際の資料である。扁平な石を用いて，周辺を打調し形態を整えている。**238**は，a面右に打割痕は認められるが，擦った痕などは不明である。裏面は剥脱し，一端も大きく欠損している。擦面のできる前段階で欠損してしまったものかもしれない。**239**は，一稜の擦面の他に一面を軽く擦っている。

IIタイプは，5例で，1次調査の**237**，**240**は一稜を擦面としている他には特別な加工は見当らない。106は，長軸の一端に細かい敲打痕が認められる。また，104～106は，いずれも擦面の他に，両側面あるいは一面を軽く擦っている。104，105はその方向が長軸で，106はこれに対し短軸方向であった。

IIIタイプは，前述したI・IIタイプとは性格の異なるもので，扁平な小円礫の上面または両面に擦ったあとのあるもので，2次調査で得られた資料である。遺構から出土した3例はいずれも破片であるが，やはり小円礫の数ヵ所に擦った痕のあるものである。102は，長楕円礫の一面が滑らかであるが明瞭な擦面ではない。

なお，性格の明らかでない礫器が，1・2次調査合せて4点出土している。大まかな敲打痕や剥

離痕は認められるが，形態・加工ともまとまりがなく，その用途も明確ではないため，使用したものかどうかはっきりとしない。

第38図23は，石英安山岩を横から剥いだものでa面の下部には，下からの剥離が認められる。第39図8は，扁平な礫の全周に亘って敲打調整がなされている。一種の敲打器かもしれないが明確ではない。245は，変朽安山岩で両面に大きな剥離が認められる。107は，硅岩の大形縦長剥片で，b面左に剥離が認められる。擦石の未成品かもしれない。

さて，縄文中期における擦石に関しては，その事実関係だけをまとめておくと，円筒上層式土器群の遺跡の中で，まず青森県中の平遺跡では，第III，II文化層から「半円状扁平打製石器」と称された，本遺跡でいうIタイプの擦石が数多く出土している。また，所謂「北海道式石冠」といわれるものも共伴しているようである[注8]。

道内に入って，サイベ沢遺跡第一地点14～7層（V文化層）では，安山岩製の北海道式石冠と共に「手斧様磨製石器」とされた輝石安山岩製の特異な形をした，擦面が広く全面敲打，研磨された擦石（石冠）が出土している。また，同地点5層（VI文化層）でも同様の組み合わせである。なお，同地点4～2層でも，「手斧様磨製石器」はみつかっていないが，「石冠」は出土しているらしい。ただ，これら3つの文化層から出土している「石庖丁」と称せられる石器は，砥石の項で述べた如く，その幾つかは「擦切用石鋸」と考えられるが，図が全く示されていないので判然としないが，中には断面楕円形の擦石も入っているのではなかろうか。

森越遺跡でも，その組み合せは，中の平遺跡第III，II文化層と同様である。すなわち，第69図21，第70図13，第71図2，7，第72図13，14，第73図4，10，11は「北海道式石冠」，第68図13，第71図8，第72図14，第74図4は，擦面以外の側縁にも敲打剥離痕のある断面楕円形の擦石，第69図11，20，第70図14，23，第71図6，第72図3，第73図9，図版85－17，88－8は，この未成品である。ただ，第70図23，第71図6の如く，剥片を利用した薄手のものは，別に検討を加える必要があるが，現在観察しうる資料が少ないので今後の課題にしておく。なお，第76図2は，サイベ沢遺跡でいう「手斧様磨製石器」に類似したものであるが，下部に細い溝が2条巡っている。

見晴町遺跡では，「北海道式石冠」，サイベ沢B遺跡では，側縁に敲打剥離痕のある擦石の破片が出土している。

柏木川遺跡3号住居址，大安在B遺跡などでも，断面楕円形の擦石が出土しており，柏木川の例は，擦面部分のみしか剥離痕がない小形品である。

トコロ第6類，伊達山式の遺跡では，この種の擦石は検出されていないが，伊達山遺跡の第8図91の礫の剥片の側縁に剥離の入った資料は，破片ではあるが，上記の遺跡で断面楕円形の擦石の未成品の可能性があるものとした資料と類似している。なお，T 77遺跡で断面楕円形の擦石が1点出土しているが，これは縄文早期の資料に伴った可能性が高い。

道南の西殿遺跡では，断面楕円形の側縁などに敲打剥離痕のある擦石と主に礫の剥片の長軸一側縁に剥離のある資料が出土している。この後者の例は，サイベ沢遺跡でいう「石庖丁」に類似した点もあり，図だけでは細かい点は判断できないが，擦切用石鋸の可能性もあろう。なお，第48図10

の擦石は小形のもので，敲打剥離痕はないが，側面～側縁は研磨整形されている。また同図8は，棒状石の一端を擦面とした石器であろうか。

すなわち，円筒上層式土器群の遺跡およびその系統を引く柏木川，大安在B遺跡，そして道南の西殷遺跡などにおいては，断面楕円形でその長軸一側面を擦面とした擦石を共通して出土し，それにサイベ沢Ⅶ・見晴式までの段階の遺跡においては，多くは「北海道式石冠」と称せられてきた資料が共伴するようである。

トコロ第6類，伊達山式の遺跡では，この種の擦石は今の所全く検出されていない。

なお，本遺跡で出土している断面三角形の擦石は，縄文早期末～前期初頭に多く認められるものであるが，中期では，他の遺跡ではみつかっていない。さらに，本遺跡でⅢタイプとした扁平な礫の平坦な一面ないし両面に擦り痕がある資料は，擦痕の観察が難しいこともあって，他の遺跡では殆んど報告がないが，注意すべき資料である。ただ，用途は，上述の石冠と称されるものとか，長軸一側面を利用したものとは違うと考えられるので，その形態とか砥石・石皿などとどのような点で異なるのか今後明確にしておかねばならない。

ひるがえって，本遺跡の用途不明の礫器をみると，245例を除いては，この項で述べてきた断面楕円形の擦石の未成品としたものと同様のもので，特に第39図8は左右対称形の石器であるが，その石質が複輝石安山岩製であることも考慮すると擦石の未成品の可能性が高くなる。また，第38図23と107は剥片に剥離の入ったものとした資料と同様のものである。

註5）なお，報告者は，断面楕円形の擦石に関して，長軸両端に特徴的に認められるややコンケーブした敲打痕を刃部と考えているようであるが，これは「北海道式石冠」の中央にある有溝に相当する加工で，その意味する所は決定できないが，柄（把手）部作出などの整形のためのもので，使用部分はあくまでも長軸一側面の狭い面を擦面とした石器である。確かに，擦面が顕著でない例もあるが，これらは大きな剥片を利用したもの以外は，少なくともその未成品であると考えられる。さらに，「すり石」として上記の資料と別の器種として扱われているものも，報告者のいうように自然石の長軸を直線的に打撃し，すりこみで半截し，その側面を擦面としたという記載の中で，自然石を長軸に沿って半截した事実は，筆者らの資料でみる限り認められないことで，最初から何ら加工を加えない扁平楕円形礫を擦り込んでいった結果として，半截されたような半月形の形状を呈するに至ったものかと思われる。すなわち，断面楕円形の擦石の中にも，擦面を作出するに際して，将来の擦面を敲打剥離調整するものとしないものがあり，単に剥離があるなしは，原材の段階で，長軸一側面に直線的でやや平坦な面があるかないかの違いによって左右されるだけであって，ことことから両者を特に区別する理由はない。また，前述した「半円状扁平打製石器」には擦面以外の側面～側縁にも剥離がある点で，上述の「すり石」と型式的には異なるにしても，器種としては，所謂有溝の巡る「北海道式石冠」と共に同一のものである。

(11) 石　皿

石皿は，2次調査の際出土した5点のみである。石質は，複輝石安山岩4点，安山岩1点で，いずれも安山岩系統のものである。一面あるいは両面を擦面としたもので，108，110は上面が深くコンケーブしている。また，108は周辺を面取りしており，109は，礫の両面が完全に平坦になっていて，一部に焼けて黒くなった部分も認められる。108，109は特に大形で，重量もかなり重いもので

ある。

擦石とセットになって使用されたと考えられる石皿の報告例は，誠に少ない。中の平，森越，西股遺跡などで報告されているのみで，いずれも破片であり，また説明不足で，面取りの状況とか大きさ・形態は不明である。

これ以外の遺跡でも，数多く出土していると考えられるが，報告がないのは遺憾である。

なお，石皿と擦石の関係については，札幌市S 256遺跡第2号竪穴住居址状遺構（上野編 1975）の遺構中央から，床面について大形の板状石皿があり，そのすぐそばに断面三角形の擦石と底部位の土器片が，ほぼ原位置を保った状態でみつかっている。しかも，石皿から25cm程離れた所には，42×38cm，深さ13cmの小ピットが穿たれ，この中から粘土の小ブロックと共に炭化材，オニグルミ（20個<），草木類の種子（1個<）が出土している。さらに，隣接した第1号竪穴住居址状遺構の底面に厚く堆積した炭層中からは，オニグルミ殻片（30個<）と共に1個のミズナラの堅果が検出されている。渡辺誠（渡辺 1973 b）のいうように，ミズナラといった落葉性どんぐりはアク抜きが必要であり，そのための製粉具として，この石皿と擦石は用いられた可能性が高いと考えられる。

なお，後述する通り，この種の擦石は，道東北の縄文中期後半の遺跡にはないが，縄文早期末～前期初頭の東釧路Ⅲ式，中茶路式の段階から，縄文前期～中期前半（？）の温根沼，東釧路Ⅴ，多寄式などの押型文のグループ時期においては，道東北部においても出土している。すなわち，前者は断面三角形の擦石，後者は「北海道式石冠」と共に石皿を伴う。この約6,000～3,700年前の時期は，紋別郡湧別町湧別市川遺跡の花粉分析の結果（五十嵐・熊野 1973 b）では，Quercus-Juglans帯の時期に相当し，モミ属，トウヒ属とも激減し，代ってコナラ属とオニグルミ属などの落葉性広葉樹が増加する。さらに，サワグルミ属が2％検出される資料もあり，当時は現在より年平均気温で1℃前後暖かかったといわれる。一方，3,700～2,300年前の縄文中期後半以降，同晩期までの間は，Abies-Picea帯の時期で，モミ属，トウヒ属などの針葉樹が優勢で，Sub-boreal期に相当する寒い期間である。このような気候変化に伴う落葉性広葉樹の北上と南下が，主にコナラ属の堅果類を製粉化するための道具としての石皿・擦石の出土差として現われると大胆に推論することもできよう。

(12) 敲　石

敲石は，1次調査で出土した4例のみである。石質は，第1号竪穴住居址状遺構から出土した第14図2の安山岩を除くと，他は皆硅岩である。河原石の長軸の一端あるいは両端に繰り返しの細かな敲打痕が認められるものである。**242～244**は，かなり大形のもので重量も750～900 gと重い。遺構のものは，長楕円形の河原石の一端に大きな剥離がありその中央が細かな敲打により潰れている。

敲石の報告例としては，中の平，森越，朝日トコロ貝塚，西股遺跡などがある。

中の平第Ⅲ文化層出土例は，1点しか図版に示されていないが，河原石を半截したものでその一端に敲打痕が認められる資料である。また，円形または楕円形の礫の両端または片面に打撃による打痕があるものもあると報告されている。

森越遺跡では，棒状ないし平面観四角形の長軸両端の面に敲打痕のあるもの（第69図19，第71図19，第72図1），柏木川遺跡3・5号住居址では棒状石の一端と側縁を利用したもの（38ページ5，

42ページ6～8），朝日トコロ貝塚，西股遺跡では，棒状および四角形の一端の面に敲打痕のあるもの（各々第34図2，第95図7と第47図4，第49図4）が出土している。いずれも，その使用面は繰り返しの敲打で潰されたような状態で，平坦になったり丸みをもったものである。

なお，石斧の項で述べた通り，森越，T 77，伊達山，煉瓦台，西股遺跡からは，石斧の刃部破損品を利用した敲石がみつかっている。同様の資料に関しては，岩手県花泉町貝鳥貝塚（草間・金子 1971）の報告書では「磨製石斧が使用によって破損（石斧が輪切状に折れたもの）した場合，敲き石と類似した使用目的に更に利用された」（P.78）と述べている。

ところで，本遺跡からは出土していないが，所謂「凹石」といわれる石器が，朝日トコロ貝塚，伊達山遺跡などで出土している。いずれも，石質は砂岩である。この石器も，その用途は明らかにされていないが，石斧の項で触れた，台石とかストーン・リタッチャーといわれる石器と共に，今後その性格を究明していかねばならない器種型式である。

(13) 石　錘

1次調査の発掘区より，複輝石安山岩製の有溝石製品が出土している。大きさは，12.1×8.5×4.8cmの分銅形をした部厚いもので，全面を軽く研磨している。両側面および下面に溝が巡り，a面中央に窪みが認められ，重量は700gである。漁撈用の錘の一種と考えられる。

類似の資料は，朝日トコロ貝塚Cトレンチ第2層（トコロ第6類）から，側面に有溝を巡らしたもの（第53図18）が出土している。石質は，砂岩で重量は135gである。

なお，サイベ沢遺跡第一地点14～7層とか森越遺跡などでは，軽石製の上部に細い溝を巡らし，把手状のものを作出したものが出土している。多くは，下部が大きく拡がり，その底面は平坦なものであるが，森越遺跡の第72図5は，棒状の素材のやや上部に溝を巡らしただけのものである。森越遺跡の報告者は，これに対して「浮子」という呼称を与え，漁撈用の浮きの可能性を示唆している。

また，煉瓦台遺跡でも，「石棒」とされた長軸両側面に面取りのある楕円形の石器が報じられている（第18図1～6）。石質は安山岩製で，「体部には敲打調整の痕跡が認められる」と報告されている。類似のものは，本遺跡の197の資料があり，丸棒状に研磨調整されているが，下端を欠失する。石質は，片岩製である。これらの資料は，縄文中期の石棒としては細く短いもので，特に煉瓦台遺跡の例は，恵山貝塚などで特徴的に認められる「魚形石器」（名取 1960）と同種の石器ではなかろうかと考えられる。

すなわち，以上の資料は，いずれも漁撈と関連した石器と考えられるものばかりである。

ところで，一般に「礫石錘」とか「打欠石錘」といわれる扁平自然礫の両端を打欠いただけの資料は，上述の遺跡からは殆どみつかっていない。管見の範囲では，中の平第II文化層，森越，大安在B遺跡と函館市天祐寺貝塚で認められるぐらいである。この「打欠石錘」は，道内においては，出土量に差がありつつも，縄文時代全般に亘って出土するものである。しかし，その分布は北日本に偏っているようである。この「打欠石錘」は，漁網用の錘の一種と一般に考えられているが，この種の見解に対しては，古くより渡辺誠（渡辺 1963，1973 a），田中熊男（田中 1963 a，b）らにより，打欠石錘は漁網錘と断定はできないという意見がある。田中は，広く現用漁具付属錘との重

量比較結果から，「漁網との関係のみに止まらず広く，漁具として」（田中 1963 b，p.52）の用途も考慮せねばならないと述べている。また，渡辺は，小林行雄氏の「縄文式時代の網漁の問題は，彼等の集団生活の発展と関連して」いるという意見を引用し，打欠石錘の重量が 100 g 前後で重いものが多いが，この重量は土錘の発達段階に比較すると弥生時代後期に相当し，かなり発達した，多くの人数が共同作業として行なう網漁に用いられる錘の重量に対比されるもので，果たして多くの打欠石錘の出土する北海道の縄文早期の社会体制が，このような網漁を相容れ得たものであったかどうか疑問であるとしている。そして，「礫石錘＝漁網錘という想定は論拠不確実とみなさざるを得ない。むしろ共同体社会体制の発展の度合，立地景観，技術史等の見解よりすれば，土器片土錘をもって漁網錘の初現形態とする方が妥当で」あるという意見を述べている（渡辺1963，p.1）。ただ，道内においても，この「打欠石錘」の中には，20～40 g の軽量で，「切目石錘」とか土錘に近いものもあり，立地とか時代を考慮しながら，今後十分再検討する余地もあろう。

なお，1次調査で発掘区から1点虫喰石が出土しているが，詳細は未報告なのでここで新めて報告する。瑪瑙製のもので，2.5×2.5cm の正三角形の平面観で厚さ 1.4cm の三角柱状のものである。側面に 0.7×0.5cm の小穴があいているが，次第に潰れたようになって他方へ通じている。その他は，何ら加工が認められず回りはすべて原石面である。重さは，16.4 g であった。

この種の有孔の自然石が，明確な共伴関係をもって出土する事実が分かっているのは，縄文中期では，岩内郡岩内町東山遺跡第2地点第3層（大場・桐井 1958）だけである。ここでは円筒上層 b ～ d 式，トコロ第6類土器などに伴ったものである。ただ，未報告の円筒上層式土器群の遺跡では，特徴的にかなり出土しているらしい。

また，本遺跡では，1次調査において，半欠品で全体形がわからないが，直径 7.5cm，厚さ 0.85 cm の，円盤上に焼き上げた土製円盤が出土している。重量は，現存部分で 23.5 g で，本来 47 g 程であったと考えられる（第 **50** 図 **307**）。さらに，石狩郡石狩町上花畔M 51 遺跡（上野編 1974）では，N 309 遺跡と同一砂丘上に立地し，しかも同時期の遺跡であるが，ここからも土器の底部片を利用した（？）土製円盤の¼程の破片（報告第 47 図 17）が出土している。

これらの有孔自然石とか，土製円盤も，漁撈用とは限らなくても，「錘」として，何らかの用途に利用された可能性があるもので，今後注意を払うべき資料である。

(14) 異形石器

2次調査の第 14 号ピットから，黒曜石製の用途不明な石器が1点出土している。側縁加工で，一部を欠損しているが側縁に2～3個のノッチを入れており，ノッチにより作出された突起先端は丸みを帯びている。正面観は彎曲した形を呈する。

さて，このような両側縁にノッチを数個入れている石器は，東北から北海道にかけて出土しており，「異形石器」または「鋸歯状異形石器」として報告されているが，その出土例は少ない。異形石器と称されたこれらの石器は，数個の突起を有するという共通部分をもとに，以下の2タイプに大別される。

Ⅰ：側縁加工で，長軸の両側縁あるいは一側縁に連続してノッチが数個入れられている。また，

正面観は全体に彎曲している例が多い。

II：ほとんどが両面あるいは半両面加工で，両側縁にノッチを入れることにより，ほぼ対称形の突き出しを作出し，物の形を表わしたものであって，所謂「石偶」と呼ばれるものである。

Iタイプに属する異形石器の出土例が報告されている遺跡は，管見の範囲で，中の平遺跡，青森県北津軽郡金木町妻の神遺跡（山道・藤田ほか 1975），同八戸市是川遺跡（保坂 1972），貝鳥貝塚，秋田県鹿角郡十和田町大湯内野遺跡（奥山・大里 1971），青森県弘前市十腰内遺跡（今井・磯崎 1968）の6遺跡である。

中の平遺跡からは，第II～III文化層（円筒上層，大木系・榎林式土器文化層）から出土したものが1例報告されている（報告図版21下段左から2つ目）。硅質頁岩製で，両側縁にノッチを2個づつ入れた側縁加工である。大きさは6×3×1.5cmで，図からみると下部を欠損しているようである。報告図の左側縁の突起は尖っているが，右側縁のものはそれに比べて浅く丸い。

妻の神遺跡からは，縄文晩期の土器に伴出して1例報告されている（報告図49－7，PL.57）。硅質頁岩製で，一端を欠損しているため全体形は不明であるが，側縁加工で両面に素材面を残している。図a面左の側縁にのみ約1.5cm間隔で4個のノッチが入れられており，正面観は側縁がく字形に彎曲している。ノッチにより作出された突起は0.7cmの長さで，先端は鋭利である。

大洞B～A′式土器期の是川遺跡でも1例報告されている（報告P.80，上段右4）。黒曜石製で，大きさは6.4×2.4×0.7cmである。両側縁に4～5個のノッチを入れ，それによってできた突起は，妻の神遺跡同様鋭利なものである。長軸の一端にもやはり短い突起が認められ，もう一端は斜め方向に細長く突起が作出されている。先端は鋭利である。

貝鳥貝塚では，「鋸歯状異形石器」として2例報告されている（報告図27－1，2）。図27－1は，石質が不明であるが13.5×3×1.2cmの大形品である。側縁加工で，両側縁に6ヵ所抉りの深いノッチが入っており，それによってできた突起はやや太く丸みを帯びている。長軸の一端につまみが作出されており，一側縁は彎曲している。報告者は，ノッチを入れていることを除くと形態的には縦形石匙によく似ていると述べている。図27－2は，大きさが7.7×2×0.2cmと，前者に比べて小形である。やはり側縁加工で，図右側縁に3個，深いノッチが入っているが左側縁のものは浅い。左側縁は彎曲している。

縄文中期末～後期初頭の土器群が主体を占める大湯内野遺跡からは，「鋸状石器」として報告されたものが1例ある（報告第13図25）。石質は不明であるが，7×2cmの大きさである。両側縁に3個ノッチを入れ，上部にはつまみを作出している。加工は，ノッチ部分のみで，つまみの部分だけ両面加工である。加工・形態的に，貝鳥貝塚の出土例と共通点がある。

十腰内遺跡からは，晩期初頭の第II群土器に伴って1例出土している（報告Fig.129—71，PL.79－222）。両側縁に各1個の尖った突起を有し，長軸下部は丸みをもっている。左右対称形で，全面に精巧な加工を施しており，IIタイプの「石偶」といわれるものに含まれる資料であるかもしれない。

以上Iタイプとされるものは，両側縁あるいは一側縁にノッチが数個入っているもので，加工はほとんどが側縁加工である。大きさは，全長5～7cmが平均で中には13cm以上のものもある。貝

鳥貝塚，大湯内遺跡の例は，石匙と似た形態で長軸上端につまみを有するが，その他のものには認められない。ノッチを入れることにより作出された突起は，鋭利なものと丸みのあるものに大別された。全体としてみると，ノッチの入れ方などには共通性が認められるが，形態としては定形的ではない。本遺構のものは，正面観が全体に彎曲する点と，両側縁に側縁加工でノッチを数回入れているなどこのＩタイプに該当するが，やや小形品である。

側縁に多数のノッチを有する石器としては，北九州北部に主として分布する石鋸（芹沢1965）と呼ばれる石器が挙げられるが，「全て小形・薄身の製作であること，片がわにだけ念入りな歯列をつくりだしていること，側縁が直線的であること」（P.426）など，その特徴は，前述したものとは明らかに違い，サイド・ブレードとして使用されたものと考えられている。

Ｉタイプに分類したこれら石器のノッチは，使用のためのものなのか，また使用するためのものならばこれら多数のノッチを必要とした用途とは何であるのか現在の所不明な点が多く，儀礼的な石器としての考慮もできよう。時代的には，管見の範囲では縄文中期後半～晩期に亘って認められ，特に晩期に多く見受けられるようである。

IIタイプのものは，ノッチというよりも突起を作出することにより何らかの物体を形づくるもので，所謂「石偶」と呼ばれるものである。Ｉタイプに比べて，ノッチの数は限られており，一側縁に多数のノッチを有することはない。加工も，Ｉタイプに比べて精巧で両面または半両面加工のものが多い。これら「石偶」に関しては，須藤隆（須藤 1974）が二枚橋遺跡出土の打製石偶に関連して，東北地方および道内の遺跡の資料について，考察を加えているのでそちらを参照願うことにして，ここでは触れない。

（土田亜佐子・上野　秀一）

第２項　器種セットについて

円筒上層式土器文化とトコロ第６類，伊達山式土器文化との石器の器種組成の相異点と類似点，そしてそこから導き出されるであろう文化的関連性および生業上の問題に関しては，手稲前Ⅲの紅葉山砂丘上に隣接して位置するＮ 293 遺跡（上野編 1974）とＮ 309 遺跡の一次の報告書（上野・高橋編 1975）において，明らかにしようと考えつつもついに今迄宿題としてそのまま触れずじまいにされてきた問題であった。今回，道内を中心とした縄文中期の遺跡の石器群を概観し，その責任の一端を果たしえれば幸と考えている。

さて，前項において，各器種毎に縄文中期の石器群について事実関係を整理し，その幾つかに関しては検討を加えてきたが，ここではそれらの各遺跡の石器群のセットの問題について触れてみたいと思う。

第 10 表および第 11 表のＴ 77 遺跡のグラフは，道内の縄文中期の遺跡の中で，比較的多くの資料が報告されている遺跡の石器群を百分比累積グラフに[注6]して示したものである。

森越遺跡のデーターは，道南の円筒上層ｂ～ｄ，サイベ沢Ⅶ・見晴町式の時期で，取扱った資料は第II，III群土器期の主に竪穴住居址出土の 163 点の石器群を一括したものである。ただ，この報

告書で図示されたものは，遺構に関係をもった資料が主体で，発掘区の資料に関しては殆ど報告しておらず，その量はダンボール箱で70個を超えるといわれる。従って，これらの資料は，竪穴住居址覆土の石器群の組み合わせを示しているだけで，発掘区を含めた遺跡全体の傾向を読み取るには若干問題があろう。また石斧などの大形の石器は，発掘区の資料がかなり入っているという偏りもある。朝日トコロ貝塚のは，第6類土器に共伴した資料で，Aトレンチ第6層，Bトレンチ第9層，Cトレンチ第1，2層，D，Eトレンチ第4層，Fトレンチ第7層の主に貝層出土の図示された資料117点を用いた。なお，この文化層からは，これ以外にも約50点の石器およびその破片が出土しているが，実測図のないものに関しては型式認定上で誤認が起きる可能性があるので除外した。T 77遺跡は，道央北部にあって，トコロ第6類を主体とし，それに若干数の縄文早期の土器を伴うもので，図示された点数は119点である。伊達山遺跡の資料は，伊達山式に伴ったもので，図示報告されたものは93点である。これ以外に，1,000点近い黒曜石を主体とする石片が出土しているらしい。いずれも発掘区出土のものである。西股遺跡のものは，遺構内外から出土したノダップII式に伴ったとされ，図示報告された209点を対象とした。なお，これらの遺跡の器種型式名で，明らかに間違いと思われるものが各遺跡であり，それはすべて訂正して数値化している。

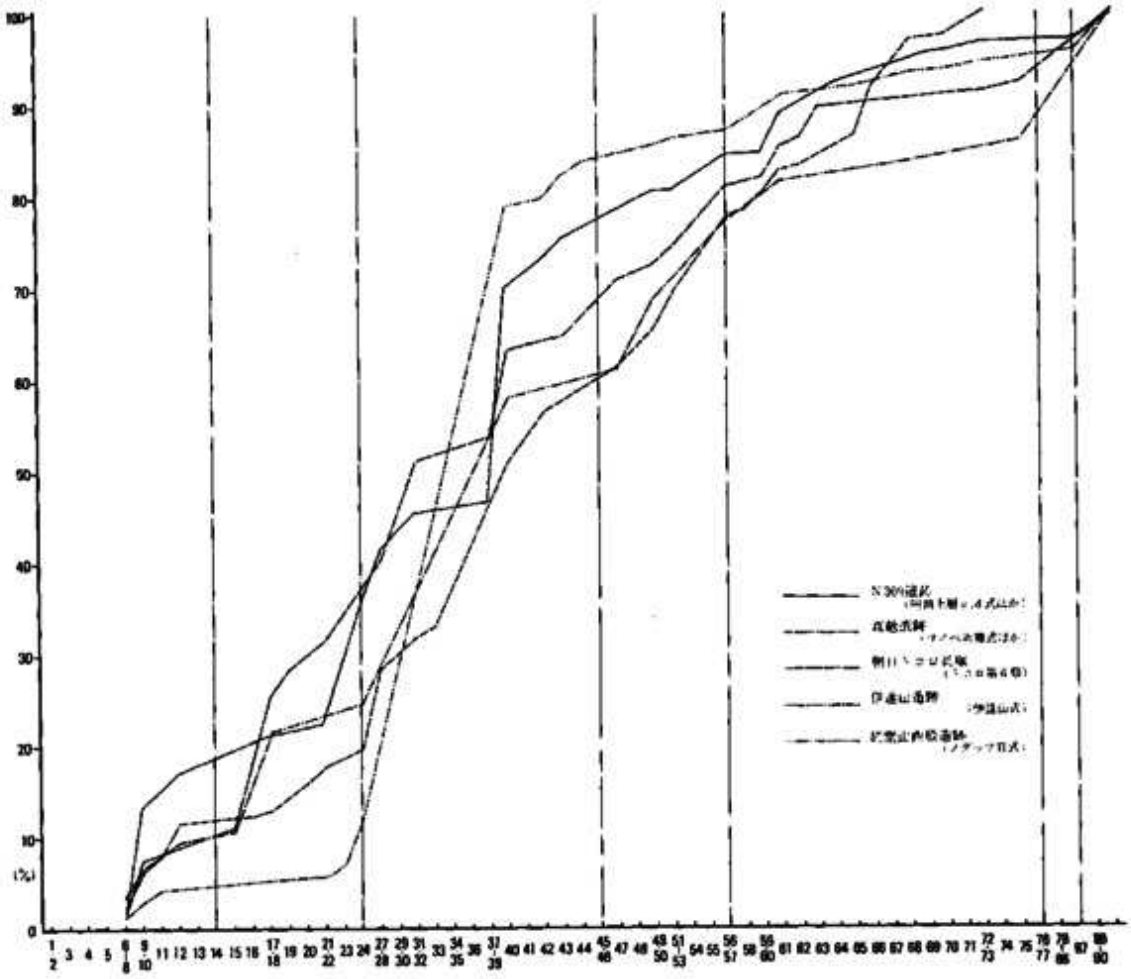
N 309遺跡の資料は，1・2次調査の遺構と発掘区出土資料を合せた479点[注7]を対象にしたもので，その土器型式は円筒上層c～d，サイベ沢VII・見晴町式などの円筒上層土器群を主体として，それにトコロ第6類などの土器を伴っている。

註6）第10，11表を作るに当たって用いた石器分類基準表は，瀬棚南川遺跡の第15表である。しかし，本表は主に縄文晩期～続縄文期の資料を比較検討するために用意されたため，それ以外の時期の資料で，この分類にないものとか，中間的なものが多くあって，本来新たに改訂されたテーブルを提示しなければならないが，今回は，種々の事情で第15表をそのまま援用する。

註7）この中には，2次調査の第12号ピット出土の性格不明の未成品，1・2次調査の遺構および発掘区出土の使用痕のない単なる剥片は含まれていない。

1～14までの石鏃をみると朝日トコロ貝塚と伊達山は，各々7.7，9.6%でほぼ同じグラフを描き，森越はAVIIIタイプがやや多く全体で11.7%で，それらの上にくる。本遺跡は，石鏃が17.1%と高い比率を示し，特にAVI，VI′タイプが異常に多い。他の西股，T 77は，各々4.3，2.5%で異常に低い比率である。なお，森越遺跡の石鏃の出土率は低いものであるが，これは前述した通り，資料的にやや問題があるためかもしれない。すなわち，N 309遺跡のような数量比が円筒上層式土器群の様相を代表しているとみることもできよう。ただ，そのタイプとしては，道南，東北地方北部の遺跡では，AV～V″タイプとした狭長のものが多いようである。

15～18の石鋸に関しては，朝日トコロ貝塚，T 77と伊達山では，各々17.9，12.6，11.9%で高い比率を示し，N 309，森越は各々4.2，1.2%でかなり低く，西股では全く出土していない。なお，石鋸は，智東Bでも9点出土しており，やや高い比率を示している。また，その大きさも，森越，智東B，朝日トコロ貝塚などの資料は6～8cmの大形の例が多いが，N 309，浜荻伏，柏木川，T 77，



第10表　N 309遺跡と縄文中期の遺跡の石器百分比累積グラフ

伊達山の例は，4～6cmのやや小形のものである。なお，東北地方北部では，この器種型式は検出されない。

19，20の石槍という器種は，森越と朝日トコロ貝塚，T 77で認められるが，器種型式の定義が曖昧なため，他の遺跡からは明確には抽出できない。また，21～23の石錐は，森越，N 309，朝日トコロ貝塚，T 77，西股などで出土しているが，その比率は1.3～3.4%で全体に低いもので，検出されている遺跡数も少ない。

25～36のナイフ状石器については，25，26の小さなつまみのついた「縦形石匙」が，森越，N 309，朝日トコロ貝塚の3つの遺跡では，5.8～8.6でほぼ等しい。しかし，朝日トコロ貝塚例は，縦長剥片の素材の形状を殆ど変えず，明瞭な刃部作出をしていないもので，同様な資料は智東B遺跡でも出土している。T 77，伊達山，西股の諸遺跡では，このタイプの石器はみつかっていない。31，32の「横形石匙」は，石神遺跡（円筒上層c式），中の平第III，II文化層，森越，見晴町遺跡の東北地

方北部から道南の円筒上層ａ～ｅ式までの遺跡で若干数みつかっているだけである。29，30，36の小さいつまみのない両面ないし片面加工のナイフ状石器は，朝日トコロ貝塚で13.7%とやや多く，森越，N 309，T 77は各々3.7，5.3，3.4%で低い。ナイフ状石器全体では，森越，N 309は13.5と11.1%でほぼ等しく，朝日トコロ貝塚は22.2%とやや高い。伊達山，西股では，明確なタイプのナイフ状石器と考えられるものは検出できないが，西股遺跡においては，150点の剥片を分類した中でＩタイプとしたものは，ナイフ状石器の可能性があり，その比率は5.7%を占める。

37～40の削器および使用痕のある剥片は，西股で67%で極端に高く，伊達山，N 309，T 77が各々33.3，23.4，21.8%でそれにつづき，森越で17.8%，朝日トコロ貝塚で9.4%でかなり低い。ただ，この数値は，使用痕のある剥片を含めた数字のため，この資料を報告者によっては全く報告していないことも考えられるので，正確な傾向を示すものではない。削器だけを抽出すると，森越，N 309，朝日トコロ貝塚は，各々8.9，4.6，5.6%でほぼ同比で，西股だけが26.8%でかなり高い比率である。なお，T 77遺跡では11.3%でやや多いが，これは使用痕のある剥片の報告例が少ないためかと考えられる。伊達山は０%で，ナイフ状石器と同様未検出である。なお，このように削器の量が少ない傾向は智東Ｂ遺跡でも認められる。また，横長剥片を用いた削器が，森越，N 309，西股（？）などで，少ないながら出土している。

92～94の剥片に関しては，表には示していないが，西股遺跡で確認された**A**，**B**２者のグループで分けると，T 77，伊達山，そして資料は少ないが煉瓦台でも**A**グループのものが主体で，森越，N 309，智東Ｂ，朝日トコロ貝塚などでは両者のグループがあり，ナイフ状石器，削器，縦形掻器などは**B**グループの剥片を主に素材にして作られている。

41～43の扁平石核（フレーク・コアー）は，グラフでは，N 309，朝日トコロ貝塚，T77，伊達山，西股各々2.7，7.7，7.0，14.0，4.3%を示しているが，この中にはピエス・エスキーユといわれる器種も含まれているので，それを抜くと1.8，7.7，5.1，12.9，0.7%になる。すなわち，朝日トコロ貝塚，T 77と伊達山遺跡では，フレーク・コアーが比較的多くみつかっていることになる。共に，前述したタイプ分類の(A)タイプの「粗製石核」が主体を占める。なお，智東Ｂ遺跡では，(A)タイプ２例に対して，(B)タイプの資料が12点出土し，特異な傾向を示している。

41～43の掻器および石篦は，森越，N 309，T 77，西股では，4.8～6.8%でほぼ等しいが，朝日トコロ貝塚では1.7%，伊達山遺跡では０%で検出されていない。縦長と円形との比率は，N 309で各々4.1，2.7%，T 77で各々2.5，1.7%，西股で各々1.0，2.4%で，前２遺跡では縦形が多く，後者はその逆である。なお，西股遺跡では，43の石篦が1.4%認められる。東北地方北部では，41，42の掻器といわれる器種は検出されず，中の平第Ⅲ，Ⅱ文化層で，「石篦」がみつかっているだけである。

45～55の石斧に関しては，総数では森越，朝日トコロ貝塚，伊達山は，各々21.5，16.2，19.3%を示しやや高い比率であるが，N 309，T 77，西股では各々9.2，11.8，3.5%で，この３遺跡はやや低い。タイプ別にみると，45，46の大～中形の両刃石斧は，森越，朝日トコロ貝塚は各々4.9，6.0%でやや高く，他方N 309，伊達山は各々3.1，3.2%，T 77，西股では各々1.7，1.0%の比率であ

る。48の扁平片刃石斧は，伊達山，森越で各々7.5，4.3%でやや高率であるが，あとは1.0～2.1%で低い。49，50の狭長片刃石斧は，伊達山ではなく，一方森越で3.7%で多いが，あとは0.5～1.7%で低いものである。なお，確認された限りでは，サイベ沢第一地点7層と森越などで擦切手法が認められる。しかし，石斧の素材，製作技法については，殆ど記載されていないのが多く，実体は不明である。

59～61の砥石は，T 77は5.9%とやや高いが，N 309，朝日トコロ貝塚，伊達山では，4.3～4.4%で等しく，森越が3.1%，西股では1.9%で少ない。また，62の擦切用の石鋸は，N 309と朝日トコロ貝塚で各々2.3，3.4%みつかっているだけである。

63～67の擦石は，森越遺跡で，64，65タイプのものが各々3.1，5.5%みつかっている以外は，N 309，西股で，64タイプのものが各々0.6，2.9%あるだけである。朝日トコロ貝塚，伊達山では1点も検出されていない。なお，N 309では，63と66タイプのものが各1%，T 77では，66が2.5%みつかっている。すなわち，東北地方北部から道南の円筒上層b～e式までの遺跡では，64と65タイプの両者を伴い，判断される限りで，道央部の円筒上層c～e式とその系統を引く柏木川，大安在B，そして道南の西股遺跡では，64はなく，65タイプの擦石のみ伴うようである。

68～70の石皿は，森越，N 309，西股で各々0.6，1.4，0.5%で，低い比率でみつかっているが，未報告の例が多いように思われ，全体のパーセンテージはN 309の比率位までは上がるものと考えられる。また，中の平遺跡第II文化層でも石皿は出土している。

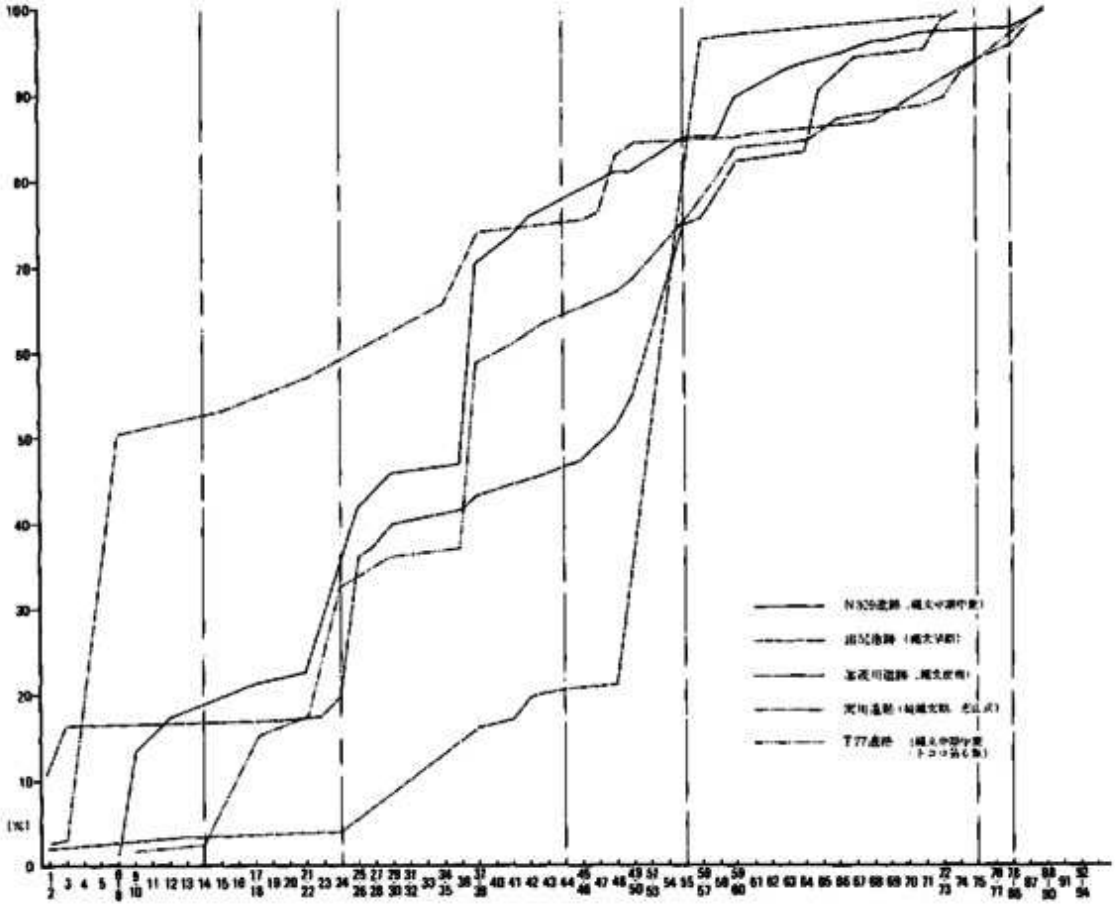
71～74の敲石は，71タイプが，森越，朝日トコロ貝塚，T 77で各々2.5，1.7，1.7%，N 309，西股で各々0.8，0.5%出土している。また74とした「凹石」は，朝日トコロ貝塚，T 77，伊達山で各々0.9，2.5，2.2%の比率で出土している。

なお，有溝石製品，浮子，石錘などの漁撈と関係ある石器は，中の平，サイベ沢第一地点，森越，N 309，大安在B，朝日トコロ貝塚，天祐寺，煉瓦台など海岸線に近い所に立地する遺跡からみつかっており，その幾つかの遺跡では，貝塚を形成している。

以上，縄文中期の6遺跡を中心に各器種型式の違いとその数量的差を説明してきた。しかし，各遺跡とも若干ではあるが他の時期の資料が混入していたり，全点報告されていないものがあり，特に「使用痕のある剥片」の報告数は，各報告者の恣意的選択によって，実数に近い数字を提示できるものと，それが不可能なものがあり，類似したセット関係をもちながらも，百分比累積グラフでは，違ったラインを描いている。

さらに，説明を単純にするために，今まで縄文中期の遺跡に関して，遺跡の性格とか立地を無視して比較検討してきた。当然，これらの条件によって石器群の組成そのものも変化を示しており，さらに北海道は，東北6県と新潟県を合わせた広さをもち，生態系においても，道東北部と道央・道南とでは大きな違いがある。

上述のような種々の問題を含む遺跡ばかりであるが，一応森越，N 309遺跡を円筒上層b～e式の遺跡，朝日トコロ貝塚，T 77遺跡をトコロ第6類の遺跡，伊達山を伊達山式の遺跡，西股を道南に中心をもつ「天祐寺式」とか「ノダップII式」の遺跡の標式的なものと考えると，石鏃と石銛は，



第11表　N 309遺跡と縄文中期～続縄文期の遺跡の石器百分比累積グラフ

円筒上層式とトコロ第6類，伊達山式とでは，前者は石鏃が多く，逆に後2者は石銛が多い。ノダップII式は，石銛はなく，石鏃も少ない。ナイフ状石器は，円筒上層式には，側縁ないし片面加工の小さなつまみのついたナイフ状石器（縦形石匙）を多く伴い，さらに道南の遺跡では，横形石匙も共伴する。一方，トコロ第6類，伊達山式，ノダップII式段階に入ると，全く伴わないか，あっても刃部調整が殆どないものである。両面加工，片面加工のつまみのないナイフ状石器は，円筒上層式とトコロ第6類には認められるが，伊達山式，ノダップII式では不顕著である。削器は，伊達山式を除いて，各土器型式の文化に伴う。剥片生産およびフレーク・コアーの問題は，コアーに関しては，円筒上層式，トコロ第6類，伊達山式，ノダップII式共に，「粗製石核」と「礫核から作られた削器」の2種を共通して含むが，出土率は，トコロ第6類，伊達山式に多い。剥片は，3～5.5cmと5.5～11cmの2種の縦長剥片をT 77，伊達山遺跡を除いて生産しているようである。掻器，石箆は，円筒上層式の中で東北地方北部と道南南部の遺跡と西股で，「石箆」を伴う以外は，縦形と円形掻器だけで，それらは各文化に共通して含んでいる。しかし，伊達山式では，この石器は検出でき

ない。

石斧は，特に傾向性をつかまえることはできず，全体として前述した4タイプの資料がセットでみつかっているが，今のところ，伊達山式では狭長片刃石斧はない。擦石は，前述した通りで，東北地方北部と道南の円筒上層式には，北海道式石冠と断面楕円形の擦石を，道央部では後者のみを伴う。トコロ第6類と伊達山式では未検出である。

第11表は，N 309遺跡とT 77遺跡の資料に，縄文早期の釧路市沼尻遺跡（沢・西 1973），縄文前期の空知郡栗沢町加茂川遺跡（岩崎・宇田川・本田・河野 1966），続縄文期初頭の瀬棚郡瀬棚町南川遺跡の資料を百分比累積グラフに入れて，縄文中期の石器群組成と他の時期の違いを示したものである。

一見して判断されることは，時代と共に剥片石器の占める量が，次第に増してくるということである。器種毎にみていくと，石鏃は，南川が極端に多い。これは，南川の資料が墓壙の副葬品が主体であることにも原因しているかもしれない。有柄の石銛は，縄文早・晩期にはなく，中期と続縄文期初頭にあるだけである。ナイフ状石器は，縄文早期では検出されないが，他の時期には，型式上の差がありつつもほぼ同比率で存在する。削器は，各時期あるが，掻器とした器種型式は，続縄文期初頭ではみあたらない。石斧は，縄文早期では少なく，一方続縄文期初頭では，大形ないし柱状片刃石斧がはじめて出現する。石錘は，縄文早期に異常に高いパーセンテージを示す。その他の器種に関しては，特に傾向性はなく，型式上の変遷をみせながら共通して含むようである。

縄文早・前期の石器群組成は，まだ細かな検討を行なっておらず発表できる段階ではないが，縄文早期から前期初頭は大きく3つの段階に分かれる。すなわち，

(I) 朝日トコロ貝塚Fトレンチ C 4，C 5区第8，9層（第14類上器）の段階（石刃鏃文化）

(II) 函館市住吉町遺跡（児玉・大場 1953），釧路市沼尻遺跡，白老郡虎杖浜村虎杖浜遺跡（大場・扇谷・竹田 1962），釧路市STV遺跡 J－2，3号住居址（沢編 1972），同市東釧路遺跡第I地点（沢・西ほか 1971）の段階（貝殻条痕文・無文）

(III) 日梨郡羅臼町ソスケ遺跡Ⅳ層（沢・本田・西・大沼 1971），網走郡女満別町中央B（本郷）遺跡A竪穴（大場・奥田 1960），浦河郡浦河町西舎遺跡住居址（黒崎・橋本・中田・高橋 1972），夕張郡夕張町タンネトウ遺跡B発掘区（野村 1962）の段階（東釧路Ⅲ式・中茶路式）

また，縄文前期は，温根沼・朱円・多寄式などの押型文土器のグループと春日町式グループ，そして静内中野・加茂川式のグループの3つの土器群があるが，各グループ共それに伴う石器群は類似したもので，組成上で特に大きな差はない。ただ，この押型文土器の中で，平底の多寄式，神居式，トコロ第10類は，道東北域における縄文中期前半に位置づけられる可能性もある（高橋・小笠原 1976）。なお，縄文早・前期の石器群のあらましは，札幌市S 256遺跡（上野編 1975）のp．61～65に触れているので併読して頂きたい。

さて，『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡（上）』の報告が出版されたのは，昭和38年（駒井編 1963）である。この中で，朝日トコロ貝塚の各トレンチにおける第6類期の貝層出土の豊富な動物遺存体と石器を関連づけて，トコロ第6類期における生活基盤と狩猟・漁撈の問題をかなり具体的

に明示し，それと同時に，石器群の百分比累積グラフを用いることによって，他の遺跡との比較検討を行ったという点で，画期的なものであった。これをうけて，昭和40年に吉崎昌一（吉崎1965）は，北海道の縄文文化を概観した中で，トコロ第6類土器および第5類土器に伴出する石器と道南西部地区のそれとは，組成の上でかなり違いをみせるということを述べた。その大要は，①道東部には鏃よりも大形の銛先あるいは小形のナイフともいえる両面加工の石器が多く，逆に道南部に多出するつまみのついたナイフ（石匙）は少なく，両地域の人間集団は，その所有生産器具において一線が画されている。②朝日トコロ貝塚にみられる動物相によれば，海棲獣類が多く，一方道南地方はエゾシカを中心とする陸棲獣類が多く採捕されている。③「だからこうした食糧の差からしめされる生活圏の相違が石器のうえにもあらわれている」（p，51，52）ということであった。

この朝日トコロ貝塚の報告および吉崎の発言は，現在我々が石器群組成を考える上での重要な原点であった。しかし，現在与えられた資料で，吉崎の意見を検討すると以下の問題が指摘できるであろう。それは，吉崎が道南西部地区の石器群としたものが，縄文中期前半に位置する円筒上層a～d式の遺跡群を対象としたものであり，他方トコロ第6，5類としたものは，同中期中葉以降の資料で，明らかに同時代における両地域の石器群の差を比較したものではないということである。確かに，縄文中期における石器群の様相は，土器型式の伝統および時間の枠を超えて，地理的な諸条件に左右される面も指摘できるが，それと同時に時代の趨勢，そして遺跡のシーズンによる棲み分け――「分村・離村など同時期における移動の関係，あるいは季節的な狩漁労の基地としてのキャンプサイトとか，特殊な生産址（石器製作址とか製塩址など）もあった」（戸沢1970，p，109）という事実も考慮せねばならない。さらに，前項の「石皿」の所で述べた如く，3,700年前――縄文中期中葉を境にして，気候の変異があり，そしてそれに伴う特に植物群の変化があったことも念頭において石器群をみなければならないのである。さらに，魚・貝類に関しては，貝塚の研究から，大きく3つの地域に分かれる。すなわち，オホーツク海沿岸（a_1），太平洋沿岸（b_1），日本海沿岸（c_1）の3者（金子1965）の地域は，検出される主要貝類の違いと共に海棲獣類，魚群の回遊する種類の違いにおいても大きな差があるようである。

結局，縄文中期という狭い期間においても，吉崎のいうように，単純に道東と道南西部との2者に分けて考えるだけでは，現実的な理解に達することができない。

結論を先にいうと，北海道縄文中期の石器群は，地域ではなく時期によって大きく2段階に分けられる。

第Ⅰ段階：縄文中期前半の円筒上層a～d式，サイベ沢Ⅶ，見晴町式などの円筒上層式土器群のグループ

第Ⅱ段階：縄文中期後半の時期で，地域によってさらに2つに細分される。

(a)トコロ第6類，伊達山式のグループ

(b)天祐寺，ノダップⅡ式のグループ

この第Ⅰ段階は，現在の与えられた資料では，道南の遺跡が主であるが，高橋（高橋・小笠原1976）のいうように多寄式，神居式，トコロ第10類などの平底押型文土器群が，道東域における縄文中期前半

に位置付けされると仮定すると，この仲間の石器群は，円筒上層式土器群のそれとかなり近い組成を示していることが判る。士別市多寄遺跡（佐藤・近堂 1960）の石器群は，ＡＶ，ＡⅦタイプの有茎鏃と五角形無茎鏃，ＢⅡ，ＢⅢタイプの石銛，ＤＩの石鑿と剝片の一端に尖頭部を作出した錐，ＥⅡの「縦形石匙」，ＥＶ，ＥⅥの片面・両面加工のナイフ状石器，ＧⅡの円形掻器，ＩＩの大形両刃石斧，ＩＶの狭長石斧，ＲⅡのフレーク・コアーと「ピエス・エスキーユ」などからなるもので，またトコロ第 10 類土器を出土した朝日トコロ貝塚Ｅトレンチ第１の遺構内出土石器（駒井編 1963）は，ＡＶ，Ｖ′タイプの有茎石鏃，ＥＶ，Ⅵの片面および両面加工のナイフとＥⅦの関のあるナイフ，ＪＩの打欠石錘２点が出土している。いずれも，円筒上層式土器群の特徴的石器である「擦石」が未検出だという問題はあるが，器種セットとしては極めて類似したもので，明らかに縄文中期前半の様相を示すものである。そして，これらは将来資料が整備されることによって，第Ⅱ段階と同様に円筒上層式土器群は，道南～道央域，平底押型文土器群は，道東北域の２つの小グループに細分される可能性がある。しかも，この第Ⅰ段階における石器群の様相は，前述した縄文前期の石器群と，石鏃の型式上の違いを除けば，かなり近似したもので，両者は同一段階としてもみることもできる。土器型式の変遷においても，少なくとも円筒土器群は，下層式～上層式へと密接な関連をもって変化し，また東北地方北部～道南の円筒土器を出土する遺跡では，下層ａ式から上層ｄ（ないしｅ）式期まで，切れ目なく同一地に居住している例が多い事実から，この期間は両者の文化伝統および生産基盤は，特に大きな変化をみせず推移したという証左をうることもできよう。

すなわち，第Ⅰ段階は全般的に「有茎石鏃」と「縦形石匙」が多く，また「北海道式石冠」とか「断面楕円形の擦石」を特徴的に伴うものである。ただ，平底押型文土器群の遺跡では，「石銛」がやや多く検出され，逆に擦石類が不顕著である。この原因は，文化伝統の違いに根ざすものと考えるよりも，地域上の差異からなる生態系の違いに原因するもので，特に「石銛」に関しては，円筒上層式の土器を出土する遺跡であっても，北にある遺跡程，その出土率が増してくる傾向がある。

第Ⅱ段階とした縄文中期後半の遺跡の内で，(a)グループの中には，石器組成が明確でないトコロ第５類，羅臼式，丸松式などの遺跡も入る可能性がある。

第Ⅱ段階ないし時期の特徴として，まず第１に挙げられることは，石鏃の出土率の低下ということである。すなわち，朝日トコロ貝塚第６類文化の石器群組成の特徴として，石鏃が少なく，石銛が相対的多数を示めるという指摘（駒井編 1963，ｐ．183）があるが，同様の傾向は内陸にあるＴ 77，伊達山遺跡においてもみることができ，西股遺跡においても，「石銛」がないと同時に石鏃の量も極端に低いという事実があり，石鏃の出土が少ないという事実は，縄文中期後半期の一般的様相として捉えることができる可能性があるのである。

さらに，いずれの遺跡においても，典型的な「縦形石匙」といわれる器種型式は殆ど検出されず，僅かに朝日トコロ貝塚において，大形の両面加工のナイフがみつかっただけである。掻器も，全般に低い比率である。そして，石皿とセットになる擦石は，西股遺跡でみつかっている以外，他の遺跡からは全く姿を消してしまう。しかも，唯一の西股遺跡例も断面楕円形のもののみで，「北海道式石冠」はない。

なお，第Ⅱ段階における(a)，(b)の２つのグループは，それぞれ道東北～道央部，道南の石器群組成を代表するものであるが，特に道南の資料は少なく，現状では普遍的事実として細かい差異を提示するまでには至っていない。

以上の説明から，道内における縄文中期の石器群組成は，単純に器種型式およびセットの違いとか，その出土率の傾向性をみた場合，前述した遺跡の性格，生態系，土器型式の差を超えて，時代の大きな文化的趨勢に左右されていたといえるようである。なお，かつて我々が縄文晩期末から続縄文期の石器群を分析した際にも，土器型式そして地域などの差異に関係なく，時代によって石器群組成の変遷がみられるという同様の結論をえている（土田・上野 1976）。

なお，縄文中期中葉の道央北部においては，第Ⅰ段階の両者が，共存してみつかる例がある。N 309 遺跡も，そのひとつであって，その石器群組成をみると，円筒上層ｃ～ｅ式の円筒上層式土器群を主体としながらも「北海道石冠」がなく，逆に「石銛」の出土率が多いという地理的特殊性を示している。また，近い時期に位置するサイベ沢Ⅶ・見晴町式，トコロ第６類，伊達山式文化の道央部における在り方の違い，さらには縄文中期後半における余市式土器群の中で，道央部にのみ分布をもつ伊達山式と道央から道南へ分布圏を拡げる「入江第Ⅲ類」，そして「天祐寺式」，「ノダップⅡ式」が，その地域的拡がりをしていく中で，どのような石器群組成の違いを示すかは，今回取り扱った資料の中からは結論は出せなかった。

こういった形態型式論的立場からみただけでも，未解決な問題は多いが，さらに細かくみると，海岸地帯にある遺跡と内陸にある遺跡との違い――これは，同一地域内にある同時期の遺跡に関しては，シーズンによる海棲獣類，魚群の３つの地域差に基く漁撈形態の違いなどから導き出される，時期の枠を超えた石器群組成上の差異は当然あることである。

しかし，現時点においては，具体的に取り扱いうる石器群の資料は少なく，また不備なもので，このような研究の障害になっている。さらに，石器の機能的面からの研究も，使用痕の観察，民俗例との比較，そして実験考古学として最近行なわれてきているが，いずれも確証を欠くもので，非常に立ち後れているという現状である。また，良好な貝塚の資料も少なく，過去に調査された事例では，その吟味が不十分なものが多い。植物遺存体に関しても，現在でも積極的にそれを検出しようとする姿勢を欠いている。

結局，この中で提示された多くの問題は，今後の課題として残される。

（上野　秀一・土田亜佐子）

結　　言

N 309 遺跡の調査結果については，各章，各節に分って調査員の記述したとおりである。

一言のもとに要約するならば発掘した遺構は，竪穴住居跡状遺構 4 個，土壙 10 個である。前者は，その外形が竪穴住居跡と何ら異なるところはないが，種々の条件から竪穴住居跡とは断定し難いものであった。これらに伴うと考えられる土器は，縄文時代中期のいわゆるサイベ沢Ⅴ，Ⅵ，Ⅶ式，天神山式，トコロ第 6 類，伊達山式土器などで，それらは層位的に確認されることなく発見された。

また，石器群に関しては，昭和 49 年の調査分をも合せて，各器種ごとに分類し，東北，北海道の該期の遺跡出土石器との詳細な比較検討を加えるとともに，器種のセットによる種々なる考察を加えている。

ただ，残念なことに，第 1 章でも述べたように，諸般の経緯から昭和 48 年，49 年に同遺跡の発掘調査を担当したものと，今次の調査の担当者が異なるために，同一遺跡を全面的に発掘したにもかかわらず，前 2 回の調査結果を十分に盛り込んだ，総合的な取りまとめを行なうことができなかった。例えば，昭和 49 年度の発掘調査の結果，今次の調査の執筆者の 1 人でもある上野によって提唱された「手稲前田式土器」についての，考察が行なわれなかった。これは，高橋，上野両名の意志の疎通を欠いたというより，土器形式の認識の相違によるものでもある。また，各執筆者の担当があまりにも分業化してしまったために，遺構と出土遺物との有機的な関連を捉えてのとりまとめにも，やや不十分な点も見られないでもない。

今次の調査に関しては，これがかなり緊急を要する調査であったために，やむを得ず調査担当者を変更したが，今後はこのような場面にも柔軟に対応しうる体制を確立しなければなるまい。ただ，前回と調査担当者が異なるための弊害ばかりが見られたわけではない。前述の同一土器への異なる認識のもとでの捉えかたもさりながら，砂丘上の遺構の捉えかたについても，両者に微妙な相異が見られないでもない。

かねて古くより日本の考古学界では，いわゆる縄張りと称して，過去に自分が発掘調査した遺跡に対して，他の研究者が発掘調査を実施することを嫌う風潮が見られないでもなかった。しかし，同一遺跡についても，研究者が異なれば，自然と種々な問題についての見方も異なるものであり，その異なる問題の提起が刺激剤となって，新たなる発達を遂げることが少なくないであろう。

我々が現在実施している札幌市域の種々な発掘調査にしても，我々が札幌市の職員であるからと言って，これを独占しようとする考えは全く持っていない。ただ一言つけ加えるならば，誠意をもって発掘調査とその整理と，そして報告書の刊行を確実に実施してくれるならば。　（加藤　邦雄）

第12表　N309（2次調査）遺構一覧表

ピット番号	区　名	平面形	規模 cm 壙口	規模 cm 深さ	長軸方向	その他 備考
1	R・－21,22	不整楕円形	(210)×193	53	ENE－WSW	
2	V・－23,24	不整円形	62×59	25	—	
3	Q・－23	不整楕円形	80×69	24	NW－SE	
4	Q・－23	不整円形	62×59	19	——	
5	P・－23	楕円形	110×85	26	N－S	
6	P・－24	不整楕円形	104×90	35	NE－SW	
7	S・－24	不整円形	82×80	38	—	
8	V・－24	不整円形	74×71	41	—	
9	P・－23,24	不整楕円形	200×179	32	E－W	
10	T・－19,20	不整長楕円形	229×(180)	27	NNW－SSE	
11	S・－20,21 T・－20,21	不整楕円形	345×312	26	E－W	
12	P・－20,21 Q・－20,21	不整長楕円形 （不整五角形）	(480)×370	34	E－W	遺物が非常に多い
13	R・－19 S・－19	不整楕円形 （不整五角形）	(370)×(300)	26	N－S	14号と重複
14	R・－19,20 S・－19,20	不整楕円形 （不整五角形）	554×(460)	38	NW－SE	13号と重複

第13表　N309（2次調査）遺構出土石器一覧表

挿図番号	出土地区	出土層位	名称	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
6－1	Pit 1	覆土	縦長剥片	(26)	20	5	(2.7)	Obs.	下部欠損
2	〃	〃	擦石破片	(34)	61	28	(76.9)	Two py. and.	
11－1	Pit 5	〃	縦長剥片	39	41	6	9.2	Har. sha.	S－1
21－1	Pit 12	a・c	石鏃	50	13	5	2.9	Obs.	S－22
2	〃	〃	〃	(27)	(13)	(3)	(1.3)	Obs.	S－16 先端，茎部欠損
3	〃	〃	〃	32	17	5	2.2	Obs.	S－11
4	〃	〃	〃	27	17	4	1.6	Obs.	S－4
5	〃	〃	〃	(29)	(14)	(4)	(1.0)	Obs.	S－5　先端部欠損
6	〃	〃	〃	27	15	5	1.1	Obs.	S－10
7	〃	遺構外	〃	26	14	3	0.9	Obs.	S－18
8	〃	a・c	〃	(21)	(14)	(4)	(1.1)	Obs.	S－3　茎部欠損
9	〃	〃	〃	(19)	15	3	(0.7)	Obs.	
10	〃	〃	〃	(19)	13	4	(0.7)	Obs.	S－23 先端，茎部欠損
11	〃	〃	〃	22	11	4	0.8	Obs.	S－27
12	〃	〃	〃	22	11	3	0.8	Obs.	S－29
13	〃	〃	〃	17	12	3	0.6	Obs.	S－24
14	〃	〃	〃	29	10	3	0.9	Obs.	S－8
15	〃	〃	石鏃尖頭部破片	(18)	12	3	(0.4)	Obs.	
16	〃	〃	〃	(16)	13	3	(0.5)	Obs.	焼けている
17	〃	〃	〃	(16)	11	3	(0.4)	Obs.	S－26
18	〃	〃	石鏃茎部破片	(16)	(9)	(3)	(0.3)	Obs.	
19	〃	〃	〃	(11)	(7)	(2)	(0.2)	Obs.	
20	〃	〃	石鏃破片	(15)	8	2	(0.3)	Obs.	
21	〃	〃	石鏃未成品	(21)	16	4	(1.2)	Obs.	S－28
22	〃	〃	〃	(13)	13	4	(0.5)	Obs.	
23	〃	〃	〃	(9)	12	2	(0.2)	Obs.	
24	〃	〃	〃	(11)	(15)	(3)	(0.3)	Obs.	
25	〃	〃	〃	(12)	(15)	(3)	(0.4)	Obs.	
26	〃	〃	〃	(13)	15	2	(0.4)	Obs.	
27	〃	〃	〃	18	15	3	1.2	Obs.	S－20
28	〃	〃	〃	17	18	3	1.0	Obs.	S－21
29	〃	〃	未成品	21	23	4	1.7	Obs.	S－19

挿図番号	出土地区	出土層位	名称	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
21－30	Pit 12	a・c	石鏃未成品	(27)	(21)	3	(1.0)	Obs.	S－14
31	〃	〃	〃	(17)	(18)	(3)	(0.5)	Obs	
32	〃	〃	未成品	(35)	24	3	2.6	Obs.	
33	〃	〃	〃	(23)	(21)	(3)	(1.1)	Obs.	
34	〃	〃	〃	(23)	18	3	(1.3)	Obs	
35	〃	〃	〃	33	14	3	1.9	Obs	S－9
36	〃	〃	〃	(16)	8	2	(0.3)	Obs.	
37	〃	〃	〃	(23)	(12)	4	(1.2)	Obs.	S－25
38	〃	〃	〃	(22)	(22)	4	(1.8)	Obs.	S－15
39	〃	〃	〃	(24)	(13)	(2)	(1.1)	Obs.	
40	〃	〃	〃	(12)	(26)	2	(1.0)	Obs.	
41	〃	〃	〃	21	22	6	2.5	Obs.	
42	〃	〃	〃	11	18	7	(1.0)	Obs.	
43	〃	〃	〃	17	10	3	0.6	Obs.	
44	〃	〃	〃	(28)	(17)	(5)	(2.7)	Obs.	S－13
45	〃	〃	〃	38	18	5	4.3	Obs.	
46	〃	〃	両面体石器関係剥片	(27)	(10)	(5)	(0.7)	Obs.	
47	〃	〃	〃	(17)	(8)	(2)	(0.2)	Obs.	
22－48	〃	〃	ナイフ状石器	78	31	8	29.2	Har.-sha.	S－6
49	〃	〃	未成品	(16)	20	3	1.2	Har.-sha.	
50	〃	〃	〃	(16)	15	4	(0.9)	Har. sha.	
51	〃	〃	〃	15	(10)	2	(0.4)	Obs.	
52	〃	〃	縦長剥片	40	38	4	5.3	Obs.	
53	〃	〃	剥片	38	38	10	14.8	Obs.	S－7　a面原石面
54	〃	〃	擦石破片	120	(81)	32	(400)	Two py. and.	S－2
55	〃	〃	砥石	(44)	(30)	(10)	(10.9)	Sa.	
56	〃	〃	〃	(22)	(35)	(10)	(15.2)	Sa.	
24－1	Pit 14	i	石鏃	(25)	16	4	(1.5)	Obs.	S－21　脚部欠損
2	〃	覆土	石鏃破片	(9)	10	3	(0.2)	Obs.	下部欠損
3	〃	i	銛先	(46)	23	8	(7.4)	Obs.	S－10　脚部欠損
4	〃	遺構外	ナイフ状石器	96	46	10	54.2	Har. sha.	
5	〃	i	削器	39	29	8	11.7	Obs.	

挿図番号	出土地区	出土層位	名称	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
24－6	Pit 14	覆土	掻器	26	14	5	2.3	Obs	
7	〃	i	異形石器	24	15	5	2.1	Obs.	
8	〃	k	石鏃未成品	(19)	20	3	(1.1)	Obs.	S－31
9	〃	i	剥片	(22)	18	7	(2.9)	Obs.	S－4 下部欠損
10	〃	覆土	〃	35	24	9	1.1	Obs.	
11	〃	i	〃	(37)	24	8	(7.4)	Obs.	S－4 上部欠損
12	〃	攪乱	〃	51	32	8	12.7	Che.	S－29
13	〃	i	〃	43	29	4	4.8	Har.-sha.	S－32
14	〃	i	石斧破片	(83)	(51)	(10)	(33.2)	Gr.-sch.	S－20
15	〃	覆土	石鋸破片	(61)	50	(8)	11	Sa.	
16	〃	k	擦石破片	(48)	(59)	(21)	(53.8)	Two py.-and.	S－34 焼けて黒ずんでいる

第14表　N309（2次調査）発掘区出土石器一覧表

挿図番号	出土地区	名称	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
30・1	W・−19	石鏃	41	(13)	4	(2.1)	Obs.	a面右逆剥部分欠損
2	V・−20	〃	(31)	12	2	(1.1)	Obs.	先端欠損
3	R・−20	〃	34	18	4	2.1	Obs.	
4	R・−19	〃	(27)	14	3	(1.1)	Obs.	茎部欠損
5	S・−20	〃	(19)	15	5	(1.2)	Obs.	〃
6	T・−26	石鏃破片	(22)	(11)	4	(1.1)	Obs.	
7	U・−22	〃	(21)	(16)	5	(1.6)	Obs.	
8	試掘	石鏃	(25)	12	3	1.1	Obs.	
9	表採	石鏃破片	(18)	(11)	(2)	(0.5)	Obs.	
10	Q・−20	〃	(15)	(14)	(2)	(0.5)	Obs.	
11	S・−19	石鏃未成品	23	12	4	1.4	Obs.	
12	S・−19	〃	20	13	3	0.9	Obs.	
13	S・−19〜20	銛先	59	31	7	9.3	Obs.	先端部（S・−20）と柄部（S・−19）が接合
14	U・−23	〃	40	21	6	3.9	Obs.	
15	S・−20	〃	(30)	18	5	2.5	Obs.	先端、柄部欠損
16	S・−20	尖頭器未成品	(22)	18	4	1.4	Obs.	
17	表採	尖頭器柄部破片	(30)	(15)	6	3.4	Obs.	
18	W・−20	ナイフ状石器	102	42	10	52.0	Obs.	
19	O・−19	〃	120	32	7	20.6	Obs.	
20	R・−19	〃	79	31	14	34.5	Obs.	
21	R・−19	ナイフ状部破片	(35)	40	9	13.0	Obs.	上部欠損
22	S・−20	ナイフ状石器	52	20	8	9.5	Obs.	全面は著しく摩滅している。
23	U・−24	〃	69	32	13	24.3	Chc.	
31・24	R・−19	〃	58	20	9	10.4	Har.-sha.	
25	R・−19	〃	(69)	(28)	5	10.4	Har.-sha.	上下部欠損
26	P・−24	ナイフ未成品	61	38	4	12.0	Obs.	
27	表採	ナイフ状石器	60	31	6	19.2	Obs.	
28	T・−24	〃	96	30	14	44.5	Har.-sha.	
29	S・−20	剥片	(58)	(22)	11	(16.1)	Obs.	上部欠損
30	表採	削器	(48)	44	11	(23.9)	Obs.	〃
31	O・−20	剥片	33	35	5	8.9	Obs.	
32	O・−20	削器	42	25	6	7.6	Har.-sha.	

挿図番号	出土地区	名称	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
31−33	U・−23	削器	31	24	5	3.0	Obs.	
34	U・−22	剥片	33	21	5	4.6	Obs.	
35	表採	削器	14	27	6	2.2	Obs.	下部欠損
36	T・−19	〃	(40)	(24)	7	3.6	Obs.	a面左欠損
37	S・−20	剥片	(27)	(13)	(4)	2.7	Obs.	〃
38	V・−19	〃	(27)	(9)	(4)	1.2	Har.-sha.	a面右欠損
39	R・−24	〃	(25)	(20)	(4)	2.4	Obs.	〃
40	S・−20	削器	(15)	8	3	0.5	Obs.	下部欠損
41	W・−20	楔器	76	30	16	31.8	Obs.	
32−42	S・−24	〃	38	28	10	10.1	Obs.	
43	Q・−25	〃	26	14	4	2.6	Obs.	上部欠損
44	S・−20	〃	(25)	(16)	(7)	2.5	Obs.	焼けている。 焼けてからa面左側欠損
45	T・−21	両面体石器	(30)	(17)	12	6.8	Obs.	上部欠損
46	T・−21	〃	(26)	23	10	6.8	Obs.	〃
47	U・−24	〃	(30)	(24)	18	13.5	Obs.	上下部欠損
48	Q・−23	〃	(41)	22	10	7.3	Obs.	
49	T・・20	〃	(11)	(29)	5	2.2	Obs.	上下部欠損
50	表採	〃	(15)	(25)	4	1.7	Obs.	上部欠損
51	S・・19	〃	(24)	26	17	4.6	Obs.	〃
52	U・・19〜−20	〃	(26)	14	5	1.8	Obs.	〃
53	S・−25	フレ・ク・コア・	33	42	10	17.2	Obs.	
54	S・−20	〃	44	32	14	25.0	Obs.	
55	T・−22	〃	36	28	11	12.1	Obs.	
56	T・−20	〃	47	31	16	23.1	Obs.	
57	R・−23	剥片	(36)	46	10	15.8	Obs.	上部欠損
58	U・−23	〃	49	31	10	16.9	Obs.	
59	W・−23〜−24	〃	44	21	12	9.1	Obs.	
60	S・−26	〃	41	28	13	11.4	Obs.	
33−61	R・−20	〃	66	54	17	50.7	Obs.	
62	R・−19	〃	80	43	13	35.4	Obs.	
63	T・−20	〃	66	28	8	12.6	Obs.	
64	T・−22	〃	72	41	15	33.8	Obs.	

挿図番号	出土地区	名称	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
33－65	W・－20	剥片	53	32	11	15.7	Obs.	
66	V・ 20	〃	55	21	7	8.7	Obs.	
67	T・－19	〃	(48)	23	9	7.8	Obs.	上部欠損
68	S・－20	〃	54	29	9	8.8	Obs.	
69	R・－21	〃	(43)	22	4	3.9	Obs.	上部欠損
70	T・－24	〃	46	22	4	3.7	Obs.	部分的に軽く焼けている。
71	W・－23～－24	〃	(33)	(21)	4	2.4	Obs.	a面右欠損
72	U・－23	〃	44	20	5	4.6	Obs.	
73	R・－19	〃	(37)	20	7	5.5	Obs.	下部欠損
74	S・－19	〃	32	16	4	2.1	Obs.	
75	R・－23	〃	(21)	(17)	(3)	1.4	Obs.	下部欠損
76	R・－20	〃	(32)	(15)	(2)	1.8	Obs.	a面右欠損
77	R・－24	〃	(27)	17	4	1.8	Obs.	上部欠損
78	S・－19	〃	(21)	(15)	4	1.0	Obs.	a面右欠損
79	T・－19	〃	(20)	11	4	0.6	Obs.	上部欠損
80	U・－22	〃	14	16	5	0.8	Obs.	
81	表採	〃	35	15	6	3.4	Obs.	
34－82	R・－19	〃	51	47	4	8.4	Obs.	
83	R・－19	〃	(57)	33	5	3.4	Obs.	下部欠損
84	S・－20	〃	55	(25)	9	14.6	Obs.	2面左欠損
85	Q・－25	〃	26	44	6	9.9	Obs.	a面右一部欠損
86	表採	〃	24	23	5	2.4	Obs.	
87	表採	〃	28	22	7	5.7	Obs.	
35－88	R・－19	石斧	(146)	65	31	(550.0)	Two py. and	
89	表採	〃	(69)	(34)	23	(62.2)	Bl. sch.	
90	V・－20	〃	(40)	(29)	(9)	(12.2)	Gr.-sch.	
91	O・－20	〃	(122)	(55)	21	(250.0)	Bl.-sch.	
92	T・－22	〃	(104)	(52)	(18)	(150.8)	Gr. sch.	
36－93	V・－24	〃	(72)	61	23	(162.5)	Mu.	
94	R・－24	〃	93	31	12	59.6	Bl. sch.	
95	S・－19	〃	(99)	(54)	26	(200.0)	Gr.-sch.	
96	P・－26	〃	(98)	40	14	(120.0)	Gr.-sch.	

挿図番号	出土地区	名称	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
36－97	R・－24	石斧	(120)	48	29	(200.0)	Gr.-sch.	
88	Q・－19	〃	(94)	(42)	11	(75.5)	Bl.-sch.	
37－99	S・－20	砥石	195	65	36	(400.0)	Sa.	
100	O・－20	〃	44	41	9	18.0	Sa.	
101	T・・24	〃	(32)	26	4	5.1	Bl.-sch.	
102	P・－26	擦石	100	47	21	150	Two py.-and.	
103	S・－19	〃	140	104	28	650	And.	
38－104	表採	断面三角形擦石	195	89	46	1100	Two py.-and.	
105	表採	〃	147	100	60	1050	And.	
39－106	S・－20	〃	160	67	58	1000	Two py.-and.	
107	W・－20	礫器	147	81	27	400	Che.	
40－108	表採	石皿	410	242	95	12500	Two py.-and.	
109	S・－19	〃	360	230	170	20600	Two py.-and.	復元
110	S・－20	〃	240	153	52	3000	Two py.-and.	
41・111	表採	〃	200	146	55	2360	And.	
112	O・－20	〃	214	175	50	2800	Two py.-and.	

〔石質略号〕 And.(Andesite)：安山岩，Bl.-sch.(Black-schist)：黒色片岩，Che.(Chert)：硅岩，Gr.-sch.(Green-schist)：緑色片岩，Har.-sha.(Hard-shale)：硬質頁岩，Mu.(Mud stone)：泥岩，Obs.(Obsidian)：黒曜石，Sa.(Sand stone)：砂岩，Two py.-and.(Two pyroxene andesite)：複輝石安山岩。

〔計測値〕 (　　)でくくった計測値は，欠損していることを示す。

引用・参考文献

五十嵐八枝子・熊野純男　1973 a「札幌市北方低地帯における沖積世の古気候変遷」『第四紀研究』13－2所収

五十嵐八枝子・熊野純男　1973 b「湧別市川遺跡周辺における沖積世の古気候変遷」『湧別市川遺跡』所収

石川　徹　1967「札幌都平稲砂山出土の土器について」『北海道考古学』3所収

石川政治　1963「函館市天祐寺貝塚」『石器時代』6所収

市川金丸・古市豊司・松山　力　1976『泉山遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書31

今井富士雄・磯崎正彦　1968「十勝内遺跡」『岩木山』所収

岩崎隆人・三室俊昭・室田彰則　1963「石狩郡当別町伊達山遺跡（第Ⅰ地点）の資料」『北海道青年人類科学研究会会誌』2所収

岩崎隆人・藤村久和　1964「石狩厚田村聚富の遺跡と遺物」『釧路の古代文化』6所収

岩崎隆人・宇田川洋・本田栄作・河野本道　1966『加茂川遺跡』（単）

岩崎隆人・三室俊昭・室田彰則　1970『伊達山遺跡』（単）

上杉　陽・遠藤邦彦　1973「石狩海岸平野の地形と土壌について」『第四紀研究』12－3所収

上野秀一編　1974『N 293遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅵ

上野秀一編　1975『S 256遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅺ

上野秀一・高橋和樹編　1975『N 309遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅻ

上野秀一・加藤邦雄・高橋和樹・土田亜佐子　1976『T 210遺跡』札幌市文化財調査報告書XIII

江坂輝弥編　1970『石神遺跡』（単）

蛯子千代志　1973「北海道西南部における円筒土器に伴出する大木式系土器について」『桧山考古学研究会会誌』2所収

大井晴男　1965「日本の石刃石器群"Blade Industry"について」『物質文化』5所収

大島直行　1976「円筒土器上層式土器の認識に関する問題」『北海道考古学』12所収

大場利夫・奥田　寛　1960『女満別遺跡』（単）

大場利夫・扇谷昌康・竹田輝雄　1962「白老郡虎杖浜遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』17所収

大場利夫・蛯子千代志　1965「函館市郊外煉瓦台遺跡」『北方文化研究報告』20所収

大場利夫・石川　徹　1966『恵庭遺跡』（単）

岡村道雄　1976「ピエス・エスキーユについて－岩手県大船渡市蛸石遺跡出土資料を中心として」『東北考古学の諸問題』所収

奥山　潤・大里勝蔵　1971『黒森山縄文期竪穴群』（単）

加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二　1973『白石神社遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅰ

金子浩昌　1965「貝塚と食料資源」『日本の考古学』Ⅱ所収

菊池俊彦　1967「札幌市平岸天神山出土の土器について」『北海道考古学』3所収

草間俊一・金子浩昌編　1971『貝鳥貝塚』（単）

倉谷泰賢・小笠原忠久　1972『大安在B遺跡』（単）

黒崎康雄・橋本　晋　1965「北海道浦河郡浦河町浜荻伏遺跡」『古代』45、46合併号所収

黒崎康雄・橋本　晋・中田幹雄・高橋正勝　1972『西舎遺跡』（単）

桑原　護　1966「北筒式土器」『考古学雑誌』51－4所収

河野広道・藤原敏郎・藤本英夫　1954『静内町先史時代遺跡調査報告』静内町々史資料1

河野広道・沢　四郎ほか　1962『東釧路』（単）

児玉作左衛門・大場利夫　1953「函館市住吉町遺跡」『北方文化研究報告』8所収

児玉作衛門・大場利夫・武内収太　1958『サイベ沢遺跡』（単）

駒井和愛編　1963「オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡（上）」（単）

佐藤忠雄・近堂祐弘　1960『多奇』（単）

佐藤忠雄　1975『館崎』（単）

沢　四郎・本田克代・宇田川洋・大沼忠春ほか　1971「ソスケ遺跡，中谷遺跡」『雛臼』所収

沢　四郎・西　幸隆・山崎　哲・山本文男・松田　猛　1971「東釧路遺跡第Ⅰ地点（東釧路貝塚）の発掘－昭和45年－」『釧路市立博物館々報』209所収

沢　四郎編　1972「釧路市緑ヶ岡ＳＴＶ遺跡発掘調査報告――第１・２次調査――」『釧路市立郷土博物館紀要』1所収

沢　四郎・西　幸隆　1973「北海道釧路市沼尻遺跡の出土遺物について」『釧路市立郷土博物館紀要』2所収

鈴木克彦・市川金丸・松山　力　1975『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書25

鈴木克彦　1976「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察」『北奥古代文化』8所収

須藤　隆　1974「青森県二枚橋遺跡出土の打製石偶について」『日本考古学・古代史論集』所収

芹沢長介　1965「縄文時代の研究をめぐる諸問題－周辺文化との関連」『日本の考古学』Ⅱ所収

芹沢長介編　1974『巷石遺跡』社教シリーズ　17

高橋和樹・内山真澄・土田亜佐子ほか　1976『瀬棚南川遺跡』（単）

高橋正勝　1966「函館市見晴町遺跡の資料」『北海道青年人類科学研究会会誌』8所収

高橋正勝編　1971『柏木川』（単）

高橋正勝　1972「北海道における縄文時代中期の終末(1)，(2)」『北海道青年人類科学研究会会誌』9，10所収

高橋正勝・小笠原忠久　1976「北海道考古学講座４　縄文時代前・中期」『北海道史研究』10所収

田中熊雄　1963ａ，ｂ「北海道における石錘の研究(1)，(2)」『宮崎大学学芸部紀要』15，16所収

種市幸生編　1975『北海道縦貫自動車道（苫小牧市植苗～千歳市平和）埋蔵文化財包蔵地群発掘調査報告書』（単）

千代　肇　1962「弥生式文化の北方伝播をめぐる課題」『考古学研究』９－１所収

土田亜佐子・上野秀一　1976「石器群について」『瀬棚南川遺跡』所収

戸沢充則　1970「縄文時代の遺跡・遺物と歴史構成」『郷土史研究と考古学』郷土史研究講座Ⅰ所収

名取武光・峰山　巌　1954『伊達町北黄金遺跡発掘報告』（単）

名取武光・峰山　巌　1958「入江貝塚」『北方文化研究報告』13所収

名取武光　1960「網と釣の覚書」『北方文化研究報告』15所収

野村　崇　1962「先史時代」『長沼町の歴史』（下）所収

羽賀憲二　1974『Ｔ 77遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅲ

羽賀憲二編　1974『Ｔ 310遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅶ

畑　宏明　1966「札幌市平岸坊主山遺跡」"Aynu Moshiri"Ⅱ所収

保坂三郎　1972『是川遺跡』（単）

松下　亘編　1974『西殷』（単）

峰山　巌・金子浩昌・桐谷賢一・西本豊弘・百々幸雄・上野秀一　1973『栄磯岩陰遺跡発掘報告』（単）

峰山　巌・大島直行・谷岡康孝　1975『森越』（単）

村越　潔　1974『円筒土器文化』雄山閣考古学選書10

森田知忠・高橋正勝　1967『サイベ沢Ｂ遺跡調査報告』（単）

森田知忠　1973「精進川遺跡」『北海道南茅部町の先史』所収

山崎博信・長谷川功　1967，1968『智東遺跡Ｂ地点　図録編・本文篇』（単）

山田悟郎　1974ａ「Ｎ 293遺跡の花粉分析」『Ｎ 293遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅵ所収

山田悟郎　1974 b「石狩町紅葉山遺跡の花粉分析」『紅葉山43号遺跡』所収
山道紀郎・藤田亮一ほか　1975『妻の神遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書30
吉崎昌一　1965「縄文文化の発展と地域性－北海道－」『日本の考古学』II所収
渡辺　誠　1963「縄文中期における網漁法の発生とその意義」『考古学手帖』17所収
渡辺　誠　1973 a『縄文時代の漁業』雄山閣考古学選書7
渡辺　誠　1973 b「食生活の変遷」『古代史発掘』1所収

図　　版

土　器　縮尺

図版11～14A，15～17　約⅓

図版14B，右約2倍，左約1/1

石　器　縮尺

図版18～22　約½

図版23～25　約⅓

A　遺跡全景（発掘終了、西より）

B　遺跡全景（発掘終了、北より）

図版2

A　第1号ピット断面（北東より）

B　第1号ピット（北東より）

A　第2号ピット

B　第3号ピット

図版4

A　第4号ピット

B　第5号ピット

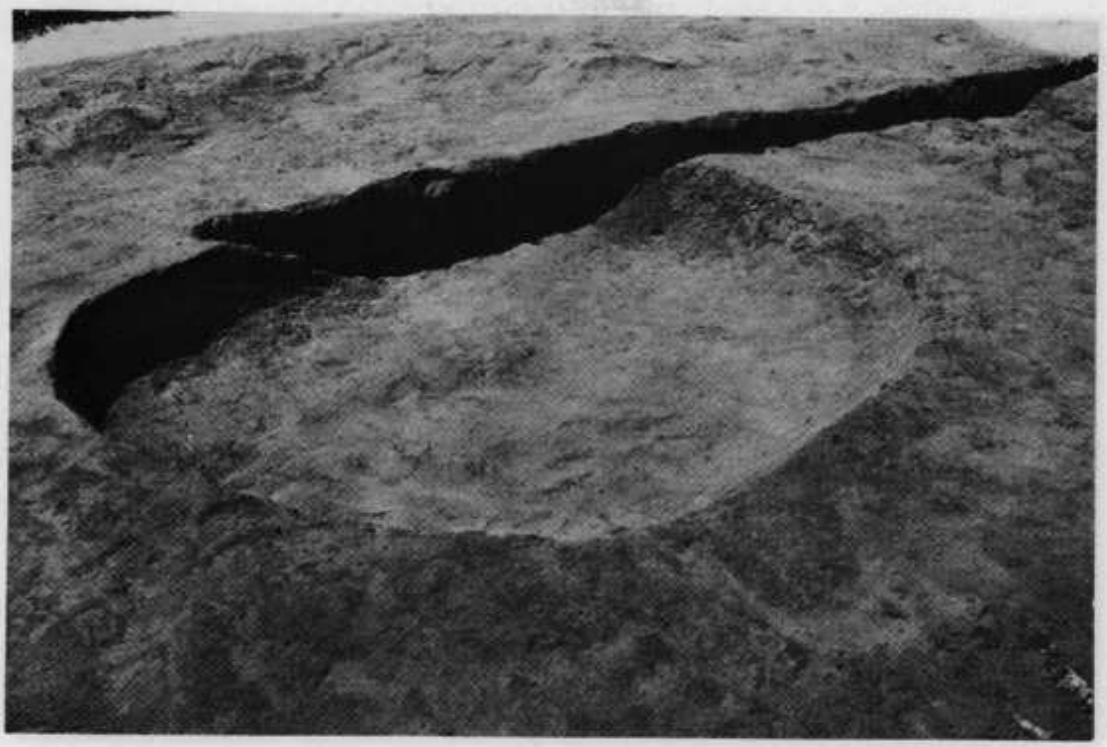
A　第6号ピット

B　第7号ピット

図版6

A　第8号ピット

B　第9号ピット（右上は第6号ピット）



A　第10号ピット

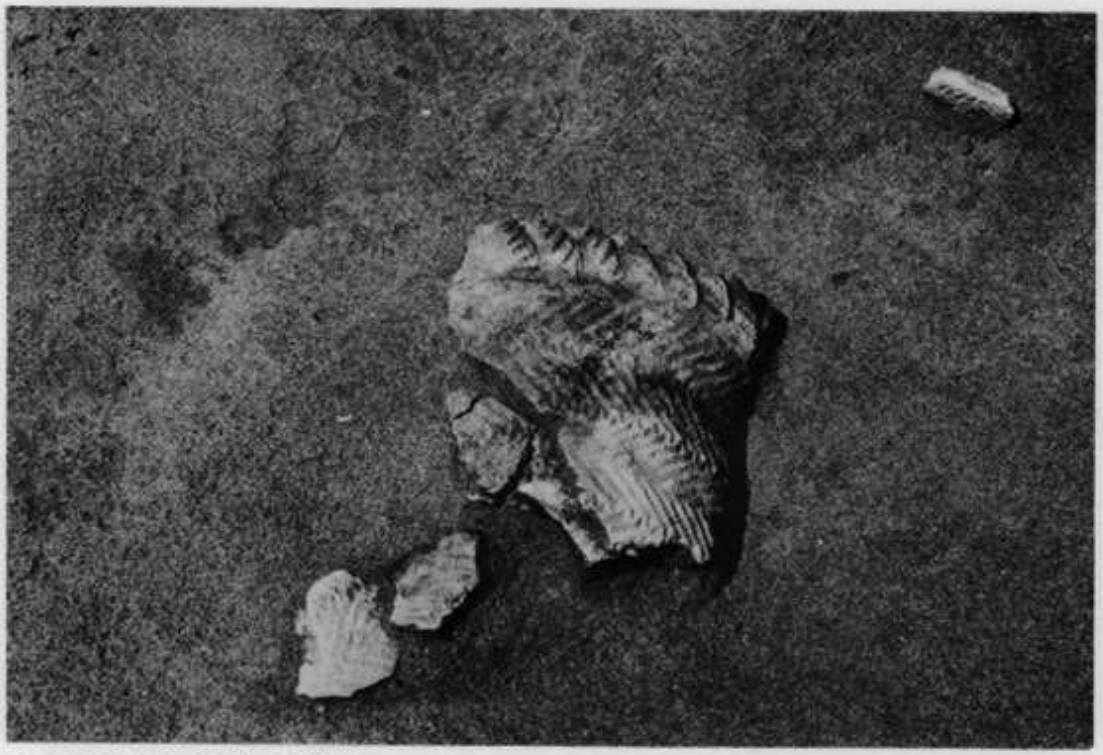
B　第10,11,13,14号ピット（上方より10,11,14,13号）

図版8

A 発掘風景

B 第12号ピット

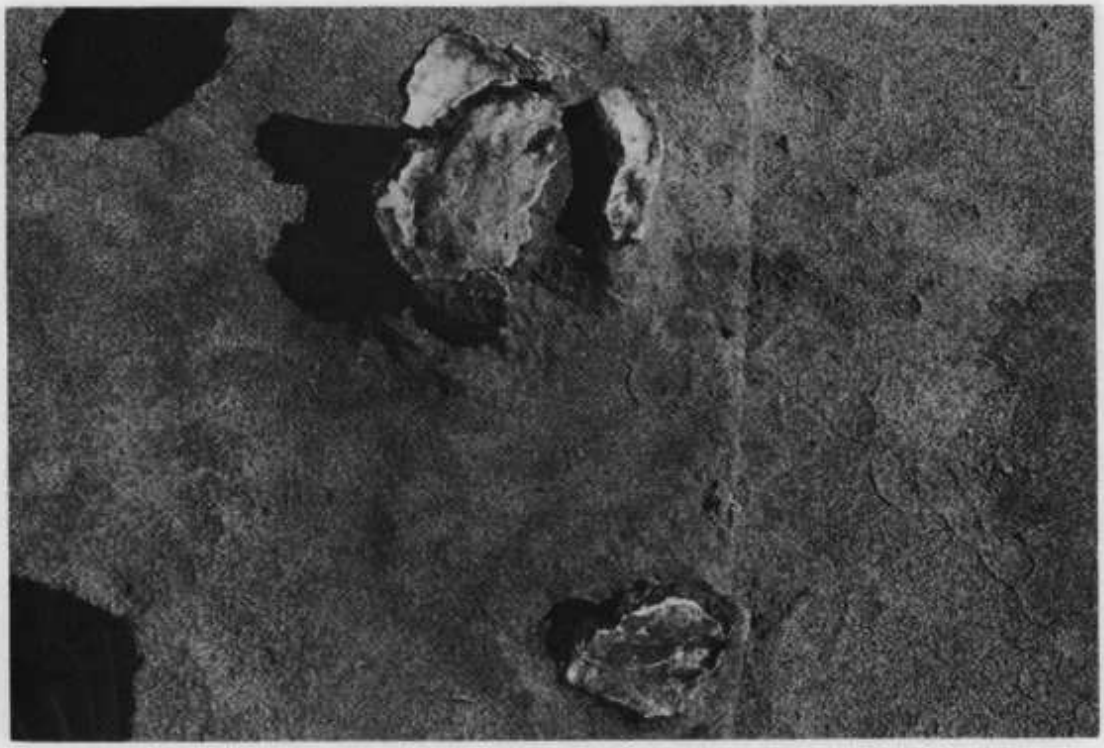
A　第12号ピット遺物出土状態 I



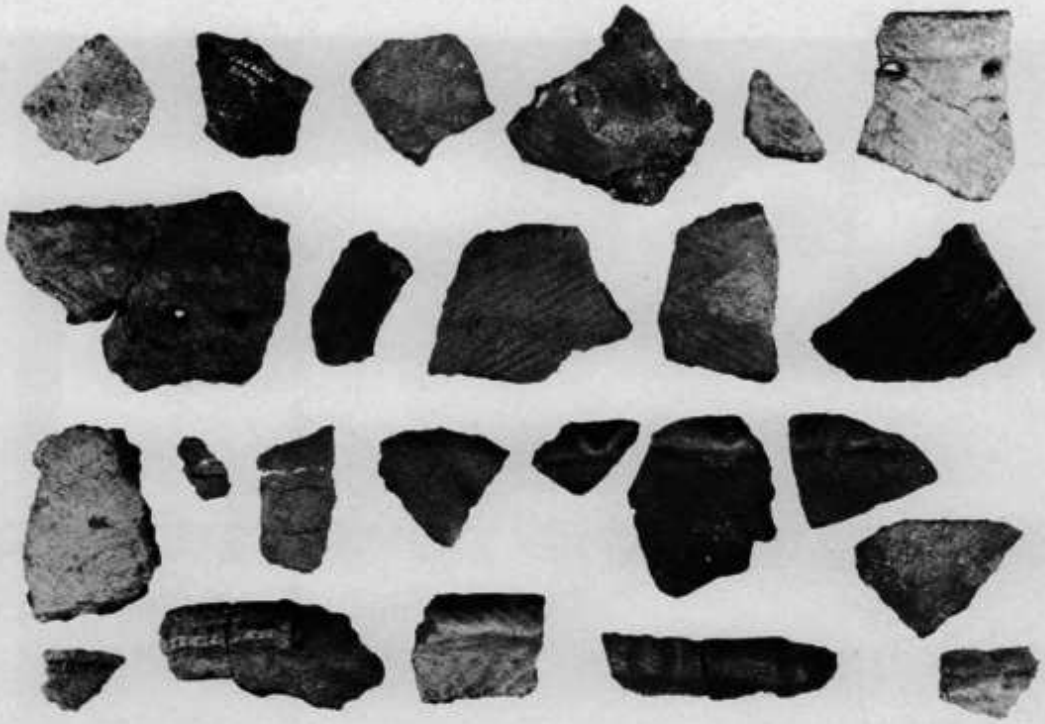
B　第12号ピット遺物出土状態 II

図版10

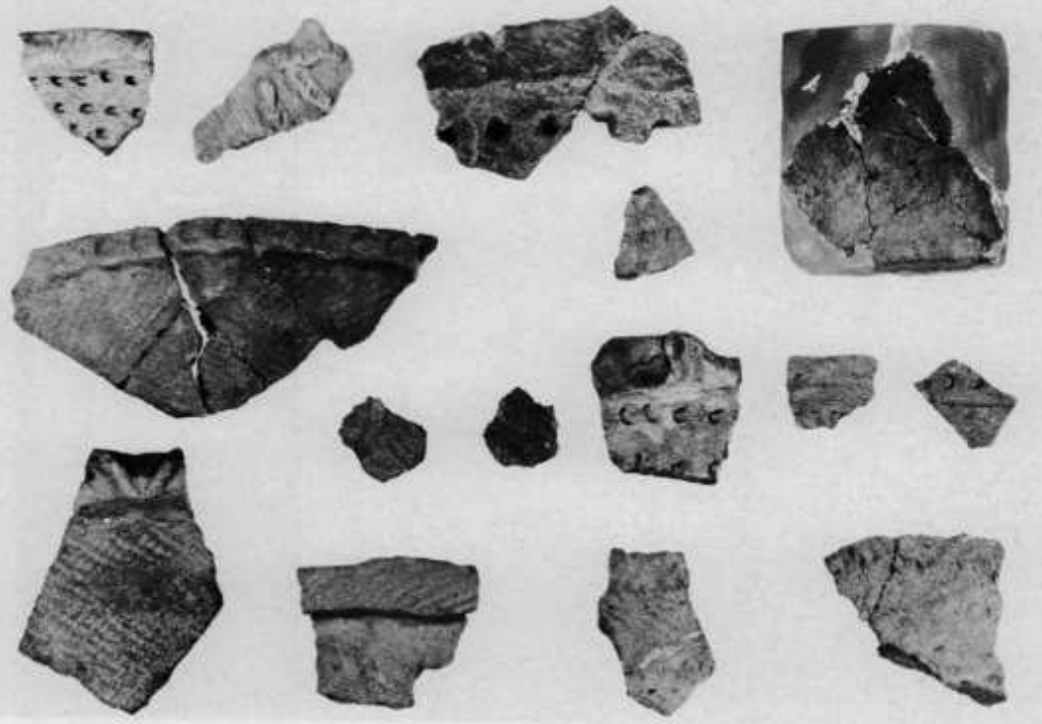
A　第12号ピット遺物出土状態Ⅲ



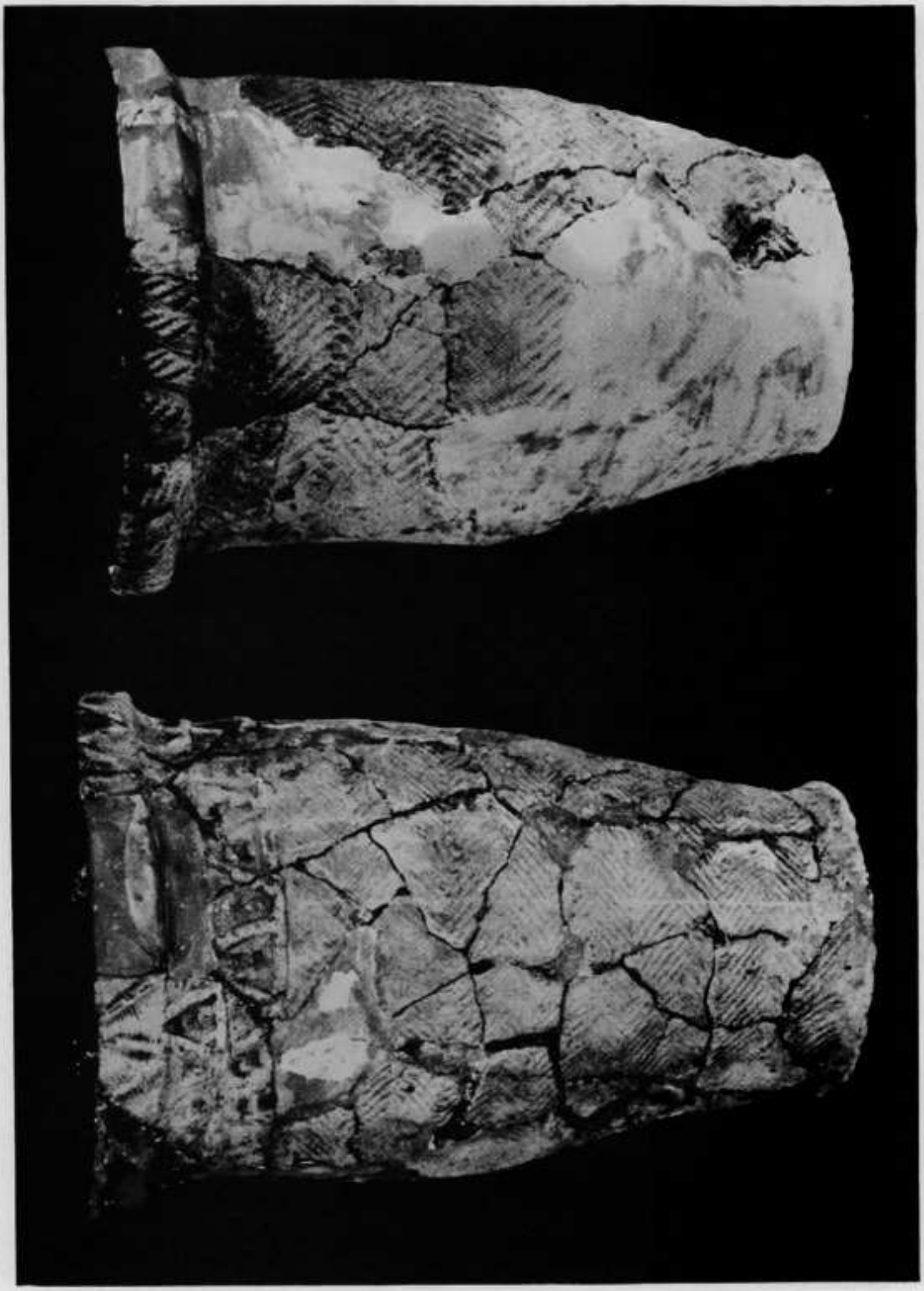
B　第12号ピット遺物出土状態Ⅳ



A　第1,5,7,9,10,11,12号ピット出土土器



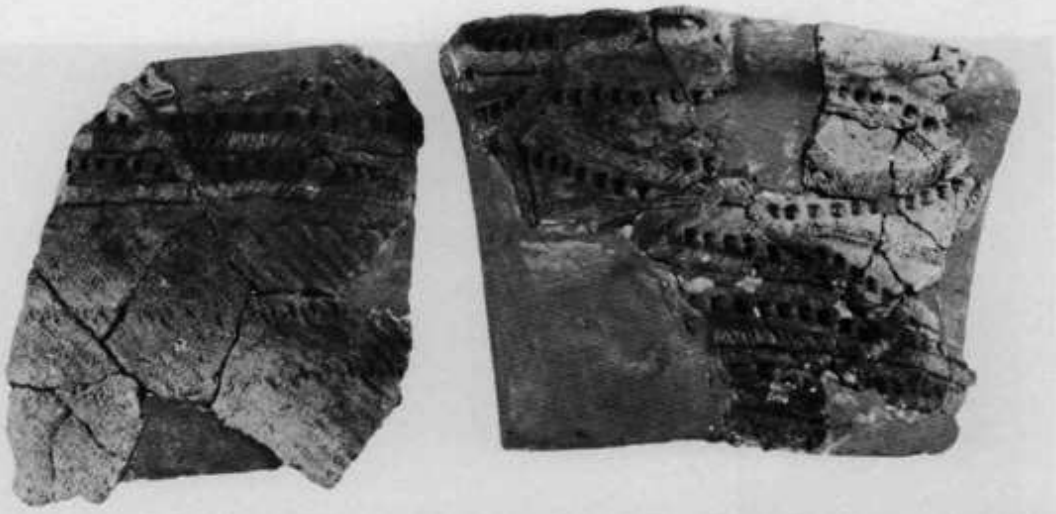
B　第12,13,14号ピット出土土器



第12号ピット出土土器

第12号ピットおよび発掘区出土土器

図版14

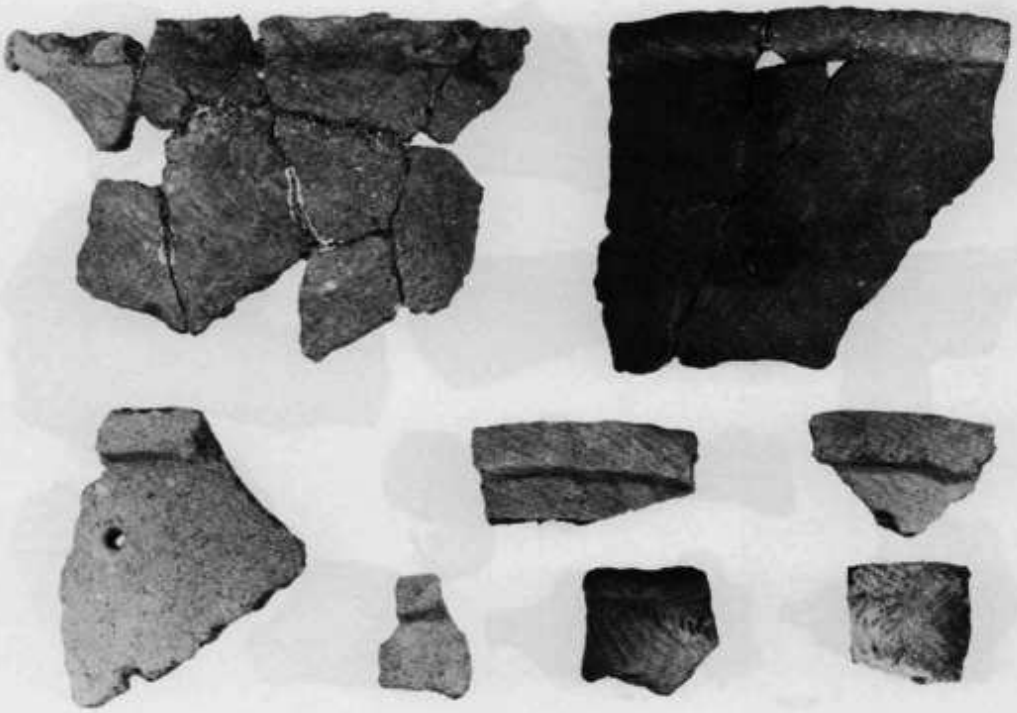


A　第12号ピット出土土器

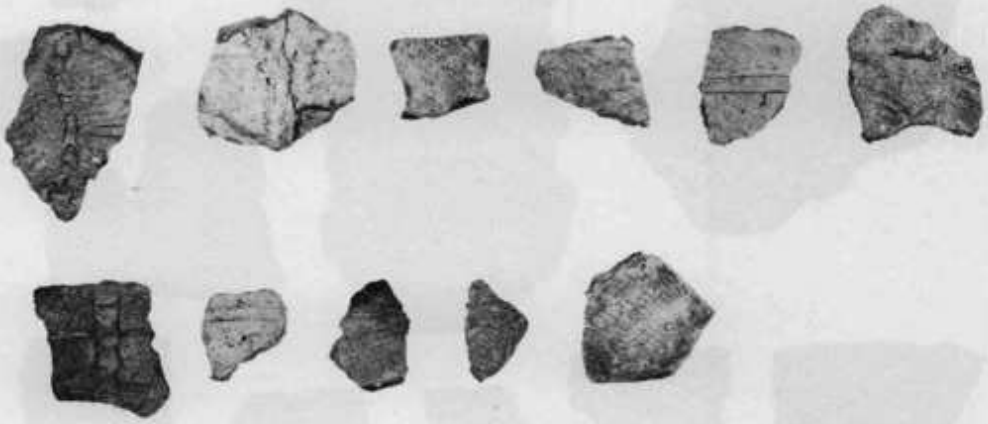
B　発掘区出土土器部分拡大写真

A　発掘区出土土器

B　発掘区出土土器

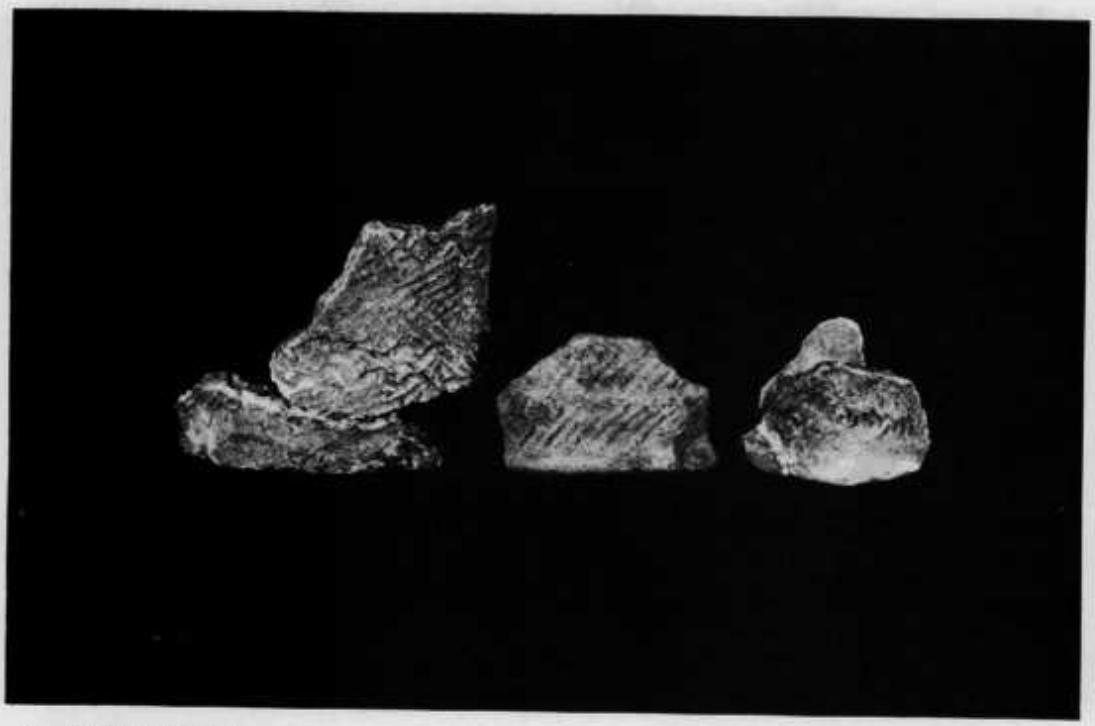


A　発掘区出土土器

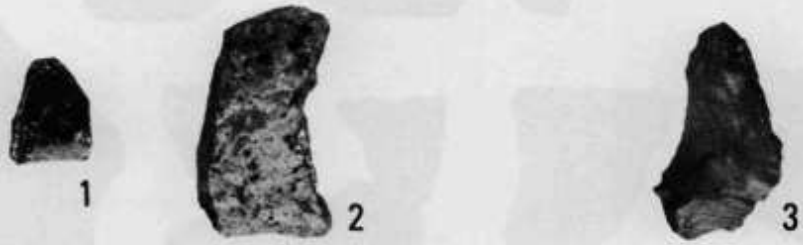


B　発掘区出土土器

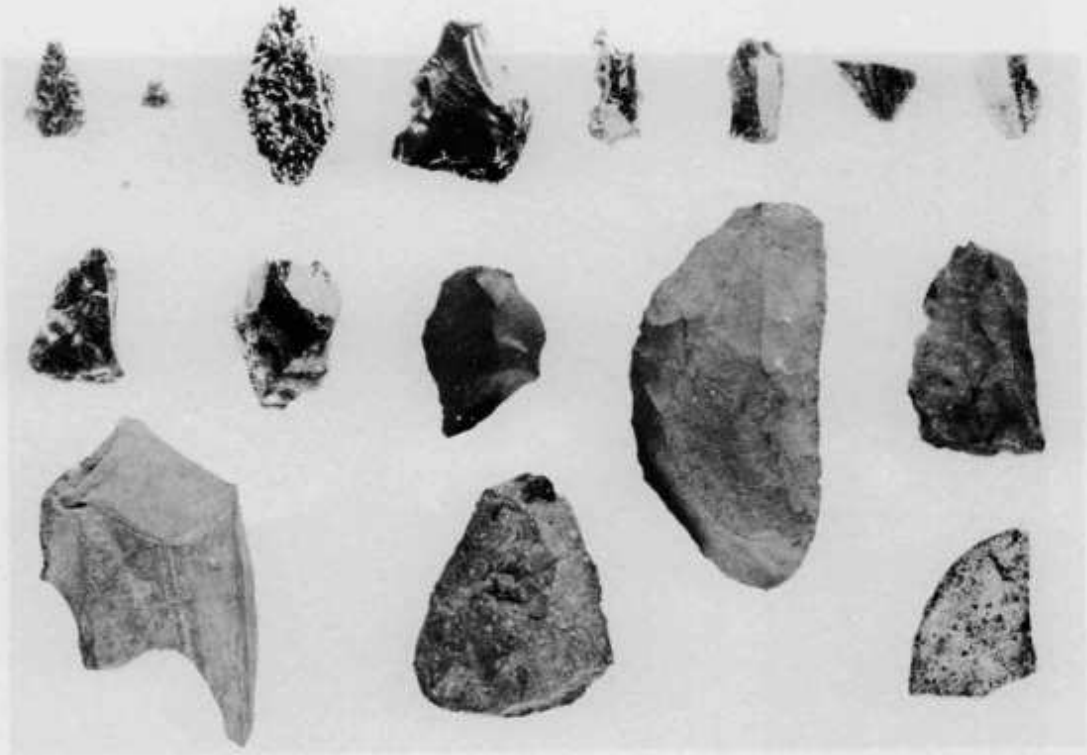
発掘区出土土器



B　発掘区出土土器

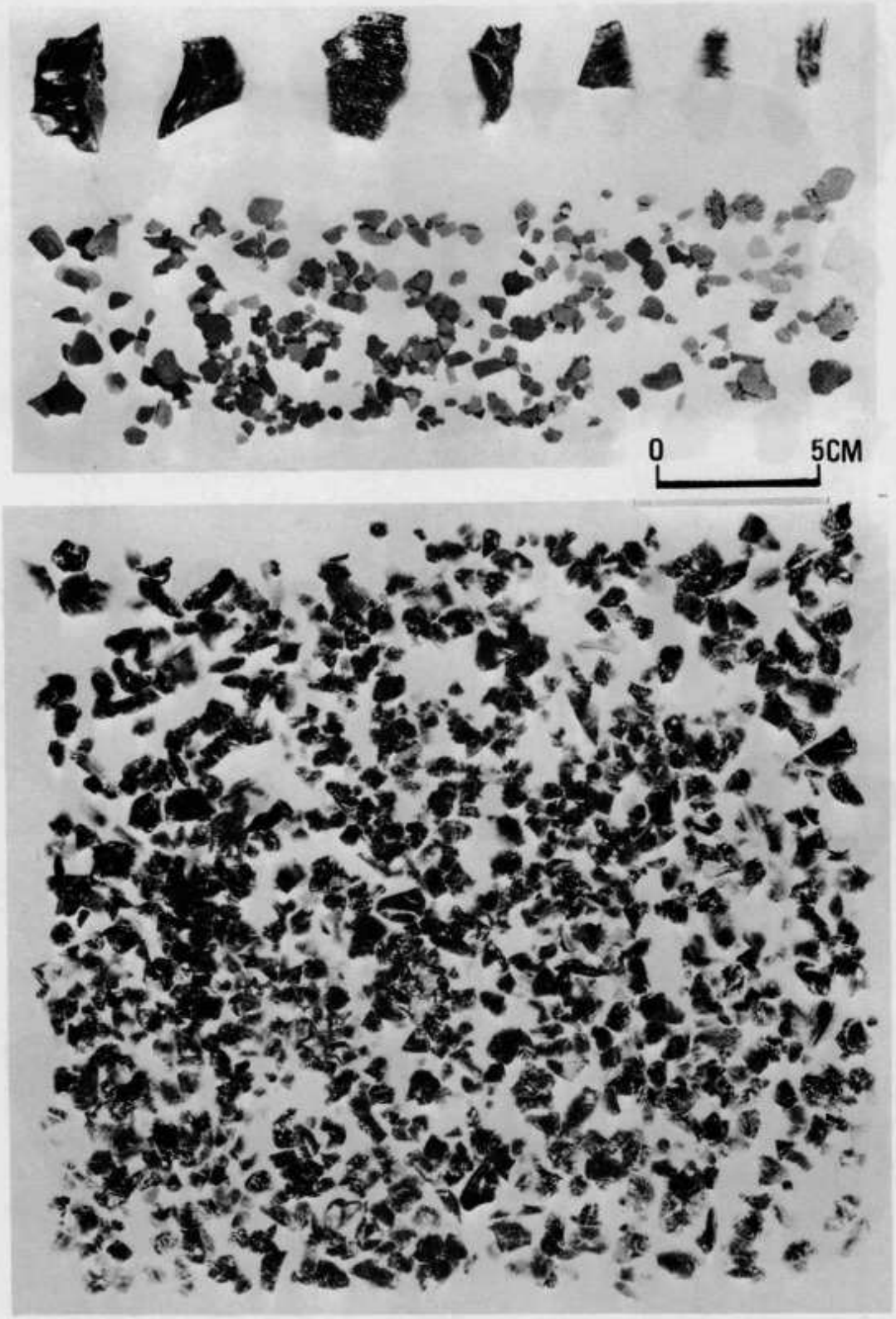


A　第1号（1,2）、第5号（3）ピット出土石器



B　第14号ピット出土石器

第12号ピット出土石器

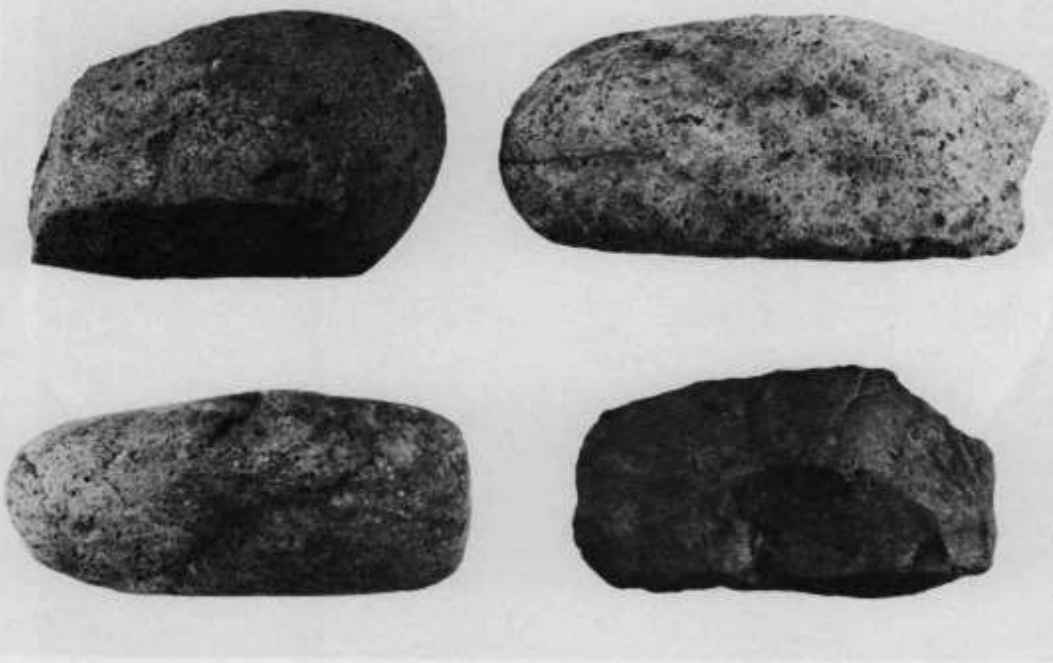


第12号ピット出土剥片（上：硬質頁岩、下：黒曜石）

発掘区出土石器（1）

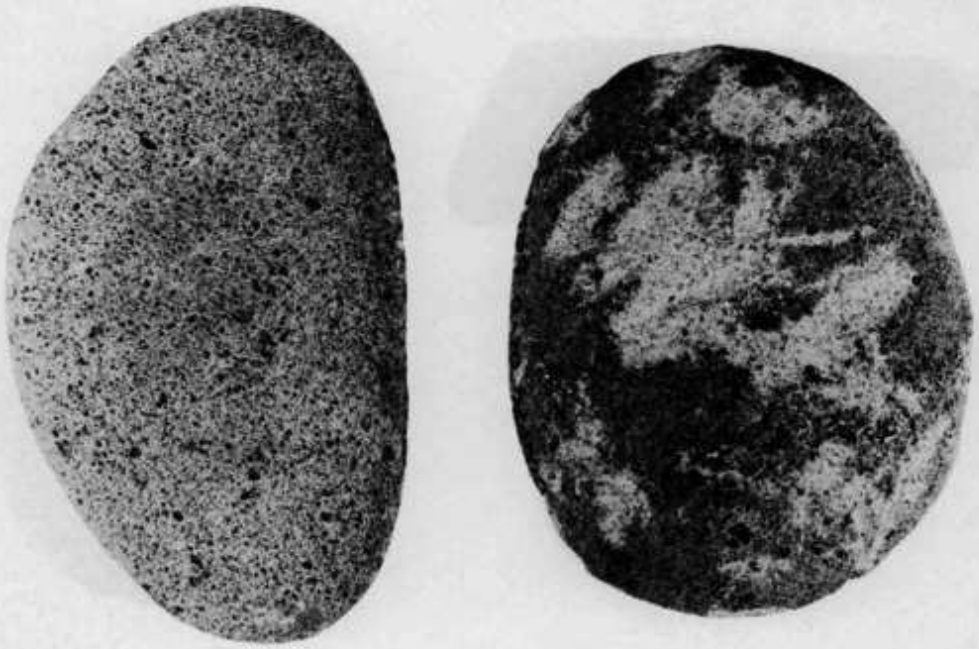
発掘区出土石器（2）

A　発掘区出土石器（3）

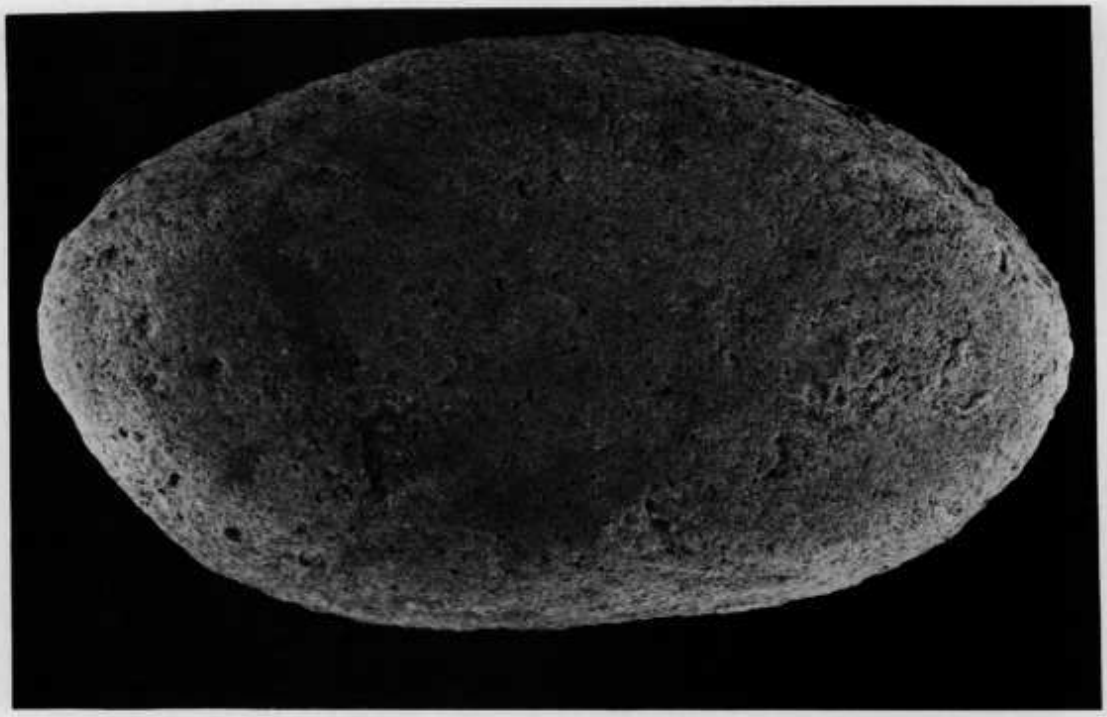


B　発掘区出土石器（4）

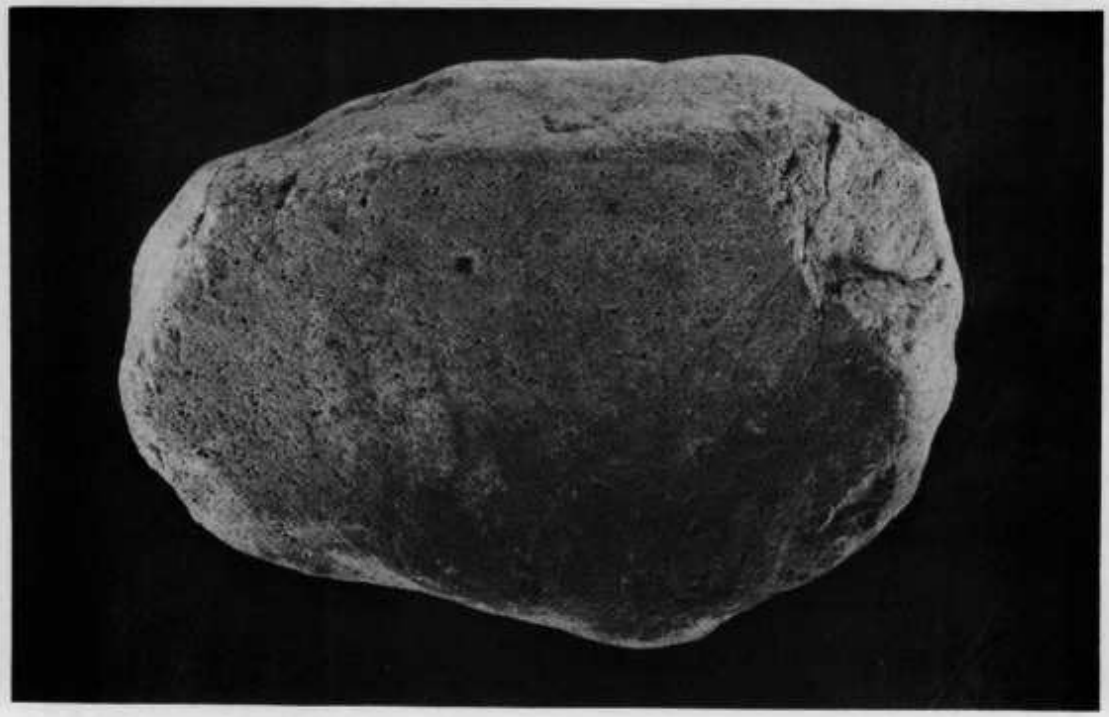
図版24



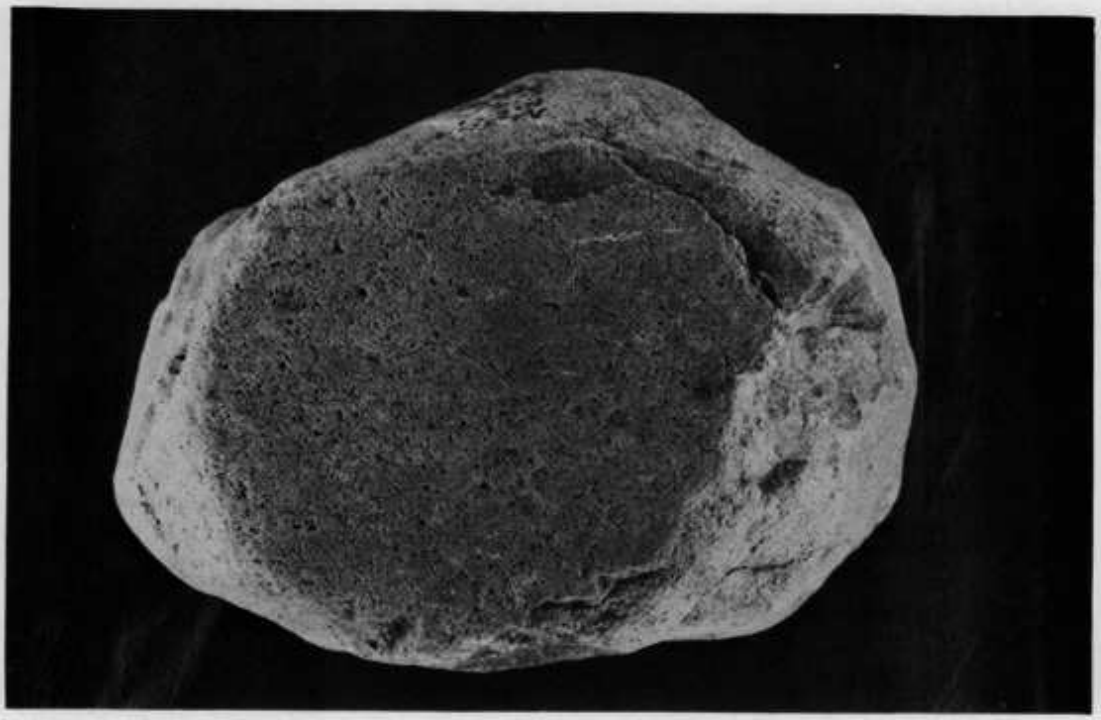
A　発掘区出土石器（5）



B　発掘区出土石器（6）



A　発掘区出土石器（表面）(7)



B　発掘区出土石器（裏面）(8)

札幌市文化財調査報告書　XVI

N 309 遺　跡　　— 1976年度発掘調査 —

昭和52年6月24日印刷
昭和52年6月30日発行

発行者　札幌市教育委員会
札幌市中央区北1条西2丁目
印刷所　(協) 高速印刷センター
札幌市中央区北4条西3丁目
北洋相銀ビル6F
TEL 271−5101